下之郷遺跡の史跡整備に伴う発掘調査報告書 Ⅱ

遺構・遺物・総括編

平成24年3月

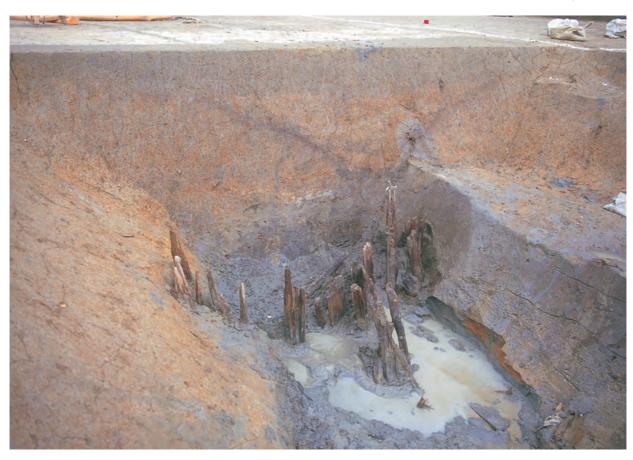
滋賀県守山市教育委員会



調査地全景(第61・62次)



第62次TA地区 環濠 (SD-1) 検出状態



第63次TF地区 しがらみ状遺構検出状態

序 文

野洲川の下流域には肥沃な沖積平野が広がり、人々が農耕を開始して以来、豊かな生産の場として発展してまいりました。先人たちは日々の営みの中で多くの歴史・文化を育み、私たちに貴重な財産として伝え残してくれました。

守山市教育委員会では、これらの歴史・文化遺産を大切に保存していくとともに、多くの方々に接していただけるように多方面での活用を図り、文化を育む環境づくりや地域振興に取り組んでおります。

本書は、国史跡下之郷遺跡の保存整備を行なうため、平成18~20年に実施した発掘 調査の成果を取りまとめ、刊行するものです。

弥生時代の下之郷には、環濠と呼ばれる大きな濠で囲まれたムラがありました。この ムラは、いつ誕生したのでしょう。そして、何の目的で環濠が掘られたのでしょうか。

これらのことは未だに解明されていない部分もありますが、現在も続く発掘調査や整理業務で徐々に実態が明らかになっていくものと考えております。

調査で得られた成果が基礎となり、平成22年秋には史跡公園が開園しました。そして、歴史を学ぶ場として活用していっております。

遺跡の保存整備を推進するにあたって、下之郷遺跡保存整備活用委員会の委員の皆様や文化庁、滋賀県教育委員会の関係者には多大なご指導、助言をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。本書が学術的な調査成果を踏まえ、今後の整備や活用の一助になればと願っています。

最後に、調査に参加いただいた方々や協力いただいた地域の皆様方、調査指導や分析 に協力をいただいた関係者に感謝を申しあげます。

平成二十四年三月

守山市教育委員会 教育長 上 路 博

例 言

- 1 本事業の対象史跡は、平成14年3月19日に指定された国史跡 下之郷遺跡である。
- 2 本報告書は、平成18、19、20年度の国宝重要文化財等保存整備費補助金(史跡等・登録記念物・歴 史の道保存整備事業補助金)を得て発掘調査を実施したものを、平成21、22年度に史跡等総合整備活 用推進事業補助金、平成23年度に史跡等及び埋蔵文化財公開活用事業費補助金を得て整理調査を実施 し、平成23年度に報告書を作成した。
- 3 現地調査および整理調査は、守山市教育委員会で実施した。
- 4 本事業にかかる教育委員会の体制は、以下のとおりである。

教 育 長 山川芳志郎(平成18~20年度) 上路 博(平成20~23年度)

(教育委員会事務局)

教育部長 井上 純作 (平成18~19年度) 三品 長治 (平成20~22年度) 古高 弘士 (平成23年度) 教育次長 石田 典明 (平成18年度) 田中 良信 (平成19~20年度) 高岡 秀和 (平成21年度) 北野 豊弘 (平成22~23年度)

文化財保護課

 課長
 山崎 秀二 (平成18~19年度)
 岩崎 茂 (平成20~23年度)

 参事
 岩崎 茂 (平成18~19年度)
 畑本 政美 (平成21~23年度)

 主幹
 畑本 政美 (平成18~20年度)
 小島 睦夫 (平成21~23年度)

 主査
 小島 睦夫 (平成18~20年度)
 伴野 幸一 (平成18~23年度)

 北脇 光昭 (平成20~23年度)
 川畑 和弘 (平成19~23年度)

主任 川畑 和弘(平成18年度)

5 下之郷遺跡保存整備事業については、平成19~23年までを下之郷遺跡保存整備活用委員会(整備部会・調査部会)で諮り、平成23年9月からは下之郷遺跡および伊勢遺跡保存整備活用委員会を新たに組織し事業の推進にあたった。各委員会の委員および部会員は以下のとおりである。なお、職名は、各委員会開催年度の現職名を記した。

[下之郷遺跡保存整備活用委員会] ※はオブザーバー

(整備部会)

岡村 道雄 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 名誉研究員 部会長

高瀬 要一 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 名誉研究員

布谷 知夫 滋賀県立琵琶湖博物館 名誉学芸員

浅川 滋男 鳥取環境大学環境情報学部環境デザイン学科 教授

阪本 寧男 京都大学 名誉教授

北野 清一 守山市下之郷自治会長

大沼 芳幸 財団法人滋賀県文化財保護協会 調査普及課課長

井上 純作 守山市教育委員会事務局 教育部長 平成19年度

三品 長治 守山市教育委員会事務局 教育部長 平成20~22年度

市原富士夫 文化庁文化財部記念物課 文化財調査官 ※

細川 修平 滋賀県教育委員会文化財保護課 副主幹 ※

(調査部会)

深澤 芳樹 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部 考古第三調査室

室長 部会長

岡村 道雄 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 名誉研究員

阪本 寧男 京都大学 名誉教授

山崎 健 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター環境考古学

研究室 研究員

大沼 芳幸 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 副主幹 ※

「下之郷遺跡および伊勢遺跡保存整備活用委員会」 ※はオブザーバー

岡村 道雄 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 名誉研究員 委員長

高瀬 要一 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 名誉研究員

布谷 知夫 三重県立博物館 館長

大橋 信弥 前滋賀県立安土城博物館 学芸課長

山崎 正史 立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 教授

川端 弘 守山市文化財保護審議会 会長

森岡 秀人 芦屋市教育委員会事務局生涯学習課

北野 清一 守山市下之郷自治会長

北田 俊夫 NPO法人びわこ豊穣の郷 理事長

川那辺守雄 守山市 政策調整部長(~10月)

岩井 寿夫 守山市 政策調整部長(10月~)

禰冝田佳男 文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官 ※

山下信一郎 文化庁文化財部記念物課 文化財調査官 ※

木戸 雅寿 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 課長補佐 ※ 大崎 哲人 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 副主幹 ※

- 6 現地の発掘調査および整理調査、報告書の編集については、川畑が担当した。本書の執筆について は、本文目次および各文節文頭に表記した。
- 7 調査報告は、前年度(平成22年度)に刊行した『下之郷遺跡の史跡整備に伴う発掘調査報告書 I (自然科学分析編)』と本書の2分冊からなるもので、本文内容で重複する部分(調査経緯、調査組織、既往調査等)については、上記の先行本に譲るものとした。
- 9 本書で用いた水準高は、東京湾平均海面 (T.P) を使用している。また、座標表示は、世界測地系による国土座標第Ⅶ系に基づく数値である。
- 10 本書で用いた地層の土色および土器の色調は、マンセル方式の『新版標準土色帖』に従い、一部は、 土色計(KONICA MINOLTA SPAD-503)を使用した。
- 11 遺構写真は調査担当の川畑が撮影し、遺物写真の撮影は寿福写房に委託した。
- 12 本調査にかかる図面・資料・出土遺物は、守山市立埋蔵文化財センターにおいて保管、公開する。

目 次

第1章 発掘調査の経過と概要	
第1節 整備対象地とその調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	· · · 1
第2節 調査の目的と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
第3節 報告書の作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第4節 調査の地区割り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	$\cdots 4$
第Ⅱ章 検出遺構	
第1節 北地区で検出された遺構	
1) 基盤堆積物の層序	10
2) 環濠 ···································	
3) 溝跡 ······	
4) その他 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第2節 南地区で検出された遺構	02
1) 環濠 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	35
2) 溝状遺構	
	0.
第Ⅲ章 出土遺物	4.0
第1節 土器 ······ 第2節 石製品 ······	
第 5 節 紐状繊維(上中央子・川畑和弘) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
另 U 即	93
第IV章 遺構と遺物の検討	
第1節 弥生時代中期後葉の土器群について	
1) 形態分類 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
2) 環濠堆積層の土器型式期と編年的位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	.107
第2節 出土土器からみた環濠の埋没時期について	
1) 環濠の開削から埋没にかけての時期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
2) 環濠の暦年代資料について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	·113
第V章 自然科学分析	
第1節 ウリ科果実遺存体のDNA分析とメロン仲間の種子遺存体における形態の分析	
(田中克典) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第2節 環濠(SD-3・SD-6)の大型植物遺体分析(那須浩郎) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	·122
第Ⅵ章 総 括	
1) 環濠が開削された地域の土地条件と水環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	.126
2) 環濠埋積と地震痕跡について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
3) 周辺植生の推移について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
4) 木材利用について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
5) 環濠と水田域について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
6) 生業と食生活について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	

挿 図 目 次

$\boxtimes 1$	下之郷遺跡位置図	図51	出土木製品実測図
図 2	史跡指定範囲と調査対象地	図52	出土木製品実測図
図 3	調査区配置図と年度別調査位置	図53	出土木製品実測図
$\boxtimes 4$	第61・62・63次調査全体図	図54	出土木製品実測図
図 5	北地区(第61・62次)調査全体図	図55	出土木製品実測図
図 6	TA地区横断ベルト断面図	図56	出土木製品実測図
図 7	SD-1ベルト18・19付近の遺物出土状況	図57	出土木製品実測図
図8	SD-1ベルト18断面図と遺物出土状況	図58	出土木製品実測図
図 9	SD-1ベルト19断面図と遺物出土状況	図59	出土木製品実測図
図10	SD-2ベルト17	図60	出土木製品実測図
図11	SD-2ベルト12	図61	出土木製品実測図
図12	SD-3ベルト11	図62	SD-1出土のかご
図13	SD-3ベルト13	図63	SD-1出土かご実測図
図14	SD-3ベルト9	図64	かご素材の横断面の光学顕微鏡写真
図15	SD-4 ベルト5	図65	壺実測図・写真
図16	SD-4ベルト16	図66	壺の出土状況
図17	SD-5ベルト2	図67	虚より検出された紐状繊維
図18	SD-6ベルト14・15	図68	壺実測図・写真・口縁詳細写真
図19	SD-7ベルト1	図69	虚より検出された紐状繊維
図20	SD-7ベルト4	図70	イノシシ第2~4腰骨の出土状況
図21	SD-8ベルト6	図71	イノシシ第7頸椎〜第3胸椎
図22	SD-8ベルト8	図72	下之郷遺跡におけるイノシシの
図23	SD-8ベルト10	P. 1.	廃棄単位
図24	SX-1 方形周溝墓	図73	下之郷遺跡出土のイノシシ
図25	SX-2 土坑状遺構	図74	下之郷遺跡出土のニホンジカ・イヌ
図26	南地区(第62・63次)調査全体図	図75	形式分類1
図27	TF地区SD-4ベルト①	図76	形式分類2
221	しがらみ状遺構出土状況図	図77	出土土器から見た環濠埋没の時期
図28	TF地区SD-4ベルト(1)	図78	環濠の埋積時期図
220	しがらみ状遺構	図79	ウリ科果実の出土位置
図29	SD-Hベルト③・SD-Iベルト④	図80	ベルト18より出土した果実遺存体の
図30	SD-Gベルト②	Доо	外面と内面
図31	出土土器実測図(SD-1)	図81	下之郷遺跡より出土したウリの果実
図32	出土土器実測図(SD-1)	201	遺存体と周辺の遺跡から出土したヒョウ
図33	出土土器実測図 (SD-1)		タンの果皮遺存体における細胞の構造
図34	出土土器実測図(SD-1)	図82	LS InDel1領域とLS InDel2領域を
図35	出土土器実測図(SD-1)	<u> </u>	増幅したPCR産物の電気泳動
図36	出土土器実測図 (SD-2)	図83	LS_InDel1領域における塩基配列の
図37	出土土器実測図(SD-3)	<u> </u>	構造
図38	出土土器実測図(SD-4)	図84	LS_InDe12領域における塩基配列の
図39	出土土器実測図(SD-5)	P401	構造
図40	出土土器実測図(SD-6)	図85	ccSSR7領域における塩基配列の構造
図41	出土土器実測図(SX-1)	図86	下之郷遺跡・北地区におけるSD-3ベルト
図42	出土土器実測図 (SD-4)	Доо	11より収集したメロンの種子遺存体
図43	出土土器実測図(SD-G)	図87	本報で供試した代表的なメロン仲間の
図44	出土石製品実測図	E⊒∪!	種子遺存体とメロンタイプ
図45	出土石製品実測図	図88	メロン仲間の種子遺存体における種子
図46	出土石製品実測図	<u>الم</u>	長の頻度分布構成とメロンタイプ
図47	出土木製品実測図	図89	環濠底の標高レベル一覧
図48	出土木製品実測図	<u>ы</u> 03	NIBNEW Y WITH TO TE
<u>~</u>	山上小水明大阪四		

図49 出土木製品実測図 図50 出土木製品実測図

表 目 次

表 1	出土土器観察表(第61・62次調査)	表13	SD-4 (ベルト16) 出土土器一覧表
表 2	出土土器観察表(第63次調査)	表14	SD-4 (ベルト①) 出土土器一覧表
表 3	出土石製品観察表(第61~63次調査)	表15	SD-5 (ベルト2) 出土土器一覧表
表 4	出土木製品観察表(第62次調査)	表16	SD-6 (ベルト15) 出土土器一覧表
表 5	出土木製品観察表(第63次調査)	表17	下之郷遺跡北地区におけるメロン種
表 6	出土かご製品観察表(第62次調査)		子遺存体のサイズと種子タイプ
表 7	動物遺存体の出土遺構と時期	表18	メロン種子遺存体の基礎統計量と
表 8	出土した動物遺存体の同定結果		種子タイプ
表 9	SD-1 (ベルト18・19) 出土土器一覧表	表19	下之郷遺跡第62次調査SD-3 · SD-6
表10	SD-2 (ベルト17) 出土土器一覧表		環濠から出土した大型植物遺体一覧表
表11	SD-3 (ベルト11) 出土土器一覧表	表20	環濠SD-1の堆積層序と出土土器
表12	SD-4 (ベルト5) 出土土器一覧表		

図 版 目 次

図版一 北地区 (第61・62次調査)	左 TC・TD地区調査風 TA地区調査風景 TA地区SD-1ベル TA地区SD-1ベル	├ 18	TA・TD地区調査風景 TA地区SD-1ベルト18 TA地区SD-1ベルト18 TA地区SD-1ベルト18
図版二 北地区 (第61·62次調査)	左 TA地区SD-1ベル (背負板関係部 TA地区SX-2 TA地区SD-1ベル	オ出土状況) ト18	(竪杵出土状況) TA地区SD-1ベルト18 (記号文土器出土状況) TA地区SX-2 TA地区SD-1ベルト18
図版三 北地区	(動物遺存体出土 TA地区SD-3 横脚左 TC地区SD-1ベル	断ベルト	(動物遺存体出土状況) TB地区調査状況 TC地区SD-1ベルト19
(第62次調査)	TC地区SD-1ベル TC地区SD-1ベル (泥除け出土状況 TC地区SD-1ベル	⊦19 ⊦19 L)	TC地区SD-1ベルト19 TC地区SD-1ベルト19 (竪杵出土状況) TC地区SD-1ベルト19
図版四 北地区 (第61・62次調査)	(腰掛出土状況) 左 TC地区SD-2ベル TC地区SD-3ベル TC地区SD-4ベル TC地区SD-5ベル	⊦11 ⊦16	(背負板出土状況) TC地区SD-2ベルト12 TC地区SD-3ベルト13 TC地区SD-4ベルト6 TC地区SD-6ベルト15
図版五 北・南地区 (第62・63次調査)	左 TC地区SD-7ベル TD地区SX-1 TD地区SX-1 TE地区調査全景		TC地区SD-8ベルト8 TD地区SX-1 TD地区SX-1 TF地区調査全景
図版六 南地区 (第63次調査)	左 TF地区調査ベルト 調査状況 TF地区調査ベルト しがらみ状遺構出 TF地区調査ベルト しがらみ状遺構出 TF地区調査ベルト	① 土状況 -① 土状況	TF地区調査ベルト① しがらみ状遺構出土状況 TF地区調査ベルト① しがらみ状遺構出土状況 TF地区調査ベルト② TF地区調査ベルト②
図版七 第62次調査	出土遺物	SD-1出土土器	

SD-1出土土器

上 第61~63次調査 SD-1・SD-3・SD-G出土土器

下 第62次調查 SD-1出土土器

図版八

図版九

第62次調査出土遺物

第61~63次調査出土遺物

図版十 第62次調査出土遺物

図版十一 第62次調査出土遺物

図版十二 第61・62次調査出土遺物

図版十三 第62次調査出土遺物

図版十四 第61·62次調査出土遺物

図版十五 第61・62次調査出土遺物

図版十六 第61次調査出土遺物

図版十七 第62・63次調査出土遺物

図版十八 第61~63次調査出土遺物 図版十九 第61~63次調査出土遺物

図版二十 第61~63次調査出土遺物

図版二十一 第61・62次出土遺物

図版二十二 第62次調査出土遺物

図版二十三 第62次調査出土遺物

図版二十四 第62次調査出土遺物

図版二十五 第62次調査出土遺物

図版二十六 第62次調査出土遺物

図版二十七 第62次調査出土遺物

図版二十八 第63次調査出土遺物

図版二十九 第63次調査出土遺物

図版三十 第63次調査出土遺物

図版三十一 第63次調査出土遺物

上 第62次調查 SD-1出土土器

下 第62次調査 SD-1出土土器

上 第62次調査 SD-1出土土器

下 第62次調査 SD-1出土土器

上 第62次調查 SD-1出土土器

下 第61・62次調査 SD-2出土土器

上 第62次調査 SD-2出土土器

下 第62次調査 SD-2出土土器

上 第61次調查 SD-3出土土器

下 第61·62次調查 SD-4出土土器

上 第62次調査 SD-4出土土器

下 第61次調查 SD-5 出土土器

上 第61次調査 SD-6 出土土器

下 第61次調査 SD-6 出土土器

上 第63次調査 SD-4出土土器

下 第62・63次調査 SX-1・SD-G出土土器

第61~63次調査出土石製品

上 第61~63次調査出土石製品

下 第61~63次調査出土石製品

上 第61・62次調査出土石製品

下 第61・62次調査出土石製品

上 第61・62次調査出土石製品

下 第61・62次調査出土石製品

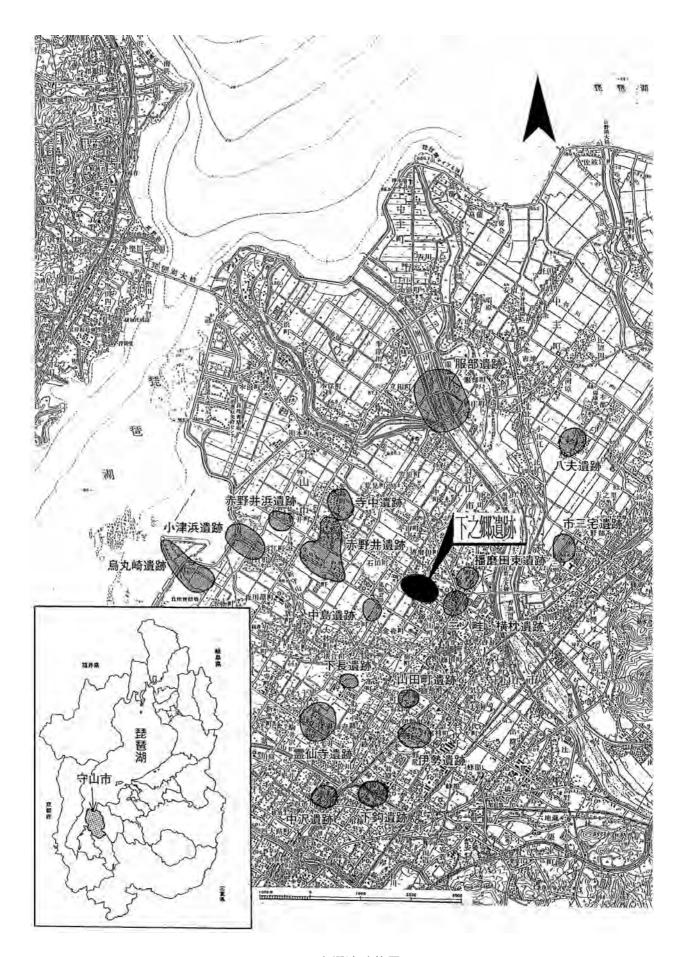


図1 下之郷遺跡位置図

第 I 章 発掘調査の経過と概要

第1節 整備対象地とその調査

下之郷遺跡は、野洲川下流域に広がる沖積平野のほぼ中央部に位置する弥生時代中期の環濠集落跡である。昭和55(1980)年に遺跡が発見されて以降、これまでに実施してきた試掘調査、確認調査、立会調査等から下之郷遺跡は3条以上の環濠を巡らせる滋賀県最大の環濠集落であることが判明し、その集落域は、おおよそ25haの規模と推定されるようになった(注1)。

平成14年3月には、遺跡が所在する下之郷町の東側農地を中心とした32,286.5㎡が国史跡に指定された。その後、追加指定を進める上での遺跡範囲や内容確認の調査を進めてきているが、これまでに調査を実施した面積は4.6ha程度で、遺跡全体(25ha)からすると全体の2割に満たない状況である。

史跡整備の計画は、平成14年に発足した保存整備構想検討委員会および平成15~17年度にかけて下之郷遺跡の活用を考える会で検討し、第一次整備の対象地は、史跡指定地の東端で農地が広がる約0.8haが選定された(注2)。その場所は、下之郷遺跡の特徴でもある多重の環濠が地下に包蔵されている地域で、遺跡の東端に位置している。

対象地の整備内容については、下之郷遺跡保存整備活用委員会の設置要綱(平成19年1月24日付)に位置づけられた整備部会において討議し、基本設計、実施設計がまとめられた。その整備項目は、①環濠の復元整備:発掘調査成果をふまえて環濠を復元する。②環濠調査船、展示施設の設置:実際の環濠や調査風景を見学できる施設や各種体験学習を行うことのできる施設を設けること。③水田・菜園:市民参加で栽培、学習できる実験水田・菜園を配置すること。等が主要な項目としてあげられ、その整備実施期間は平成20~22年度の3か年に実施することが計画された。そして、史跡整備に伴う発掘調査(今回報告分)を、平成18~20年度に行った。

発掘調査の実施期間と概要は、以下のとおりである。

「第61次調査 調査期間:平成18年9月1日から平成19年3月24日まで(平成18年度)

調査内容:遺構の平面検出と断割り調査を実施。集落東側の環濠の具体的形状把握。 TA地区において基盤層の断割と断面確認、層序記載をおこなった。

[第62次調査] 調査期間:平成19年6月11日から平成20年3月23日まで(平成19年度)

調査内容:遺構の平面検出と環濠の一部掘削調査を実施。環濠の各ベルトから柱状 サンプルを採るとともに、花粉や珪藻など自然科学分析を実施した。

[第63次調査] 調査期間:平成20年6月1日から平成21年3月14日まで(平成20年度)

調査内容:遺構の平面検出と南地区環濠の一部掘削調査を実施。SD-4で検出された しがらみ状遺構の調査を実施した。

(注1) 2004~2010『下之郷遺跡確認調査報告書I~VI』守山市教育委員会

(注2) 2007『下之郷遺跡保存整備基本計画書』守山市教育委員会

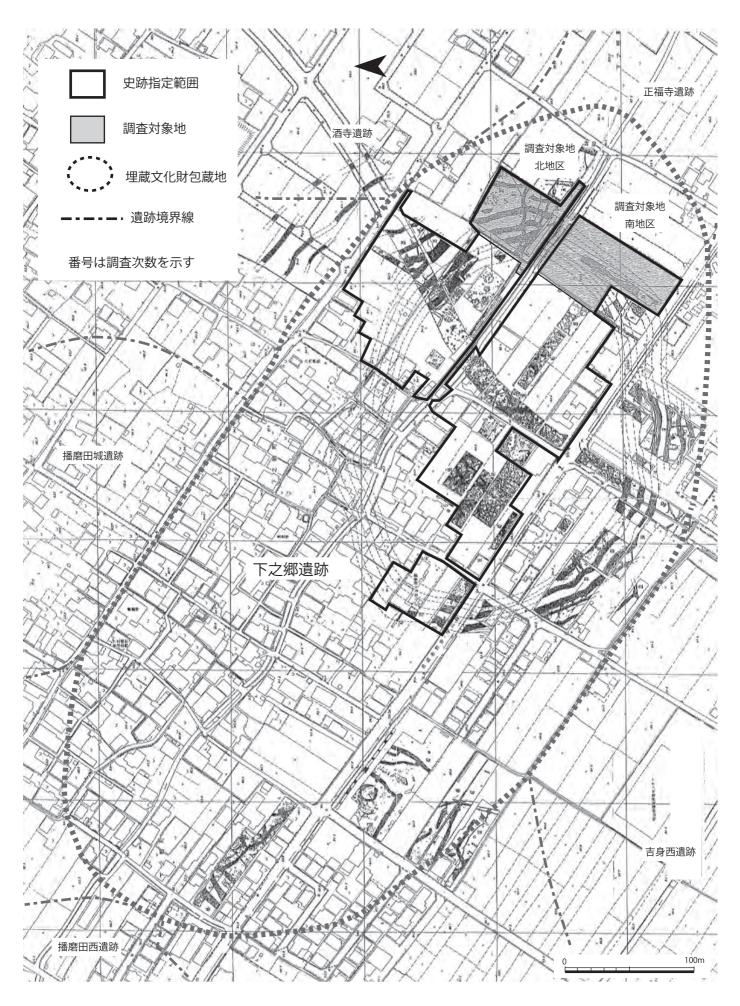


図2 史跡指定範囲と調査対象地

第2節 調査の目的と方法

今回の発掘調査は、整備目的の調査であるため、整備対象地域の地下遺構の正確な把握を主眼におき、全掘調査ではなく、遺構の平面検出と一部掘削を実施し、整備に必要な情報を効率的に得たうえで遺構を埋め戻し、地下保存をしていく方針で実施した。対象地の地下には、環濠が周回していることが既往調査から予測されたため、調査目的には、①環濠の条数と時間的な新古関係(同時並存するものとしないもの)を把握する。②集落の誕生から消滅にかけての環境変遷過程を究明する。③弥生時代中期の琵琶湖湖辺における生業や生活の具体像の検討などを主目的として調査に着手した。現地で検出された環濠の調査では、環濠の一部に横断するかたちで土層観察ベルトを各地点に設け、上層から土層面の堆積状態を確認しながら掘り下げ、土層面には層序番号を付記し、出土する遺物を土層ごとに振り分けて取り上げた。環濠をベルト状に底まで掘り込んだ時点で、断面(壁面)を削り上げ、環濠の堆積状況を観察し土層番号を壁面に注記するとともに写真記録と図面(1/10実測)作成と粒度などの観察内容を記載することとした。

環濠層序の確立については、現地において川畑が主体的におこなうとともに、土壌の堆積構造や 粒度の微細構造の検討については、辻本裕也氏 (株)パリノ・サーヴェイ)、宮本真二氏 (琵琶湖博 物館)とともに現地で実施した。観察した環濠の断面からは、それぞれ垂直に不撹乱柱状試料 (以 後、柱状サンプルと記す。)を切り取り、肉眼で観察しづらい地点については屋内で再度、辻本が 観察と確認を実施した。

出土遺物の整理と記載においては、上記した調査目的に応じるべく、環濠の開削から埋没の変化や状況を時期的に把握ができるように層序確立と遺物の取り上げ関係には注意を払った。

自然科学的な分析は、調査の進捗に合わせて現場の層序やサンプリング地点を分析担当者と共に確認しながら実施することを原則とした。ただし工程上の調整ができなかったものについては、先の柱状サンプルから分析試料を取得することを行なった。実施した自然科学分析とその各分析における調査目的は、以下のとおりである。

①堆積物微細構造の軟X線分析については、環濠の埋没土壌の微細構造を判読し、いかにして環濠が埋もれたのか、また環濠の縁に土塁など盛土があったのならば、崩落土砂や人為的な埋土を認定することができないか。そして、自然科学的な分析(花粉分析やプラント・オパール分析等)で、サンプル採取をおこなう際の地点・部位の妥当性確認と分析結果の解釈を導くこと。②放射性炭素年代測定については、環濠の掘削から埋没にかけての時間的推移について実年代把握を行う。③年輪年代測定分析も、同様に環濠埋没過程の暦年代究明を行うこと。④花粉分析については、環濠集落の時期を中心とした、周辺の自然環境の変化を究明するとともに、環濠周辺の景観復原などの情報取得を行う。⑤プラント・オパール分析については、環濠周辺での稲作状況や環濠=農業水利施設とする考えについて検討すること。⑥珪藻分析については、環濠の水環境について復元し、具体的に水が流れていたのか、干上がっていたのか、淀んでいたのか等の検討をおこなう。⑦出土木材の樹種同定は、環濠の周辺に存在した森林植生の復原や出土木材の樹種組成を検討することから、人による木材利用のあり方を明らかにすること。⑧大型植物遺体同定については、環濠周辺の植生復原や当時の栽培植物を具体化し、人と植物のかかわり方を究明していくための材料とする。

第3節 報告書の作成

調査報告書は、3年にわたり実施した整備に伴う発掘調査の成果を、2分冊に分けて報告することとした。第1分冊目が自然科学分析編で、第2分冊目(今回の報告)が遺構・遺物・総括編である。

前者は、環濠の調査における自然科学分析の結果をまとめた基礎資料編とする位置づけで、後者は、検出された遺構や出土した土器、石器など、人為的遺物を中心にした内容の報告と第1分冊も踏まえた調査の総括と補足資料を掲載するものである。また「調査の経緯」、「調査組織」、「遺跡の位置と環境」、「既往調査の概要」については、第1分冊ですでに記されており、重複する内容であるため、本書では割愛した。併せて本報告書には自然科学分析の補遺として、①ウリ科果実遺存体のDNA分析とメロン仲間の種子遺存体における形態の分析、②環濠(SD-3・SD-6)の大型植物遺体分析の結果を掲載した。

第4節 調査の地区割り

発掘調査は、対象地をTA地区からTF地区の6つの調査区に区分けをして実施した。また、対象地の中央に流れる石田川の右岸域に位置するTA・TB・TC・TD地区は、北地区と総称し、石田川左岸のTE・TF地区については、南地区と総称することとした(図3(上))。なお、北地区で設定したTB地区については、調査区南隣を流れる現石田川の河川敷にあたっており、表土直下から地下約1mを開削し土砂(礫層)の除去を行ったが、遺構検出面の削平が著しく、かつ河川護岸際からの湧水が激しかったため、埋め戻して現状保管することとした。

各地区の調査年次は、平成18年度(61次)にTA・TB・TC・TD地区。平成19年度(62次)にTA・TC・TD地区の一部とTE地区。そして平成20年度(63次)にTE・TF地区の調査を実施した(図3(下))。



(調査風景1) 遺構の平面検出状態



(調査風景2) 基盤層検出と層序確認



(調査風景3)環濠出土遺物の実測



(調査風景4) 環濠断面から柱状サンプル採取

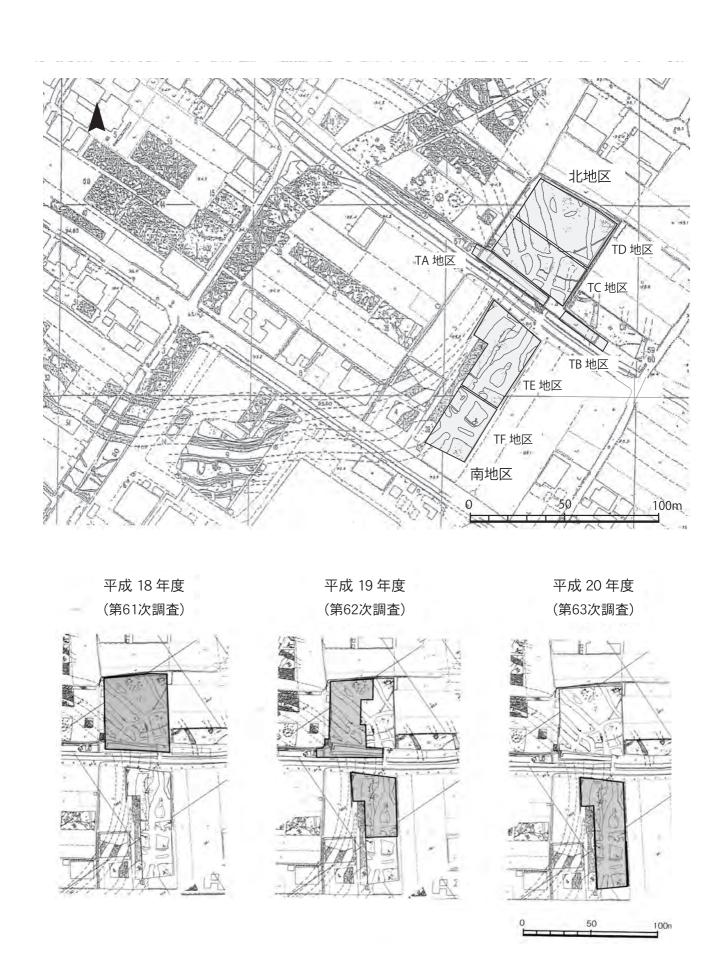


図3 調査区配置図(上)と年度別調査位置(下)

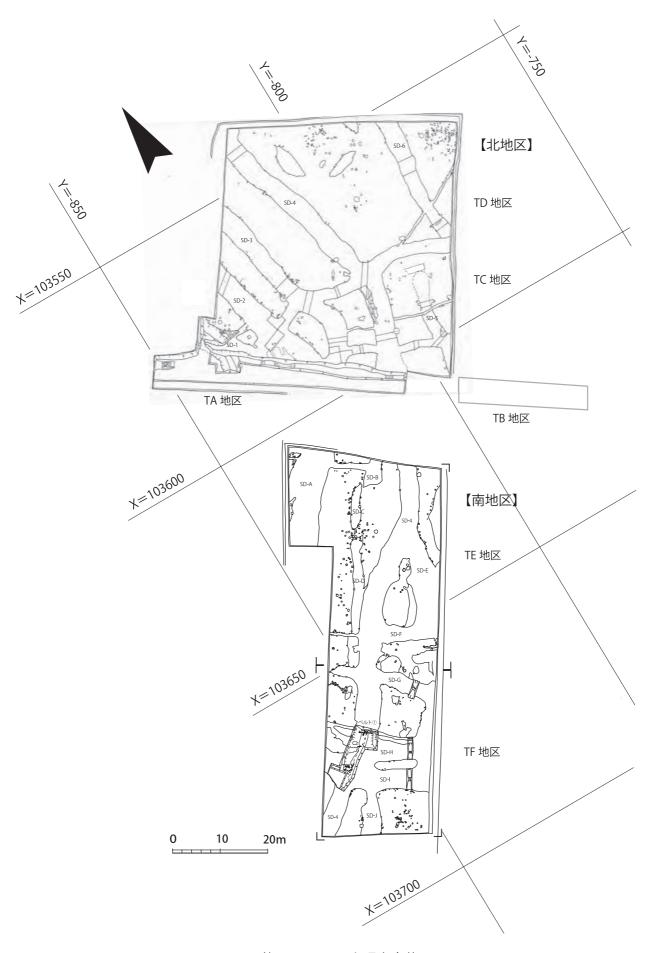
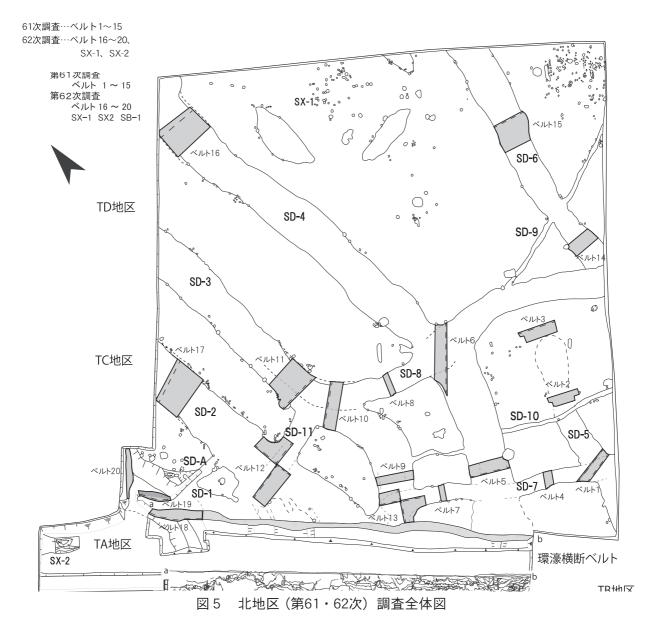


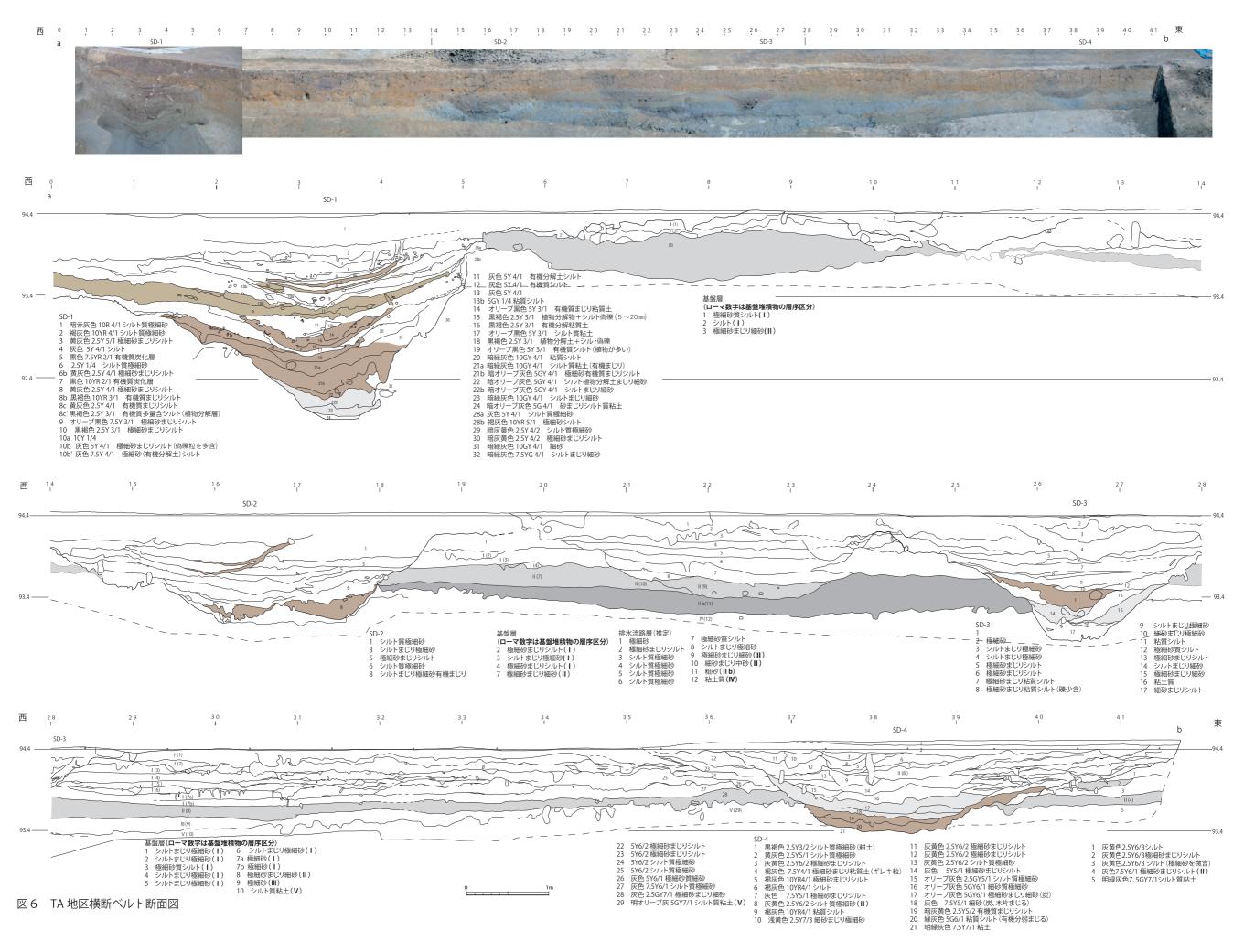
図4 第61・62・63次調査全体図

第Ⅱ章 検出遺構

第1節 北地区で検出された遺構

石田川北側の整備予定地約3,000㎡について確認調査を行った。その結果、南から北に向けて伸びる6条の環濠(SD-1~SD-6)と溝跡4条(SD-7~SD-10)方形周溝墓(SX-1)、土坑もしくは井戸跡(SX-2)などが検出された。平面検出後、遺構の形状や種類、切合関係等を踏まえて土層観察ベルトを設けて遺構の埋没状況や掘方の形状の把握にあたった。なお、石田川に近接するトレンチ(TA地区、TB地区)においては、後世の河川活動による削平によって遺構がのる基盤層の上面1m程度が削平を受けている。特にTB地区については湧水があり、護岸を破損する恐れがあったため確認を進めた後に、埋め戻し現状復旧を行った。検出した6条の環濠は、緩やかな弧を描く状態で北地区から南地区に向けて伸びており、そのうちのSD-4については、石田川を跨いで南地区でも延長して検出した。それより内側に位置するSD-2、3についてはTA地区において近接する状態で検出しているが、その南には石田川および管理用道路の空間地があるため、南地区の遺構との関連は判然としていない。





1) 基盤堆積物の層序

第61次調査区の南西部、TA地区においては、SD-1からSD-4までの環濠をほぼ横断するかたちで断面を検出し、その基盤をなす堆積物を観察することができた(図6)。これは、TA地区の旧地表面が横を貫流する石田川によって削平されてしまっており、隣接する調査区(TC地区)の検出面と比高差が1m程あったことによるものである。以下、TA地区の横断面に現れた基盤堆積物について説明を加える。

環濠が掘り込まれている基盤堆積物の層相は、上方粗粒化するシルトから細砂によるものからなる。層相から、氾濫堆積物と推定される。堆積物の形成年代については不明であるが、腐植質泥層より上位の堆積物は土壌発達層準を挟在しないことから、比較的短期間に形成されている可能性がある。

本断面で観察された環濠の基盤堆積物は、大きく5つの層に区分される。上位より I 層~V層とする(図6)。V層は灰色~暗灰色を呈するシルトや極細砂からなる。本層下部では下に凸な外形をなし、有機質シルトや粘質土などの薄層により充填されている排水流路堆積物が確認される。上部ではやや有機質となり、生物擾乱により初生の堆積構造が不明瞭となっている。以上の層相から、本層形成期の調査地点は水位の高い湿地ないし池沼のような滞水域であったが、上部層準の形成期にかけて水位が低下し、動、植物の生育する領域へと変化していったことが推定される。なお、TA地区断面で検出されたSD-1~SD-4の環濠は、このV層まで掘削されており、環濠充填堆積物の最下部には、掘削時に生じたV層の偽礫が散在している。

IV層は、V層の侵食により生じたとみられる凹地を充填する堆積物で著しく擾乱された腐植質シルトからなる。当時のIV層堆積域は湿地のような堆積環境であったことが推定される。一方、断面東側のV層上位には土壌構造が確認される有機質砂質土からなるⅢ層が覆う。

IV層と \blacksquare 層の層位関係については、SD-3環濠の掘削により不明であるが、同時異相をなす堆積物の可能性がある。これら \blacksquare IV層・ \blacksquare II層の上位には、氾濫堆積物の \blacksquare ・ \blacksquare I 層が覆っている。

IV層および断面西側のV層の上位には、上下に凸なレンズ状の外形をなす水平葉理、斜交葉理をなす細粒~中粒砂(II b層)が堆積している。本層は、層相から氾濫堆積物の一種で、堤防決壊堆積物と推定される。

Ⅱ層は生物擾乱が著しく、やや有機質を含む砂質極細砂シルトからなる。 I 層は、氾濫堆積物の逆級化成層をなす砂質シルト〜シルト質細砂の積層からなる。 II 層から I 層にかけて、堆積物の粒径は上方粗粒化する。

以上の基盤堆積物の層相から、調査区の堆積環境はII層形成期以降に変化し、氾濫堆積物が累重する氾濫原の堆積環境に変化したことが推定される。これらII・I層の形成年代については不明であるが、顕著な土壌生成層準を挟在しないことから、比較的短期間に形成されている可能性がある。

I層上部は弥生時代以降の人為的削平によってなくなっているが、環濠はこのような氾濫原の発達時期に構築されている可能性がある。この点については、調査区周辺地域の地形発達過程を踏まえた評価が今後必要である。

2) 環濠

SD-1

TA・TC地区の西隅で検出された環濠で、6条並行するもののうちで一番内側に位置するものである。TA地区においては、石田川によって肩部が削平されており、特に南側が顕著である。環濠を検出した場所の基盤層検出面は標高94.44m、濠底は標高91.90mで、濠幅約7m、深さは2.5mを測る。断面形は逆三角形に近い。他の環濠に比して遺物の埋蔵量が著しく多く、土器、木製品、動植物遺存体等が多量に産出する。掘削調査は、TA地区(ベルト18)とTC地区(ベルト19)の2つに分けて行った(図5)。以下、遺構埋没と遺物出土の状況をベルトごとに記載する。(図8・9)

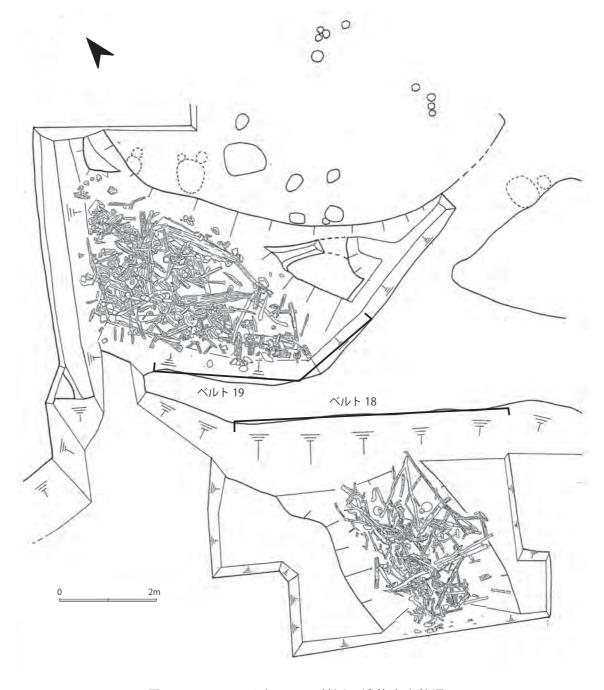


図7 SD-1 ベルト18・19付近の遺物出土状況

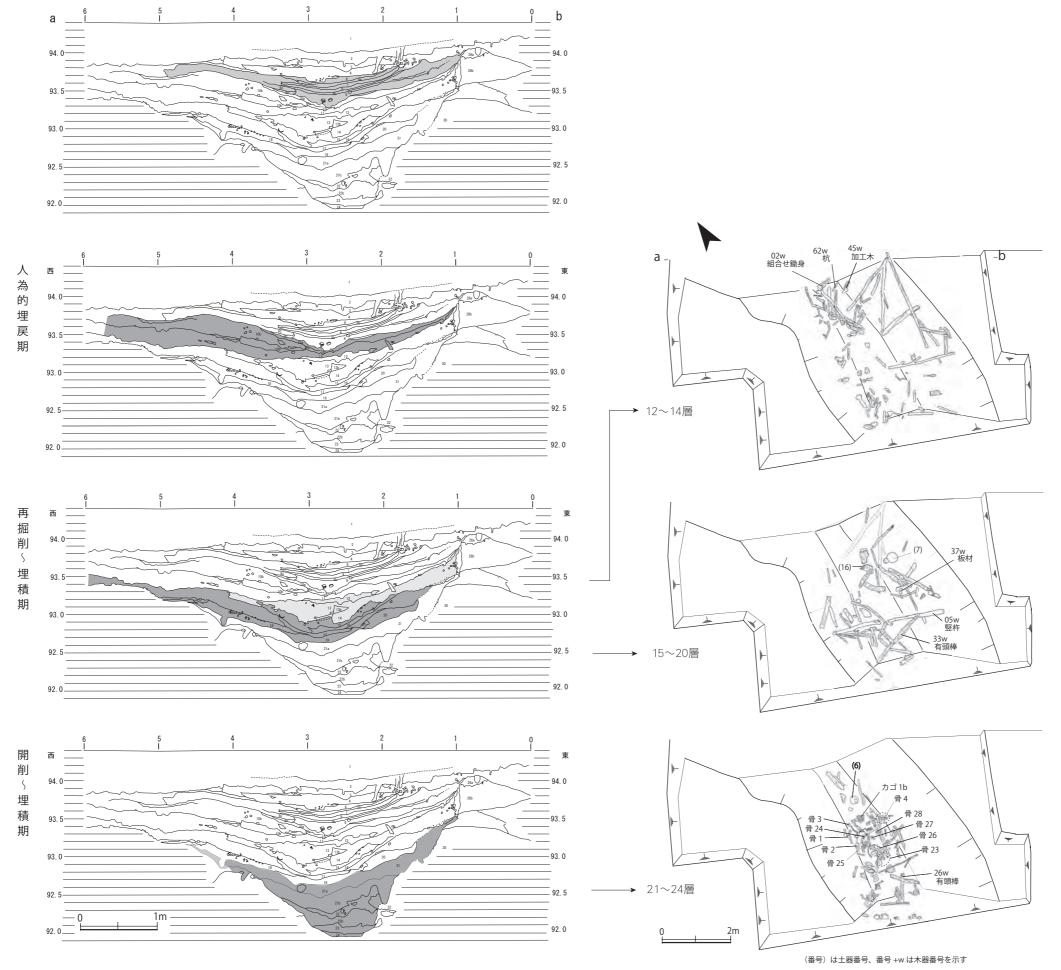


図8 SD-1 ベルト18 断面図(左)と遺物出土状況(中・右)



12~14層の検出状況



15~20層の検出状況



21~24層の検出状況



完掘状態

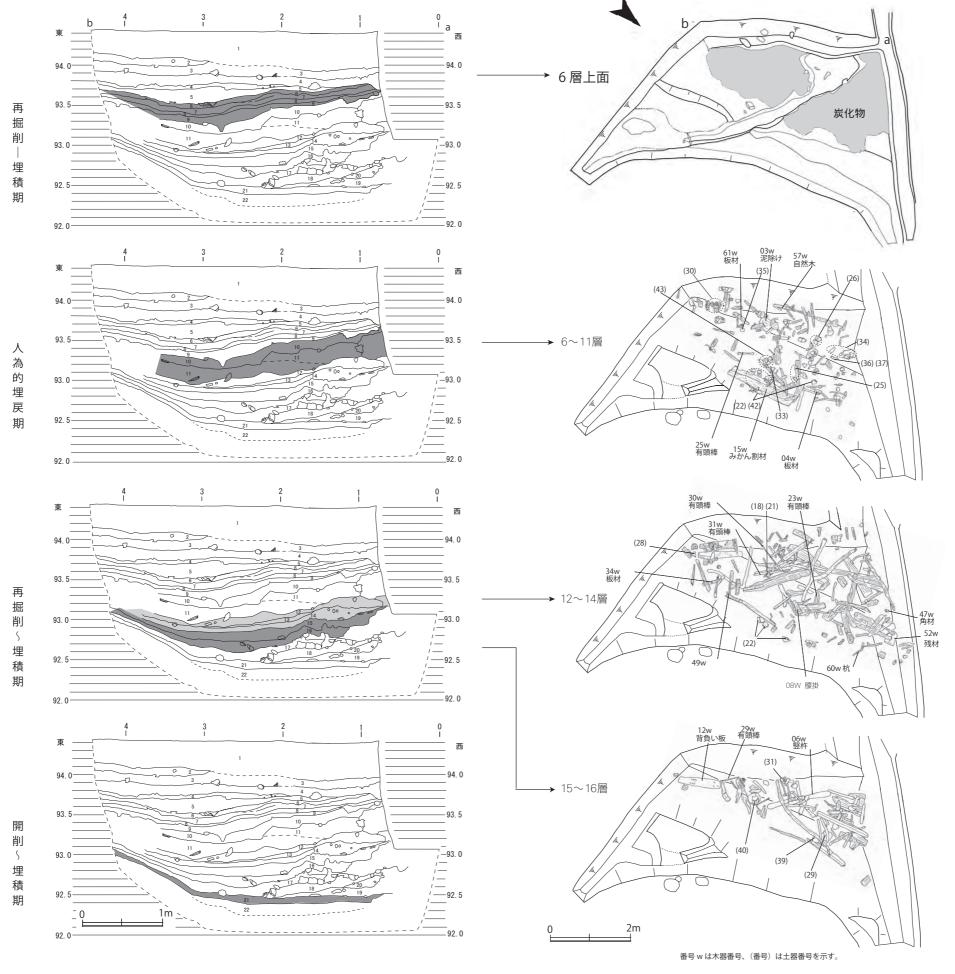


図9 SD-1 ベルト19 断面図(左)と遺物出土状況(中・右)



6層上面 (流れ込み) 検出状態



6~11層検出状態



12~16層検出状態



完掘状態

SD-1 【ベルト18】

環濠の埋積土のなかで最下部に位置する24~22b層はシルトおよび極細砂からなり、環濠開削期 ~埋積期(機能期)の堆積物と判断され、滞水域で形成されたと推定される。この堆積土中から出 土したものには動物遺存体が多く含まれる。それ以外には自然木やウリ科種子や樹木の葉など大型 植物遺体が認められた。出土した土器は、下之郷遺跡から出土している土器の中でも最古期にあた るものが含まれており、Ⅲ期に遡るものが含まれている。21層は樹木の葉や枝材を挟在するシルト 質土からなる。21層形成後、環濠は人為的に再掘削されている。21層から出土した遺物で特筆され るものには、かご (1 b)、記号文「X」が描かれた壺 (6) 等がある。再掘削された環濠の機能 期に形成された19層からは、木質遺物や植物遺存体が混じり、有機質シルトや極細砂からなる。出 土土器にはIV期前葉にあたるものが含まれている。19層の上位には、植物遺存体の葉理を挟在する シルト、不連続な葉理をなす極細砂からシルト、木質遺物・植物遺存体などが多く混じる不連続な 葉理をなす極細砂、わずかに偽礫が混じる不連続な植物遺存体の葉理を挟在する擾乱されたシルト からなる17~ 14層がある。これらの堆積層形成期の環濠内も、水位変動があるものの、湿地のよ うな堆積環境であったと推定される。13層はシルト~極細砂の偽礫と植物遺存体に富むシルト質極 細砂の偽礫からなり、その上位に累重する12層は植物遺存体に富む泥炭質シルトからなる。この層 序から出土したものにウリ科果実の遺存体がある (第V章第1節参照)。そして、多量の木製品が 出土するのは、上記した12~19層にかけての堆積土中に著しいものがある。出土土器についてはIV 期前葉の遺物が出土している。10・11層は人為的な埋土と判断され、12層の水位上昇期直後に埋 戻しが行われていることがうかがえる。11・10層の人為的埋土は、再度人為的に掘削され、環濠が 再掘削されている。本層は層相からしばしば干上がる時期を挟在する水域~湿地のような堆積場で 形成されたことが推定される。出土土器については、N期中~後葉を主体にしたものが出土してい る。8b層は植物遺存体の葉理、6b層は炭化物や植物遺存体を含む不連続な葉理をなすシルト、7層 は炭化物・植物遺存体が多く混じる不連続な葉理をなす細粒砂、6層は植物遺存体の葉理をなすシ ルト、5層は植物遺存体の葉層を挟在する有機質シルトからなる。これらの層相から8層~5層も 水位変動がある沼地〜湿地のような堆積環境で形成されたと推定され、出土土器はIV期中葉を主体 にしたものが出土している。 4層~1層では層相が変化する。部分的に葉理を残す層準も認められ るが、砂質シルトないしシルト質極細砂の偽礫が多く混じる堆積物からなるもので、IV期中~後葉 の土器を包含している。そしてIV期以降の土器は含まれていないことから、弥生時代後期には既に 埋没していたものと考えられる。(図8)

以上、環濠を充填する堆積物は、最下層から環濠開削~埋積期(24~21層)、再掘削~埋積期(19~12層)、人為的埋戻期(11·10層)、再掘削~埋積期(9~1層)の4時期に大きく区分される。

【ベルト19】

ベルト19の土層断面図は、SD-1 に直行するものでないため環濠最深部の土層は、図 9 に現れていない。遺物出土状況を整理し、ベルト18とも整合を図るうえで以下土層の記載を行う。

当図の最下部に堆積する22~ 21層はシルト質粘土からなる。環濠開削~埋積期に該当するもので、滞水域で形成されたことが推測される。遺物の包含量は少ない。21層形成後、環濠は人為的に再掘削されている。再掘削された環濠の機能期にあたる12~19層は粘質土から極細砂からなるもので、層の厚さは50cm程度である。木製品(背負板12w、竪杵6w、腰掛9w他)や植物遺存体が多量に含まれている。水位変動があるものの、いずれも滞水時期に堆積した土層と判断される。出土土

器はIV期前葉を主体にしたものである。 $10\cdot11$ 層は人為的な埋土と判断され、12層の水位上昇期直後に埋戻しが行われていることがうかがえる。埋土中には土器(IV期前~中葉)や木製品が含まれている。 $11\cdot10$ 層の人為的埋土は、再度人為的に掘削されている。8 層は植物遺存体の葉理、7層は炭化物や植物遺存体を含む不連続な葉理をなすシルト質土、6 層は炭化物・植物遺存体が多く混じるシルト質粘質土で、その上面は短期的にも地表化していた可能性があるもので、SD-2から流れ込む 1 条の小溝が検出されている(図 9)。1 から 5 層は環濠上層部を最終時点で覆った土砂で、シルトから極細砂によってなる。

SD-2

【ベルト17】

環濠を検出した場所の基盤層検出面は標高94.40m、濠底は標高92.85m、濠幅約5.2m、深さは1.55mを測る。断面形は緩やかな逆三角形に近い。SD-2より外側にある他の環濠に比して遺物の出土量は多いが、SD-1に比すると少ない。土器、木製品、動植物遺存体等が出土している。以下、ベルト17の断面図を図10に示し、埋没状況を記載する。

環濠の埋積初期の開削〜埋積期の堆積物は、12層から5層が相当する。12層は環濠が開削されている基盤をなす堆積物に相当するが、環濠の開削期の人為的擾乱により著しく乱れている。11層は環濠開削時に取り込まれた12層に由来する偽礫が多く認められる層準であり、偽礫間は機能期の堆積物である10層により充填されている。10層は不連続な葉理構造をなす、植物遺存体に富むシルト〜極細砂からなる。当時の環濠内は、水流の影響を受ける時期を挟在する、地下水位の高い湿地〜水域であったことが推定される。出土土器については、IV期前葉のものが出土している。その上位にある9層〜5層は上方粗粒化する砂質泥〜砂層からなる。このことから、9層形成後、環濠内の水位は何らかの理由により上昇傾向にあり、5層形成期には河川の氾濫堆積物が流入したことが窺える。

人為的な埋戻期に形成された堆積物は、7層が相当する。本層は5層の氾濫堆積物が流入した直後に形成されており、SD-1で確認された水位上昇期直後の人為的な埋戻期と同調的な変化とみなせる。この人為的堆積物である7層からは、円礫や土器片(IV期中葉)、炭化粒(植物種子)などが多数確認されている。7層は、その後再度掘削され、溝が掘り込まれている。再掘削された溝を充填する堆積物は4層から1層が相当する。これらの堆積物は下位の初期段階の環濠堆積物と層相が異なっている。これらの層相から、3層中部より上位の堆積物は人為的営力により形成された堆積物や再堆積した土壌からなることが推定され、出土土器については、IV期後葉のものが出土している。このことから溝の再掘削期以降の調査区は、地表環境や土地利用が大きく変化していることが示唆される。

以上、環濠SD-2内の堆積層は、その累重状況から、大きく、初期の環濠開削〜埋積期(12~5層)、人為的な埋め戻しの時期(7層)、再掘削〜埋積期(4~1層)の3時期に区分される。 【ベルト12】

SD-2とSD-3を取りつなぐようにSD-11が掘られている。ベルト12は、そのSD-11とSD-2との関係を明らかにするために設定した土層観察ベルトである。図11を参照して以下説明を加える。

ベルト12の南北断面(a-b)ではSD-2に並行するかたちでほぼ水平方向に土層が堆積しているが、 その中位で土層を上面から切り込むかたちで断面が緩やかなU字形をした溝が掘りこまれている。 このことから2つの溝(SD-11とSD-2)の関係は同時に存在し機能していたのではなく、SD-11は

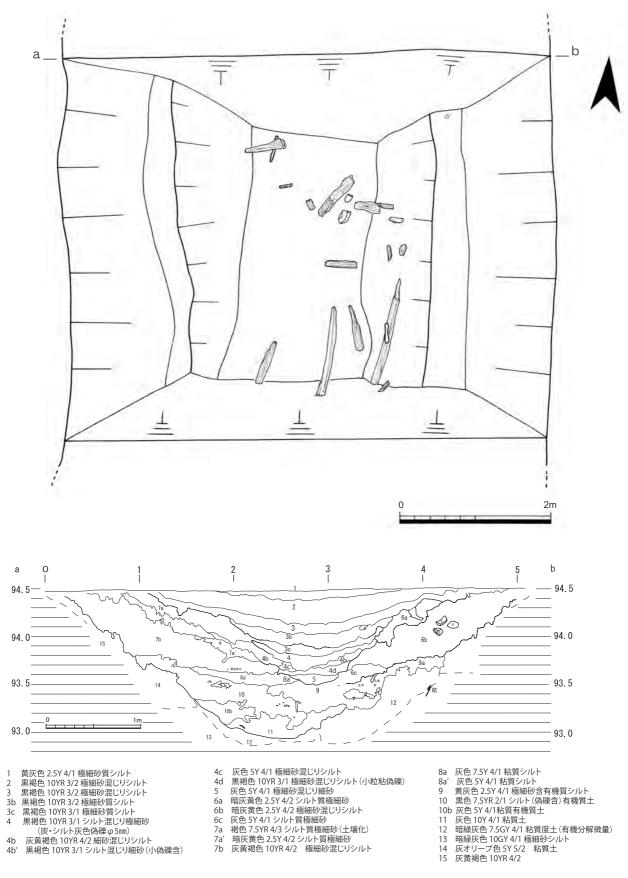


図10 SD-2 ベルト17

SD-2よりも後出で、SD-2が完全に埋もれてから掘られた溝であることがわかる。このベルトからは出土土器はあるもののSD-11の機能した時期を特定する資料は得られていない。

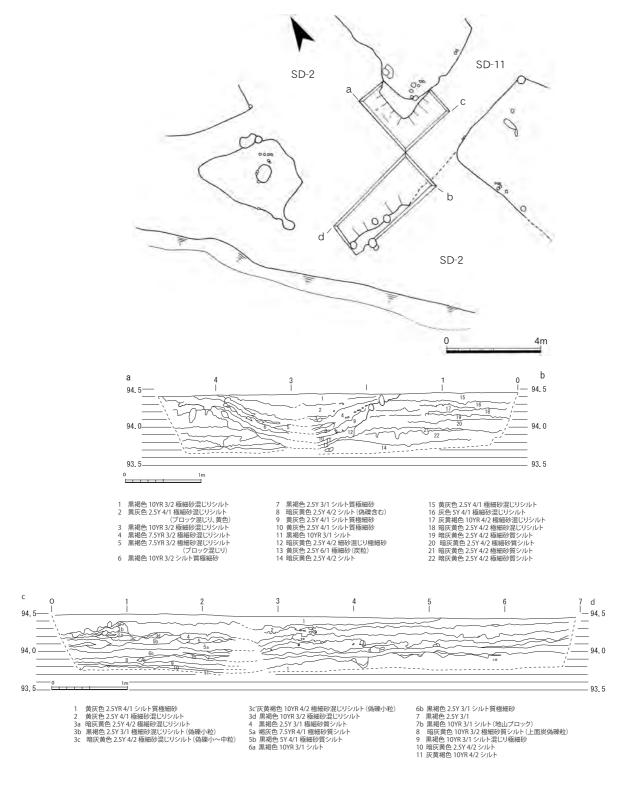


図11 SD-2 ベルト12

SD-3

【ベルト11】

環濠を検出した場所の基盤層検出面は標高94.50m、濠底は標高92.80m、濠幅5.2~6m程度、深さは1.70mを測る。断面形は逆台形に近い。遺物の出土量はSD-1、2に比すると少ないが、土器や木製品等が出土している。以下、ベルト11の断面図を図12に示し、埋没状況を記載する。

初期の環濠開削~埋積期の堆積物は、20層~9層が相当する。20層は環濠が開削されている基盤をなす堆積物が、開削期の人為的擾乱により著しく乱れている。19層は20層に由来する偽礫が混じ

る不連続な葉理構造をなす、植物遺存体に富む砂質シルトからなっており、ウリ科作物の種子が多量に出土している(第V章第1節参照)。当時の環濠内は、水流の影響を受ける時期を挟在する、地下水位の高い湿地~水域であったことが推定される。

 $18\sim20$ 層にかけての出土土器には、IV期前~中葉のものが出土している。その上位に累重する 18層~ 9 層は上方粗粒化する砂質シルト~シルト質極細砂からなり、 9 層形成期にかけて、環濠内の水位が上昇傾向にあったことが推定される。出土土器には、IV期中葉のものが出土している。

人為的な埋戻期の堆積物は14層~5 層が相当する。これらの堆積物の層相は不規則に配置する、大きさが不揃いの亜角状をなすシルト質極細砂ないし極細砂質シルトの偽礫からなる。人為的堆積物を掘削後に再開削された溝を埋積する堆積物は、4 層がやや腐植を含む砂質シルトからなる。著しく擾乱されているため、初生の堆積構造は不明瞭となっているが、有機質遺物がほとんど確認されないことなどから、常に冠水しているような状態ではなく、乾燥する時期を挟在していることが推定される。また、4 層の上位には大きさが不揃いの亜角状をなすシルト質極細砂の偽礫からなる堆積物が累重する。人為的営力により形成された堆積物の可能性が高い。 $4 \sim 1$ 層の出土土器については、IV期中~後葉のものが出土している。

このように本環濠の充填堆積物の状況をみると、SD-2の堆積状況に類似する。

以上、環濠内堆積層は、その累重状況から、大きく、初期の環濠開削期〜埋積期 (20~9層)、 人為的な埋戻しの時期 (14~5層)、再掘削期〜埋積期 (4~1層) の 3 時期に区分される。

【ベルト13】

SD-7が東側より伸びてきてSD-3と接合する部分に土層観察ベルト13を設定し、その切合い状況や新古関係の確認にあたった。図13を参照にして、この地点の堆積状況を説明しておく。

ベルト13の東西断面 (a-b) では、SD-7に並行するかたちでほぼ水平方向に土層が堆積し、SD-3 に堆積した土砂を切り込んでいる様子がうかがえる。SD-7 が SD-3に重なる先端部分では、土層が駆け上がる状態が断面にうかがえる。南北断面 (c-d) では、ほぼ水平に埋積したSD-3の土層を、深さ約50cmで断面が緩やかなU字形をした溝SD-7が切り込む状況が確認できる。このことから2つの溝 (SD-3とSD-7) の関係は同時に存在していたのではなく、SD-7はSD-3よりも後出で、SD-3が完全に埋もれてから掘られた溝であることがわかる。このベルトからは出土土器はあるもののSD-7の機能期を特定する資料は得られていない。

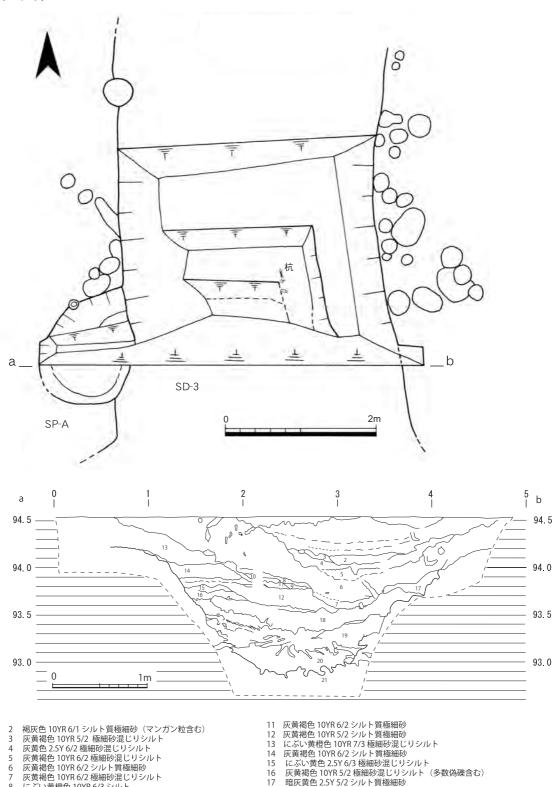
【ベルト9】

TC地区で検出されたSD-3の南端に近い部分に断割りベルトを設け断面観察を行った。図14を参照にして、この地点の堆積状況を説明しておく。

当ベルト位置での遺構検出面は標高94.4mを測る。濠底は標高93.0m、濠幅は $5\,\mathrm{m}$ 程度と考えられる。深さは $1.4\mathrm{m}$ を測る。断面形は緩やかな逆三角形に近い。埋積初期の開削〜埋積期の堆積物は、23層から21層が相当する。23層は環濠が開削されてまもない時期に水中に堆積してできた土層で、有機質遺物はあまり認められない。22層は有機質混じりのシルトで偽礫を含む。21層は有機質を含むもの。 $15\sim19$ 層にかけては地山に酷似する堆積物で人為的埋土と考えられる。この地層を切り込むかたちで $7\sim14$ 層が埋積しており、極細砂を含むシルト質土からなる。再掘削〜埋積期にあたるものである。その上位に累重する3層 ~6 層は極細砂〜シルト質土からなるもので、一旦埋もれた環濠が、 $\mathrm{SD-7}$ から分岐した溝によって再掘削されたことによるものと考えられる。そして、 $1\sim2$

層については、さらに新しい時期の撹乱によるものと考えられる。

以上、当ベルト9の堆積層は、その累重状況から、大きく、初期の環濠開削~埋積期(23~21層)、 人為的な埋戻しの時期(20~15層)、再掘削~埋積期(14~7層)、再掘削~埋積期(3~6層) の4時期に区分される。

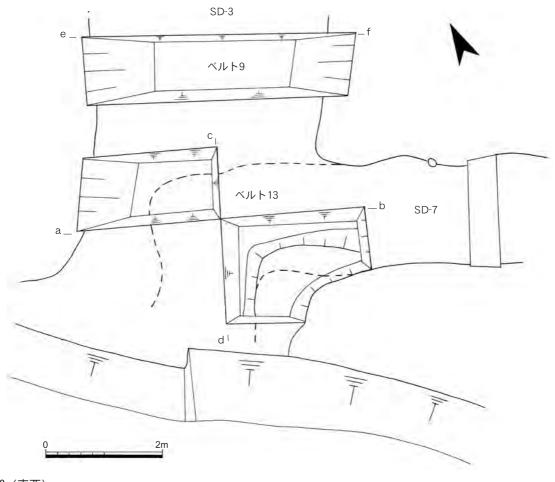


- 8 にぶい黄橙色 10YR 6/3 シルト 9 褐灰色 7.5YR 5/1 極細砂混じりシルト 10 褐灰色 10YR 5/1 極細砂混じりシルト

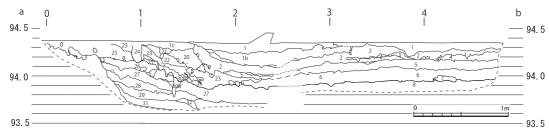
- 14 15
- にぶい黄橙色 10YR 7/3 極細砂混じりシルト 灰黄褐色 10YR 6/2 シルト質極細砂 にぶい黄色 2.5Y 6/3 極細砂混じりシルト 灰黄褐色 10YR 5/2 極細砂混じりシルト (多数偽礫含む) 暗灰黄色 2.5Y 5/2 シルト質極細砂 灰黄色 2.5Y 6/2 (有機質土層) 暗灰黄色 2.5Y 6/2 極細砂

- 19 20
- 21 灰色 7.5Y 6/1 極細砂まじり細砂

図12 SD-3 ベルト11



ベルト13 (東西)



- 1 褐灰色 10YR 5/1 シルト混じり極細砂 1b 褐灰色 10YR 6/1 極細砂
- 褐灰色 10YR 6/1 細砂混じり極細砂 黄灰色 2.5Y 6/1 極細砂混じり細砂
- 黄灰色 2.5Y 6/1 極細砂混じり細砂
- 20 21
- 灰黄色 2.5Y 6/2 極細砂混じり細砂 褐灰色 10YR 6/1 シルト混じり極細砂
- 暗灰黄色 2.5Y 5/2 シルト混じり極細砂質細砂 褐灰色 10YR 5/1 極細砂
- 褐灰色 10YR 5/1 シルト質極細砂

- 25 灰黄色 2.5Y 6/2 極細砂混じりシルト 26 暗灰黄色 2.5Y 5/2 極細砂混じりシルト 27 灰オリーブ色 5Y 6/2 極細砂混じりシルト 28 暗灰黄色 2.5Y 5/2 (炭・土器)シルト混じり極細砂 90 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト混じり極細砂 30b 黄灰色 2.5Y 6/1 シルト混じり極細砂

- 31 黄灰色 2.5Y 5/1 シルト混じり細砂 32 褐灰色 10YR 6/1 シルト混じり細砂
- 褐灰色 7.5Y 4/1 シルト質極細砂 褐灰色 10YR 5/1 シルト質極細砂
- 灰黄褐色 10YR 6/2 シルト(偽礫)
- 地山粒土の混入 褐灰色 10YR 5/1 シルト質極細砂
- 暗灰黄色 2.5Y 5/2 細粒混じり極細砂 黄灰色 2.5Y 5/1 極細砂混じり細砂
- 7 灰色 5Y 5/1 極細砂質シルト 8 灰オリーブ色 5Y 6/2 シルト質極細砂

ベルト 13 (南北)

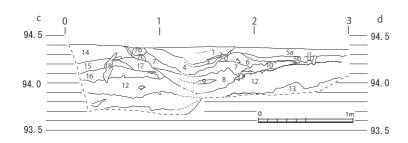


図13 SD-3 ベルト13

- 褐灰色 7.5Y 5/1 シルト質混じり極細砂(偽礫含む)
- 褐灰色 10YR 6/1 極細砂

- 9 灰黄色 2.5Y 6/1 シルト質極細砂(偽礫) 10 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト質極細砂

- 11 褐灰色 10YR 6/1 極細砂質シルト 12 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト混じり極細砂 13 灰オリーブ色 5Y 6/2 シルト混じり極細砂
- 14 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト質極細砂 15 暗灰黄色 2.5Y 5/2 シルト混じり極細砂 16 褐灰色 10YR 5/1 シルト混じり極細砂
- 17 暗灰黄色 2.5YR 5/2 シルト質極細砂 18 褐灰色 10YR 5/1 シルト質極細砂

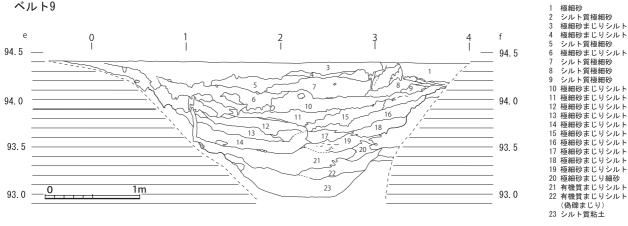


図14 SD-3 ベルト9

SD-4

【ベルト5】

環濠を検出した場所の基盤層検出面は標高94.50m、濠底は標高93.3m、濠幅4.5m程度、深さは約1.2mを測る。断面形は緩やかなU字形に近い。出土遺物には、土器や木製品、植物遺存体等が出土している。以下、ベルト5の断面図を図15に示し、埋没状況を記載する。

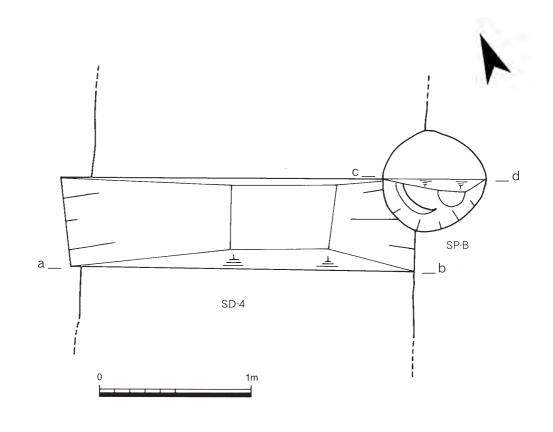
初期の環濠開削期〜埋積期の堆積物は15層〜 10層が相当する。15層は環濠の基盤をなす16層の砂質泥の偽礫が混じる、開削時の人為的擾乱により形成された堆積層である。14〜16層からの出土土器には、IV期中葉のものが少量ある。15層上部は上位に累重する14層形成期に侵食されている。14層は植物遺存体が多く混じる葉理をなす中砂〜シルト混じり極細砂、13層は有機質混じり細砂、12層から11層は極細砂からなるが、著しく変形しているため、初生の堆積構造が不明瞭となっている。変形の影響があまり及んでいない部分の層相から、14層はトラフ型の斜交葉理をなす砂層、13層〜 11層も葉理構造をなす砂〜シルト質細砂層、10層は塊状構造をなす砂質シルト層と判断される。以上から環濠構築期〜埋積期は、環濠に水があり機能していた時期と放置されて埋積が進んだ時期の双方があったことが分かる。このようにSD-4の初期段階の堆積物は、先述のSD-2・3とは大きく異なり、上方に向けて細粒化する層相変化を示している。

これらの堆積物の上位には、人為的営力により形成されたとみられるシルト質極細砂ないし極細砂質シルトの偽礫からなる 9 層~ 5 層堆積物が累重する。人為的堆積物を掘削後に再掘削された溝を埋積する堆積物は 4 層~ 1 層が相当する。 4 層はやや腐植を含む砂質シルトからなる。有機質遺物がほとんど確認されないことから、常に冠水しているような状態ではなく、乾燥する時期を挟在する湿地のような堆積場であったと推定される。 4 層の上位に累重する 3~1 層は、著しく擾乱された砂質シルト~シルト質極細砂からなり、放射・垂直方向の植物根痕が密度高く分布する。これら 3~ 1 層中には、環濠の基盤堆積物である I 層に由来する偽礫が混在することを踏まえると、人為的営力により形成された堆積物の可能性が高い。

以上、環濠内堆積層は、その累重状況から、大きく、初期の環濠開削~埋積期(15~10層)、人 為的な埋戻しの時期(9~5層)、再掘削期~埋積期(4~1層)の3時期に区分される。

【ベルト16】

環濠を検出した場所の基盤層検出面は標高94.60m、濠底は標高93.2m、濠幅約6 m程度、深さは約1.4mを測る。断面形は緩やかなU字形に近い。出土遺物には、土器や木製品、植物遺存体等が出土している。以下、ベルト16の断面図を図16に示し、埋没状況を記載する。



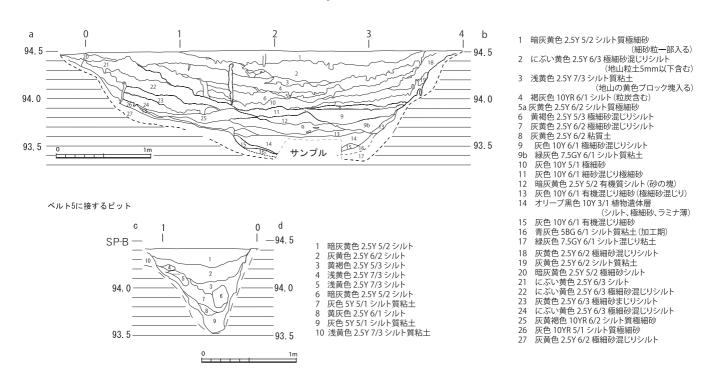
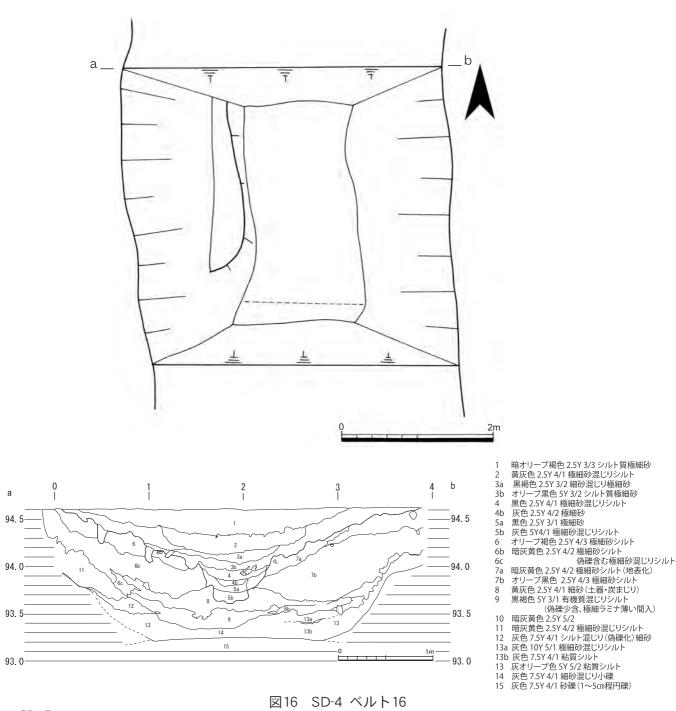


図15 SD-4 ベルト5

初期の環濠開削期〜埋積期の堆積物は14層〜11層が相当する。最下層部分の13、14層は環濠の基盤をなす15層の円礫混じりの砂礫層に到達しており、巻上げによる砂礫がシルト質土に含まれている。13層の上位に累重する11層、12層はシルトから極細砂によって埋積されたもので、8、9 層によって再掘削、侵食を受けている。8、9 層の出土土器にはIV期中〜後葉のものが出土している。8 層の上部にある6、7 層は、基盤層に酷似する極細砂まじりシルトで充填されており、人為

的な埋め土と判断している。この土層からは、IV期中~後葉にかけてのものが出土している。 6、7層の堆積後SD-4は、再度溝が掘削されており、その最深部は93.6m、約1 mほど開削されている。再掘削後の堆積物である $1\sim5$ 層からは、IV期後葉にあたる土器が出土している。



SD-5

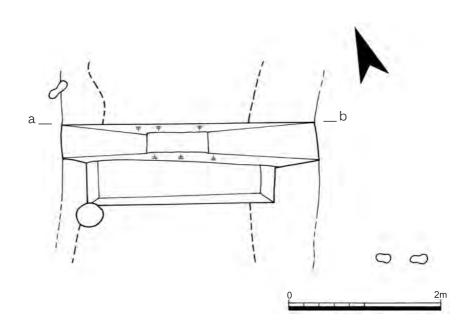
【ベルト2】

SD-5を検出した場所の基盤層検出面は標高94.50m、濠底は標高93.9m、濠幅約3.5m、深さは約0.6mを測る。断面形は緩やかなU字形に近い。出土遺物には、少量の土器片が出土している。

以下、ベルト2の断面図を図17に示し、埋没状況を記載する。

本地点の環濠堆積物の累重状況は、上述してきた環濠とは異なっており、再掘削されている状況は確認されない。最下部の11層は、基盤をなす14層のシルト混じり極細粒砂などの偽礫が散在する

泥質細粒砂からなる。環濠開削時の人為的擾乱が及んだ層準と判断される。この上位には、環濠周 辺の土壌に由来するとみられる腐植質泥~砂質泥からなる再堆積土壌の7層が堆積する。さらに7 層の上位に堆積する6層~5層は亜角状をなす砂質泥~泥質砂の偽礫が混じる砂質泥~泥質砂から なる。植物根痕等の著しい擾乱により、初生の堆積構造は不明瞭となっている。



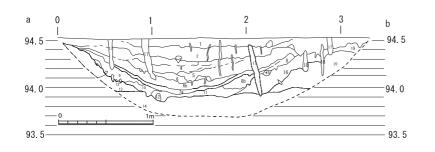


図17 SD-5 ベルト2

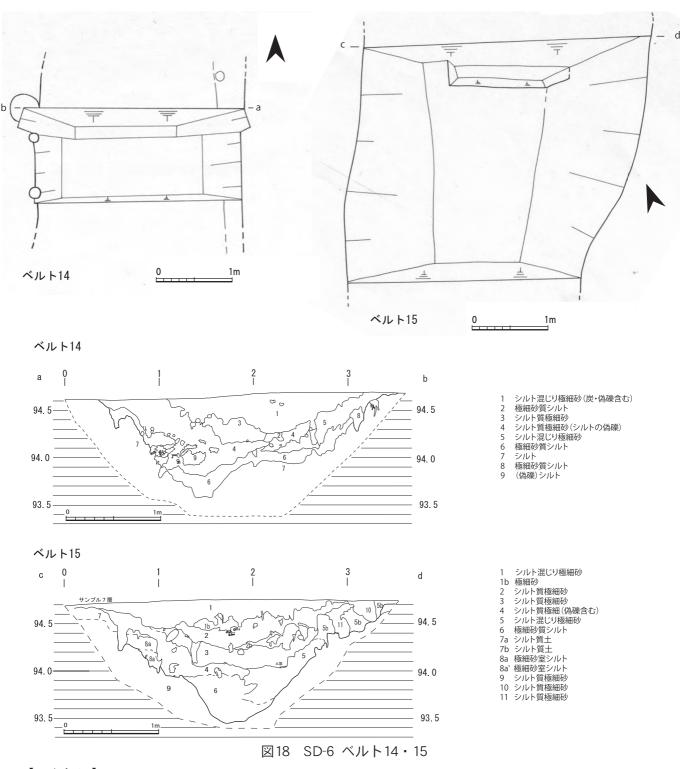
- 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト質極細砂 にぶい黄色 2.5Y 6/3 シルト質極細砂 (炭粒混じり)
- 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト質極細砂
- 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト質極細砂
- 褐灰色 10YR 5/1 シルト質極細砂 暗灰黄色 2.5Y 5/2 極細砂混じりシルト
- 6 7a 褐灰色 10YR 5/1 極細砂混じりシルト
- 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト質極細砂 にぶい黄色 2.5Y 6/3 シルト質極細砂
- 10 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト質極細砂 11 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト質極細砂
- 褐灰色 10YR 5/1 極細砂混じりシルト
- 13 浅黄色 2.5Y 7/3 シルト混じり極細砂 14 灰黄色 2.5Y 7/2 シルト混じり極細砂
- 15 灰黄色 2.5Y 7/3 シルト
- 16 にぶい黄色 2.5Y 6/3 極細砂混じりシルト
- 17 黄灰色 2.5Y 6/21極細砂 18 暗灰黄色 2.5Y 5/2 極細砂
- 19 にぶい黄色 2.5Y 6/3 極細砂質シルト 20 にぶい黄色 2.5Y 6/3 シルト

SD-6

【ベルト14】

SD-6を検出した場所の基盤層検出面は標高94.70m、濠底は標高93.5m、濠幅3.5m程度、深さは 約1.2mを測る。断面形は緩やかなU字形に近い。出土遺物には、弥生土器片が少量出土している。 以下、ベルト14の断面図を図18に示し、埋没状況を記載する。

初期段階の環濠堆積物である6層は、灰色を呈する上方細粒化するシルト質極細砂~極細砂まじ りシルトである。層相からは、常に冠水していたとは考えにくく、増水時に水没することのある有 機物の分解が進行するような堆積場であったことが推定される。このようにSD-6環濠充填堆積物の 層相は、SD-1~4などの初期段階の環濠充填堆積物下部で認められる有機物に富む層準は存在せず、 大きく異なっている。



【ベルト15】

初期段階の環濠堆積物である6層は、灰色を呈する、上方細粒化する泥質砂~砂質泥からなり、層相からは、常に冠水していたとは考えにくく、増水時に水没することのある有機物の分解が進行するような堆積場であったことが推定される。本層の上位に載る4・3層は大きさが不揃いで不規則に配置する、亜角状をなす砂質泥~泥質砂の偽礫からなることから、人為的営力により形成された堆積物と判断される。これらの堆積物の上部は掘削され、凹地が構築されている。この凹地を埋積する堆積物はやや腐植に富む砂質泥からなる。植物根痕により著しく擾乱されているため、初生の堆積構造は不明瞭となっている。不規則に発達する亜角状の偽礫状の構造などの存在から、再堆積した土壌ないし、土壌生成が進行するような堆積環境で形成された可能性がある。

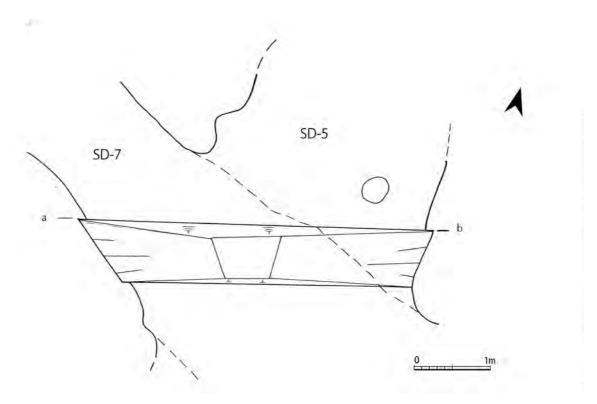
本環濠堆積物は、その累重状況から初期の環濠開削期~埋積期、人為的な埋戻期、再掘削期~埋積期の3時期に区分される。

3) 溝跡

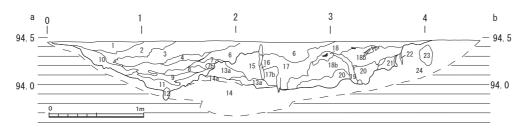
SD-7

【ベルト1】

SD-5とSD-7が交差する地点にベルト1を設けて遺構の切り合い状況の確認を行った。図19に示 した断面図を見ると、深さ約60cmで緩やかなU字形に掘られたSD-5を埋める20層から15層を切り 込む形で、12層から1層が掘削されており、時期的に言うとSD-7が、SD-5よりも新しいものである ことがわかる。SD-7の下層(9層)には水流に運ばれた砂の堆積が認められる。ベルト1からの出 土遺物には、弥生土器片が少量出土しておりⅣ期後葉に相当するものである。





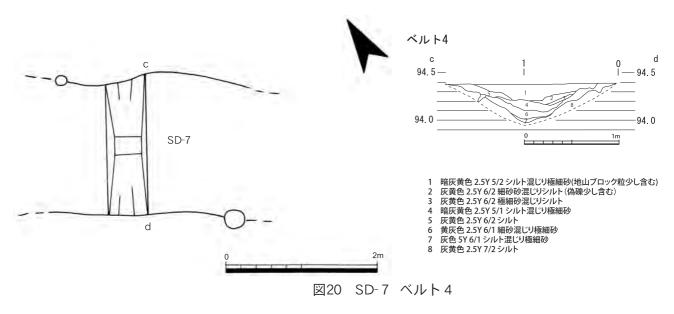


- 褐灰色 10YR 6/1 シルト質極細砂
- 褐灰色 10YR 6/1 極細砂混じりシルト 暗灰黄色 2.5Y 5/2 極細砂混じりシルト
- 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト混じり極細砂 灰黄色 2.5Y 7/2 極細砂
- 灰黄色 2.5Y 6/2 極細砂混じりシルト
- 7 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト質極細砂 7b 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト質極細砂
- 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト混じり極細砂
- 灰黄色 2.5Y 6/2 細砂混じり極細砂
- 10 暗灰黄色 2.5Y 5/2 シルト質極細砂
- 11 黄灰色 2.5Y 5/1 極細砂混じりシルト 12 褐灰色 10YR 5/1 シルト
- 13a 暗灰黄色 2.5Y 5/2 極細砂混じりシルト 13a 灰黄色 2.5Y 6/2 シルト
- 14 にぶい黄色 2.5Y 6/3 シルト質粘土
- 15 灰黄褐色 10YR 5/2 極細砂混じりシルト 16 褐灰色 10YR 5/1 シルト
- 17 褐灰色 10YR 5/1 極細砂混じりシルト (炭・土器含む)
- 17b 褐灰色 10YR 6/1 極細砂混じりシルト 18 灰黄褐色 10YR 5/2 極細砂質シルト 18b 暗灰黄色 2.5Y 5/2 極細砂質シルト
- 19 灰黄褐色 10YR 4/2 シルト 20 暗灰黄色 2.5Y 5/2 粘質シルト 21 灰黄色 2.5Y 6/2 粘質シルト
- 22
- 灰色 5Y 7/3 粘質シルト 灰黄褐色 10YR 5/2 極細砂混じりシルト
- 24 浅黄色 5Y 7/3 粘質シルト

図19 SD-7 ベルト1

【ベルト4】

SD-7のベルト4での断面形は、緩やかな逆三角形に近いもので、幅1.8m、深さ45cmを測る。埋積土砂はシルトから極細砂が基本であるが、下層には砂の堆積が一部で認められる。出土遺物には、弥生土器片が少量出土しているが、年代を特定する資料は得られていない。



SD-8

【ベルト6】

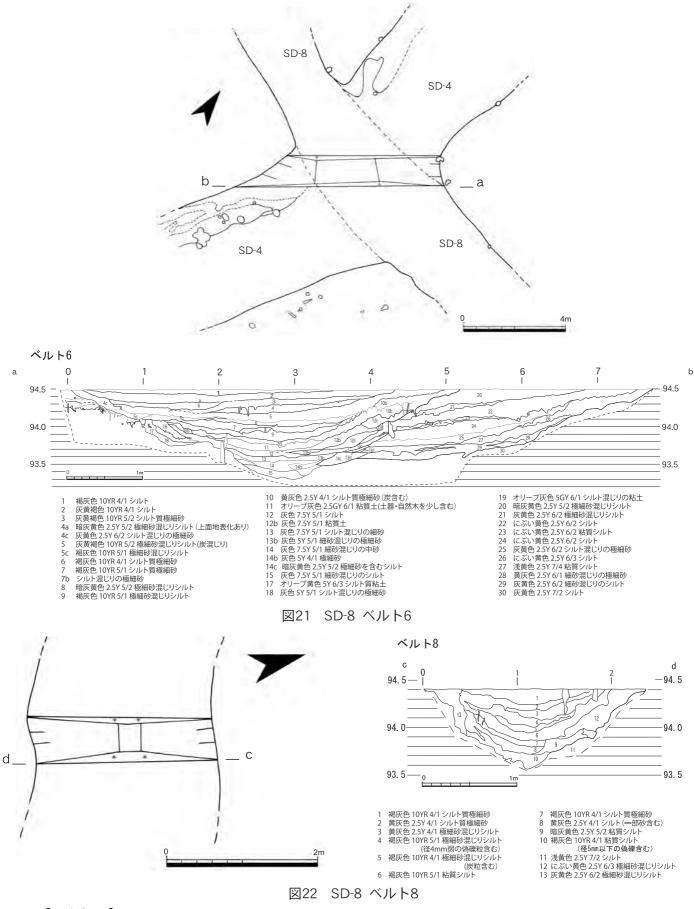
SD-8とSD-4が交差する地点にベルトを設け、遺構の切り合いを観察した。以下、ベルト6の断面図を図21に示し、埋没状況と遺構の切合いを記載する。ベルト6断面の右半分には、SD-4の堆積状況が看取され、それを抉り込むようにSD-8の堆積物が認められる。

SD-4の開削から埋積期に相当する土層は、29層から25層にかけての層序で、中粒砂からシルト混じりの細粒砂によって構成されており、環濠内に水があり機能していた時期と放置されて埋積が進んだ時期の双方があったことがうかがえる。その上位にはシルト〜シルト混じりの極細砂による24層から20層があり、人為的営力により形成されたと見なされる土層がある。それを切り込む形でSD-8の1層から15層が埋積している。SD-8の下層部分(13~15層)には、炭化粒を含む細砂〜中砂の堆積物が認められ、一時的なものかもしれないが、水が流れていた痕跡がうかがえる。その後、再掘削され、再度10層において細粒砂の堆積が認められ、水の流れた痕跡がうかがえる。その後は上方に細粒化し極細砂からシルトによって埋積している。

【ベルト8】

SD-8に直行する形でベルトを設け土層の観察を行ったのが図22のベルト8である。この地点におけるSD-8の幅は2.3m、深さ約90cmを測る。断面形状は緩やかなU字形を呈している。

SD-8の埋積状況を以下説明すると、最下層部分にある11層は溝が開削されている基盤をなす堆積物(地山)に相当するが、溝の開削期の人為的擾乱により著しく乱れている。9、10層は開削時に取り込まれた11層に由来する偽礫が多く認められる層準で、シルトにより充填されている。その上部には、水流によって運ばれたと考えられる砂が一部で認められる(8層)。そして6、7層には、シルトや粘質土が堆積したのち、偽礫や炭化粒を多く含む4、5層がその上部に堆積する。そして、その後は上方に細粒化する状態で溝が埋もれてしまう。

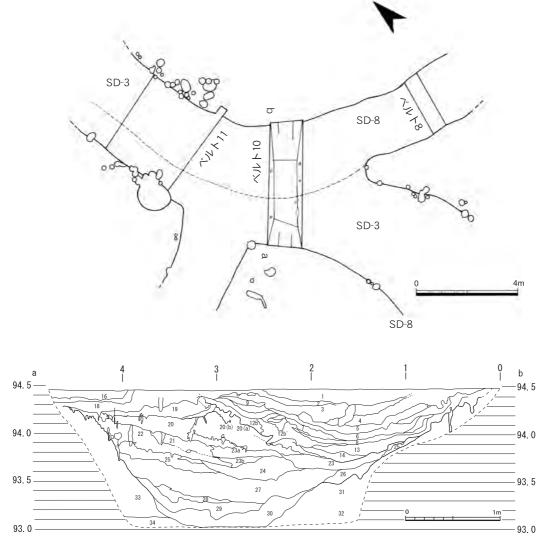


【ベルト10】

SD-8とSD-3が交差する地点にベルト10を設けて遺構の切り合い状況の確認を行った。図23に断面図を示す。概要を記すと、この地点では幅約5 m、深さ約1.5mの環濠SD-3を、幅約3 m、深さ約80cmの大溝SD-8が切り込むかたちで検出された。SD-3は、環濠開削から埋積期にあたる30層か

ら26層までが有機質を多量に含むシルト質土と、その上部に人為的盛り土に相当する22層・25層 が位置し、さらにその上位に再掘削~埋積期にあたる24層から19層が所在している。再掘削~埋積 期の24層においては、細粒炭や木片などを含む細砂層があり、一時的にせよ水流をうかがわせる堆 積物が確認できる。

図23断面図の右端側(b)に認められるSD-8については、開削から埋積期においてはシルトや 極細砂によって埋没しており、砂は認められないが、炭化粒や偽礫を含む層序が一部で確認できる (12・13層)。一時的な水没や水流に伴う現象と考えられる。ベルト10からの出土遺物には、弥生 土器片が少量出土しているが、SD-8の帰属時期は、IV期より時期的に下るものの検出はなかった。



- 褐灰色 10YR 4/1 シルト質極細砂
- 黒褐色 10YR 3/1 シルト質極細砂(炭粒まじり) 褐灰色 10YR 4/1 シルト質極細
- 褐灰色 10YR 4/1 シルト質極細砂 褐灰色 7.5YR 4/1 極細砂質シルト
- 黒褐色 10YR 3/1 シルト 質極細砂(炭含む) 褐灰色 10YR 5/1 シルト質極細砂(炭含む) 褐灰色 10YR 4/1 シルト混じり極細砂

- 暗灰黄色 2.5Y 5/2 極細砂まじりシルト 灰黄褐色 10YR 4/2 シルト質極細砂
- 11 暗灰黄色 2.5Y 5/2 極細砂質シルト 12b 灰黄褐色 10YR 4/2 シルトまじり極細砂(偽礫)
- 褐灰色 10YR 5/1 シルトまじり極細砂(炭含む)

- 褐灰色 10YR 4/1 シルト混じり極細砂(炭含む)
- 黄灰色 2.5Y 4/1 極細砂質シルト 灰黄色 2.5Y 6/2 極細砂混じりシルト 16
- 暗灰黄色 2.5Y 5/2 極細砂まじりシルト にぶい黄色 2.5Y 6/3 極細砂まじりシルト
- 18
- 灰黄色 2.5Y 6/2 極細砂質シルト

- 23b オリーブ灰色 5GY 6/1 シルト質極細砂 24 灰色 7.5Y 6/1 極細砂まじり細砂 (砂粒・木片少まじり)
- ·ブ灰色 2.5GY 6/1 シルトまじり極細砂 26
 - オリーブ灰色 2.5GY 6/1 有機質・ 極細砂まじり粘質土
- 暗灰黄色 2.5Y 4/2 有機質多くまじりシルト (1mmから5mmの丸い偽礫) 27
- オリーブ灰色 2.5GY 6/1 有機質まじりのシルト 褐灰色 5YR 4/1 有機質土
- 29
- イリーブ灰色 5GY 6/1 有機質まじりシルトオリーブ灰色 2.5GY 粘質シルト オリーブ灰色 2.5GY 粘質シルト 緑灰色 2.5GY 6/1 細砂まじり中砂 30
- 31
- オリーブ灰色 5GY 6/1 極細砂まじりシルト 青灰色 5BG 6/1 中砂 33

図23 SD-8 ベルト10

4) その他

SX-1

長楕円形の溝を方形(コの字状)に配置する遺構で、対面する溝の内径の幅は東西約13m、南北13m以上のものである。調査区に限られて北辺は検出されていないが、4辺を同様の溝で囲む方形周溝墓の可能性が高い。3辺に囲まれた内側空間にはピットが多数確認できる。周溝の埋土とピットの埋土には類似するものがあるが、周溝墓と同時期の遺構かは明確でない。平面検出と溝の一部断ち割りで調査を終えているためピットの性格づけや年代判定は出来ていない。溝からは弥生土器が少量出土(97、98、99)しており、IV期中葉~後葉に相当するものと考えられる。

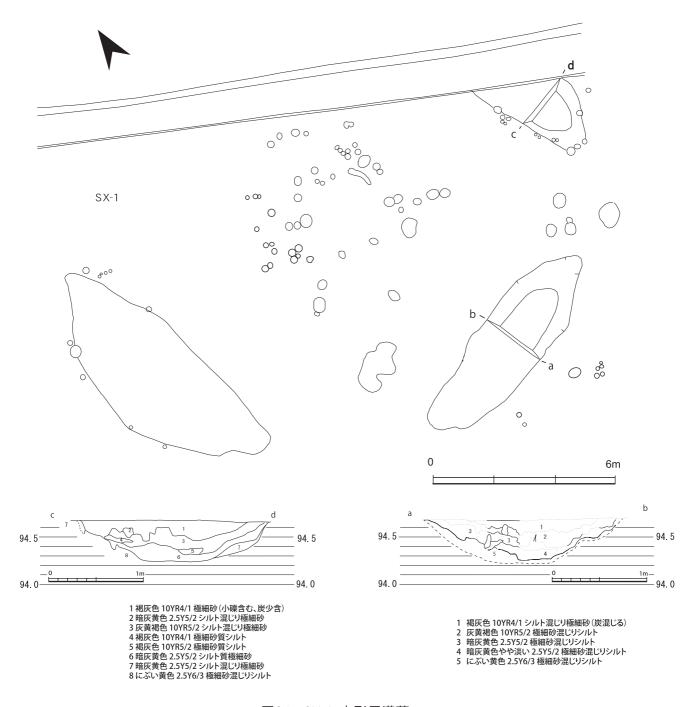


図24 SX-1 方形周溝墓

SX-2

TA地区の西端において検出されたもので、土坑もしくは井戸の可能性がある。石田川の護岸近くに所在するため遺構上部が、1m程削りとられ底の部分のみが検出されたものである。残存深は約70cmを測るもので、復元すると削平前の旧地表からの深度は2m程になる。

検出された土坑状遺構の最深部有機質土には、植物遺存体や木材が多数含まれおり、木製品としては、腰掛の破損品や竪杵の原材などが出土している。

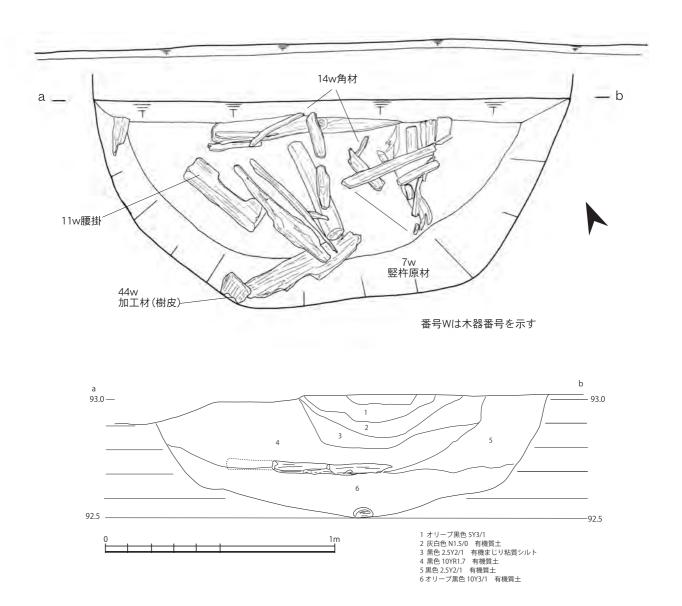
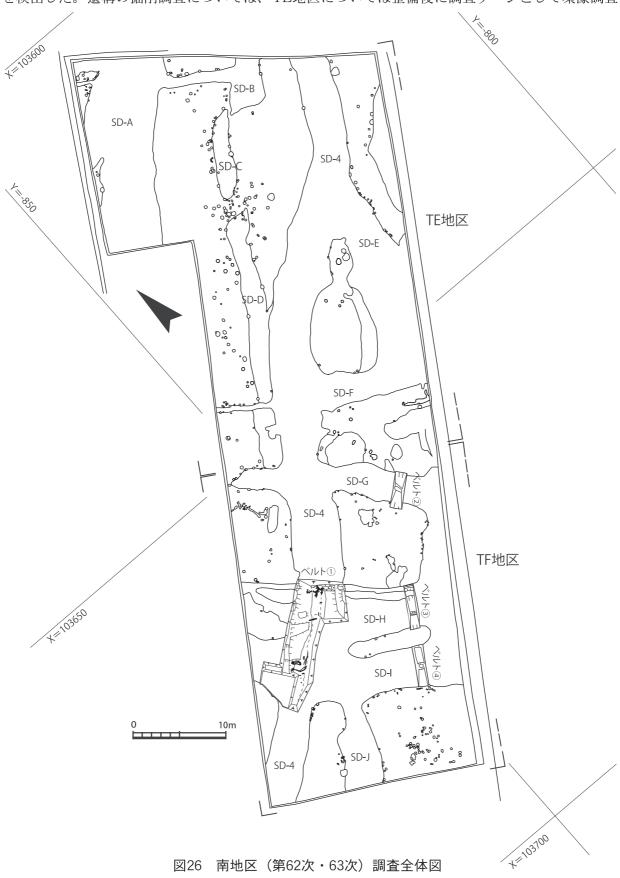


図25 SX-2 土坑状遺構

第2節 南地区で検出された遺構

石田川の南側の田地約3,000㎡について、TE地区とTF地区の2つに分割して遺構の平面検出を行った。その結果、北地区に延伸すると思われる2条の環濠(SD-A、SD-4)と溝状遺構(SD-B~J)を検出した。遺構の掘削調査については、TE地区については整備後に調査ゾーンとして環濠調査



施設における発掘計画が予定されているため、平面検出による遺構の形状把握で止めた。

なお、遺構番号は、未掘削などで遺構の性格づけが判然としていないものについては、数字表記ではなくアルファベット表記にすることとした。

TF地区については、環濠の展示を検討していたため、平面検出の後、遺構の形状や種類、切合関係等を踏まえて土層観察ベルトを設けて、遺構の埋没状況や掘方の形状、出土遺物の時期の把握を行う調査を実施した。

1)環濠

SD-A

SD-4

TE地区の北西隅で検出された遺構で、掘削調査は行っていないため詳細は不明であるが、検出面の土層状況などから環濠の可能性が高い。検出地点の標高は94.6mで、環濠の幅は約7mを測る。

TF地区の南西からTE地区の北東に向けて掘られた環濠と考えられる。平面検出した後に土層観察ベルト①を設け、環濠の埋積状況の確認を行った。

【ベルト①】

SD-4を検出した場所の標高は、94.80m、濠底は標高93.2m、濠幅5.6m程度、深さは約1.6mを 測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。出土遺物には、土器や木製品、植物遺存体等が出土して いる。以下、ベルト①の断面を図27に示し、埋没状況を記載する。

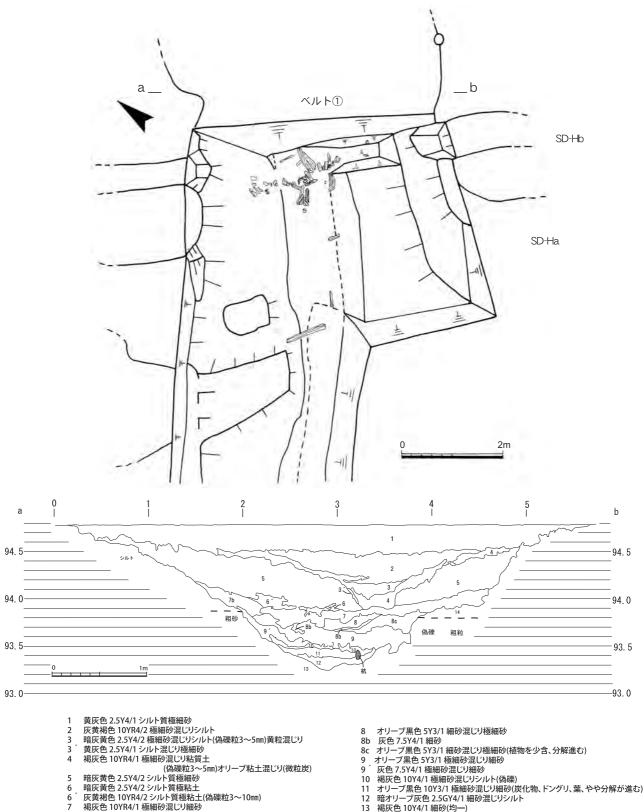
初期の環濠開削期〜埋積期の堆積物は12層〜7層が相当する。12層は環濠の基盤をなす13層の砂質シルトに偽礫と細砂が混じる。11〜7層は細砂を含む極細砂〜シルトの互層からなり、炭化粒、ドングリ、葉っぱ等植物遺存体を少量含むが、分解が進み保存状態はあまり良くない。以上から環濠構築期〜埋積期は、環濠に水があり機能していた時期と放置されて埋積が進んだ時期の双方があったことが分かる。その上部には、人為的に埋め戻されたシルト質極細砂ないし極細砂質シルトの偽礫からなる6層〜5層が堆積している。

その後に再掘削された溝を埋積する堆積物は、4 層~1 層が相当する。4 層はやや腐植や微粒炭、偽礫を含む砂質シルトからなる。4 層の上位に累重する 3 ~2 層は、著しく擾乱された砂質シルト~シルト質極細砂からなるもので、それを侵食するかたちで極細砂を主体にした1 層が埋積している。ベルト①の出土土器には、開削から埋積期の層順よりIV期前葉~中葉のものが少量出土している。

以上、環濠内堆積層は、その累重状況から、大きく、初期の環濠開削〜埋積期(12~7 層)、人 為的な埋戻しの時期(6~5 層)、再掘削期〜埋積期(4~1 層)の 3 時期に区分される。

しがらみ状遺構について

SD-4ベルト①の北隅の環濠底部において、環濠を横断するかたちで延長約3mの幅でしがらみ状遺構が検出された。SD-4の開削期〜埋積期においては、水が流れていた痕跡が土砂の堆積状況から確認できることから、しがらみ状遺構は、環濠底を流れる水の勢いを弱めたり、水を堰き止め水面の高低を調整したりするために施された可能性がある。



- 7b 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト混じり極細砂

- 13 褐灰色 10Y4/1 細砂(均-
- 14 オリーブ褐色 2.5Y4/3 シルト

図27 TF地区 SD-4 ベルト① しがらみ状遺構出土状況図

しがらみ状遺構には、直径5~20cm、長さ50~150cm程度の丸木やみかん割材、板材などの47本 の杭材が用いられていた。その構築材は、縦方向に打ち込まれたもののみで、柴や竹、渡し木など 絡ませた状況は確認できなかった。杭の高さは濠底から40~60cm突出しており、断面層序の7層境 界面付近、標高93.8m~94m付近で止まるものが多い。

しがらみ状遺構が検出された場所を真上から平面的に観ると、SD-HaやSD-Hbが、このしがらみ状

遺構があるSD-4の側近を横断する形で掘られている。これらについては全掘調査をしておらず、同時期のものか明らかにし得ていない。

しがらみ杭が、環濠に打ち込まれた層序と時期については、環濠開削期〜埋積期の12層〜9層が埋積していく過程で打ち込まれたと解するのが適切と思われる。打ち並べられた木杭のうち96w(測定番号C141)については、C14年代測定およびウイグルマッチングによる同定を実施しており、その較正年代はcalBCで126-66(94.7%)、56-56(0.8%)、最も確率の高い年代は最外年輪で106cal B Cという年代が求められている (注1)。

(注1) 小林謙一 2011 「出土木材の炭素年代測定」『下之郷遺跡の史跡整備に伴う報告書 I 』

2) 溝状遺構

SD-H

SD-Hは、TF地区の中央で検出された溝状遺構で大小の2本(SD-HaおよびSD-Hb)が並行して南東-北西に向けて伸びている。調査区中央部でSD-4と交差するかたちで検出されている。検出面の精査では切り合い関係が認められず、SD-4との新古関係の判定はできなかった。そのため、土層観察ベルト③を設けて、SD-HaおよびSD-Hbの時期や形状を把握する調査を行った。

【ベルト③】

SD-Haは、幅約3.5m、深さ約90cm、断面形状が緩やかに落ち込む溝状遺構である。出土遺物に図化できるものは無く、高坏体部破片が1点出土したのみで年代特定に至っていない。

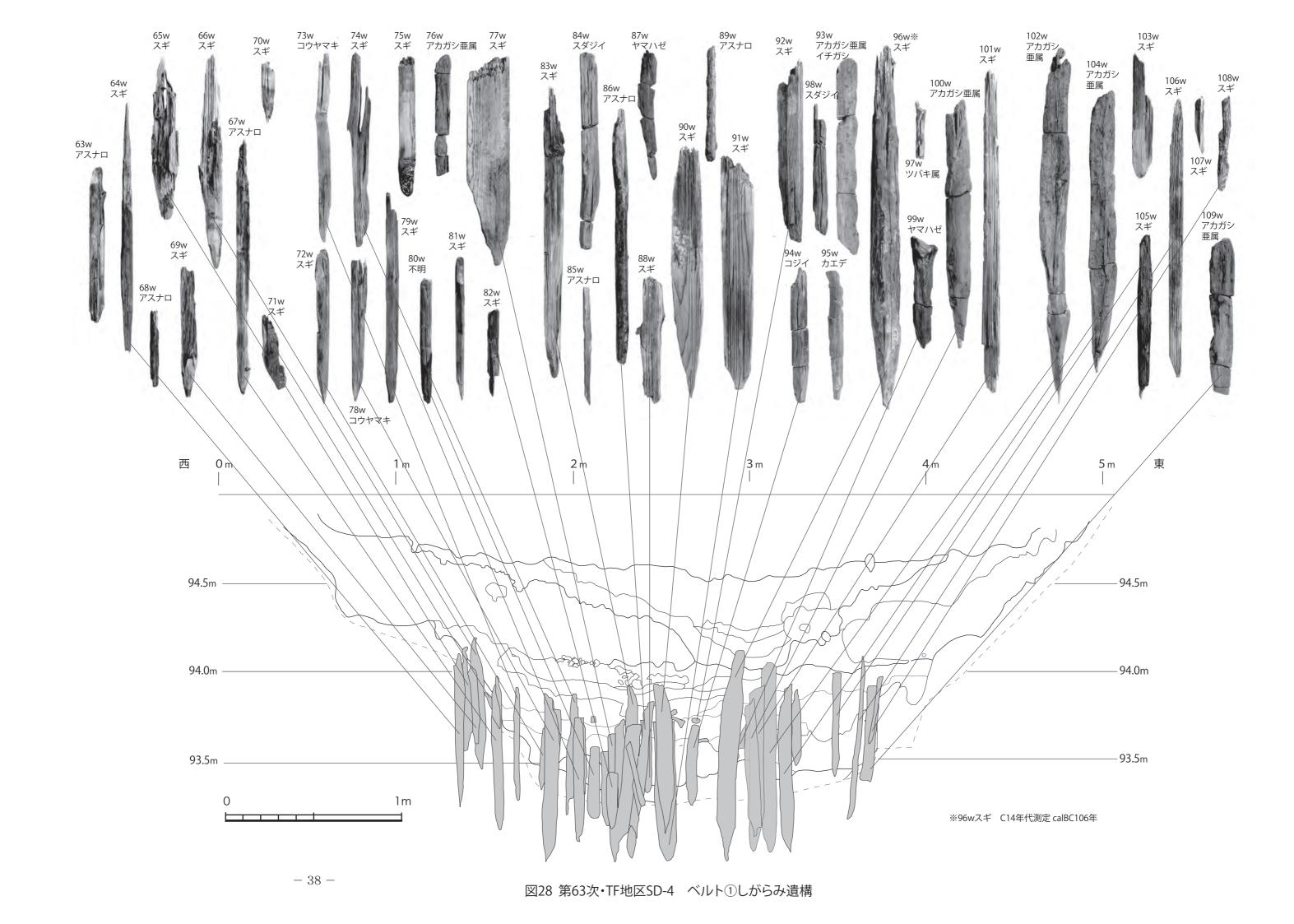
SD-Hbは、幅約60cm、深さ約20cm、断面U字形をした溝状遺構である。出土遺物は無い。

SD- I

SD-Iは、TF地区で検出された溝状遺構で南東-北西に向けて伸びている。

【ベルト④】

SD-Iは、幅約4.5m、深さ約90cm、断面形状が緩やかに落ち込む溝状遺構である。出土遺物には細片であるが、古墳時代前期(布留式)の土器片が少量出土している。



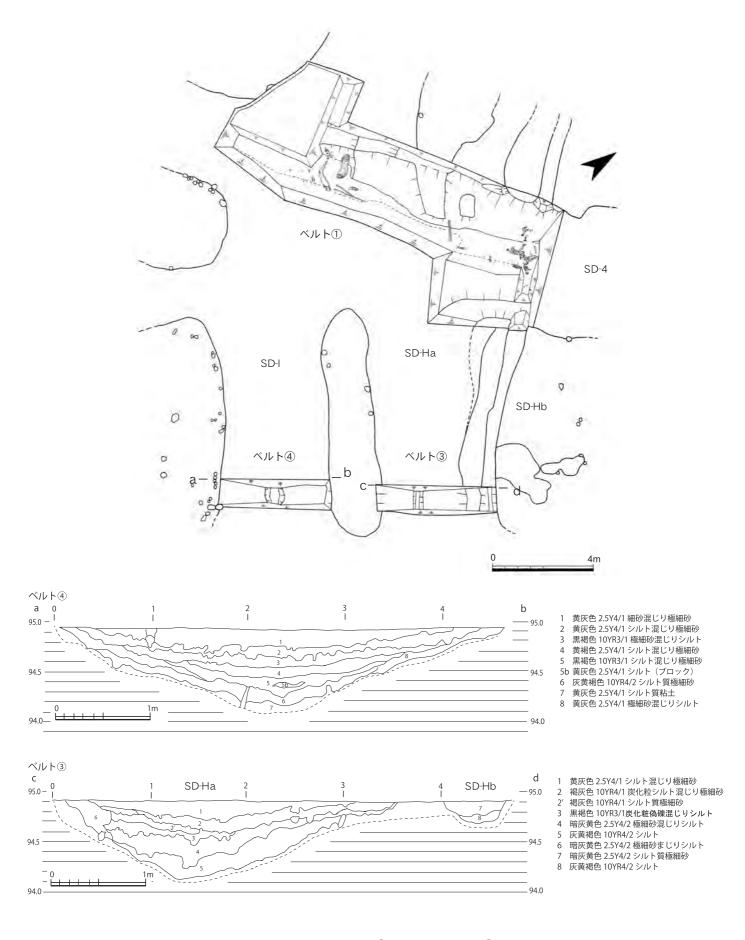


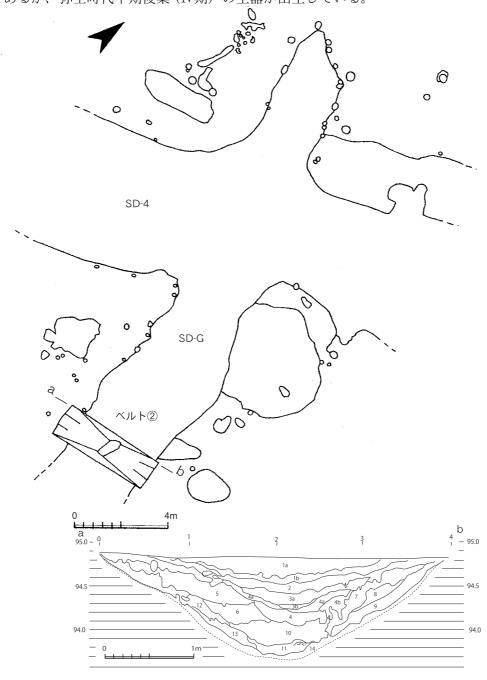
図29 SD-H ベルト③・SD-1 ベルト④

SD-G

SD-Gは、TF地区の北側で検出された溝状遺構で、南東-北西に向けて伸びている。調査区内で SD-4と交差するかたちで検出されている。検出面の精査では切り合い関係が認められず、SD-4と の新古関係の判定はできなかった。そのため、土層観察ベルト②を設けて、時期や形状の把握を行 うこととした。

【ベルト②】

SD-Gは、幅約4m、深さ約110cm、断面形状が緩やかに落ち込む溝状遺構である。出土遺物は 少量であるが、弥生時代中期後葉(IV期)の土器が出土している。



- 1a 灰色 5Y4/1 シルト質極細砂
- 1b 黄灰色 2.5Y4/1 シルト混じり (偽礫・炭含む)
- 2 灰黄褐色 10YR4/2 粘質シルト (偽礫・炭含む)
- 3a 黄灰色 2.5Y4/1 極細砂混じりシルト
- 3b 暗灰黄色 2.5Y4/1 細砂混じりシルト
- 4a 灰褐色 7.5Y4/2 極細砂混じりシルト
- 4b 黄灰色 2.5Y4/1 粘質シルト
- 4 灰褐色 10YR4/1 シルト
- 5 暗灰黄色 2.5Y4/2 極細砂含むシルト
- 暗灰黄色 2.5Y4/2 極細砂含むシルト
- 暗灰黄色 2.5Y5/2 粘質シルト
- 暗灰黄色 2.5Y5/2 粘質土
- 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト質粘土
- 灰色 5Y4/1 粘質土(有機質混じる)
- 灰色 10YR3/1 シルト質粘土(有機質混じる)
- 12 暗灰黄色 2.5Y4/1 粘質シルト
- 暗灰黄色 10YR4/2 粘質シルト 13
- 14 灰色 2.5Y4/1 シルト質粘土

第Ⅲ章 出土遺物

第1節 土器

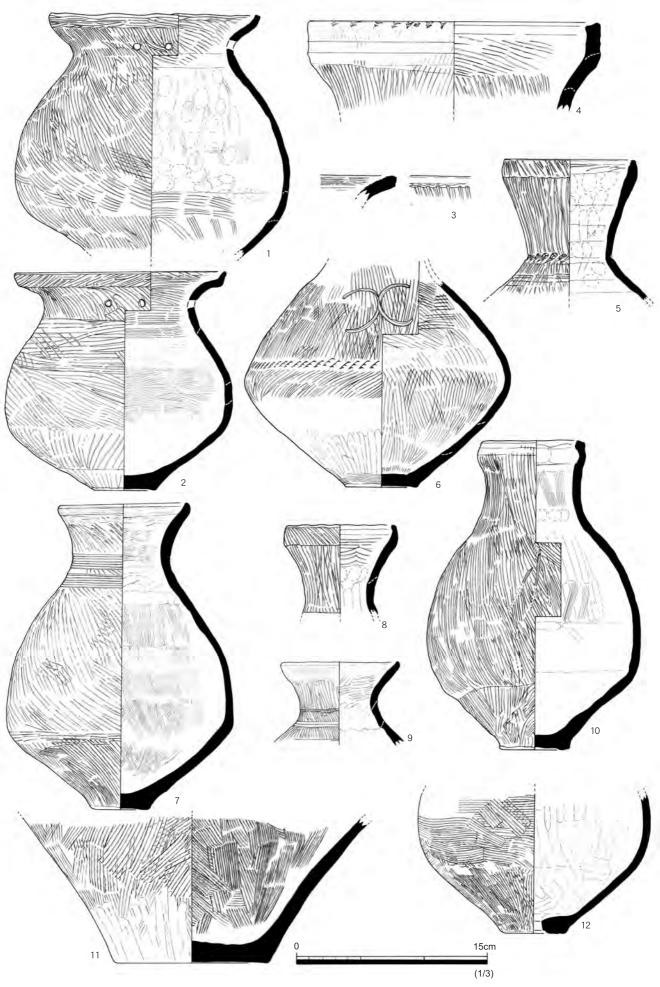
環濠の調査では、土砂の堆積状況を観察するためのトレンチベルトを設定するとともに、各ベルト内から出土する遺物を層序ごとに取り上げ、環濠の埋積時期を把握する調査を実施した。遺物の取り上げは、単層ごとに取り上げたものと、土砂の堆積構造を判断したうえで複数の土層を一纏まりのユニットとして現場で認定し取り上げたものがある。整理調査では、出土した土器の残存状態を確認したうえで、以下の $1\sim4$ 類に仕分けを行った。1類は、ほぼ完全な形状に復元実測ができるもの。2類は、口縁が1/4以上程度あるもの。もしくは体部などの残存状況から器形が復元実測できるもの。3類は、土器形式の特徴や製作手法、施文方法などを残しているが2類よりも器体が小さな破片。4類は2類よりも小さな破片で、施文や土器形式を峻別できないものとした。

上記の基準をもとに土器を選別し、そのうちの1類および2類については、本章で図面掲示と観察結果を記載することとした。また3類については、図化作業を行っていないが年代を推定するための資料として全て観察し、第 \mathbb{N} 章「第1節 2) 環濠堆積層の土器型式期と編年的位置」でその結果の一部を記載した。

(北地区)

SD-1 ベルト18出土土器 1~16

1、2は受口状口縁を呈する在地系の壺で、頸部に蓋を結束する為の2孔1対の穿孔をもつもの である。1は下膨れの体部から短く外反する第1口縁を立ち上げ、その先端から横ハケで短く上方 に第2口縁をつくりだす。2は外反する第1口縁からさらに外方へ短く第2口縁を立ち上げ、外面 に斜位の粗ハケを施す。3は大きく外反して開く口縁の一部で、広口壺の口縁部である。4は大型 有段口縁壺の口縁部で、第2口縁外面は粗ハケを施した後、凹線文状に幅広く平滑な横ナデを施す。 5は外傾し直線的に伸びる口縁を持つ直口壺で、口縁端部に斜位に粗ハケを施す。頸部には列点文 を施す。6は壺の胴部で最大幅径付近に列点文をめぐらす。肩部付近にはヘラ描で記号文「X」を 記す。7はやや下膨れの胴部に短く外反する口縁をもつ短頸壺である。底部と胴部は別途に粗ハケ を施した後、接合部付近の外面を横位にハケで仕上げる。頸部には2条の櫛描直線文を施す。口縁 端部外面は粗ハケを消すように横ナデを施している。8は短頸直口壺の口縁部である。口縁先端部 を内傾させて立ち上げ、端部に面を設け外面に斜位の粗ハケを施す。 9 は短く外傾する口縁を持つ 壺で口縁端部外面を指でつまみ、横ナデを施したものである。10はやや長胴の体部に短い円筒状の 口縁部を立ち上げた短頸直口壺である。底部と胴部は別途に粗ハケを施し、接合した痕跡がある。 口縁端部には、つまみ上げた痕跡があり内面は抉れた部分が認められる。体部外面肩部には3本の ヘラ描沈線文が認められる。11は大型壺の底部で内外面ともにハケが施されている。外面の底部付 近は粗ハケの後に上位から下位へのケズリを施している。12は壺の底部から胴部で、底部には焼成 前のものと思われる穿孔がある。外面は底部と胴部で縦位と横位のハケの施し方が異なる。13~15 は在地系の受口状口縁甕である。13はほぼ完形の甕で、外反する第1口縁の先端を外方へやや屈曲 させ第2口縁部をつくりだす。第2口縁外面は斜位の粗ハケを施す。体部上位には櫛描直線文を複 帯で施している。14は外反して立ち上がる第1口縁の端部を外方につまみ上げ、第2口縁としてい る。第2口縁の外面は横位の粗ハケを施す。口縁先端にはキザミを間隔をおいてめぐらす。15はや や小型の甕で底部には1穴の穿孔がある。体部は全面を粗ハケで仕上げ、体部上位に櫛描直線文を



(21層) 3·6·9·10·11·12 (20層) 8 (17~19層) 1·2·7 (その他) 4·5

図31 出土土器実測図 (SD-1)

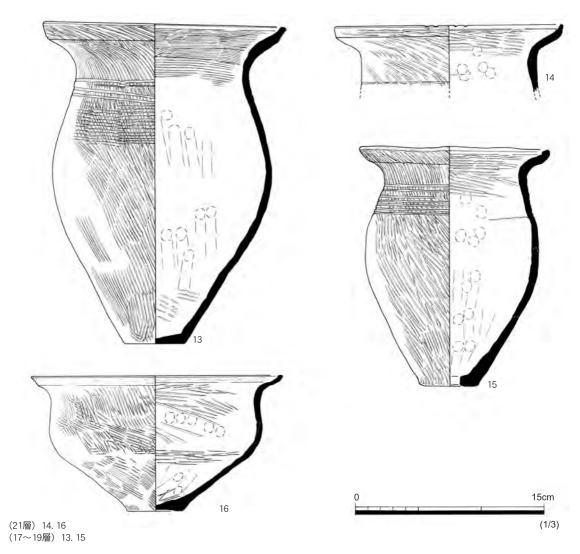
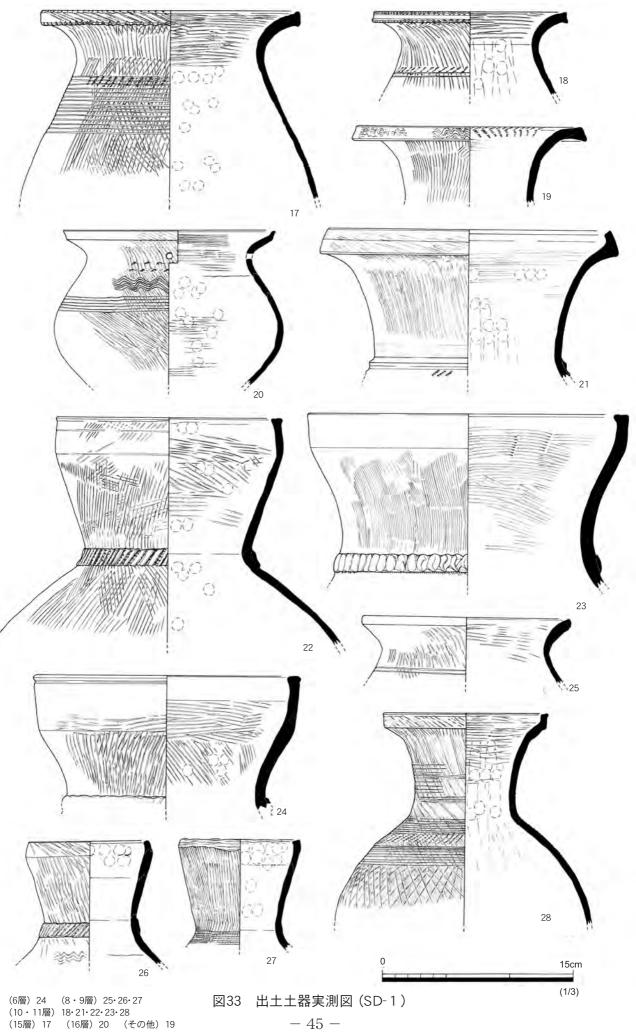


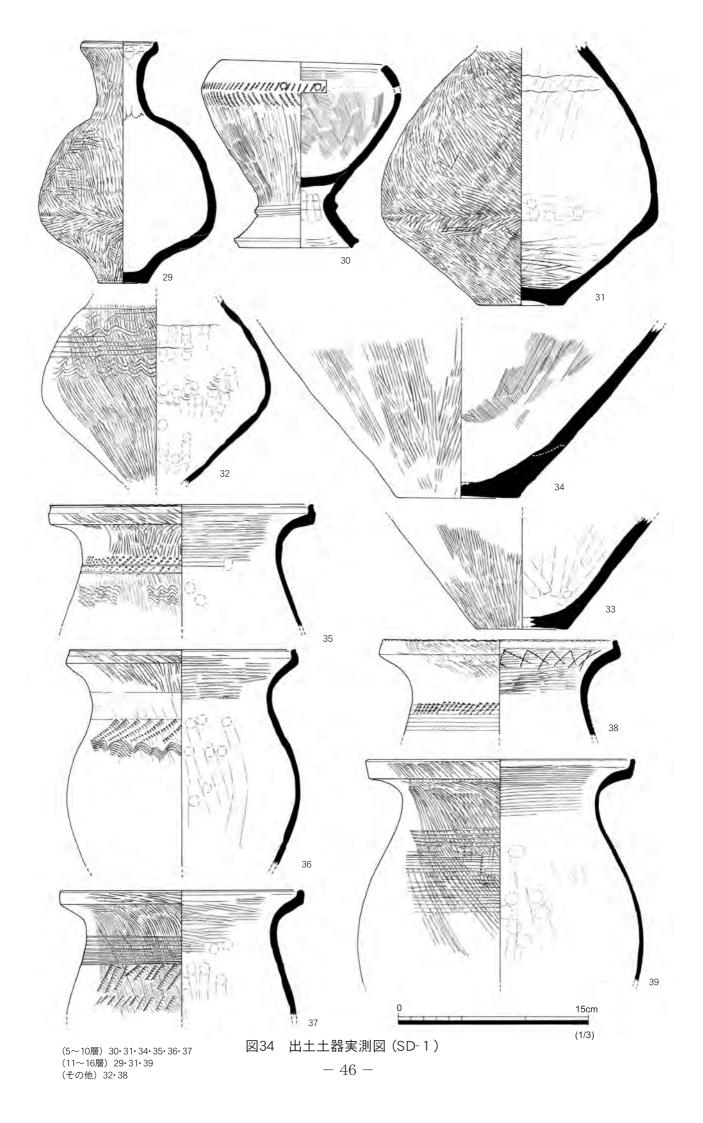
図32 出土土器実測図(SD-1)

施す。体部から外反し第1口縁を立ち上げ、先端を上方に立ち上げる。第1口縁外面は斜位の粗ハケを施す。16は在地系の受口状口縁をもつ鉢である。粗ハケを残す胴部から外反する第1口縁をつくり、外方に第2口縁をつくりだす。

SD-1 ベルト19出土土器 17~44

17、18は在地系の広口壺である。17は外反して開く口縁の端部先端に面をつくりだし、斜位の粗ハケを施している。面の端面上下にキザミをめぐらす。体部外面と口縁内面には粗ハケを施す。胴部上位には櫛描直線文を施している。18は17と同様に口縁端面上下にキザミを施している。19は緩やかに外反して伸びる口頸部をもつ広口壺で口縁先端は上方に面をつくりだし、列点文を施す。端部は下部を肥厚させ、端面に櫛描波状文を施す。20は受口状口縁を呈する在地系壺である。頸部には蓋を結束すると思われる2孔1対の穿孔がある。胴部はずん胴で頸部より下に櫛描で波状文、直線文が施されている。外傾して立ち上がる第2口縁外面は斜位の粗ハケを施す。口縁内面にも横位の粗ハケを施す。21は在地系の大型壺で外傾して伸びる第1口縁の先端からやや内傾する第2口縁を立ち上げる。胴部から立ち上がる第1口縁のつけ根には貼り付け凸帯文を廻らせ列点文を施す。第2口縁の外面は斜位のハケ調整を施した後に上半部を横ナデする。





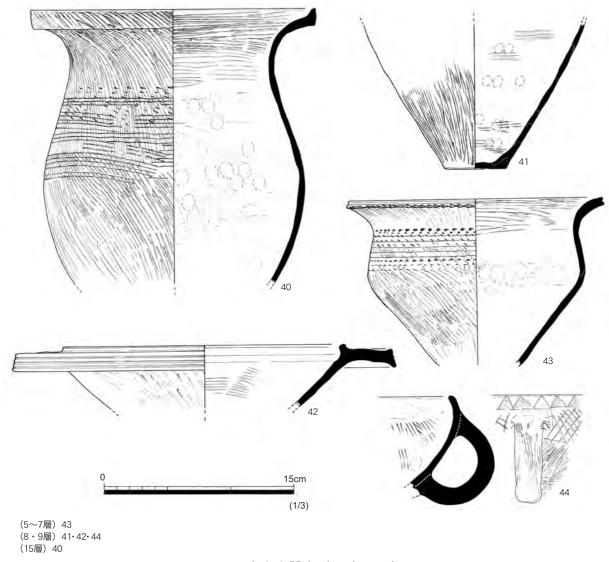


図35 出土土器実測図(SD-1)

22、23、24は凹線文系の有段口縁大型壺である。22は頸部に貼り付け凸帯文を施し、列点文で飾る。第2口縁外面はハケ調整の後に横ナデ調整を施し、2条の沈線文が残る。23は頸部に貼り付け凸帯文を施し、指押さえで施文する。第2口縁外面はハケ調整の後に横位に幅広くナデを施す。24は頸部に貼り付け凸帯文を施す。外傾して立ち上がる第1口縁から上方に第2口縁を立ち上げる。第2口縁外面はハケ調整の後に横位に幅広くナデを施し、端部には1条の幅狭の凹線文を残す。25は太頸の短頸壺で口縁部はやや肥厚している。頸部には櫛描直線文が施されている。26は直口壺の口縁部で、頸部には貼り付け凸帯文を付したうえ列点文を施す。口縁部先端は内傾させて端部外面に斜位の粗ハケを施す。27は外傾して立ち上がる直口壺の口縁部で、端部外面を横位に粗ハケ調整し内傾させて第2口縁をつくりだす。28は緩やかに外反して伸びる第1口縁の先端を屈曲させて、受口状の第2口縁をつくりだす。口頸部には櫛描直線文を複帯で描き櫛描列点文や斜格子文で飾る。29は球型の体部に小さな平底をもつ細頸壺である。口縁は緩やかに外反し、端部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部を横ナデし、その他の全面にハケを施す。30は精選された粘土を利用して製作された台付無頸壺である。口縁部には蓋を結束すると思われる2孔1対の穿孔がある。底部は円盤充填で作っている。最大径付近には、先端を鋭利に尖らした櫛状工具で列点文を施す。また、脚台と

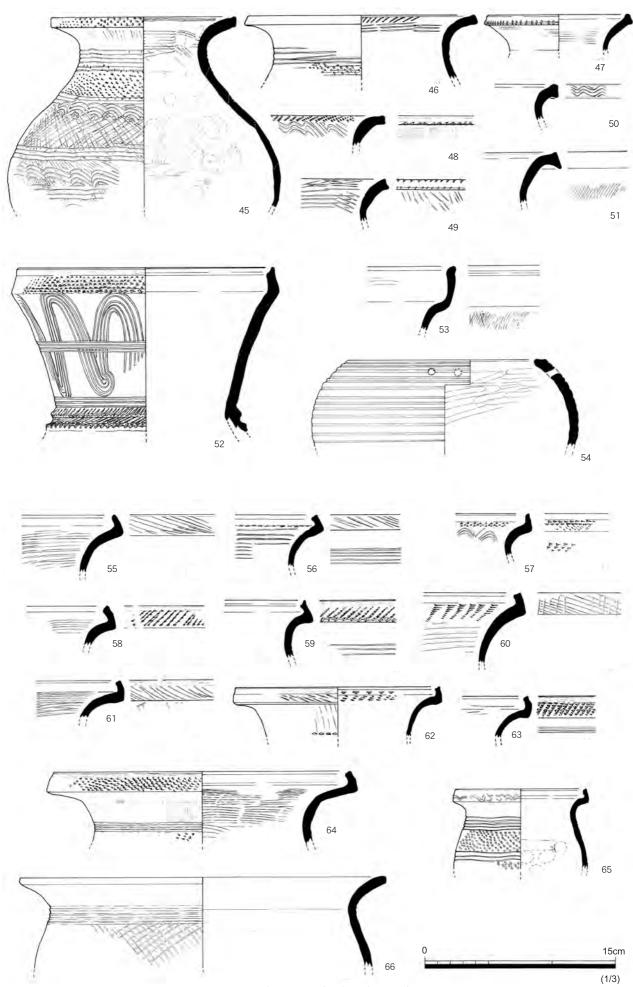
体部の接合部分に1条の貼り付け凸帯文を廻らす。31、32は最大径を体部中位より下にもつ下膨れ 気味の壺体部である。31は体部外面全面に粗ハケを施しているが、その上に縄状のものを掛けて使 用したと考えられる痕跡が残る。32は胴部上半に櫛描直線文、波状文の複帯構成で施文する。33、 34は壺の底部である。34は凹線文系の有段口縁大型壺の底部の可能性が高い。35から41はいずれ も在地系の受口状口縁甕である。

35は第1口縁は外反して開き、受口状に短く第2口縁を立ち上げる。第2口縁外面は粗ハケの後、上半を横ナデしてスリ消す。頸部から胴部にかけて櫛描で列点文、直線文、波状文を施す。36は緩やかに外反する第1口縁に、短く内傾する第2口縁を立ち上げる。第2口縁外面は粗ハケの後、上半を横ナデしてスリ消す。頸部から胴部にかけて櫛描で列点文、波状文を施す。37は外反する第1口縁から短く第2口縁を立ち上げる。第2口縁の外面は横位に粗ハケを施し、頸部から下に櫛描直線文、列点文を施す。38は緩やかに外反する第1口縁から、短く内傾する第2口縁を立ち上げ、口縁端部にはキザミを施す。口縁内面は、横位の粗ハケの後、櫛描列点文を山形状に連続して施文する。外面には頸部より下に櫛描で列点文、直線文を施している。39は短く外反する第1口縁の先端をほぼ垂直に立ち上げ第2口縁とし、第2口縁外面に斜位の横ハケを施す。外面の頸部以下には櫛描直線文を施している40は緩やかに外反する口縁部を短く垂直に立ち上げ、第2口縁を作り出す。第2口縁外面は斜位の粗ハケを施す。頸部以下には櫛描直線文を施している。41は在地系甕の底部と考えられる。42は高坏の坏部で水平口縁をもつものである。口縁端部外面をスリナデ(擬凹線文)し下端を引き出す。43は在地系の鉢で緩やかに外反する口縁をもち、口縁端部を肥厚する。口縁端面は凹状に仕上げた後、下端にキザミを施している。頸部以下には列点文、直線文を施す。44は希少器種で、台付鉢に把手の付くものである。外面は鋸歯文と斜格子文で加飾している。

SD-2ベルト17出土土器 45~70

45は短く外反する口縁をもつ在地系の広口壺で、口縁端面には列点文を施す。頸部から胴部にかけて櫛状工具により直線文、列点文、波状文、斜格子を連続して施文する。46から51はいずれも広口壺口縁部である。46は外反して広がる口縁部の端部内面を列点文で飾る在地系の壺で頸部には直線文、列点文が認められる。47は口縁端部の外面下端にキザミをめぐらす。48は外反する口縁を肥厚気味に仕上げ、端面下端にキザミをめぐらす。口縁端部内面には櫛状工具による列点文、波状文を施文する。49は口縁端面の上下端にキザミをめぐらす。50は短く外反する口縁部の端面に波状文を施す。51は外反する口縁の端部下端を下方に引き出し、面を作る。

52は有段口縁の在地系大型壺の口縁部で、外傾して立ち上がる口縁部の先端を内側に屈曲させ受口状におさめる。頸部には2条の貼り付け凸帯文を付し、櫛状工具で列点文を施す。口頚部外面には櫛状工具で大きく波状文を描き、その上から櫛描直線文を施文している。第2口縁外面は端部上半に横ナデを施し、下半は櫛状工具により列点文を施す。53は凹線文系の有段口縁壺の口縁部である。第2口縁外面に1条の疑凹線文を施す。54は台付無頸壺である。2孔1対で蓋を結束するための穿孔を持つ。口縁外面には多条の凹線文を施す。55から65までは在地系の受口状口縁甕である。55、56は第2口縁外面全体に斜位の粗ハケを施す。57から59は第2口縁外面に斜位の粗ハケを施した後、上半を横ナデし下半に櫛状工具で列点文を施す。60は第2口縁外面を斜位の粗ハケで仕上げた後、5条単位として等間隔で櫛描直線文を垂直に施す。61、62はやや内傾する第2口縁部の外面に斜位の粗ハケを施した後に、上半を横ナデし粗ハケを消している。62は第1口縁内面に列点文をめぐらしている。63、64は内傾して立ち上がる第2口縁の外面上半を横ナデし、下半に櫛状工具



(2層) 46 (5層) 47·48·49·50·55·56·57·58 (6層) 52·54·65 (7層) 53·58·60

(9層) 45・51・61・62・63・64 (その他) 66

図36 出土土器実測図(SD-2)

により列点文を施す。65は小型の受口状口縁甕で第2口縁外面に波状文をめぐらせ、頸部から胴部に列点文、直線文を施す。66は短く外反する単純口縁の大型甕である。頸部には櫛状工具により直線文、その下に斜格子文を施す。

SD-3 ベルト9出土土器 (67) /ベルト10出土土器 (68) /ベルト11出土土器 (69・70)

67は口縁を「く」の字に折り曲げる甕で、口縁部の先端は肥厚している。体部外面には縦位にハケが施され、頸部は横位に強いナデが施されている。外面には煤が付着している。68は受口状口縁をもつ在地系大型壺の口縁部である。外傾して立ち上がる口縁部の先端を垂直に屈曲させ受口状におさめる。口頸部には凸帯文をもたず、櫛状工具で列点文を施す。69は有段口縁大型壺の口縁部である。第2口縁外面に3条の凹線文をもち、頸部には貼り付け凸帯文を付せず、直接器壁に刺突文を施す。70は受口状口縁甕の大型品で、外反する第1口縁からほぼ垂直に第2口縁を立ち上げている。第2口縁の外面は粗ハケ調整をしたのち、上半を横位にナデてハケ調整を消している。第1口縁内面は、櫛描き列点文、波状文で飾られている。

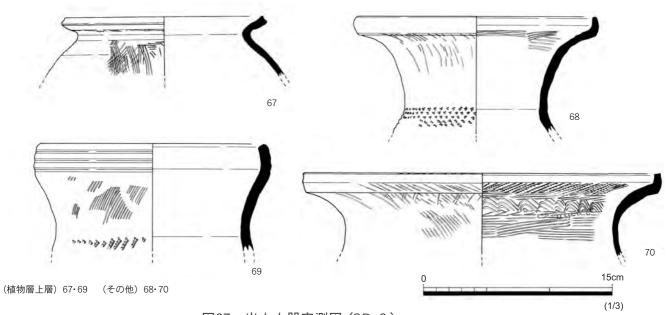
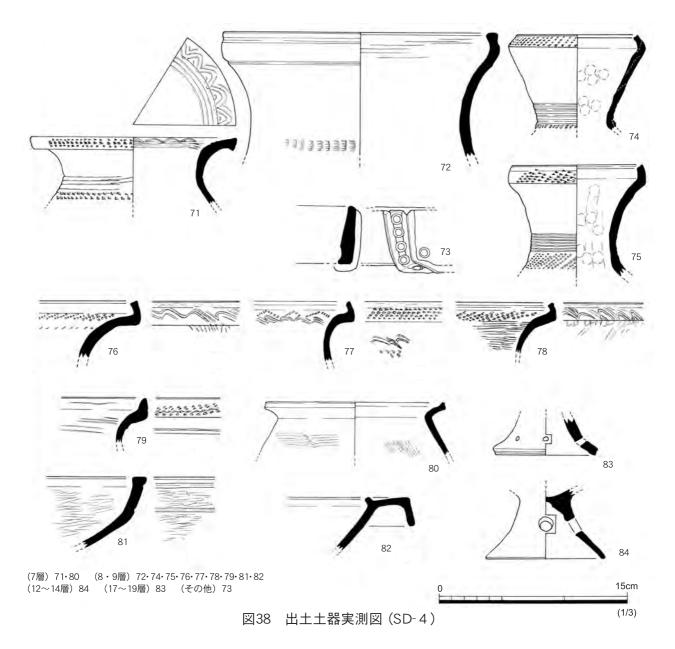


図37 出土土器実測図(SD-3)

SD-4ベルト16 出土土器 71~84

71は短く外反する口縁をもつ在地系の広口壺で、口縁端面には列点文を施す。頸部には櫛状工具で直線文、列点文を施す。口縁内面は波状文、直線文で飾られている。72は大型有段口縁壺の口縁部。やや内傾ぎみに立ち上がる第2口縁外面には間隔をあけて2条の凹線文を施す。頸部には貼り付け凸帯文を付さず、直接列点文を施している。73は大型壺の第2口縁部である。外面には貼り付け凸帯文を施し、竹管文状の施文を付し加飾している。74、75は在地系の直口壺口縁部で、第2口縁外面を列点文で飾る。口頸部には退化した貼り付け凸帯文を付し、列点文を施す。76~79は在地形の受口状口縁甕の口縁部である。そのうち76~78はいずれも第2口縁を内傾して立ち上げ、外面上半を横ナデ仕上げした後、櫛状工具で波状文や列点文を施す。内面は、列点文や山形文、波状文により飾られている。79は第2口縁を垂直に立ち上げ、外面のハケ調整を横ナデして消し、その上から列点文を施す。80は口縁を「く」の字状に折り曲げる甕で、体部をタタキで仕上げた可能性が

ある。外面には煤が付着している。81は高坏の坏部で、口縁部に間隔をおいた2条の凹線文をもつ。82は水平に伸びる口縁の先端を垂下させる高坏の坏部である。83は短く開く中空の高坏脚部である。84は円錐状に開く高坏脚部である。



SD-5 ベルト1出土土器 (85) /ベルト2出土土器 (86・87) 85~87はいずれも在地系の受口状口縁甕の口縁部である。85は緩やかに外反する第1口縁から、

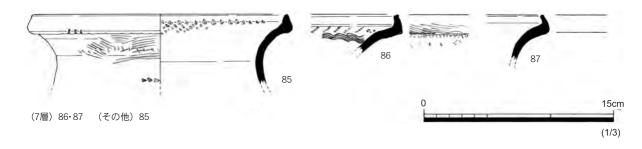
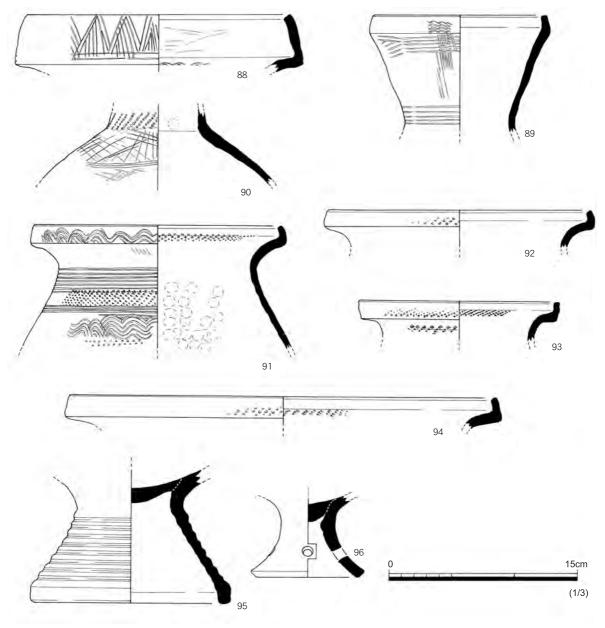


図39 出土土器実測図(SD-5)

短く内傾ぎみに第2日縁を立ち上げる。第2日縁の下端部にはキザミをめぐらし、第1日縁内面を列点文で加飾する。86は緩やかに外反する第2日縁からやや内傾して短く第2日縁を立ち上げる。第2日縁外面は全体に斜位にハケを施したのち、上半を横ナデして仕上げる。内面には波状文を施す。87は第2日縁外面全体に斜位にハケを施したのち、上半を横ナデして仕上げている。

SD-6ベルト15 出土土器 88~96

88は受口状口縁壺の口縁部である。やや内傾ぎみに立ち上げる第2口縁の外面にはヘラ描きで鋸歯文を施す。89は在地系の直口壺口縁部である。外傾して伸びる口縁の先端を短く内傾させて立ち上げる。口縁外面には櫛状工具で直線文、波状文を施す。90は壺の頸部から体部で、頸部には退化した貼り付け凸帯文をもち、その上から列点文を施す。肩部にはヘラ描きで斜格子文を施す。91~94は在地系の受口状口縁甕で、いずれも第2口縁外面は全体にヨコナデを施し、その上から列点文



(3層) 88.89・90・91・92・93・94・95・96

図40 出土土器実測図(SD-6)

や波状文を施しており、斜位ハケは認められない。91は頸部に櫛描直線文を施し、それより以下に 列点文、直線文、波状文と連続して文様を施す。95は円錐形に開く高坏脚台部で全面に凹線文を施 す。96は短く開く高坏脚台部で円盤充填法が認められる。

SX-1 出土土器 97~99

97~99は在地系の受口状口縁甕である。97は第2口縁をやや内傾ぎみに立ち上げ、外面に斜位の ハケを施した後、上半を横ナデしてハケ調整を消している。98は第2口縁をやや内傾ぎみに立ち上 げ、外面のハケ調整を上半部ナデ消している。99はほぼ垂直に第2口縁を立ち上げ、外面を横ナデ 仕上げしたのち櫛描列点文を施す。第1口縁内面には櫛状工具による列点文を山形に施文する。



図41 出土土器実測図(SX-1)

(南地区)

SD-4ベルト①出土土器 100~109

100は短く外反する口縁をもつ在地系の広口壺で、口縁端面を強く横ナデし、上端部を短く突出 させ、キザミを施す。第1口縁内面を列点文で飾る。101は短く外反する口縁をもつ広口壺で、口 縁端面を疑凹線文で強くスリナデしている。体部上半に櫛状工具により直線文、波状文を施す。

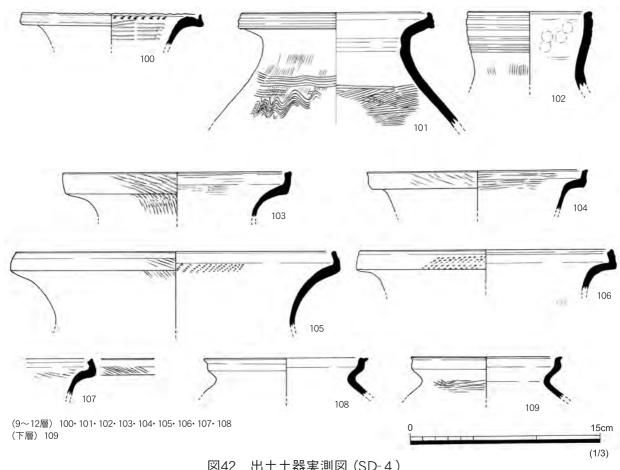


図42 出土土器実測図(SD-4)

102は内湾ぎみに立ち上がる直口壺の口縁部で、口縁外面には5条の凹線文を施す。103~107は在地系の受口状口縁甕である。103、104は第2口縁をやや外傾して立ち上げ、外面に斜位の粗ハケを施す。105、106は第2口縁をやや内傾して立ち上げ、外面を斜位の粗ハケ後、上半を横ナデしている。107は第2口縁をやや内傾して立ち上げ、外面は斜位の粗ハケを全てナデ消ししたあと列点文をめぐらす。108、109はSD-4の上層から出土したもので、古墳時代に下る受口状口縁甕である。

SD-Gベルト② 出土土器 (110・111) 110は算盤玉状の体部をもつ細頸壺で、外傾して伸びる口縁部の先端を緩やかに内湾させて終える。底部は欠損している。口縁部から胴部にかけて櫛状工具による簾状文を連続して施す。 111は受口状口縁 甕の口縁部である。 やや内傾ぎみに第 2口縁を立ち上げ、 外面のハケをナデ 消し、列点文を施

(5・6層) 110 (その他) 111

して終える。

図43 出土土器実測図 (SD-G)

	表1 出土土器観祭表(第61・62次調金)												
遺物番号	挿図 写真図版 登録番号	器種	次数	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徵	手法的特徵	色調 胎土 焼成	備考		
1	図31 図版七 62862	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	18層	口 径:16.2cm 残存高:19.0cm	下膨れの体部から短く外反する第1口縁を立ち上げ、先端上方に第2口縁をつくりだす。口縁端部はゆるやかな波状を呈す。頸部に2孔1対の穿孔2ヶ所。	第1口縁は内外面とも斜方向へのハケ。 第2口縁は内外面とも横ハケ。 頸部から底部にかけて斜方向へのハケ。 内面は縦ハケの後ナデ。 体部最大径付近は横ハケ。	色調: 褐灰色10YR6/1 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	底部欠損		
2	図31 図版七 62861	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	17層	口 径:16.4cm 底 径: 4.7cm 器 高:17.1cm	外反する第1口縁から短く外傾気味に第2口 縁を立ち上げる。顕部に2孔1対の穿孔2ヶ 所。	第1、第2口縁外面は斜方向への粗ハケ。 内面は横方向への粗ハケ。頸部から肩部 は斜方向への粗ハケの後、横方向に粗ハ ケを廻らす。底部から体部下方は縦方向 から斜方向への粗ハケ。内面は横ハケ。	色調:淡黄色2.5Y8/3 胎土:微石粒多く含む 焼成:良好	口縁部〜頸部わずかに欠損		
3	図31 図版九 62873	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	21層	口 径:不明 残存高:2.0cm	外反する口縁の端部に面をもつ。	口縁外面下端部にキザミ。外面縦ハケ、 内面横ハケ。	色調:灰白色2.5Y8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干		
4	図31 図版九 62838	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	上面 褐色土下	口 径:22.6cm 残存高: 7.0cm	外反する第1口縁から垂直に第2口縁を立ち上げる。口縁端部はほぼ水平な面をもつ。	第1口縁は内外面とも縦ハケ。第2口縁外面は縦ハケの後、強い横ナデにより口縁を三分する。端部にキザミ。内面は斜方向へのハケ。端部付近は横ナデ。	色調: 淡橙色5YR8/3 胎土: 微石粒(~3mm)含む 焼成: 良好	大型有段口縁 壺 口縁部1/4		
5	図31 図版九 62888	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	断面削り 一括	口 径:10.2cm 残存高:11.0cm	外傾してのびる口縁の端部を垂直に立ち上げる。	第1口縁外面は縦ハケ。第2口縁外面は斜 方向へのハケ。頸部に列点文、肩部に直 線文。	色調:灰白色10YR8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部2/3~頸 部		
6	図31 図版七 62872	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	21層	底 径: 5.5cm 残存高:17.5cm	体部中位が張り、肩部に「X」線刻。	体部上半に縦ハケ、中位は斜方向へのハケ。下半は縦方向へのハケ。下半は縦方向へのナデ。体部の最大 径付近に列点文。内面は下方から中位は 縦ハケ、上方は横ハケ。	色調:灰白色7.5YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	頸部~口縁部 欠損 スス付着		
7	図31 図版七 62869	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	19層	口 径: 9.9cm 底 径: 4.3cm 器 高:24.2cm	ゆるやかに外反する口縁の端部を上方につまみあげる。体部の最大径が底部に近い。	口縁端部は内外面とも横ナデ。頸部に2条 の直線文。外面全体に斜方向へのハケ。 体体部は縦ハケ、頭部から口縁にかけ横 いケ、頭部から口縁にかけ横 いケ。	色調:浅黄橙色10YR8/4 胎土:微石粒含む 焼成:良好	完形		
8	図31 図版九 62871	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	20層	口 径:8.3cm 残存高:7.0cm	外反する第1口縁からやや内傾して第2口縁を立ち上げ、端部は面をもつ。	第1口縁外面は縦ハケ。第2口縁外面に斜 方向へのハケ。内面は横ハケ。口縁端部 付近は横ナデ。頸部に沈線文1条残存。	色調:灰白色2.5Y8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~頸部 3/4		
9	図31 図版九 62881	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	21層b	口 径:9.1cm 残存高:6.6cm	口縁は外反し、端部は丸く収める。	第1口縁から体部外面に縦ハケ。内面は 斜方向へのハケ。第2口縁外面は縦ハケ の後横ナデ。内面は横ナデ。頸部から肩 部にかけて直線文。	色調:灰白色10YR8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~頸部		
10	図31 図版七 62882	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	21層b	口 径: 7.0cm 底 径: 5.4cm 器 高:24.4cm	短い円筒状の口縁を持ち、端部はつまみ上 げる。やや長胴の体部をもつ。肩部に線刻。	口縁端部付近は内外面とも横ナデ。体部 全体に縦ハケ。内面は縦方向へのハケ、 ナデ。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	体部~底部1/2 欠損		
11	図31 図版七 62877	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	21層	底 径:11.8cm 残存高:11.4cm	大型壺の底部。	体部内外面とも縦ハケ。外面底部付近は 粗ハケの後、上から下への削り。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	底部~体部若 干		
12	図31 図版九 62875	壺	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	21層	底 径: 4.7cm 残存高:11.1cm	体部は丸味をもつ。底部に1孔の穿孔。	体部中位は横ハケ、下方は縦ハケ。内面 はヘラ状工具によるナデ。	色調:灰黄色2.5Y7/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	底部~体部3/4		
13	図32 図版七 62858	甕	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	17層~19 層	口 径:18.8cm 底 径: 4.8cm 器 高:25.8cm	外反する第1口縁から短くゆるやかに外傾する第2口縁を立ち上げる。最大径は口縁部にある。	に直線文。内面は口縁から頸部にかけて 横ハケ。	色調:にぷい赤褐色5YR5/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	体部1/4欠損 外面全面スス 付着		
14	図32 図版九 62876	甕	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	21層 21層b	口 径:17.9cm 残存高:5.3cm	外反する第1口縁から外傾気味に第2口縁を立ち上げる。	面は横ハケ。端部にキザミ。頸部は横方向への粗ハケ後、斜方向への粗ハケ。	色調: 淡橙色5YR8/4 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	口縁部〜頸部 3/8 外面全面スス 付着		
15	図32 図版七 62863	甕	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	18・19層	口 径:14.7cm 底 径: 4.7cm 器 高:19.2cm	外反する第1口縁の先端を上方に立ち上げ、第2口縁をつくる。口縁部はゆるやかな波状を呈す。底部に1孔の穿孔。	第1、第2口縁外面は斜方向へのハケ。内面は横ハケ。体部外面に粗ハケ後、頸部から肩部にかけて直線文。	色調: 明赤灰色2.5YR7/1 〜橙色2.5YR6/6 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	口縁部1/3欠損 スス付着		
16	図32 図版八 62880	鉢	62	TA (I)	SD-1 ベルト18	21層b	口 径: 19.8cm 残存高:10.8cm	外反する第1口縁からわずかに内傾する第2 口縁をもつ。端部は面をもつ。体部の最大 径は口縁部にある。	内面から頸部に横〜斜方向へのハケ。体 部外面は縦ハケの後、体部最大径付近に 横ハケ。	色調:灰白色2.5Y8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~体部 1/4欠損		
17	図33 図版八 62707	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	15層	口 径:20.0cm 残存高:14.6cm	口縁は短く外反し、端部に面をつくり出す。	第1口縁外面は縦ハケ。第2口縁外面は斜 方向へのハケ。端面上下にキザミ。内面 は横ハケ。体部は斜方向へのハケ後、上 半に列点文・直線文。	色調:灰白色2.5Y8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~肩部 1/2強		
18	図33 図版十一 62743	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	11層	口 径:15.0cm 残存高:6.5cm	口縁は短く外反し、端部に面をつくり、下端 を若干垂下する。	口縁外面は横ナデの後、端面上下にキザミ。内面は横ハケ。体部外面は斜方向へのハケ後、頸部から肩部にかけて列点文・直線文。	色調:灰白色10YR8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~頸部3/4		
19	図33 図版十一 62818	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	肩黄色土	口 径:17.5cm 残存高: 5.9cm	口縁をほぼ水平にのばし、先端をやや垂下 させ終える。端部には面を作る。	口縁外面はナデの後、波状文。口縁内面 に綾杉状の列点文。頸部外面は縦ハケ。	色調:にぷい黄橙色10YR7/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部1/4弱		
20	図33 図版十 62776	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	16層	口 径:16.6cm 残存高:12.2cm	外反する第1口縁に外傾気味の第2口縁を 立ち上げる。頸部に円孔1穴残存。(2孔1対 の1孔か。)	第1口縁から体部にかけて斜方向へのハケの後、肩部に波状文・直線文。第2口縁 外面は斜方向へのハケ。	色調: 暗褐色10YR3/3 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	口縁部~体部 1/3弱 外面全面スス 付着		
21	図33 図版十 62728	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	10・11層	口 径:22.0cm 残存高:11.6cm	外反する第1口縁に内傾する第2口縁を立ち 上げる。頸部には断面三角形の貼り付け凸 帯を廻らす。	第1口縁から頸部は縦ハケ。第2口縁外面 は斜方向へのハケ。頸部凸帯下方に列点 文。	色調:灰白色2.5Y8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~頸部 1/3強		
22	図33 図版八 62653	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	9~11b層	口 径:17.7cm 残存高:17.7cm	ゆるやかに外傾する口縁をやや内傾ぎみに 立ち上げ、端部は水平な面を作る。	縁は斜方向へのハケの後、横ナデ。沈線 2条残存。頭部に貼り付け凸帯を施し、列 点文。内面は斜方向・横方向へのハケ。	色調:淡橙色5YR8/4 胎土:微石粒(~4mm)含む 焼成:良好	口縁部~頸部		
23	図33 図版十 62639	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	9•10層	口 径:24.9cm 残存高:13.6cm	ゆるやかに外反する口縁に、ほぼ垂直に第 2口縁を立ち上げ、端部は水平な面を作る。 頸部に貼り付け凸帯を廻らす。	第1口縁は縦ハケ、第2口縁は横ハケの 後、横ナデ。内面は横ハケ。頸部凸帯に 指押さえによる施文。	色調:にぷい橙色10YR7/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	大型壺 口縁部4/5		
24	図33 図版十一 62715	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	6層 上面小溝 肩	口 径:20.4cm 残存高:10.5cm	上は付け凸帯文を廻らす。 能は付け凸帯を施し、指押さえによる 施文。		色調: 灰白色7.5YR 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	有段口縁壺 口縁部1/4		
25	図33 図版十一 62614	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	8•9層	口 径:16.1cm 残存高:5.2cm	ゆるやかに外反する口縁は端部付近で肥厚する。	口縁外面縦ハケ、端部付近は横ナデ。頭 部に直線文。内面は横ハケ。	色調: にぷい黄橙色10YR7/2 胎土: 微石粒多く含む 焼成: 良好	口縁部~頸部1/4		

表1(続き) 出土土器観察表(第61・62次調査)

遺物番号	挿図 写真図版 登録番号	器種	次数	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徵			備考
26	図33 図版十一 62641	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	9層	口 径:9.3cm 残存高:9.7cm	外傾して立ち上がる第1口縁の先端を内傾 気味に立ち上げ、第2口縁をつくる。頸部に 貼り付け凸帯文を廻らす。	第1口縁外面は縦方向への粗ハケ、第2口縁外面に斜方向への粗ハケ。頸部貼り付け凸帯に列点文、体部に波状文。	色調: 灰白色7.5YR8/2 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	口縁部~頸部
27	図33 図版十一 62617	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	8•9層	口 径:9.2cm 残存高:8.4cm	外傾して立ち上がる第1口縁の先端を内傾 気味に立ち上げ、第2口縁をつくる。端部は 面をもつ。	第1口縁外面は縦ハケ、第2口縁外面に横 ハケ。頸部に直線文。	色調:浅黄橙色10YR8/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~頸部 4/5
28	図33 図版八 62694	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	10·11層 14層	口 径:12.8cm 残存高:16.7cm	ゆるやかに外反する第1口縁からほぼ垂直 に第2口縁を立ち上げる。端部はほぼ水平 な面を作る。体部は丸みをもつ。	第1口縁外面は縦ハケ、斜方向へのハケ 後横ナデ。内面横ハケ。第2口縁外面は 斜方向への粗ハケ。頭部から体部にかけ て直線文・列点文・斜格子文。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~体部若干
29	図34 図版八 62779	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	15層	口 径: 5.7cm 底 径: 3.8cm 器 高:19.1cm	体部の最大径が底部に近い。球形の体部に 小さな平底をもつ。頸部はゆるやかに外反 し、ほぼ垂直に第2口縁を立ち上げる。	体部全面に縦〜斜方向へのハケ。体部最 大径付近に横ハケ。	焼成:良好	細頸壺 完形
30	図34 図版八 62554	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	5~9層	口 径:13.0cm 底 径: 8.8cm 器 高:14.8cm	口縁は短く内傾して丸味をもつ。口縁端部は 面をもつ。体部と脚部の接合付近に貼り付 け凸帯文を施す。2孔1対の穿孔2ヶ所。	点文。坏部と脚部の接合は円盤充填法を 用いる。	色調:浅黄橙色7.5YR8/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	台付無頸壺 ほぼ完形
31	図34 図版 八 62782	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	15層	底 径: 6.6cm 残存高:20.5cm	体部は下膨れ、体部の最大径が底部に近い。	体部外面全体に斜方向へのハケ。最大径付近はやや縦方向へのハケ。縄目痕が残る。内面はナデ。	焼成:良好	口縁部~頸部 欠損
32	図34 図版十二 62830	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	検出時断 面	口 径:不明 残存高:14.6cm	体部中位が張る。	体部外面全体に縦ハケ、肩部から体部にかけて波状文・直線文。内面ナデ。	色調:明褐灰色7.5YR7/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	体部1/4 外面全面スス 付着
33	図34 図版十一 62651	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	9層	底 径:7.1cm 残存高:8.6cm	壶底部。 ————————————————————————————————————	体部外面は縦ハケ。内面は削り、縦方向 へのナデ。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒多く含む 焼成:良好	底部1/2弱
34	図34 図版十 62633	壺	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	9層	底 径: 9.0cm 残存高:13.5cm	大型壶底部。	外面は縦ハケ、内面は細かい縦ハケ。	色調:にぷい黄橙色10YR7/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	大型壺 底部~体部若 干
35	図34 図版十二 62574	甕	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	7~9層	口 径:20.5cm 残存高: 9.6cm	外反する第1口縁に、短く内傾する第2口縁を立ち上げる。	第1口縁から体部にかけて縦ハケ後、列 点文・直線文・波状文。内面は口縁から顕 部に横ハケ。第2口縁外面は斜方向への ハケの後、上半分を横ナデ。端部に10個 単位のキザミを4ヶ所施す。	色調: 灰褐色7.5YR5/2 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	口縁部~頸部 4/5 スス付着
36	図34 図版八 62637	甕	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	9•10層	口 径:17.7cm 残存高:17.1cm	外反する第1口縁に内傾する第2口縁を立ち 上げる。	第1口縁外面は縦ハケ。第2口縁外面は斜 方向への粗ハケ。口縁端部、頸部付近に 横ナデ。頸部から体部にかけて列点文・ 波状文。口縁内面は横ハケ。	色調:灰白色2.5Y8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部〜体部 2/3 外面全面スス 付着
37	図34 図版九 62638	甕	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	9層	口 径:18.8cm 残存高: 9.9cm	ゆるやかに外反する第1口縁にほぼ垂直に 第2口縁を立ち上げる。端部は水平な面をも つ。	第1口縁から頸部に緩ハケ後、直線文・列 点文。第2口縁外面横〜斜方向への粗ハ ケ、端部は横ナデ。口縁内面は横ハケ。	色調: 黒褐色10YR3/2 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	口縁部〜体部 1/2弱 外面全面スス 付着
38	図34 図版十 62713	甕	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	枝溝内 肩黄色土	口 径:18.2cm 残存高: 7.6cm		第1、第2口縁外面斜方向へのハケ、上端 を横ナデレキザミ。内面は横ハケ後、山形 に列点文。体部外面は縦ハケの後、列点 文・直線文。	色調:にぷい黄橙色10YR7/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部1/2 スス付着
39	図34 図版十 62750	甕	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	11~16層	口 径:20.9cm 残存高:17.6cm	外反する第1口縁に、やや外傾する第2口縁をもつ。	第1口縁から体部外面は斜方向へのハケ 後、頸部から肩部にかけて直線文。内面 は丁寧なナデ。第2口縁外面は斜方向へ のハケ、内面は横ハケ。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部〜体部 1/4 スス付着
40	図35 図版九 62780	甕	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	15層	口 径:22.5cm 残存高:21.7cm	外反する第1口縁に短く垂直に第2口縁を立ち上げる。最大径は口縁部にある。	第1口縁から体部は縦ハケ。第2口縁外面は斜方向へのハケ。内面は口縁部から頸部にかけて横ハケ。体部上半に列点文・直線文。体部は横ナデ。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	底部欠損 スス付着
41	図35 図版十 62640	甕	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	9層	底 径: 4.8cm 残存高:11.4cm	小さな平底をもつ。体部にススが付着する も、底部付近にススの付着なし。	外面縦ハケ。	色調: 灰褐色7.5YR6/2 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	底部 スス付着
42	図35 図版十一 62720	高坏	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	9層		ほぼ水平な口縁をもつ高坏坏部。口縁端部は垂下させ、坏部の先端は内傾して立ち上がり、端部に面をもつ。		色調:赤橙色10R6/6 胎土:微石粒多く含む 焼成:良好	坏部1/4強
43	図35 図版十一 62526	鉢	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	5~7層	口 径:19.8cm 残存高:13.2cm	口縁は外反して短く立ち上がり、端部は内傾 した面をなす。最大径は口縁部にある。	口縁外面は横ナデ後、端部下端にキザミ。内面は横ハケ。体部外面は縦~斜方向への粗ハケ後、頸部から肩部にかけて列点文・直線文。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部2/3~体 部1/2
44	図35 図版十二 62615	鉢	62	TC (I)	SD-1 ベルト 19	8・9層	口 径:不明 残存高:8.6cm	把手付鉢。口縁部は強く内傾し、端部はほぼ水平な面を作る。	口縁外面に鋸歯文。体部外面には斜格子 文。下部は斜方向へのハケ。	色調:にぶい黄橙色10YR7/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~把手
45	図36 図版十二 62032	壺	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	4-9層	口 径:14.2cm 残存高:15.0cm	口縁部は外反して短く立ち上がり、口縁端部 は垂直な面を作る。	口縁外面は横ナデ後、列点文。内面に直線文。外面は頭部から体部にかけて直線 文・列点文・波状文・斜格子文。	色調:淡橙色5YR8/3 胎土:微石粒(~3mm)含む 焼成:良好	口縁部〜体部 1/3 撹乱の為4層か らも出土 スス付着
46	図36 図版十三 62005	壺	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	2層	口 径:17.7cm 残存高: 5.0cm	口縁部はゆるやかに外反し、端部はやや内傾して面を作る。	口縁内面は列点文・直線文。 頸部外面に 直線文・列点文。	色調:にぶい橙色7.5YR7/3 胎土:微石粒多く含む 焼成:良好	口縁部1/5
47	図36 図版十三 62056	壺	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	5層	口 径:11.0cm 残存高: 2.9cm	ゆるやかに外反する口縁に内傾する端部を もつ。	口縁外面は横ナデ、下端にキザミ。頸部 に沈線1条残存。内面横ハケ。	色調:褐灰色10YR4/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干 スス付着
48	図36 図版十三 62057	壺	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	5層	口 径:不明 残存高:2.4cm	口縁は外反し、端部はほぼ垂直の面をも つ。	口縁外面は横ナデ後、下端にキザミ。内面は列点文・波状文。	色調: 灰褐色7.5YR4/2 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	口縁部1/5 スス付着
49	図36 図版十三 62054	壺	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	5層	口 径:不明 残存高:3.3cm	ゆるやかに外反する口縁にやや内傾する端 部をもつ。	内面横ハケ。	色調:にぶい黄橙色10YR7/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干 スス付着
50	図36 図版十三 62053	壺	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	5層	口 径:不明 残存高:2.8cm	短く外反する口縁の端部に、ほぼ垂直に面をもつ。	口縁外面に波状文。	色調:橙色5YR7/6 胎土:微石粒(~2.5mm)含む 焼成:良好	口縁部若干
51	図36 図版十三 62167	壺	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	9層	口 径:不明 残存高:4.0cm	外反する口縁は端部に面を作り、下端を垂 下させる。	口縁外面に横ナデ。頸部は斜方向へのハケ。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒(~3mm)含む 焼成:良好	口縁部~頸部 1/4
52	図36 図版十二 62018	壺	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	3b層 6層	口 径:20.0cm 残存高:10.9cm	外傾して立ち上がる第1口縁部の先端を内側に屈曲させ、受口状の第2口縁をもつ。頭部に貼り付け凸帯を付す。	第1口縁から頸部にかけて波状文を施し、 その上に直線文。第2口縁外面に列点文、 上部13横ナデ。頸部に2条の凸帯を廻ら せ刺突列点文を施す。	色調: 褐灰色7.5YR6/1 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	口縁部~頸部 にかけて1/3
53	図36 図版十三 62151	壺	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	7b層 一括	口 径:不明 残存高:5.0cm	外反する第1口縁に内傾する第2口縁を立ち 上げる。	第1口縁縦ハケ。第2口縁外面端部に1条 の凹線文。内面横ナデ。	色調:淡赤橙色2.5YR7/4 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干

遺物番号	挿図 写真図版 登録番号	器種	次数	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徵	手法的特徵	色調 胎土 焼成	備考
54	図36 図版十三 62089	壺	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	6b層	口 径:15.5cm 残存高: 6.9cm	ゆるやかに内湾する口縁を立ち上げ、端部 は面をもつ。口縁下に2孔1対の穿孔あり。	口縁外面に多状の凹線文。内面へら状工 具による磨き。	色調: 灰色10YR8/2 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	台付無頸壺 口縁部若干
55	図36 図版十三 62046	甕	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	5層	口 径:不明 残存高:4.5cm	外反する第1口縁に内湾する第2口縁を立ち 上げる。	第2口縁外面に斜方向への粗ハケ、内面は横ハケ。	色調:灰白色5Y8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
56	図36 図版十三 62048	甕	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	5層	口 径:不明 残存高:4.0cm	外反する第1口縁に内傾する第2口縁を立ち 上げる。端部は内傾した面をもつ。	第2口縁外面に斜方向へのハケ。内面に 横ハケ、ヘラ先列点文。 頸部外面に直線 文。	色調:にぶい黄橙色10YR7/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
57	図36 図版十三 62049	甕	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	5層	口 径:不明 残存高:3.2cm	立ち上げる。	状文。第2口縁外面に列点文。上半は横 ナデ。	色調:灰白色10YR8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
58	図36 図版十三 62047	甕	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	5層	口 径:不明 残存高:3.0cm	外反する第1口縁に内湾する第2口縁を立ち上げ内傾する面をもつ。	面横ハケ。	色調:浅黄橙色7.5YR8/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干 スス付着
59	図36 図版十三 62073	甕	62	(I)	SD-2 ベルト17	6b層	口 径:不明 残存高:4.5cm	外反する第1口縁に内傾した第2口縁を立ち 上げ、端部に面をもつ。 外反する第1口縁に内傾する第2口縁を立ち	第2口縁外面に列点文、下端部にキザミ。 頸部に直線文。内面ナデ。	色調: 灰褐色7.5YR5/2 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	口縁部1/6
60	図36 図版十三 62141	甕	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	7b層 西斜面	口 径:不明 残存高:5.5cm	上げる。端部に面をもつ。	を交差させた斜格子状の文様。口縁内面 に列点文、横ハケ。	色調:にぶい黄橙色10YR7/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
61	図36 図版十三 62165	甕	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	9層	口 径:不明 残存高:2.9cm	外反する第1口縁にやや内傾した第2口縁を立ち上げ、端部に面をもつ。	を横ナデ。口縁内面横ハケ。	色調:明褐灰色7.5YR7/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
62	図36 図版十三 62166	甕	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	9層	口 径:15.9cm 残存高: 3.9cm	外反する第1口縁にやや内傾する第2口縁を立ち上げ、端部に面をもつ。	ナデ。頸部に列点文。口縁内面に列点 文。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
63	図36 図版十三 62177	甕	62	TC (I)	SD-2 ベルト17		口 径:不明 残存高:3.4cm	上げ、端部に面をもつ。	直線文。	色調:にぷい黄橙色10YR7/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干スス付着
64	図36 図版十三 62164	甕	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	9層	口 径:23.2cm 残存高: 5.6cm	外反する第1口縁に内湾する第2口縁を立ち上げ、端部に面をもつ。	2口縁外面に列点文、上部ナデ。頸部に直 線文。	胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部〜頸部 1/6 スス付着
65	図36 図版十三 62077	甕	62	TC (I)	SD-2 ベルト17	6b層 黄色土	口 径:10.3cm 残存高: 6.3cm	外反する第1口縁に内傾する第2口縁を立ち上げる。	第2口縁外面に波状文、上部ナデ。頸部から体部にかけて直線文・列点文。	色調:灰白色10YR8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~肩部 にかけて1/3
66	図36 図版十二 61077	甕	61	TC (I)	SD-2 ベルト12B	黄色土	口 径:28.4cm 残存高: 7.2cm	大型甕口縁部と見られる。	頸部に直線文、肩部に斜格子文。	色調:灰色2.5Y7/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
67	図37 図版十四 61134	甕	61	TC (I)	SD-3 ベルト9		口 径:15.7cm 残存高:4.8cm	短く外反して立ち上がる「く」の字状口縁をもつ。	部から口縁にかけて横ナデ。	色調:浅黄橙色10YR8/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~頸部 1/5 スス付着
68	図37 図版九 61186	壺	61	TC (I)	SD-3-C ベルト10		口 径:19.0cm 残存高: 9.1cm	外反する第1口縁にほぼ垂直に第2口縁を 立ち上げる。	第1口縁から頸部にかけて縦ハケ。口縁 内面は横ハケ。頸部に列点文。	色調:灰白色10YR8/1 胎土:微石粒多く含む 焼成:良好	口縁部~頸部
69	図37 図版十四 61239	壺	61	TC (I)	SD-3 ベルト11	18層	口 径:17.9cm 残存高: 8.5cm	外反する第1口縁にやや内湾気味に第2口縁を立ち上げ、端部に面をもつ。	第1口縁外面縦ハケ。第2口縁外面に3条 の凹線文。頸部に列点文。	色調:浅黄橙色7.5YR8/4 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部1/3
70	図37 図版十四 61254	甕	61	TC (I)	SD-3 ベルト11	18層	口 径:28.3cm 残存高: 6.4cm	外反する第1口縁にほぼ垂直に第2口縁を立ち上げ、端部は面をもつ。	第1口縁外面は斜方向へのハケ。第2口縁 外面に斜方向へのハケ、上半を横ナデ。 口縁端部にキザミ。内面は列点文・波状 文、横ハケ。	色調: にぶい褐色7.5YR6/3 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	口縁部〜頸部 1/2 スス付着
71	図38 図版十四 62231	壺	62	TD (I)	SD-4 ベルト16	7層	口 径:16.2cm 残存高: 5.2cm	外反する口縁の端部に面を作り、下端を垂 下させる。	口縁外面に列点文、内面に波状文・直線 文。頸部に直線文・列点文。	色調:灰白色2.5Y8/1 胎士:微石粒多く含む 焼成:良好	口縁部~頸部 1/4
72	図38 図版十四 62297	壺	62	TD (I)	SD-4 ベルト16	8層	口 径:21.5cm 残存高: 9.9cm	ゆるやかに外反する第1口縁に内傾気味に 第2口縁を立ち上げ、端部は水平な面をも つ。	ケ。頸部に列点文。	色調:浅黄橙色10YR8/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~頸部 1/4弱 スス付着
73	図38 図版十四 61022	壺	61	TA (I)	SD-4		口 径:不明 残存高:5.2cm	大型壺の口縁部と見られる。貼り付け凸帯 文を施す。	貼り付け凸帯に竹管文。	色調:淡橙色5YR8/4 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
74	図38 図版十四 62268	壺	62	TD (I)	SD-4 ベルト16	8層	口 径:9.7cm 残存高:7.7cm	外傾して直線的にのびる第1口縁に、内傾 する第2口縁を立ち上げ、端部は面をもつ。 頭部に退化ぎみの凸帯をもつ。	点文。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~頸部
75	図38 図版十四 62292	壺	62	TD (I)	SD-4 ベルト16	8層	口 径:10.3cm 残存高: 8.9cm	ゆるやかに外反する第1口縁にやや内湾する第2口縁を立ち上げる。口縁端部に凹状の面をもつ。		色調:灰白色2.5YR8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~頸部
76	図38 図版十五 62238	甕	62	TD (I)	SD-4 ベルト16	8層	口 径:不明 残存高:4.7cm	外反する第1口縁にやや内傾する第2口縁を立ち上げ、端部は面をもつ。	面に列点文。	色調:灰白色10YR8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
77	図38 図版十五 62251	甕	62	TD (I)	SD-4 ベルト16	8層	口 径:不明 残存高:4.7cm	短く外反する第1口縁にやや内湾する第2口 縁を立ち上げ、丸く収める。	面に列点による山形文・波状文。頸部に 波状文・列点文。	色調:灰白色10YR8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部1/5 スス付着
78	図38 図版十五 62317	甕	62	TD (I)	SD-4 ベルト16	9層	口 径:不明 残存高:4.1cm	外反する第1口縁に内傾する第2口縁を立ち 上げる。端部に面をもつ。	ハケ。第2口縁外面に波状文、上部横ナ デ。内面に列点文、横ハケ。	色調:灰黄褐色10YR6/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
79	図38 図版十五 62252	甕	62	TD (I)	SD-4 ベルト16	8•9層	口 径:不明 残存高:3.7cm	外反する第1口縁に垂直気味に第2口縁を立ち上げ、端部は丸く収める。	第2口縁外面に列点文、上部横ナデ。頸部に直線文。内面横ハケ。	焼成:良好	口縁部若干 スス付着
80	図38 図版十五 62230	甕	62	TD (I)	SD-4 ベルト16	7層	口 径:14.0cm 残存高: 4.2cm	短く外反して立ち上がる「く」の字状口縁をもつ。端部は上方につまみあげ、外側に面を作る。	部内面は斜方向へのハケ。(タタキ?)	色調:黒褐色2.5Y3/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部〜頸部 1/5弱 スス付着
81	図38 図版十五 62272	高 坏	62	TD (I)	SD-4 ベルト16		口 径:不明 残存高:5.7cm	ゆるやかに内湾して立ち上がる坏部の端部に水平な面を作る。	も横方向への磨き。	色調:にぶい黄橙色10YR7/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	坏部1/5
82	図38 図版十五 62242	高坏	62	TD (I)	SD-4 ベルト16	8層	口 径:不明 残存高:4.3cm	ほぼ水平な口縁の端部を垂下させる。	端部の垂下した面に凹線をもつ。	色調:浅黄橙7.5YR8/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	坏部1/5
83	図38 図版十四 61311	高坏	61	TC (I)	SD-4 ベルト6	17~19層	底 径:7.8cm 残存高:2.9cm	「ハ」の字状に開く脚部。裾端部は外傾する面をもつ。		色調:明褐灰色7.5YR7/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	脚柱部1/2
84	図38 図版十四 61307	高 坏	61	TC (I)	SD-4 ベルト6	12~14層	底 径:9.5cm 残存高:5.5cm	「ハ」の字状に開く脚部。	裾部に3ヶ所の円孔。	色調:浅黄橙色7.5YR8/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	脚柱部、裾部 1/3

表1(続き) 出土土器観察表(第61・62次調査)

遺物番号	挿図 写真図版 登録番号	器種	次数	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徵	手法的特徴	色調 胎土 焼成	備考
85	図39 図版十五 61328	甕	61	TC (I)	SD-5 ベルト1	取上一括	口 径:不明 残存高:5.5cm	外反する第1口縁にやや内傾した第2口縁を立ち上げ、端部は面をもつ。	第2口縁外面は横ナデ、下端部にキザミの 痕跡。内面に列点文。	焼成:良好	口縁部~頸部 1/6
86	図39 図版十五 61347	甕	61	TC (I)	SD-5 ベルト2	7層	口 径:不明 残存高:2.2cm	外反する第1口縁にやや内傾する第2口縁を立ち上げ、端部は面をもつ。	を横ナデ。内面に列点文・波状文。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
87	図39 図版十五 61348	甕	61	TC (I)	SD-5 ベルト2	7層	口 径:不明 残存高:3.6cm	上げ、端部は丸く収める。		色調:明褐灰色7.5YR7/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
88	図40 図版十六 61383	壺	61	(I)	SD-6 ベルト15	3層	口 径:20.8cm 残存高:4.6cm	大型有段口縁壺。内傾して立ち上がる第2 口縁は端部に内傾する面をもつ。	文、横ハケ。	色調:灰白色10YR8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
89	図40 図版十六 61393	壺	61	(I)	SD-6 ベルト15	3層	口 径:13.7cm 残存高: 9.2cm	外上方に伸びる第1口縁から内傾気味に第2口縁を立ち上げる。	文。第2口縁外面に波状文。	色調:淡赤橙色2.5YR7/4 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~頸部
90	図40 図版十六 61378	壺	61	TD (I)	SD-6 ベルト15	3層	口 径:不明 残存高:5.8cm	頸部に退化した貼り付け凸帯を付す。		色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	肩部若干
91	図40 図版十六 61380	甕	61	TD (I)	SD-6 ベルト15	3層	口 径:19.6cm 残存高: 9.8cm		かけて直線文・列点文・波状文。口縁内面 に列点文。	色調:にぶい黄橙色10YR7/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~肩部 1/2
92	図40 図版十六 61368	甕	61	TD (I)	SD-6 ベルト15	3層	口 径:20.8cm 残存高: 3.0cm	外反する第1口縁に内傾する第2口縁を立ち 上げる。		色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
93	図40 図版十六 61384	甕	61	TD (I)	SD-6 ベルト15	3層	口 径:15.9cm 残存高: 3.4cm	立ち上げ、端部は面をもつ。		色調:にぶい褐色7.5YR6/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~頸部 若干
94	図40 図版十六 61391	甕	61	TD (I)	SD-6 ベルト15	3層	口 径:33.7cm 残存高: 2.5cm	外反する第1口縁に内傾する第2口縁を立ち 上げる。		色調:浅黄橙色10YR8/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
95	図40 図版十六 61375	鉢	61	TD (I)	SD-6 ベルト15	3層	底 径:15.3cm 残存高:10.7cm	台付鉢の脚部。		色調:黄橙色7.5YR7/8 胎土:微石粒含む 焼成:良好	台付鉢 脚部
96	図40 図版十六 61385	高坏	61	TD (I)	SD-6 ベルト15	3層	底 径:8.0cm 残存高:6.5cm	「ハ」の字状に開く脚部。裾端部に外傾し、 面をもつ。		色調: 橙色5YR7/6 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	脚柱部
97	図41 図版十七 62287	甕	62	TD (I)	SX-1	1区	口 径:不明 残存高:2.8cm	ゆるやかに外反する第1口縁に内傾気味に 第2口縁を立ち上げ、端部は面をもつ。	第2口縁外面に斜方向へのハケ。	色調:灰白色10YR8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
98	図41 図版十七 62893	甕	62	TD (I)	SX-1	1区	口 径:不明 残存高:3.2cm	第2口縁を立ち上げ、端部は面をもつ。	ナデ。内面に横ハケ。	色調:灰白色10YR8/1 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部若干
99	図41 図版十七 62291	甕	62	(I)	SX-1	2区	口 径:15.4cm 残存高:3.2cm	外反する第1口縁にほぼ垂直に第2口縁を 立ち上げ、端部に面をもつ。	第2口縁外面に列点文、内面に山形文。	色調:灰白色7.5YR8/1 胎土:微石粒(~4mm)含む 焼成:良好	口縁部1/6

表2 出土土器観察表(第63次調査)

遺物番号	挿図 写真図版 登録番号	器種	次数	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徵 手法的特徵		色調 胎土 焼成	備考		
100	図42 図版十七 63050	壺	63	TF (I)	SD-4 ベルト①	12層	口 径:14.2cm 残存高: 2.5cm	大きく外反する口縁の端部をやや内傾して 上部に拡張し、面を作る。	面に列点文、横ハケ。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部1/8		
101	図42 図版十七 63062	壺	63	TF (I)	SD-4 ベルト①	12層	口 径:14.8cm 残存高: 8.0cm	大きく外反する第1口縁の端部をやや内傾して上部に拡張し、第2口縁の面を作る。	デ。頸部から体部にかけて縦ハケ後、直	色調:浅黄橙色10YR8/3 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部~肩部 1/3		
102	図42 図版十七 63068	壺	63	TF	SD-4 ベルト①	9~11層	口 径:9.8cm 残存高:6.3cm	ゆるやかに内湾して立ち上がる口縁の端部 はやや内傾する面をもつ。	ケ。	色調:灰白色10YR8/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部1/6		
103	図42 図版十七 63012	甕	63	TF (I)	SD-4 ベルト①	9~11層	口 径:18.0cm 残存高: 3.5cm	ゆるやかに外面する第1口縁にやや外傾する第2口縁を立ち上げ、端部に凹状の面をも つ。	方向へのハケ。	胎土:微石粒含む 焼成:良好	スス付着		
104	図42 図版十七 63033	甕	63	TF (I)	SD-4 ベルト①	10・11層	口 径:17.3cm 残存高: 3.2cm	を立ち上げ、端部に面を作る。	ハケ。	色調: 灰褐色7.5YR6/2 胎土: 微石粒含む 焼成: 良好	口縁部1/6		
105	図42 図版十七 63038	甕	63	TF (I)	SD-4 ベルト①	10~12層	口 径:24.8cm 残存高: 6.0cm	ゆるやかに外反する第1口縁に内傾気味の 第2口縁を立ち上げ、端部はやや内傾して面 を作る。	ナデ、内面に列点文。		口縁部1/2 スス付着		
106	図42 図版十七 63067	甕	63	TF (I)	SD-4 ベルト①			外反する第1口縁に内傾気味の第2口縁を 立ち上げ、端部は内傾して面を作る。		色調:にぷい黄橙色10YR7/2 胎土:微石粒含む 焼成:良好	口縁部1/8 スス付着		
107	図42 図版十七 63072	甕	63	TF (I)	SD-4 ベルト①	9~11層 杭周り	口 径:不明 残存高:2.1cm	外反する第1口縁に内傾気味の第2口縁を 立ち上げ、端部は内傾して面を作る。	横ナデ。	色調:にぷい黄橙色10YR7/4 胎土:微石粒含む 焼成:良好			
108	図42 図版十七 63036	甕	63	TF (I)	SD-4 ベルト①	10・11層	口 径:13.0cm 残存高: 3.1cm	短く外反する第1口縁から外傾気味に第2口 縁を立ち上げる。端部は外傾につまみ出 す。			口縁部〜頸部 1/6 スス付着		
109	図42 図版十七 63077	甕	63	TF (I)	SD-4 ベルト①	下層	口 径:11.8cm 残存高: 3.2cm	短く外反する第1口縁から外傾気味に第2口縁を立ち上げ、端部は外側につまみ出す。		焼成:良好	スス付着		
110	図43 図版九 63103	壺	63	TF (I)	SD-G ベルト②	肩部分	口 径: 6.4cm 残存高:17.9cm	外傾して伸びる口縁部は先端を内湾させる。算盤玉状の体部をもつ。		胎土:微石粒含む 焼成:良好	底部欠損		
111	図43 図版十七 63100	甕	63	TF (I)	SD-G ベルト②	5•6層	口 径:17.6cm 残存高: 3.1cm	外反する第1口縁に内傾気味の第2口縁を 立ち上げ、端部は内傾して面を作る。			口縁部1/3 スス付着		

第2節 石製品

石製品は、現地の遺構を平面検出する際に出土するものと、遺構掘削中に出土するものがある。前者については、検出時の平板測量図や概略図に地点を記載して取り上げ、後者については出土した地点、地区、層序を記載して取り上げることとした。出土した石製品(自然石を含む)は全て観察確認をしたうえで、以下の基準により仕分けして報告書に掲載した。1類は、石製品としてほぼ完全な形状が残っているものである。2類は、欠損しているが器種や形状が復元でき、使用状態などがわかるものである。3類は、人の手により加工もしくは使用されたものと判断されるが、欠損摩耗しており形状が判然としないもの、または剥片など小さな破片である。4類は人の手により加工、もしくは使用されたものか判然としないもの。上記した選別基準をもとに石製品を選別し、そのうちの1類および2類については、本章で図面掲示と観察結果を記載することとした。また3、4類については、仕分けの後、コンテナに梱包し収納している。報告書への記載は、遺構別の記載ではなく、器種別に掲載することとした。1、2類の石製品は、狩猟具・武器が7点、伐採加工具が8点、収穫具が1点、漁労具が4点、加工具が9点、合計29点である。

(狩猟具・武器)

打製石鏃 (1s・2s)

ともにサヌカイト製の石鏃である。1sは凹基式で扁平な完全形である。2sは、基端部を欠損しているが平基式もしくは凹基式の石鏃である。

磨製石鏃 (3s~6s)

3sは扁平な有茎で、両側辺を研ぎ出す。基端部から段をもって抉り込み、茎をつくりだす。4sは有茎で、基端部から緩やかに茎を作り出す。断面形状は薄い菱形を呈し、先端部は欠損しており、衝撃により折損した可能性がある。5sは鏃身の長い有茎の石鏃で、先端部は欠損する。両側辺を鋭利に研ぎ出し、鏃身中心には稜をのこし、断面は薄い菱形を呈するが、茎の部分は扁平である。6sは、大型の磨製石鏃の破損品もしくは製作途上品の可能性があるものである。A面は平滑な礫面を残し、両側辺を磨き出している。

磨製石剣 (7s)

7sは、扁平な磨製石剣の切先部分で、衝撃により折損した可能性がある。切先および両側辺は鋭利に研ぎ出している。

(伐採・加工具)

扁平片刃石斧(8s・9s)

8sはやや小ぶりであるが扁平片刃石斧の中型品である。9sは同じく扁平片刃石斧で刃部左側縁を 欠損している。

柱状石斧(10s)

10 s は基部の両側面を平滑に仕上げ、断面形状は長方形を呈する。刃部は仕様により破損している。

太型蛤刃石斧 (11 s~14 s)

11sはほぼ完全な形を残すが、刃部先端の刃縁は使用による衝撃で破損している。基部から基端 部には製作時の敲打痕を全面に認めることができる。12sは刃縁を欠損する太型蛤刃石斧で、刃部 を平滑に磨いた痕跡がある。基部は自然の礫面を残す。13sは基部および刃部先端の刃縁を欠損し ているもので、全体を丁寧に磨き平滑に仕上げている。14s は基端部を破損した石斧で、基部から 刃部にかけて製作時の敲打痕を全面に残し、刃縁部分のみ磨き仕上げている。

磨製石斧(15s)

15 s はやや扁平な磨製石斧の大型品で両側縁を叩き加工し、最終時には磨き、一部で平滑な側縁がある。扁平片刃石斧とみることもできるが、基部の幅は6.5cmを測り非常に大型なものである。基部には製作時の敲打痕を残す部分もあるが、全体に平滑に仕上げている。

(収穫具)

石包丁 (16s)

16sは破損品であるため全形は不明であるが石包丁と考えられる。 頁岩を利用して作られているが、体部平面はさほど平滑な仕上げはされていない。 刃縁部分は欠損しているが、 直線的に伸びる 背部が認められる。対になると思われる 2 穴が確認できる。

(漁労具)

石錘 (17s~20s)

扁平な円礫の両極を打ち欠き、その部分に紐などを結束させて脱落しにくくしたものと、肉厚な円礫の中央部に抉りをもたせ、その部分に紐などを結束させるものの2つのタイプが確認できる。 17s、18s は前者で、角のない扁平な円礫の長径先端部分を打欠き作られている。19s は欠損しており全形が不明で石錘かどうか判然としないものである。両側辺を敲打し階段状剥離が認められる。20s は肉厚な円礫の中央部を敲打し、直径2cm程度の溝を作っている。

(加工具)

叩き石 (21s)

21sは直径4~5cmの丸いチャートで、一部に平滑な面をもつ。平滑面に手指を添えて握ると納まりがよい。刃縁の部分は敲打痕が多数残り、石器製作などの道具になるものと考えられる。

凹石・磨石 (22 s)

22 s は破損しているため全形は不明であるが、直径10cm程度の花崗岩円礫である。短径部分を上下にして据えた際の上面にはくぼみ(凹)が認められる。長径の刃縁部分には磨き面が認められ磨り石としての使用があった可能性がある。

石鋸 (23s)

23 s は紅廉片岩製の石鋸で、側縁の一部には鋭角な部分を残している。

砥石 (24s~27s)

24sは砂岩性の小型品で、両側 2 面が平滑になり使用された痕跡がある。25s から27s は中型品で、いずれも内湾する平滑面をもつ。25s は平滑な使用面を 2 面、26s は 5 面、27s は 3 面観取できる。

未製品(28g・29g)

28 s ・ 29 s は自然の礫面を一部に残すやや扁平な長方形を呈するものである。28 s の長辺の両端は敲打痕と剥離が認められる。29 s には長辺両端の先端部分が打ち欠けており、両側にも敲打による剥離痕が観取できる。

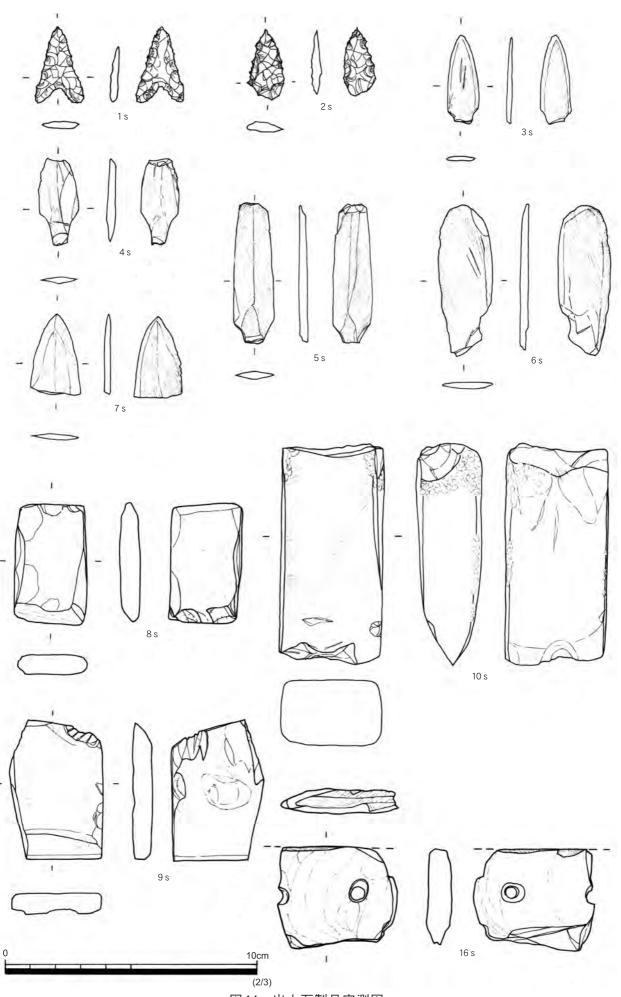


図44 出土石製品実測図

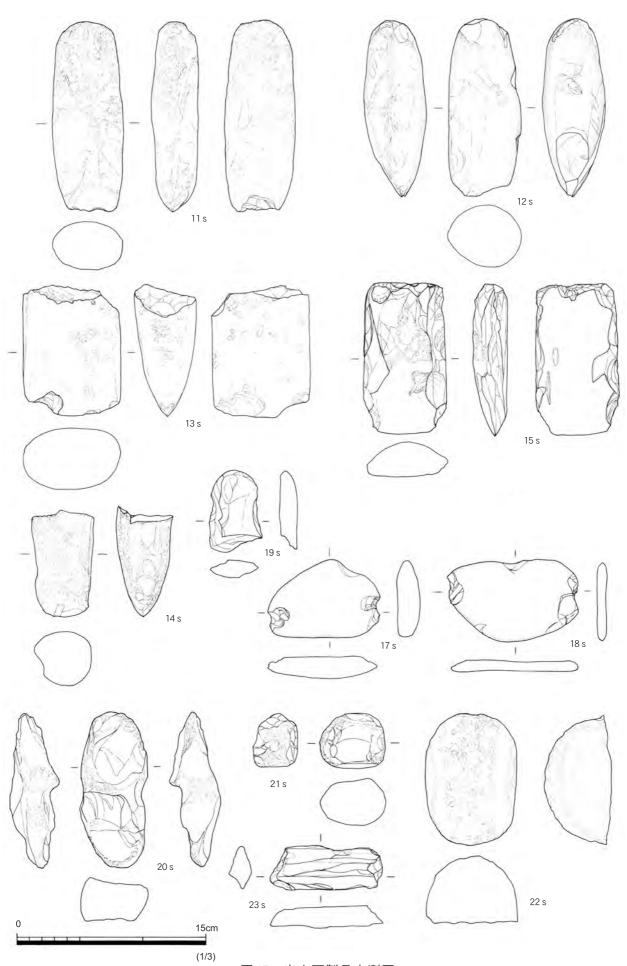


図45 出土石製品実測図

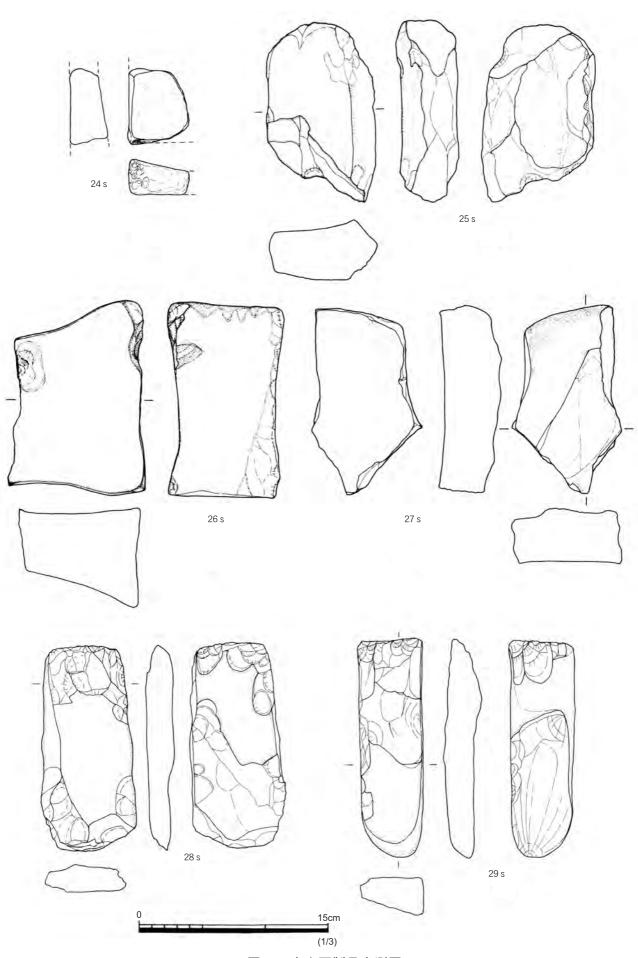


図46 出土石製品実測図

表3 出土石製品観察表(第61~63次調査)

遺	+ ∓ ເໝ				- 100 ш	工口表吅既尔仪	(2)	法			
物番号	挿図 写真図版 登録番号	種別	次数	調査区	遺構	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
1s	図44 図版十八 61004s	打製石鏃	61	TC(I)	SD-3 ベルト9	1・2層	3.0	1.9	0.3	1.3	サヌカイト
2s	図44 図版十八 61005s	打製石鏃	61	TC(I)	SD-3 ベルト13	黄色土中	2.7	1.5	0.4	1.1	サヌカイト
3s	図44 図版十八 62004s	磨製石鏃	62	TA(I)	SD-1 ベルト18	16層	3.4	1.2	0.2	1.2	頁岩
4s	図44 図版十八 63006s	磨製石鏃	63	TF(I)	SD-4	3層 肩部黄色土	3.5	1.5	0.3	2.0	頁岩 先端部欠損
5s	図44 図版十八 62003s	磨製石鏃	62	TA(I)	SD-1 ベルト18	16層	5.6	1.6	0.3	4.5	頁岩 先端部欠損
6s	図44 図版十八 62005s	磨製石鏃未製品	62	TC(I)	SD-2 ベルト17	5層 黄色肩土	6.0	2.1	0.4	5.9	頁岩
7s	図44 図版十八 63005s	磨製石剣	63	TF(I)	SD-4 ベルト①	下層	3.2	2.0	0.2	1.8	粘板岩
8s	図44 図版十九 61003s	扁平片刃石斧	61	TC(I)	SD-3 ベルト11	上·中層	4.8	2.8	0.8	21.3	
9s	図44 図版十九 62002s	扁平片刃石斧	62	TC(I)	SD-1 ベルト19	9層	5.5	3.7	0.8	36.4	
10s	図44 図版十九 63001s	柱状片刃石斧	63	TF(I)	SD-4 ベルト①	3層	8.7	4.1	2.6	204.7	
11s	図45 図版十九 61001s	太型蛤刃石斧	61	TA(I)	SD-3 横断ベルト付近		15.1	5.7	3.7	501.6	
12s	図45 図版十九 61002s	太型蛤刃石斧	61	TC(I)	SD-3 ベルト11	上・中層	14.1	5.7	4.9	532.9	
13s	図45 図版十九 62001s	太型蛤刃石斧	62	TC(I)	SD-2 ベルト17	9・10層	10.4	7.8	4.8	563.3	
14s	図45 図版十九 63003s	太型蛤刃石斧	63	TF(I)	遺構検出		8.5	5.0	4.4	246.9	砂岩
15s	図45 図版十九 63002s	太型蛤刃石斧	63	TF(I)	SD-4 ベルト①		12.1	6.6	2.8	340.0	
16s	図44 図版十九 63004s	石包丁	63	TF(I)	遺構検出		4.7	4.0	1.0	27.7	刃部等欠失する。
17s	図45 図版二十 62008s	石錘	62	TC(I)	SD-2	9層上面	9.9	6.2	1.8	145.2	
18s	図45 図版二十 61007s	石錘	61	TC(I)	遺構検出		10.4	6.5	1.0	98.8	
19s	図45 図版二十 62009s	石錘	62	TC(I)	SD-1 ベルト19	14・15層	6.5	4.0	1.5	50.5	
20s	図45 図版二十 62007s	石錘	62	TC(I)	SD-1 ベルト19	5層上面検出溝	12.3	5.1	3.9	296.0	
21s	図45 図版二十 61006s	叩き石	61	TA(I)	SD-1 横断ベルト付近		5.2	4.5	3.7	130.4	チャート
22s	図45 図版二十一 62014s	凹石(磨石)	62	TC(I)	SD-1 ベルト19	11b層	10.5	7.3	5.4	549.5	花崗岩 上面にくぽみ
23s	図45 図版二十 62006s	石鋸	62	TE(I)	遺構面上		9.0	3.5	1.8	63.6	紅簾片岩
24s	図46 図版二十一 62012s	砥石	62	TC(I)	SD-1 ベルト19肩部	11層	6.0	4.8	3.0	123.8	残存中2面の使用確認
25s	図46 図版二十一 62013s	砥石	62	TC(I)	SD-2 ベルト17	9~10層	14.4	8.7	4.9	730.0	
26s	図46 図版二十一 61009s	砥石	61	TC(I)	SD-2 ベルト17		15.4	10.1	9.2	1990.0	花崗岩 5面とも使用
27s	図46 図版二十一 61008s	砥石	61	TC(I)	SD-2 ベルト12		15.8	8.8	4.9	740.0	砂岩
28s	図46 図版二十一 62011s	未製品	62	TD(I)	SD-4 ベルト16	3層	16.3	7.5	2.1	409.3	
29s	図46 図版二十一 62010s	未製品	62	TA(I)	SD-1 ベルト18	15層	17.3	5.1	2.8	416.9	

環濠 (SD-1・SD-4) を中心に弥生時代中期の木質遺物が大量に出土し、うち木製品318点と自然木151点の樹種同定結果についてはすでに報告した (能城ほか2011)。大枠ではすべてが弥生時代中期の遺物と捉えられるため、ここでは製品別・種別に提示し、木器 (製品の一部となる可能性の高い加工木を含む)、加工木・自然木、土木材 (SD-4で発見されたしがらみ状遺構の構築材)の順に記載する。

木器 (1 w~21w、23w~33w) 1 wは広鍬である。『木器集成図録 近畿原始篇』の分類でいう広鍬ⅡA式にあたる。後面には泥除けを装着するための段を設ける。泥除けが当たった痕跡が確認できないこと、身の先端部がやや分厚いことから、未製品の最終段階か未使用の可能性が高い。2 wは組合せ鋤身の一部で、使用者からみて左側にあたる部位が残存したものである。広鍬・鋤身とも、イチイガシ柾目材を用いる。ほかにイチイガシ柾目材を用いたものに4wがある。形状や樹種・木取り、法量、加工の状況から、鍬か鋤の未製品もしくは原材の一部とみられる。3 wはアカガシ亜属柾目材を用いた泥除け未製品である。身の全形を粗く作り出し、原材(みかん割り材)から表裏を削り込んでやや薄くした段階で、広鍬との装着部となる端面には樹皮が残存する。ほかにアカガシ亜属柾目材を用いたものに15wがある。長さ170.6cmにおよぶ長大なみかん割材で農具原材とみられる。長さ30cm程度に分断する目的で目途の線を刻んだ状態である。

5 w・6 wは竪杵である。前者はツバキ属芯持材、後者はアカガシ亜属割材と樹種・木取りは異なるが、双方とも握り部の突起が弥生時代前期に多い算盤玉状から簡略化を経た形状となっており、弥生時代中期後半に通有の竪杵といえる。7 wは用材(アカガシ亜属割材)と法量から竪杵原材とみられる。握り部の削り込みはまだ始まっておらず、側面は面取りして多角形を呈し、均一な太さである。この原材の長さ(164.2cm)と製品の長さの対比により、竪杵5 w(長さ156.0cm)は未使用あるいは使い始めて間がない製品とみられる。側面の一部に樹皮を留める点も、この見解に符合する。先端形は、図示した上側の面がほぼ平坦なのに対し、下端はやや台状を呈しており、形状を作り分けた可能性がある。6 w(長さ128.4cm)は使用により先端部の磨滅が進んだ状態とみられる。曲がりは埋没後の土圧による可能性が高い。先端は一端が尖り気味で、もう一端は平坦に磨滅している。端面には付着物が認められ、搗いた際の対象物が残っている可能性があるが、分析は行っていない。

8 w~11wは刳物腰掛である。8 wと9 wは出土層位の異なるものが接合して同一個体と判明した。3つの破片に分かれて同じ環濠(SD-1)から出土し、両端の2 破片(9 w)は15層、その2 破片の間に入るもう1つの破片(8 w)は12層で見つかった。接合後の法量は全長49.1cm、幅29.0 cm、高さは20.3cmを測る。四隅に高さ12.0cm程度の脚を4本備える。座面中央は厚さ3.5~4.5cm程度まで薄く刳り込み、腰掛の縁にあたる脚と脚の間は短辺・長辺とも7 cm程度の厚みを残す。この構造により、重量をある程度軽くしつつ割れを防ぎ、持ち運ぶ際に手をかけやすくする効果が生じる。脚外面には刳り込みに沿って約0.2cmの段差を設け、縁取りのように巡らせる。最も大きな破片にのみ、座面にも同様の段差が刻まれている。10wは8 w・9 wより小型の刳物腰掛。4 脚でなく、長辺に平行する2 脚を備え、側面からみると座面上辺より脚下辺のほうがやや短い。11wは同じく2 脚をもつ刳物腰掛の脚下端のみ残存したものである。脚の形態は10wと異なり、窓状の

透かしをもつ。接地面には網代が付着しており、腰掛の使用状況を示す可能性がある。合計 3 点の 腰掛にはトチノキ、ケヤキ、スギとそれぞれ異なる樹種が使われていた。

12wは背負板。下之郷遺跡第25次調査では、環濠SD-1から背負板2点が出土しており、これで当遺跡では3例目の出土となる。素材は木目の通った良質なヒノキ柾目材で、年輪年代測定の対象資料としたが、辺材が残存せず、伐採年代については紀元前350年以降との推定にとどまった(光谷2011)。背負板は玉津田中遺跡や八日市地方遺跡などで類例が出土しており、やや大きな孔2つと下部の小孔2つに紐を通して人が背負うという使用法が想定復元できる(村上2004)。有頭棒13wは、形状からみて背負板に組む横桟となる可能性が高い。この有頭棒の出土位置は背負板から約5m離れた地点であり、両者ともSD-1の再掘削~埋積期に当たる層位(背負板=15層、有頭棒13w=17層)で出土した。有頭棒の中央部には背負板の幅(22.9cm)に合致する平面が削りだされており、その裏面には二条の浅い窪みが帯状に巡る。窪みの幅は約3.6cm、窪みと窪みの間隔は14.8cm、窪み位置での棒の太さが約3cmを測り、背負板上部の小孔4つの孔幅と横方向の間隔、縦方向の間隔にそれぞれ概ね合致する。背負板の小孔2つに紐を縦方向に通したのち、有頭棒の浅い窪みに沿って紐をかけることにより、板と有頭棒を結縛したとみられる。そうして背負板と有頭棒13wは、図版24下のような接合状況に復元できる。潅木のミツバウツギはあまり遺跡で頻出する材ではないが、弾力性に富む材質であり、嵩のある運搬物をまとめる上で、よくしなる材を選び、芯を外した分割材とした上で横桟に利用したことが窺える。

16w・17wはイヌガヤ芯持材を加工した棒材で、側面は面取りされている。16wは一端に二条の溝を廻らす精緻な加工を施し、もう一端は炭化・欠損する。17wは一端にかけてやや細く側面を削り、数か所に斜め方向の刻みを施す。曲げに伴う加工と考えられ、製品としては小型弓原材の可能性がある。18wはスギの割材を用いた栓で、頭部は断面円形、軸部は断面方形を呈する。19w・20wはムクロジ割材で同一個体の可能性があるが接合はしなかった。農工具などの柄の可能性がある。21w・23w~33wは有頭棒である。21wのみ広葉樹(クスノキ科)芯持材、他はすべて針葉樹(スギ7点、ヒノキ3点、サワラ1点)割材を用いる。頭部の形状や法量は多様であり、様々な構築物の一部を成したとみられる。25wは側面の一部に平面を作り出す。26wは有頭棒に含めたが、一端を二股に削り出し、中央部には刳込みが入る。側面には板状に割り出す際の工具の痕跡とみられる線状の加工痕を留める。

29w~32wの4点はいずれもスギ割材を用い、出土地点・層位(SD-1の14~16層)が近く、形状や法量、頭部の加工の類似度が高いことから、同じ構築物を構成する一群の部材とみられる。33wはサワラの割材を用いたやや大型の有頭棒で、建築部材の垂木であった可能性がある。今回の調査では他に同型の製品や大型建築部材は見つかっていないことから建築材ではなく有頭棒に含めた。サワラは今回の調査で樹種同定した469点中わずか2点と少ない。

加工木・自然木(14w・22w・34w~61wのうち後述の土木材 3 点をのぞく28点)14wはマタタビ属の芯持材で平滑な 2 平面を作り出し、角材状を呈する。22wはヒノキ割材を用いた棒材である。両端を欠損するが、側面を丁寧に削り出しており精緻な製品の一部であった可能性がある。34w~39wはヒノキ・スギの板材で、42wが柾目である以外、すべてが板目である。36wは幅約2cmの帯状の刳込みを施す。41wはアカガシ亜属みかん割り材で一部に樹皮を留め、原木直径は約14cmと考えられる。木錘原材などの可能性はあるが、同形の成品が出土していないため加工木に含めた。43wはアカガシ亜属の芯持丸木材で分枝部にあたり、L字形を呈する。分枝部に加工痕を留める。

直径約3cmは、アカガシ亜属の自然木42点中22点と最も頻度の多い直径階2-4cm(能城ほか2011)に相当する太さである。40w・44wは樹皮で端部に切断痕が残る。40wは全面が炭化する。

45w~51wは両端に切断痕のある加工材である。45w・46w・50w・51wはそれぞれトネリコ属・モミ属・クワ属・イヌガヤの芯持丸木で前二者には樹皮が残る。47w・48wはツバキ属割材。ツバキ属は竪杵などに芯持材のままで用いられることが多く、芯を外した割材の製品はまれである。49wはスギ割材。固くて削りにくい節を含むことから、加工段階で必要な部位を採取したあとの残材とみられる。

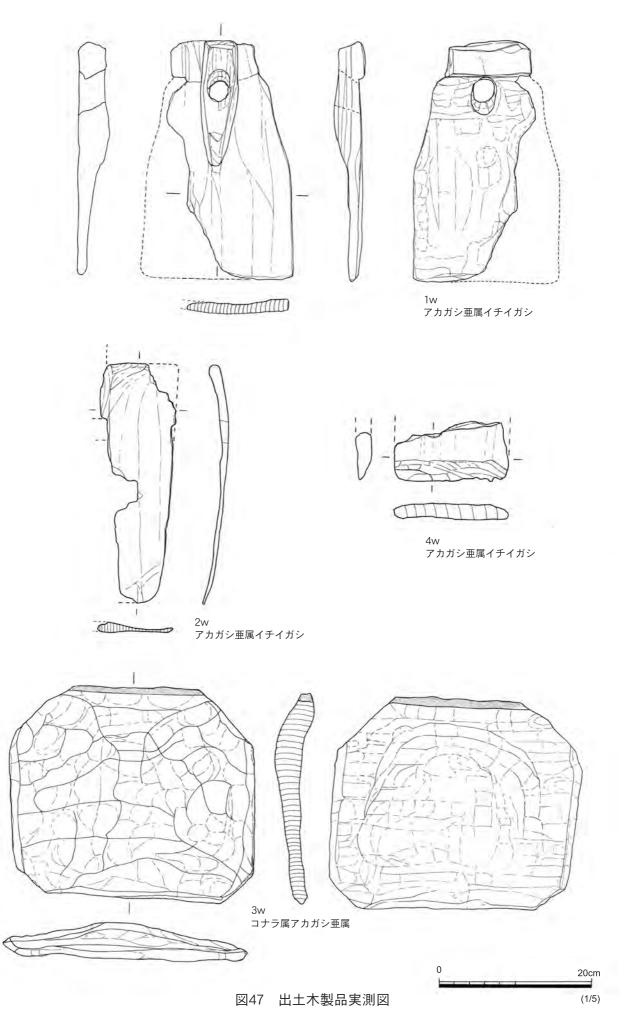
同様に製材時に生じた残材の可能性が高いのが52w(スギ)と61w(ヒノキ)である。前者は節の部分が炭化している。こうした節を含む部位は製品としては使いにくく、製材を行った場所近くに放棄されるものと想定できることから、付近でスギやヒノキの製材を行っていた可能性を示す資料と位置づけられる。53w・54wはクワ属・クサギの芯持丸木で一部に面取りを施す。

56w・57w・59wはツバキ属の芯持丸木で樹皮が残る。57wは端部に切断痕がなく他に加工痕も認められないことから自然木とした。図示したようにツバキ属の材は分枝や曲がりのある部位も多く、5wのような竪杵には真直ぐな部位を選んで利用したことが窺える。58wはクヌギ節みかん割材で樹皮を留める。原木直径は14cm程度と復元でき、469点中11点を数えるクヌギ節の加工木・自然木(クヌギ節の製品は今回出土していない)のなかでは最も径が大きいうちの1点である。

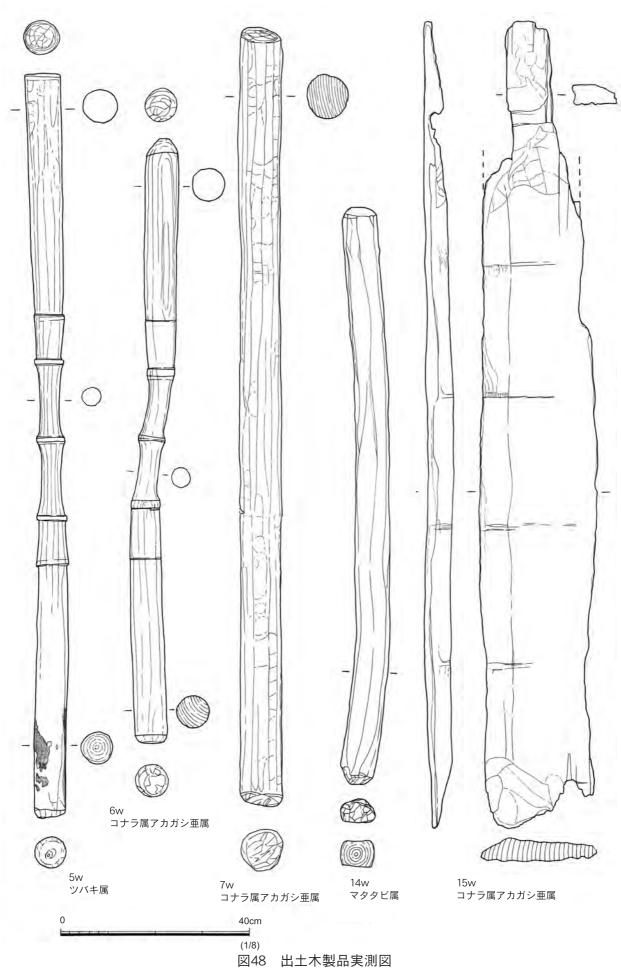
土木材 (55w・60w・62w・63w~109w) SD-1出土材のなかで一端を尖り気味に加工して杭状を呈する3点を土木材の杭とした。いずれも環濠の埋土中から寝た状態で出土したもので、実際に杭として使用されたかどうかは不明。60wはスギの分割材を用いた割杭で、55wと62wはそれぞれクスノキ科・アカガシ亜属を用いた丸木杭である。

63w~109w はSD-4出土しがらみ状遺構の構築材47点である。杭47点のうち芯持丸木を用いた丸木杭が8点に対し、分割材を用いた割杭が39点と多数を占める。割杭の木取りは各種あり、板目が11点とやや多く、みかん割り3点、半割と柾目各2点、追柾目1点と続くほか、上記の木取りに該当しないその他割材が20点ある。樹種はスギが25点(うち丸木杭は1点のみ)と多く、アスナロ6点(同3点)とアカガシ亜属5点が続き、コウヤマキ、スダジイ(同2点)、ヤマハゼ各2点、イシイガシ、ツブラジイ(同1点)、ツバキ属(同1点)、カエデ、不明材が各1点あった。

杭材の出土位置(図28)をみると、環濠内側にあたる西側の30本は針葉樹がとくに多く、広葉樹はアカガシ亜属、スダジイ、ヤマハゼ各1点のみである。そして東側の17本は広葉樹が10本と過半を占める。ヤマハゼの割杭2点は接合しないものの、ともに板目で法量も近く、同じ原木から作られたものと想定できる。ほかにも遺構の構築に際して1本の原木から割り出され、近くに打ち込まれた杭材が何群かあるとみられるが、下半部のみ残存する現状では接合関係の確認は困難で、樹種と打ち込まれた位置から推測ができるのみである。やや幅広の板杭3点はいずれもスギであり、幅10cmを超える杭はこのスギの板杭3点以外にはアカガシ亜属の割杭が1点ある。アカガシ亜属は5点いずれも割杭で、幅は8cm以上のものがそのうち4点を占める。アスナロは点数ではアカガシ亜属を上回るが、幅は2.7~5.2cmとやや細く、丸木杭が3点を占めるなど、原木・材ともに細手であったことが窺える。以上から、このしがらみ状遺構の構築時には、スギ、次いでアカガシ亜属が資源として最も豊富に使い得る樹種であり、補足的に周辺で得られた多様な樹種も用いたものと考えられる。



− 68 **−**



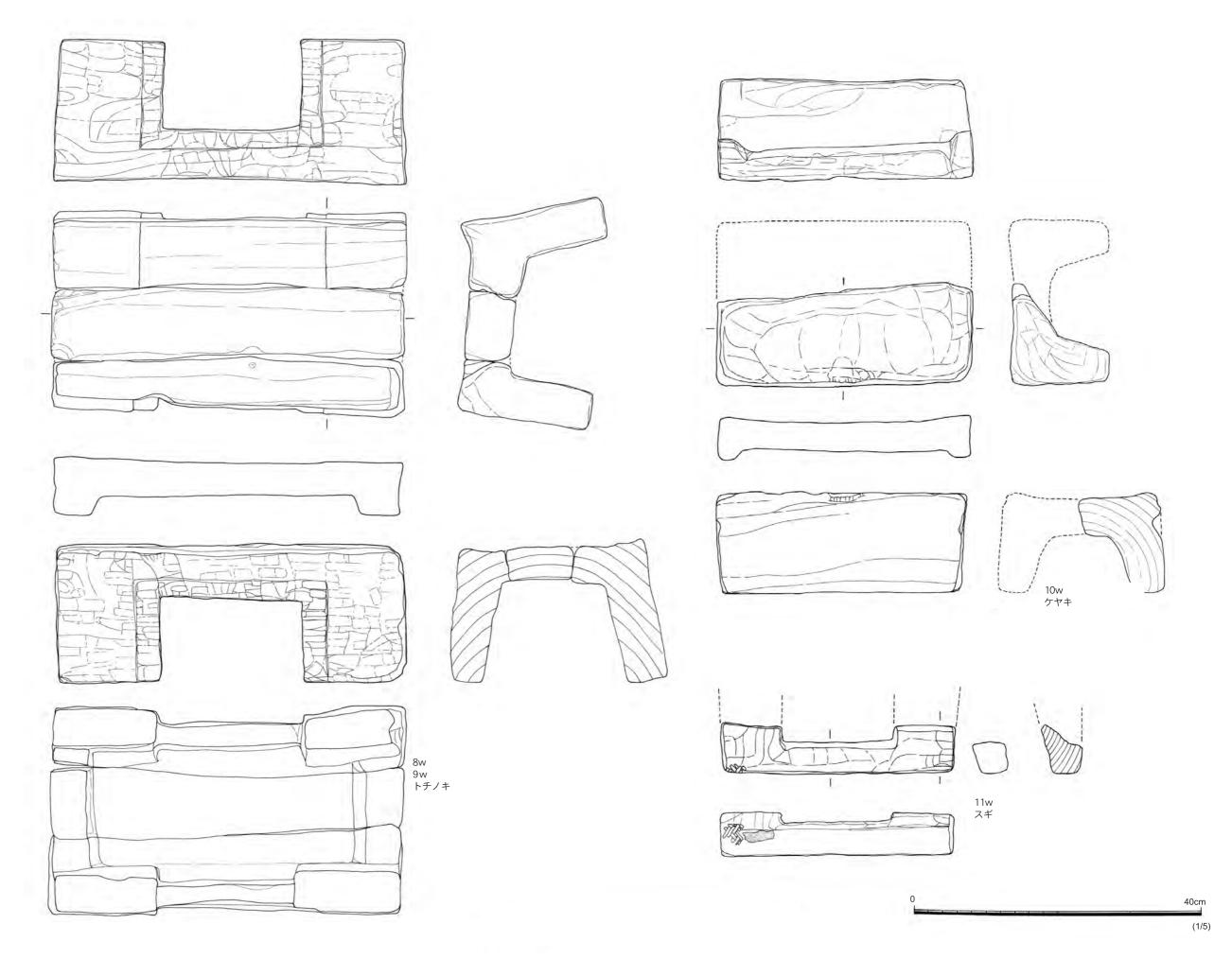


図49 出土木製品実測図

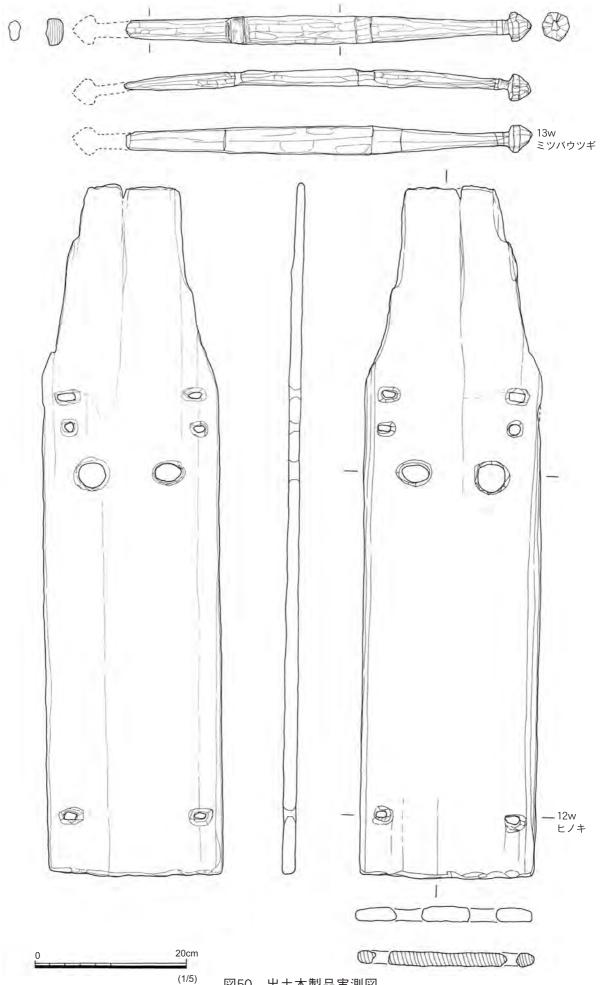


図50 出土木製品実測図

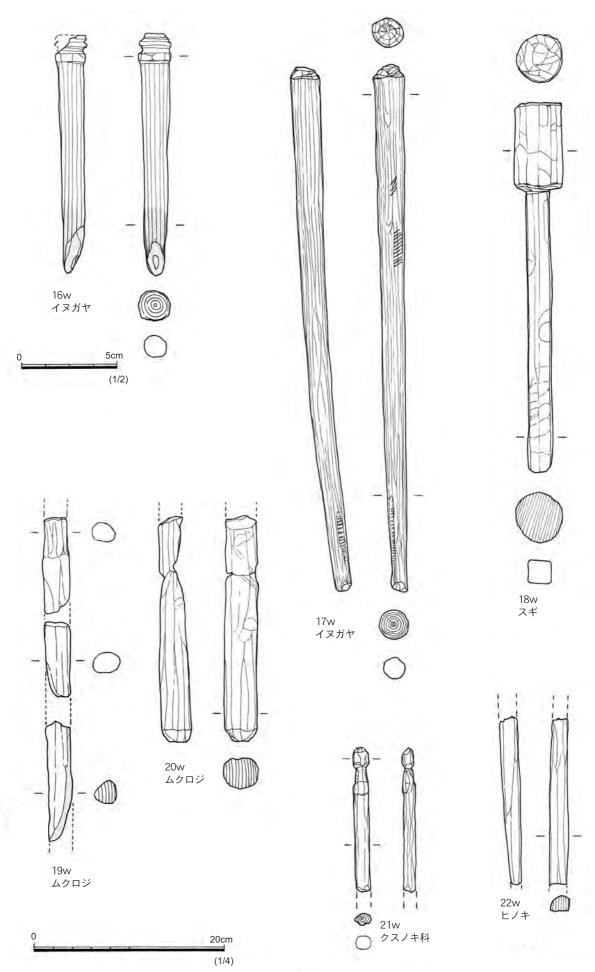
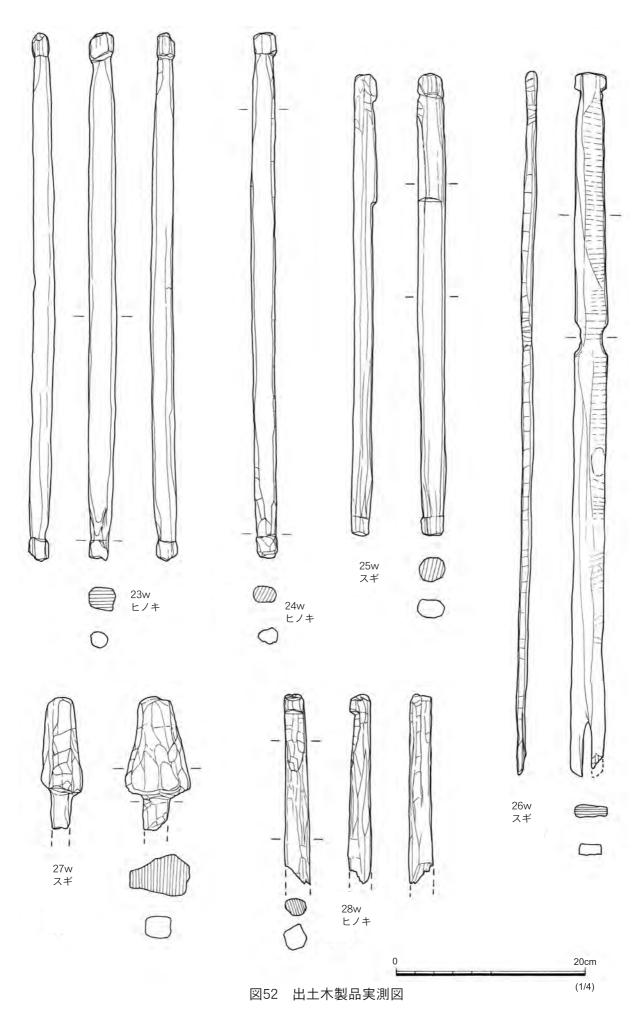


図51 出土木製品実測図



- 74 -

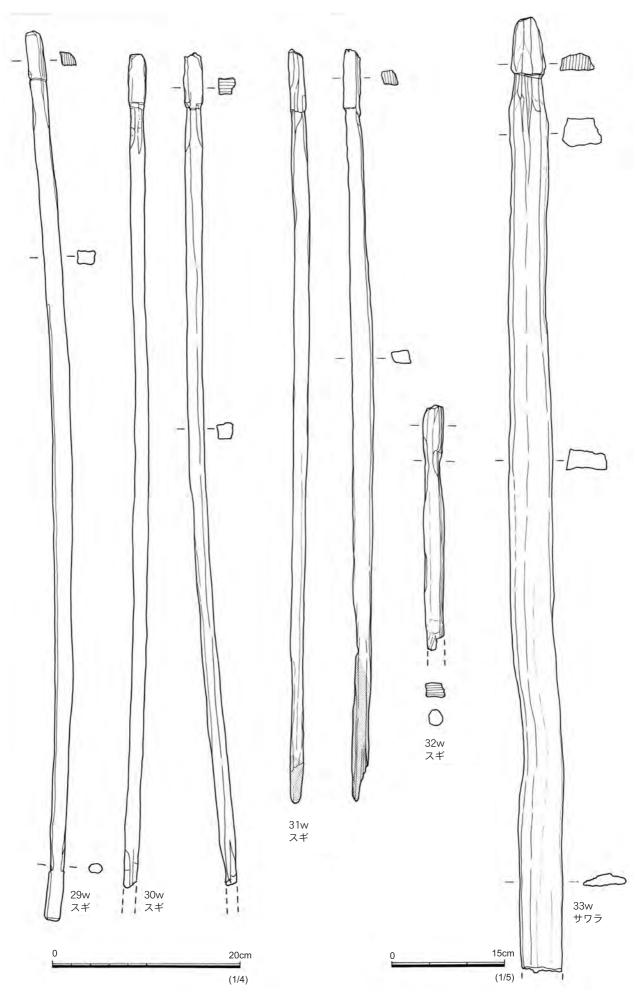


図53 出土木製品実測図

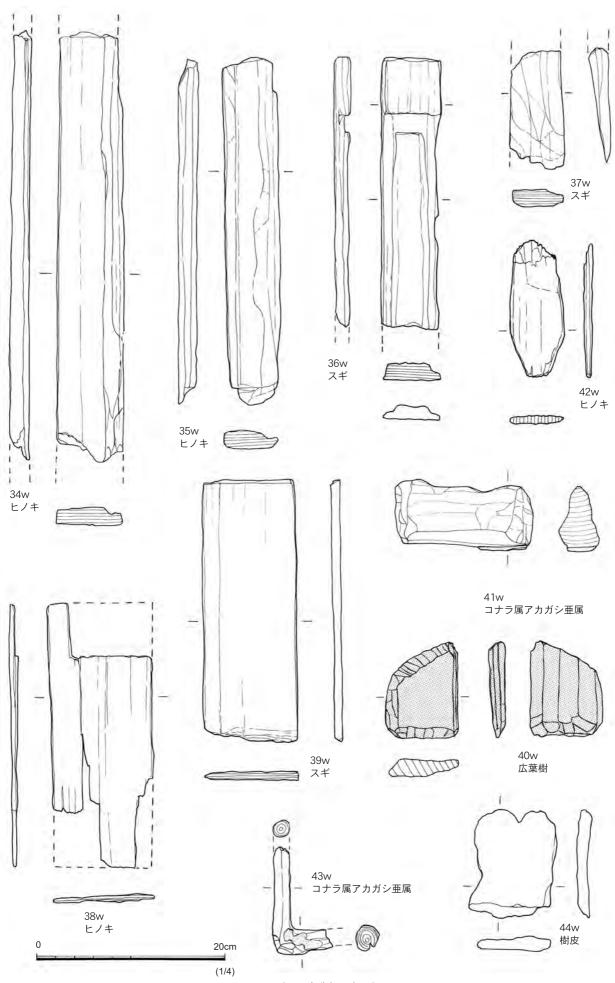
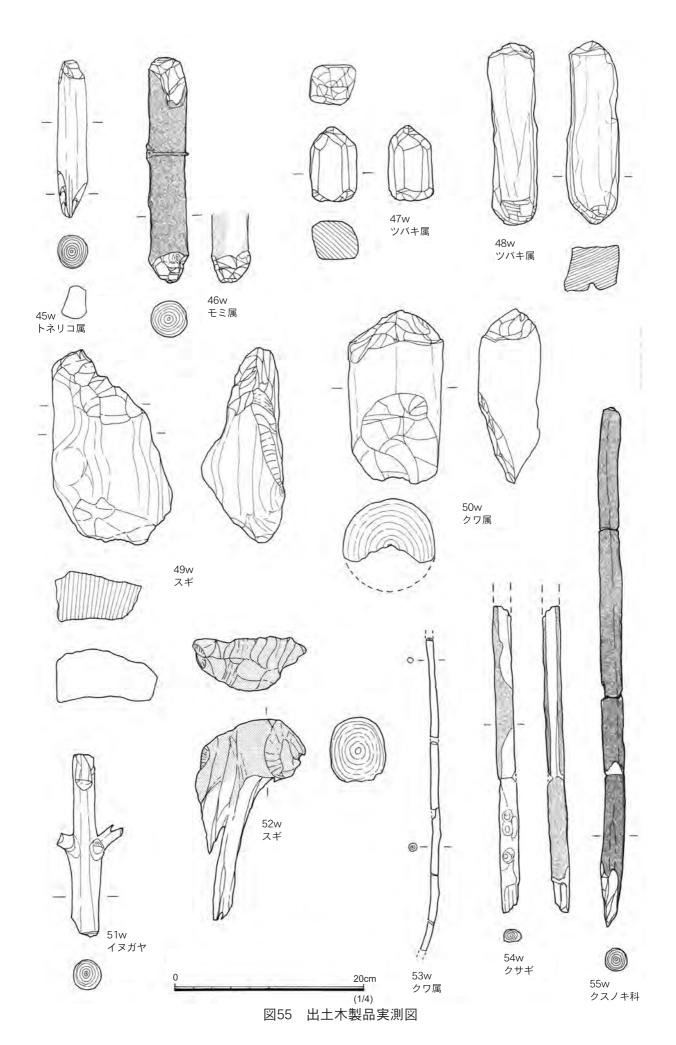


図54 出土木製品実測図



− 77 *−*

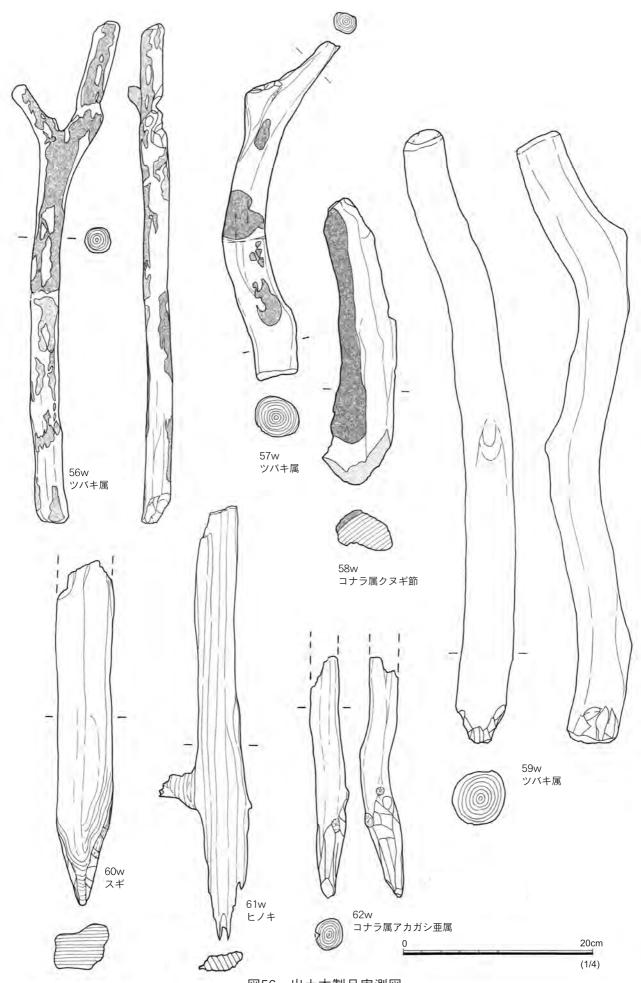


図56 出土木製品実測図

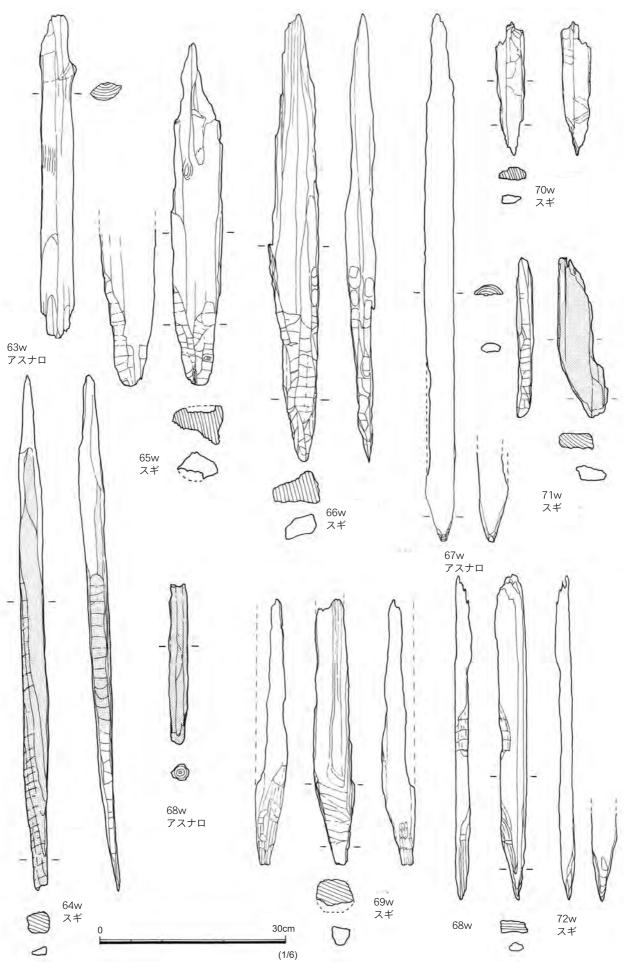
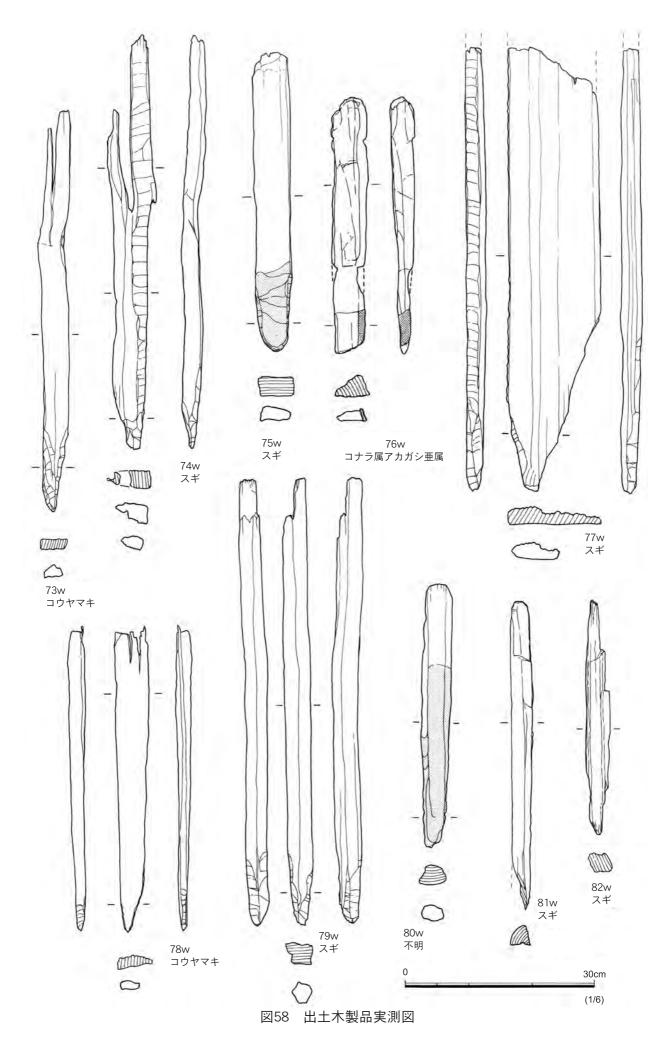
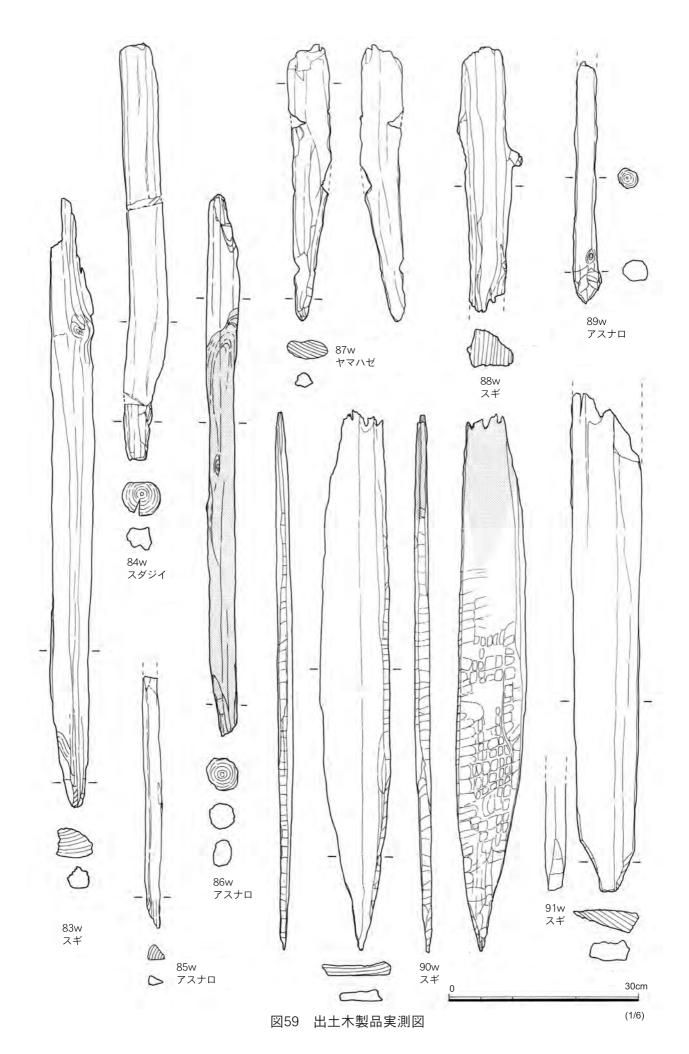


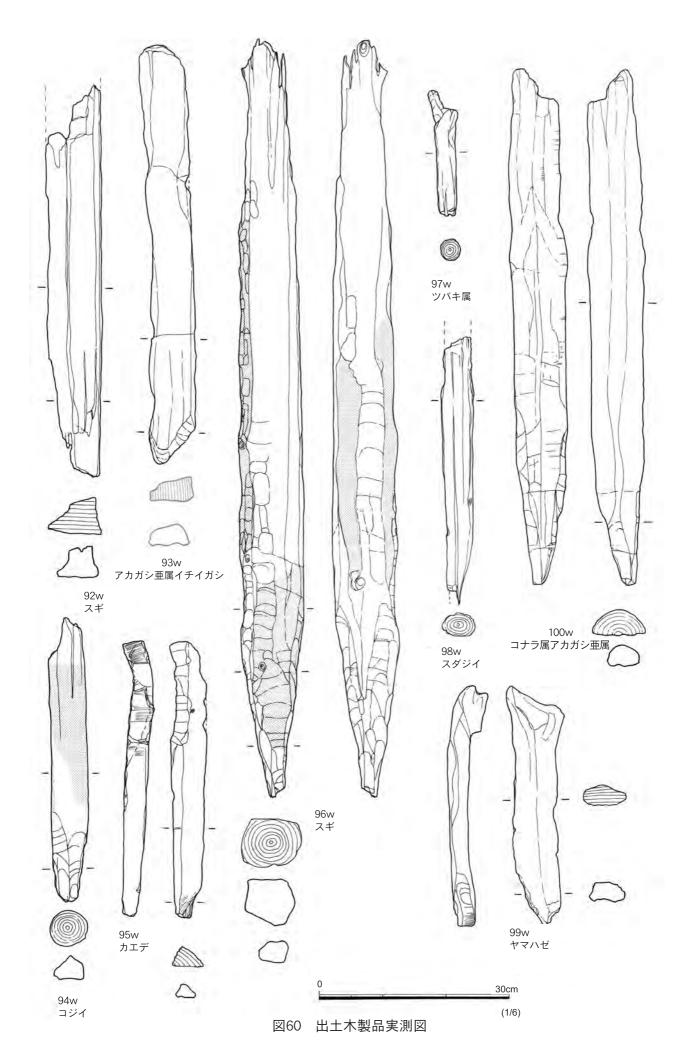
図57 出土木製品実測図



- 80 **-**



− 81 **−**



− 82 **−**

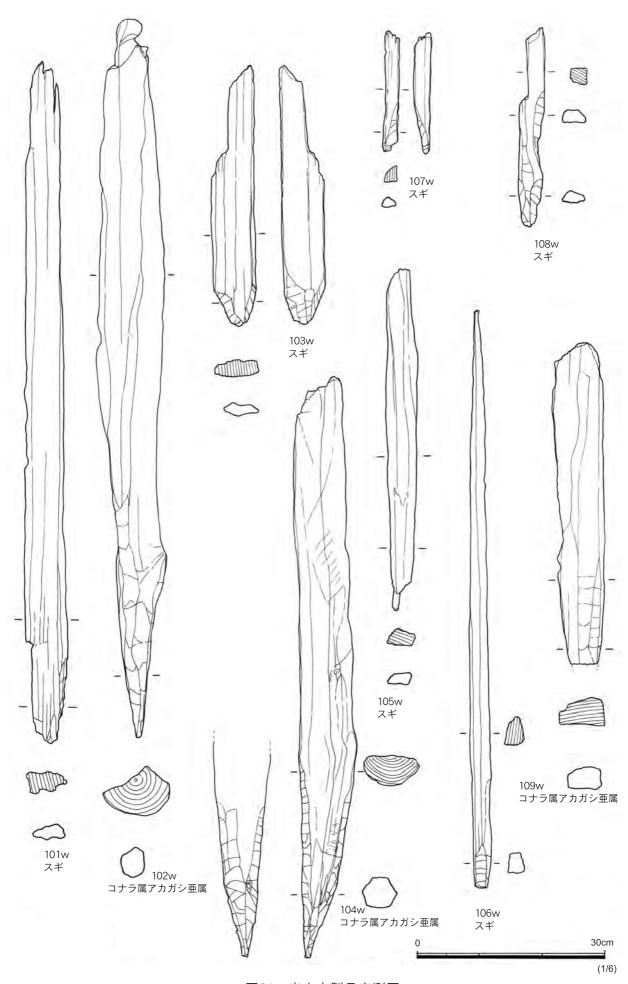


図61 出土木製品実測図

表4 出土木製品観察表(第62次調査)

	表4 出土木製品観察表(第62次調査)												
遺物	挿図 写真図版	種別	調査	細木豆	` * +#	層位	### T##	± Hn ()	ä	去量(cm)		備考	樹種同定 番号
番号	写真図版 登録番号	器種	次数	調査区	遺構	階址	樹種	木取り	長	幅	厚	1佣 有	爾写 (SMG no)
1w	図47 図版二十二 62001w	農具 広鍬	62	TA(I)	SD-1	13·14	アカガシ亜属イチイガシ	柾目	31.1	14.2	4.1		420
2w	図47 図版二十二 62002w	農具 組合せ鋤身	62	TA(I)	SD-1	13·14	アカガシ亜属イチイガシ	柾目	31.3	9.7	1.6		1
3w	図47 図版二十二 62003w	農具 泥除け	62	TC(I)	SD-1	10	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	27.4	32.2	4.8	樹皮残存	422
4w	図47 図版二十二 62004w	加工具 板材	62	TC(I)	SD-1	9	アカガシ亜属イチイガシ	柾目	14.9	7.8	2.0		175
5w	図48 図版二十三 62005w	農具 竪杵	62	TA(I)	SD-1	15•16	ツバキ属	芯持丸木	156.0	7.4	7.1	丁寧な作り 樹皮残存	419
6w	図48 図版二十三 62006w	農具 竪杵	62	TC(I)	SD-1	15•16	コナラ属アカガシ亜属	割材削出	128.4	7.0	7.1	土圧による変形か、段あり	418
7w	図48 図版二十三 62007w	農具 竪杵 原材	62	TA(I)	SX-2	6	コナラ属アカガシ亜属	芯持削出	164.2	8.9	9.2	断面多角形	162
8w	図49 図版二十二 62008w	雑具 腰掛	62	TC(I)	SD-1	12	トチノキ	板目	49.1	9.1	6.8		413
9w	図49 図版二十二 62009w	雑具 腰掛	62	TC(I)	SD-1	15	トチノキ	芯持削出	49.0	18.2	20.3	8wと同一個体	421
10w	図49 図版二十二 62010w	雑具 腰掛	62	TC(I)	SD-1	14	ケヤキ	板目	36.4	14.1	14.0		415
11w	図49 図版二十二 62011w	雑具 腰掛	62	TA(I)	SX-2	6	スギ	柾目	32.5	6.1	6.7	透かし付腰掛の脚の底部、裏面に網代状の断片付着	414
12w	62012w	運搬具 背負板	62	TC(I)	SD-1	15	ヒノキ	板目	90.4	22.9	1.9	年輪年代測定済み	
13w	62013w	部材 有頭棒	62	TA(I)	SD-1	17	ミツバウツギ	芯持丸木	53.2	3.7	2.3		416
14w	図48 図版二十三 62014w	加工木 角材	62	TA(I)	SX-2	6	マタタビ属	芯持丸木	121.3	7.3	5.7	二面に樹皮残存 加子状の工具で割り付け線	161
15w	図48 図版二十三 62015w	原材 みかん割材	62	TC(I)	SD-1	10	コナラ属アカガシ亜属	柾目	170.6	24.7	6.0		468
16w	図51 図版二十五 62016w	用途不明 棒材	62	TA(I)	SD-1	13	イヌガヤ	芯持丸木	12.7	1.8	1.7	一部焼痕	417
17w	図51 図版二十五 62017w	用途不明 小型弓の原材?	62	TA(I)	SX-2	不明	イヌガヤ	芯なし削出	55.0	3.1	3.0		424
18w	図51 図版二十五 62018w	建築部材 栓	62	TC(I)	SD-1	16	スギ	割材	38.9	5.0	5.3	一部焼痕	411
19w	図51 図版二十五 62019w	加工木 棒材	62	TA(I)	SD-1	21	ムクロジ	芯なし削出	30.6	2.9	2.3		130
20w	図51 図版二十五 62020w 図51	用途不明 棒材	62	TA(I)	SD-1	19-21	ムクロジ	芯なし削出	23.7	3.4	3.2		423
21w		部材 有頭棒	62	TA(I)	SD-1	14	クスノキ科	芯持丸木	15.0	1.6	1.5	面取りあり	98
22w		加工木 棒材	62	TA(I)	SD-1	15	ヒノキ	芯なし削出	17.3	2.0	1.6		112
23w	図版二十五 62023w	部材 有頭棒	62	TC(I)	SD-1	14•15	ヒノキ	割材	55.7	3.0	2.4		428
24w	62024w	部材 有頭棒	62	TA(I)	SD-1	14	ヒノキ	割材	55.6	2.5	1.7		412
25w	62025w	部材 有頭棒	62	TC(I)	SD-1	10	スギ	割材	48.3	2.9	2.5		434
26w	図52 図版二十五 62026w	部材 有頭棒	62	TA(I)	SD-1	21b	スギ	板目	74.4	3.4	1.3		410
27w	62027w	加工木	62	TC(I)	SD-1	15	スギ	割材	14.0	6.8	4.3		431
28w	62028w	部材 有頭棒	62	TC(I)	SD-1	14•15	ヒノキ	割材削出	20.1	2.6	2.7		172
29w	62029w	部材 有頭棒	62	TC(I)	SD-1	16	スギ	割材	94.7	2.1	1.7		433
30w	図53 図版二十五 62030w	部材 有頭棒	62	TC(I)	SD-1	14	スギ	割材	88.9	1.8	1.2		427
31w	62031w	部材 有頭棒	62	TC(I)	SD-1	14•15	スギ	割材	80.2	2.3	1.4	一部炭化	429
32w	62032w	部材 有頭棒	62	TC(I)	SD-1	15	スギ	割材	32.7	2.2	1.8		430
33w	62033w	部材 有頭棒	62	TA(I)	SD-1	16	サワラ	柾目	125.9	5.8	3.9		460
34w	図54 図版二十六 62034w	加工木 板材	62	TC(I)	SD-1	11	ヒノキ	板目	45.6	7.0	2.1		204

	表4 (続き) 出土木製品観察表(第62次調査) ***・ 挿図													
遺物		種別	調査		Value 1-40	<u></u>	LLIVE		ž	去量(cm)			樹種同定	
番号	写真図版 登録番号	器種	次数	調査区	遺構	層位	樹種	木取り	長	幅	厚	備考	番号 (SMG no)	
35w	図54 図版二十六 62035w	加工木 板材	62	TC(I)	SD-1	11	ヒノキ	板目	35.8	5.6	2.1		205	
36w	図54 図版二十六 62036w	加工木 板材	62	TA(I)	SD-1	15より下	スギ	板目	28.9	6.3	1.8	段あり	46	
37w	図54 図版二十六 62037w	加工木 板材	62	TA(I)	SD-1	15	スギ	板目	12.5	4.9	2.1		58	
38w	図54 図版二十六 62038w	加工木 板材	62	TA(I)	SD-1	12(断面)	ヒノキ	板目	27.9	10.9	0.9		102	
39w	図54 図版二十六 62039w	加工木	62	TA(I)	SD-1	21b	スギ	板目	27.5	9.8	1.1	切断痕あり	435	
40w	図54 図版二十六 62040w	加工木 板材	62	TA(I)	SD-1	13·14	広葉樹(樹皮)	板目	10.2	7.6	1.9	全面炭化	6	
41w	図54 図版二十六 62041w	加工木 みかん割材	62	TA(I)	SD-1	21b	コナラ属アカガシ亜属	芯去みかん割	14.6	7.0	4.2	切断痕あり 樹皮残存	120	
42w	図54 図版二十六 62042w	加工木 板材	62	TC(I)	SD-2	4	ヒノキ	板目	14.4	5.7	0.9		326	
43w	図54 図版二十六 62043w	加工木 L字型材	62	TA(I)	SD-1	21b	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	11.4	6.4	2.7	加工あり 樹皮残存	141	
44w	図54 図版二十六 62044w	自然木 樹皮	62	TA(I)	SX-2	6	(樹皮)	樹皮	11.4	8.7	1.7	切断痕あり	163	
45w	図55 図版二十七 62045w	加工木	62	TA(I)	SD-1	15•16	トネリコ属	芯持丸木	17.6	3.2	3.5		91	
46w	図55 図版二十七 62046w	加工木	62	TA(I)	SD-1	19	モミ属	芯持丸木	23.8	4.0	3.8	折りとり 年輪数30以上 両端加工 樹皮残存	127	
47w	図55 図版二十七 62047w	加工木角材	62	TC(I)	SD-1	11	ツバキ属	芯なし削出	8.0	4.9	4.1		425	
48w	図55 図版二十七 62048w	加工木角材	62	TA(I)	SD-1	14	ツバキ属	芯なし削出	19.6	5.5	4.9	両端加工あり	111	
49w	図55 図版二十七 62049w	加工木 分割材	62	TC(I)	SD-1	11	スギ	割材	20.7	12.5	8.5	一端切断痕、節含む	206	
50w	図55 図版二十七 62050w	加工木	62	TA(I)	SD-1		クワ属	芯持丸木	18.1	9.9	6.7	両端切断	109	
51w	図55 図版二十七 62051w	加工木	62	TA(I)	SD-1	20④	イヌガヤ	芯持丸木	19.3	3.5	3.1	両端切断痕あり、加工あり	124	
52w	図55 図版二十七 62052w	加工木 残材	62	TC(I)	SD-1	11	スギ	柾目	21.0	11.6	4.9	節含む, 一部炭化	199	
53w	図55 図版二十七 62053w	加工木 棒材	62	TA(I)	SD-1	24	クワ属	芯持丸木	38.0	0.8	0.8		151	
54w	図55 図版二十七 62054w	加工木	62	TA(I)	SD-1	21b	クサギ	芯持丸木	32.6	2.0	1.8	一面面取り 樹皮残存	143	
55w	図55 図版二十七 62055w	土木材杭	62	TA(I)	SD-1	16	クスノキ科	芯持丸木	54.7	2.3	2.4	樹皮残存	28	
56w	図56 図版二十七 62056w	加工木	62	TA(I)	SD-1	21b	ツバキ属	又·芯持丸木	52.9	3.0	2.8	一端切断痕あり 樹皮残存	136	
57w	図56 図版二十七 62057w	自然木	62	TC(I)	SD-1	10	ツバキ属	又·芯持丸木	36.5	4.9	4.1	樹皮残存	170	
58w	図56 図版二十七 62058w	加工木 分割材	62	TA(I)	SD-1	15	コナラ属クヌギ節	みかん割り	30.1	6.6	4.3	斜め方向に切断痕、炭化部 分あり、燃材材か 樹皮残存	64	
59w	図56 図版二十七 62059w	加工木	62	TA(I)	SD-1	13-14?	ツバキ属	芯持丸木	64.8	5.5	6.2	先端加工	150	
60w	図56 図版二十七 62060w	土木材 杭	62	TC(I)	SD-1	9-11b	スギ	割杭	36.6	6.7	4.8		426	
61w	図56 図版二十七 62061w	加工木 残材	62	TC(I)	SD-1	9	ヒノキ	柾目	45.6	9.5	2.2	節含む	169	
62w	図56 図版二十七 62062w	土木材 杭	62	TA(I)	SD-1	13·14	コナラ属アカガシ亜属	丸木杭	25.4	3.0	3.2		5	

						衣 3	山工小袋的観祭	仪 (为00人间	旦/				
	挿図	7# Pu							ž	法量(cm)			樹種同定
遺物番号	写真図版 登録番号	種別 器種	調査 次数	調査区	遺構	層位	樹種	木取り	長	幅	厚	備考	番号 (SMG no)
63w	図57 図版二十八 63001w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層 (13·14)	アスナロ	みかん割り	52.9	5.2		特に加工なし	395
64w	図57 図版二十八 63002w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	15層西肩	スギ	割材	84.0	3.7		側面〜先端部削り 表面焼 痕	408
65w	図57 図版二十八 63003w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	15層西肩	スギ	割材	55.9	8.2		先端部削り	407
66w	図57 図版二十八 63004w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	割材	72.8	8.1	5.4	表面・側面ハツリ痕	409

表5 (続き) 出土木製品観察表(63次調査)

	表5 (続き) 出土木製品観察表(63次調査)												
遺物	挿図 写真図版	種別	調査	細木豆	遺構	層位	樹種	± Hn ()	ä	去量(cm)		備考	樹種同定
番号	写真図版 登録番号	器種	次数	調査区	退慄	層包	倒性	木取り	長	幅	厚	加布	番号 (SMG no)
67w	図57 図版二十八 63005w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層西肩部	アスナロ	割材	86.5	4.7	1.7	先端部削り	391
68w	図57	土木材 丸木杭	63	TF (I)	SD-4	下層	アスナロ	芯持丸木	26.0	3.0	2.7	表面炭化	394
69w	図57 図版二十八 63007w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層西肩	スギ	割材	43.6	6.3	5.2	先端部削り	390
70w	図57 図版二十八 63008w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層西肩	スギ	割材	21.7	4.6	2.1		405
71w	図57 図版二十八 63009w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層西肩	スギ	割材	26.1	6.3	2.7	3/4焼痕	406
72w	図57 図版二十八 63010w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	板目	52.9	4.9	2.5		392
73w	63011w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	コウヤマキ	割材	64.9	4.3	2.4	先端部削り	404
74w	図58 図版二十八 63012w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	割材	66.4	7.1	3.1	先端部 側面削り	402
75w	図58 図版二十九 63013w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	板目	48.2	5.8	3.2		401
76w	図58 図版二十九 63014w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り	41.5	5.5	3.6	特に加工痕なし	400
77w	図58 図版二十九 63015w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	追柾目	71.4	14.8	3.1	先端部削り	398
78w	図58 図版二十八 63016w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	コウヤマキ	柾目	49.0	5.2	2.5		393
79w	63017w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	割材	71.2	5.4	4.5		403
80w	図58 図版二十九 63018w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	不明	割材	42.4	4.6	3.3	炭化が激しいため加工痕不明 焼痕 特に加工なし	300
81w	図58 図版二十九 63019w 図58	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	割材	49.6	3.5	3.2	特に加工なし 先端部欠損 特に加工痕なし	396
82w	図版二十九 63020w 図59	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	割材	37.7	3.7		小片	397
83w	図版二十九 63021w 図59	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	割材	97.5	6.4	4.5	プレ3種 印刊 ウ	384
84w	図版二十九 63022w 図59	土木材丸木杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スダジイ	芯持丸木	66.1	6.1	5.5	特に加工なし	385
85w	図版二十九 63023w 図59	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	アスナロ	割材	40.4	2.7	2.5	先端部削り 下3/4炭化	383
86w	図版二十九 63024w 図59	土木材丸木杭	63	TF (I)	SD-4	下層	アスナロ	芯持丸木	86.5	5.2	.5.2	99wと同一木	382
87w		土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	ヤマハゼ	板目	44.4	6.6	2.9	先端部削り 先端部欠損	381
88w		土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	割材	42.5	7.3	6.2		387
89w	図版三十 63027w 図59	土木材 丸木杭	63	TF (I)	SD-4	下層	アスナロ	芯持丸木	39.7	3.7	3.4		388
90w	図版三十 63028w 図59	土木材 板杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	板目	86.5	10.9		上部表面に焼き痕	386
91w	図版三十 63029w 図60	土木材 板杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	板目	79.7	11.3	3.3		389
92w	図版三十 63030w 図60	土木材割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	板目	62.4	8.8	6.0		372
93w	図版三十 63031w 図60	土木材割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	アカガシ亜属イチイガシ	みかん割り	66.7	7.1	4.1	先端部削り 表面に焼痕あり	377
94w	図版三十 63032w 図60	土木材 丸木杭	63	TF (I)	SD-4	下層	コジイ	芯持丸木	45.8	5.8	5.9		371
95w	図版三十 63033w 図60	土木材割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	カエデ	みかん割り	44.2	5.6	3.9		374
96w	図版三十 63034w 図60	土木材 丸木杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	芯持丸木	120.9	9.9	7.7	痕あり C14年代測定 西暦106B.C.	376
97w	図版三十 63035w	土木材 丸木杭	63	TF (I)	SD-4	下層	ツバキ属	芯持丸木	20.1	3.3	3.5		378
98w	図60 図版三十 63036w	土木材 丸木杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スダジイ	芯持丸木	42.6	5.2	4.1	先端部欠損 87wと同一木	373
99w	図60 図版三十 63037w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	ヤマハゼ	板目	38.2	8.4	3.4	端部切断加工 104wと同一木	375
100w	図60 図版三十一 63038w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	コナラ属アカガシ亜属	半割	82.1	8.0	4.2	先端部削り	379

表5 (続き) 出土木製品観察表(第63次調査)

遺物	挿図	種別	調査						ä	法量(cm)			樹種同定
番号	写真図版 登録番号	器種	次数	地区	遺構	層位	樹種	木取り	長	幅	厚	備考	番号 (SMG no)
101w	図61 図版三十一 63039w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	割材	110.0	6.6	3.6	106wと同一木 先端削り 破損激	380
102w	図61 図版三十一 63040w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	コナラ属アカガシ亜属	割材	116.2	10.6	8.0		363
103w	図61 図版三十一 63041w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	柾目	42.0	6.9		先端部削り	365
104w	図61 図版三十一 63042w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	コナラ属アカガシ亜属	半割	93.9	9.0		100wと同一木 先端部削り	354
105w	図61 図版三十一 63043w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	東肩下層	スギ	板目	55.3	5.0		特に加工なし	367
106w	図61 図版三十一 63044w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	東肩下層	スギ	板目	94.0	3.2	4.8	101wと同一木 先端部削り	368
107w	図61 図版三十一 63045w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	下層	スギ	割材	19.8	2.3		先端部削り(小片)	366
108w	図61 図版三十一 63046w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	東肩下層	スギ	割材	32.2	4.0		先端部削り	369
109w	図61 図版三十一 63047w	土木材 割杭	63	TF (I)	SD-4	東肩下層	コナラ属アカガシ亜属	板目	52.2	8.1	4.6	削痕あり 先端部欠損	370

木製品の出土状況について 今回の調査では、木器の未製品や原材が2地点で確認された。SD-1ベルト19の10・11層(人為的埋戻し期)(図9)では泥除け未製品3wと農具の可能性が高い板材4w、農具原材15wが出土した。樹種は4wがイチイガシ、あとの2点がアカガシ亜属である。人為的埋土に未製品や原材が含まれたのは、①埋め戻しが進行する途上において、浅くなりつつある環濠が程よい深さの水場として未製品・原材の一時保管場所に利用され、その後何らかの理由で放棄された。②不要となった未製品・原材が埋土とともに投棄されて堆積した。の2つの可能性が考えられる。4wは鍬や鋤の端材とみられることから②の要素もあるが、折損のない泥除け未製品や農具原材(みかん割り材)は廃棄対象とは考えにくく、①の可能性が高いとみられる。15wは分断するための目途となる線が4本入っている。分断後の1個体は長さ30cm,幅20~25cm程度となることから広鍬か泥除け4点の製作が見込まれ、断面の形状からは泥除けの可能性が高い。分断位置の目途線は、刃幅3.5cmの斧を鏨のように打ち込んで刃跡を連続的につけることで形成されており、刃先の痕跡から鉄斧の使用が窺える。

未製品・原材は、土坑もしくは井戸とされるSX-2の最下層(6層)でも出土した(図25)。土器は共伴しておらず、詳細な時期は不明である。ここでは竪杵原材7w、角材14wが出土している。同じ遺構からは層位不明ながら小型弓の原材の可能性がある用途不明品17wも見つかっている。14wはマタタビ属の芯持丸木で裏表に平面を作り出し、両側面には樹皮を留める。細い材を割り出す母材であろう。17wはイヌガヤの芯持丸木で側面は丁寧に面取りをし、側面には曲げの加工に伴うとみられる刻みが確認できる。土坑もしくは井戸の底部にこれらの原材を保管していたと考えられる。

引用文献

能城修一・佐々木由香・村上由美子 2011「出土した木製品類と自然木の樹種」『下之郷遺跡の史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』守山市教育委員会

光谷拓実 2011「出土木材の年輪年代測定」『下之郷遺跡の史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』守山市教育委員会

村上由美子 2004「背負い運搬具」『人類誌集報 2003』東京都立大学考古学報告9

第62次調査のTA地区、環濠SD-1の埋積土中において土器や木材などに伴い編組製品1点が出土した。以下にその観察結果を報告する。

編組製品は、SD-1のベルト18第21 b 層からほぼ完全な形状をとどめた状態で出土した。底部から体部上部まで残存するが、口縁部は残存しない。形状からかごと判断した。底部は一部のみが残存し、一辺が約10cm前後の正方形もしくは長方形である。深さは残存部分で約30cm、口径は約25 cmの円形に復元されるもので、環濠の底に横たわるかたちで検出された。かごの内部には底部の堆積物である泥土が充填しており、内容物の検出に注意が払われたが、損傷する恐れがあったため、かごの内容物の調査はおこなわず、高級アルコール法による保存処理を行った。

素材は割り裂いたへぎ材を用いている。編組技法は、底部は2本1単位の2本飛び網代編である。体部では2本1単位の部分がそれぞれ分かれて別のタテ材となっている。それぞれのへぎ材は底部段階で2本重ねるか、体部に立ち上がる直前で1本重ねて足している。体部では重ねたへぎ材を上部にむかって横にずらして2本1単位とし、タテ材としている。体部のヨコ材は1本1単位を基本とし、体部はござ目編みで製作されている。体部上部には連続して4本のヨコ添えもじり編みがみられ、現状ではかご本体からは、ずれている。その上部にあると思われる縁仕舞や口縁部は残存しておらず、不明である。上端にヨコ添えもじり編みがあることから、他の遺跡の類例等と比較すると、その上部か近い部分に口縁部があったと想定される。

かごに使用された素材については、体部ヨコ材について吉田生物研究所に委託し、素材(横断面、 放射断面、接線断面)の解剖学的な観察から、イネ科タケ亜科を利用したものと同定された。

また、別項の包埋法による3断面の解剖学的な観察結果では、ヨコ添え材およびヨコ添えもじり 材、タテ材は、同様にイネ科タケ亜科(竹笹類)という結果が得られた。

出土したかごの調査から、当時の編組方法の技術の一端と、利用された植物素材が判明した点では貴重な調査成果である。なお、かごの時期は、出土した層序と共伴する土器の形式から弥生時代中期後葉(IV期前葉)に相当する。





図62 SD-1出土のかご

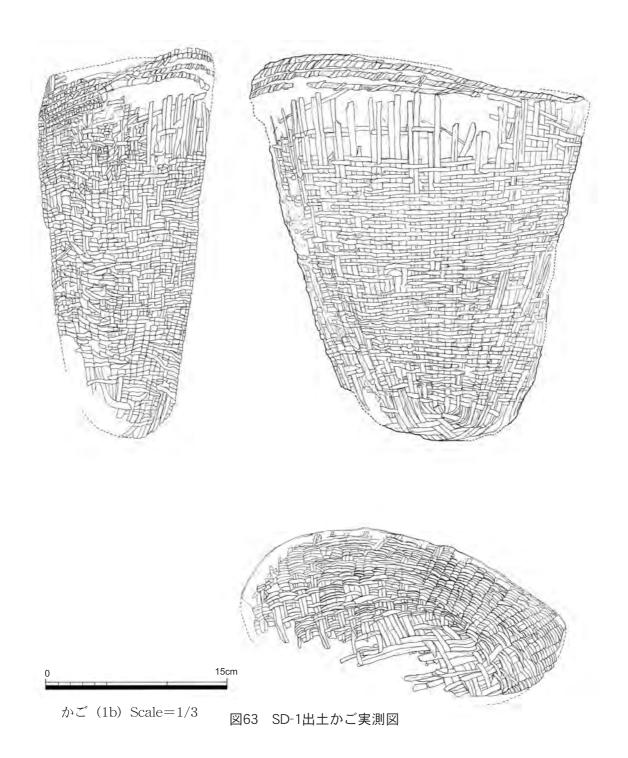
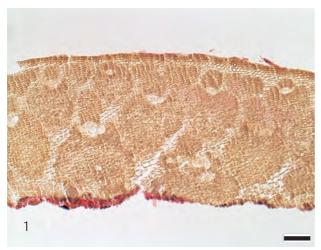
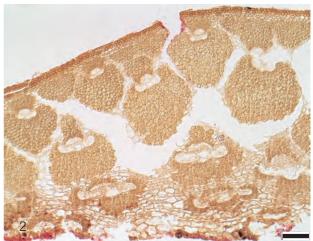


表6 出土かご製品観察表(第62次調査)

				MO HIT	13 C 20			
番号 挿図 登録番号	器種	次数	調査区	遺構	層位	法量(cm)	編み方	備考
1b 図63 62001b	かご	62	TA(I)	SD-1 ベルト18	21 b層		底部:2本飛網代 体部:ござ目	





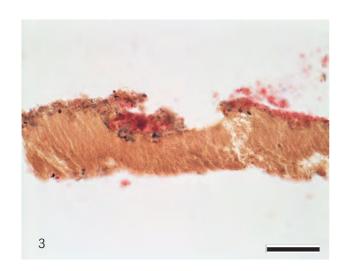


図64 かご素材の横断面の光学顕微鏡写真

1:体部タテ材 (SD1 ベルト18, 21b 層), 2:体部上部ヨコ添え材 (SD1 ベルト18, 21b 層),

3: カゴヨコ添えもじり材(SD1 ベルト18, 21b 層) 1-3 のスケールは100 μ m.

第62次調査の際、環濠 (SD-1) から出土した土器の内部から紐状の繊維が出土した。以下にその観察結果を報告する。

TA地区SD-1ベルト18の第9層から完形の土器(遺物番号7・62869)が出土した。この土器は、やや下膨れの胴部に短く外反する口縁をもつ短頸壺の一種で、外面には在地系器種に通有の粗いハケ調整が施されている。この土器の内部には、土壌とともに枝や葉、種実などの植物遺体と昆虫遺体が堆積しており、その中の堆積物の上面に紐状の繊維(図67)が断裂した状態で3個体含まれていた。紐状の繊維は、それぞれ長さ5cm、幅0.3~0.5cmで、左の片撚り紐(ℓ)が2本合わさって右に撚られている右の諸撚り紐 $\{\ell > R\}$ であった。3個体の紐は、撚り方や紐の幅がほぼ同じであることから、同一の紐であったと考えられる。なぜ土器内に紐が入っていたのかは不明である。





図65 **壷実測図・写真** (遺物番号7・62869)



図66 壷の出土状況







図67 壷より検出された紐状繊維

また、同じくSD-1の第17層から出土した土器(遺物番号 $2\cdot 62861$)からも紐状の繊維が出土した。この土器は、受口状口縁をもつ在地系の広口壺の一種で、口頸部には4つの穴があり、2穴一対で対面する場所に穿孔をもつものである。この器種は、蓋形土器とセットでの使用が考えられるが、今回の出土地点周囲からは蓋の出土は無かった。壺の口頸部の穴の一つには、繊維が詰まっており紐の断片と考えられる。また、対面側の穴と器壁内面には紐状の繊維が付着した状態であった(図68 右端)。土器の内部には、口縁部の破片や土壌、植物遺体、昆虫遺体が堆積していたが、その上面に紐状の繊維が6 個体含まれていた(図69)。紐状の繊維は、長さ $1.5\sim 5$ cm、幅 $0.25\sim 0.4$ cmで、右の片燃り紐(r)が2本合わさって左に撚られている左の諸撚り紐 $\{ \cline{\Gamma} > L \}$ であった。6 個体の紐は、撚り方や紐の幅がほぼ同じであることから同一の紐が分裂したものと考えられ、穴に付着した紐とも同一のものと考えられる。紐状の繊維は穴に付着した状態であることから、土器の穴に通されて使われたと考えられる。当時の紐状の繊維の利用の実態を示す非常に珍しい出土例といえる。また、壺の使用状態や用途を復元するうえでも貴重な事例といえる。

これら2例の紐状の繊維は、撚り方が異なっていることが明らかになった。この繊維が何の植物 を素材として作られたものか、今後調査する必要がある。



図68 壺実測図・写真・口縁詳細写真(遺物番号2・62861)

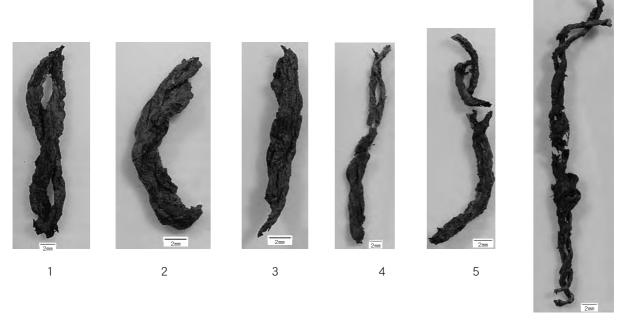


図69 壷より検出された紐状繊維

6

1. はじめに

滋賀県下之郷遺跡では、守山市教育委員会が実施した第61~63次調査において、弥生時代中期の 環濠の可能性がある大溝から動物遺存体が出土した。本節では、これらの動物遺存体の分析結果に ついて報告する。

2. 分析資料

動物遺存体は、SD-1とSD-2から出土した。すべて調査現場で採集された資料である。時期は弥生時代中期(畿内第Ⅲ~Ⅳ様式期)に比定される。ほとんどの動物遺存体にビビアナイトが析出しており、保存状態は全体的に悪い。骨に大きな亀裂が生じたり、骨の表面が剥離したりしており、痕跡観察や計測が困難な資料が多い。

遺 構	層位	埋没時期区分 (川畑・辻本2011)	埋没時期
	10層 11層	人為的埋戻期	Ⅳ期前~中葉
SD- 1	14層 16層 17層 19層 20層	再掘削~埋積期	Ⅳ期前葉
	21a層 21b層	開削~埋積期	Ⅲ期~Ⅳ期初頭
SD- 2	9層 10層	開削~埋積期	IV期前葉

表 7 動物遺存体の出土遺構と時期

3. 分析方法

同定は現生骨格標本との比較により行ない、比較標本には環境考古学研究室が所蔵する標本(NAC標本)を用いた。同定対象は、原則として骨端部が残存する資料とした。なお、同定結果の記載において「中型哺乳類」としたものはイノシシやニホンジカ程度の大きさの哺乳類、「小型哺乳類」としたものはイヌ程度の大きさの哺乳類を示す。

4. 分析結果

出土した動物遺存体は、同定資料数 (NISP) で合計176点であった。出土遺構を見ると、SD-1

から174点、SD-2から2点が出土している。SD-1の出土状況を埋没時期区分(川畑・辻本2011) ごとに見ると、時期不明の2点を除く172点のうち、開削~埋積期(II期~IV期-1)が148点と最も 多く出土しており、再掘削~埋積期(IV期-1~2)から18点、人為的埋戻期(IV期-2~3)から6点が出土している。

この他に、貝類の痕跡が残された土塊が採取されている。イシガイ科やシジミ科と推測される資料も含まれているが、貝殻外面の痕跡のみで、殻頂部などが観察できないため、同定するまでには至らなかった。現場の記録を見ると、取り上げの段階では殻皮が残存していた可能性があるが、分析段階では残存していなかった。

イノシシ Sus scrofa

計84点が出土し、頭蓋骨、下顎骨、歯、環椎、軸椎、頚椎、胸椎、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、 寛骨、大腿骨、膝蓋骨、脛骨、踵骨、距骨、中手骨あるいは中足骨を同定した。

年齢構成については、①歯の萌出・交換・咬耗状況の観察と②四肢骨骨端の癒合状況の観察を行なった。まず、下顎骨の歯牙の萌出・交換・咬耗状況における基準(林ほか1977)に従って年齢構成を検討すると、Ⅰ段階(第1大臼歯が萌出開始~完了)が1個体、V段階(第3大臼歯の第3咬頭まで咬耗)が3個体、不明が1個体である。次に、四肢骨骨端の癒合状況における基準(Hongo・ Meadow 2000)に従って年齢構成を検討すると、生存率がⅠ段階とⅡ段階では100%、Ⅲ段階では85%であった。各段階で生存率が高い点から、多くのイノシシが成獣であったと考えられる。歯と四肢骨の観察結果は、イノシシの成獣が多く出土しているという共通した傾向である。また、犬歯から性別を検討するとメスと判断できる資料が多い。

ニホンジカ Cervus nippon

計53点が出土し、頭蓋骨、角、下顎骨、歯、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、寛骨、大腿骨、脛骨、 踵骨、中足骨、基節骨、中節骨を同定した。

年齢構成については、①歯の萌出・交換・咬耗状況の観察と②四肢骨骨端の癒合状況の観察を行なった。まず、上顎骨は2個体が観察でき、ともに第3大臼歯の萌出が完了した段階であった。下顎骨では、1個体が観察でき、第2大臼歯が萌出途中の段階であった。次に、ニホンジカの四肢骨骨端の癒合状況に関する基準がないため、同じシカ属のアカシカ(Cervus elaphus)の基準に従うと(「Ilgenzdi2000)、生存率が I 段階では100%、Ⅱ 段階では88.8%、Ⅲ 段階では100%、Ⅳ 段階では90%であった。ニホンジカとアカシカにおける癒合年齢の差異が明らかでないため、各段階の詳細な年齢は不明である。しかし、各段階での生存率が高い点から、ほとんどのニホンジカが成獣であったことが確認できる。歯と四肢骨の観察結果は、ニホンジカの成獣が多く出土しているという共通した傾向である。

イヌ Canis lupus

計3点が出土し、頭蓋や大腿骨を同定した。成獣で、性別は不明である。この他にも、イヌ程度の大きさの骨が2点出土している。出土状況からイヌの可能性が高いと推測される。

5. 哺乳類組成

同定資料数(NISP)でイノシシが84点と最も多く出土し、ニホンジカが53点、イヌが3点であっ た。哺乳類がイノシシ、ニホンジカ、イヌの3種に集中するという傾向は、弥生時代における哺乳 類組成と共通したものである。しかし、イノシシの齢構成は幼獣や若獣に偏らずに成獣が中心であっ た。これは、他の弥生時代から出土したイノシシの様相とは異なる傾向である。現場採集資料のみ であるため、幼獣の骨が採集されなかった可能性を完全に排除することはできないが、弥生時代に おいて、イノシシのメスが多く、成獣が多く出土していることは非常に興味深い。

6. イノシシの解体方法

SD-1の21b層において、イノシシの椎骨が分離せずに連結した状態で3例出土した。

- ① 環椎(第1頚椎)+軸椎(第2頚椎)+第3頚椎
- ② 第7頚椎+第1胸椎+第2胸椎+第3胸椎
- ③ 第2腰椎+第3腰椎+第4腰椎

こうした連結状態の出土状況は、肉や腱などの軟組織が結合したままで廃棄されたことを示して おり、当時の解体方法を知る上で貴重な資料となる。下之郷遺跡では、イノシシの胴部を椎骨3~4 個分の単位で切り離したものと復元することができる。なお、保存状態が悪いために解体痕跡は観 察困難であった。

また、こうした連結資料の存在は、動物骨の廃棄後に流水による移動やイヌなどの肉食動物によ る撹乱の影響が少なかったものと評価することができる。これらの連結資料が出土したSD-1の21 層は、堆積物の観察により樹木の葉や枝材を狭在する泥からなっており、21層形成期には滞水域で 形成されていたと考えられる(川畑・辻本2011)。また珪藻分析から、21層(DⅡ帯)は埋積が進 むにつれて湖沼環境から沼沢湿地化が進んだことが推定されている(藤根2011)。このように21層 は、比較的浅い沼地のような水域であったと推測され、そこに解体した食料残滓を投棄したために、 骨が廃棄単位を保持したまま埋没したものと考えられる。



図70 イノシシ第2~4腰骨の出土状況(SD-1 の21b層) 図71 イノシシ第7頸椎〜第3胸椎



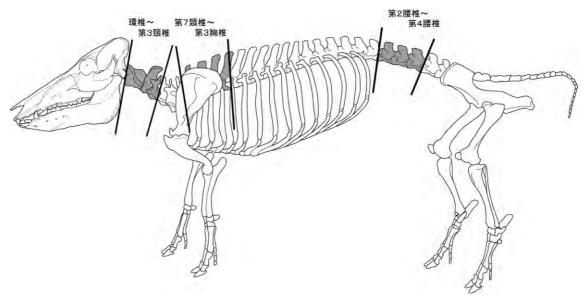


図72 下之郷遺跡におけるイノシシの廃棄単位

7. 下之郷遺跡における動物遺存体研究の課題

これまで下之郷遺跡から出土した動物遺存体については、フナの保存加工に関する議論がある (中島2003、2005)。ただし、この議論の元になった発掘調査報告書は刊行されておらず、出土状況、時期、動物遺存体の内容に関する基礎データが提示されていないまま、解釈のみが先行して説明されている状況にある。哺乳類も同様に概説的な説明があるものの、層位や時期などの出土状況は不明である (高橋2005)。そのため、下之郷遺跡における動物遺存体に関する従来の解釈を検討することができなかった。

土壌選別など適切な調査方法を実施していないこともあり、本稿では下之郷遺跡で説明されてきた「稲作漁撈民」と名付けられた生業活動について議論できていない。貴重な遺物が出土したという断片的な情報は数多くあるものの、出土状況や分析結果などの基礎的なデータが提示されないために、検証不可能な下之郷遺跡のイメージが生産され続けているという状況は、動物遺存体だけではない。今回の報告が、今後の下之郷遺跡のために活用されることを望みたい。

引用文献

川畑和弘・辻本裕也 2011 「環濠堆積物の層序」『下之郷遺跡の史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』、pp.21-41

高橋啓一 2005 「遺跡から発見された動物の骨」 『守山市誌 考古編』 pp.72-73

中島経夫 2003 「淡海の魚からみた稲作文化」『弥生のなりわいと琵琶湖―近江の稲作漁労民―』 pp.70-91

中島経夫(2005)「人間の活動と魚の関わり」『守山市誌 考古編』pp.76-77

林良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂(1977)「日本産イノシシの歯牙による年令と性の判定」 『獣医学雑誌』39、pp.165-174

藤根久(2011)「環濠堆積物中の珪藻化石群集」『下之郷遺跡の史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』、pp.71-76

Hongo,H and Meadow,R.H. (2000) 「Faunal Remain from Prepottery Neolithic Levels at Çaönü, Southeastern Turkey: A Preliminary Report Focusing on Pigs (Sus sp.)」 [Archaeozoology of the Near East IVA]、 pp.121-140

Îlgenzdi,G. (2000) 「Zooarchaeology at Çaönü : A Preliminary Assessment of the Red Deer Bones」 『 Archaeozoology of the Near East IVA』、pp.41-153

表8 出土した動物遺存体の同定結果

遺標	地区	層位	時期	種	部位	残存部分	左右	備考	遺物No.
				イノシシ	下顎骨	[M2 M3]	右	咬耗段階は不明	302
SD-1	TC(I)	10	Ⅳ期前~中葉 -	イノシシ	遊離歯	下顎M2	右		303
3D 1	10(1)	10	14 William	イノシシ	遊離歯	下顎M3	右		303
				イノシシ	遊離歯	下顎M3	不明		304
SD-1	TC(I)	11	Ⅳ期前~中葉	ニホンジカ	上顎骨	[<u>P3</u> P4 M1]	右		305
				イノシシ	頭蓋骨	後頭骨			171
SD-1	TA(I)	14層上面攪舌	L IV期前葉	ニホンジカ	大腿骨	遠位端(癒合)	右		260
			-	ニホンジカ	頭蓋骨	前頭骨(早)	左	-	90
	TA(I)	16	Ⅳ期前葉 -	ニホンジカ	上顎骨	[<u>P2</u> P3]		- 同一個体?	92
SD-1			-	ニホンジカ	頬骨		右	-	91
-				ニホンジカ	遊離歯	上顎M3			93
	TC(I)	16	Ⅳ期前葉	イヌ	大腿骨	遠位端(癒合)	左		65
			-	ニホンジカ	頭蓋骨	前頭骨(♀)+頭頂骨+側頭骨	_		222
			-	ニホンジカ	上顎骨	[M2 M3]	右		228
CD 1	TA (T)	17	πτ# # *	ニホンジカ	顔面骨	頬骨	右		314
SD-1	TA(I)	17	Ⅳ期前葉	イヌ	頭蓋	[× 12 13 <u>C</u> <u>P2</u> P3 P4 M1 M2] [I1 12 I3 C <u>P2</u> P3 P4 M1 M2]	左右	- 同一個体?	309
				小型哺乳類	頭蓋骨	頭頂骨		- 同一個本:	311
				小型哺乳類	頭蓋骨	後頭骨			312
				ニホンジカ	頭蓋骨	前頭骨(♀)+頭頂骨+後頭骨+側頭骨	左右	- 同一個体?	144
				ニホンジカ	上顎骨	[P2 P3 P4 M1 M2 M3]	右	山	145
SD-1	TA(I)	19	Ⅳ期前葉	ニホンジカ	上顎骨	[P2 P3 P4]	左	同一個体?	147
			-	ニホンジカ	上顎骨	[M1 M2 M3]	左	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	146
				イヌ	頭蓋骨	頭頂骨	左		261
SD-1	TA(I)	20	Ⅳ期前葉	ニホンジカ	肩甲骨		右		274
				イノシシ	上顎骨	[I1 I2]	左	同一個体	105
			-	イノシシ	上顎骨	[× <u>P1 P2</u> P3 P4]	左	1-3 PM L1.	106
			_	イノシシ	下顎骨	関節突起	左		103
SD-1	TA(I)	21a	Ⅲ期~Ⅳ期初頭	イノシシ	遊離歯	下顎P4	左		110
			-	イノシシ	膝蓋骨		右		104
			-	イノシシ	脛骨	近位端(癒合)	左		99
				中型哺乳類	肋骨		右		64
			-	イノシシ	頭蓋骨	頭頂骨+側頭骨	左	- 同一個体	116
			-	イノシシ	頭蓋骨	後頭骨	左		117
			-	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨+後頭骨	左		14
			-	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨+後頭骨	左	同一個体? -	19
			-	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨	左		15
			-	イノシシ	頭蓋骨	頭頂骨	左		151
			-	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨	右		139
			-	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨	右		291
			-	イノシシ	上顎骨	[11 12 13]	右.	一	306
			-	イノシシ	上顎骨	[<u>C(</u> ♀) P1 P2 P3 P4 M1 M2 M3]	右	第3咬頭まで咬耗	307
			-	イノシシ 	上顎骨	[C(3)]	右	一一一個体	271
			-	イノシシ	遊離歯	上顎犬歯(♂)破片		# Ant = - + + 1	272
			-	イノシシ	上顎骨	[M1 M2 M3]		第3咬頭まで咬耗	67
			-	<u>イノシシ</u>	上顎骨	[I1 <u>I2</u> ×]			268
CD 1	TA (T)	0.11	m #9 wz #9 ÷n ae	<u>イノシシ</u>	上顎骨	[<u>C(</u> ♀) P1 P2 P3 P4]		一一個体?	289
2D-1	TA(I)	21b	Ⅲ期~Ⅳ期初頭 ₋	イノシシ	遊離歯	上顎M3			288
			-	イノシシ	上顎骨 下顎骨	[M2] [C(♀) <u>P1 P2</u> P3 P4 M1 M2 M3]	<u>右</u> 右	第3咬頭まで咬耗	295 326
			-				左		
			-	イノシシ	下顎骨 下顎骨	[<u>I1 I2 I3 C(♀) P1 P2 P3 P4 M1</u> M2 M3] 下顎角	右	第3咬頭まで咬耗 同一個体	327
			-	イノシシ	下银音 下顎骨	下頭用 [<u>II</u> I2 I3 C(♀) P1 P2 P3 P4 M1 M2 M3]	右	第3咬頭まで咬耗	233
			-	イノシシ	下顎骨	[12 I3 C(\P) \times P2 P3 P4 M1 M2 M3]	左	第3校頭まで校托 第3校頭まで校耗 同一個体?	234
			-	イノシシ	下顎骨	下顎枝	右	一個体!	234
			=	イノシシ	下顎骨	下現权 [<u>I2 I3</u> C(♀) - P2 P3 P4 M1 M2 M3]		第3咬頭まで咬耗	317
			=	イノシシ	下顎骨	[× P2 P3 P4 M1 M2 M3]	右		317
			-	イノシシ	下银官 下顎骨	[di1 di2 di3 dc P1 dp2 dp3 dp4 (M1)]	右	カリス织みで攻社	318
			-	イノシシ	下银官 下顎骨	[dil di2 di3 dc P1 dp2 dp3 dp4 (M1)]		一一個体?	338
			_		1 万具 月	[upz aps ap4 (WII)]	<u> </u>		J44
			-	イノシシ	環椎+軸椎			軸椎は歯突起	4
			-					軸椎は歯突起 のみが残存 	4 3

遺構 地区	層位	時期	種	部位	残存部分	左右	備考	遺物No.
		-	イノシシ	第7頚椎				
		-	イノシシ	第1胸椎			同一個体	334
		-	イノシシ	第2胸椎 第3胸椎				
		-	イノシシ	第2腰椎				275
		-	イノシシ	第3腰椎			同一個体	282
		-	イノシシ	第4腰椎				278
		-	イノシシ	肩甲骨	関節窩癒合	左		39
		-	イノシシ	肩甲骨	関節窩癒合	右		87
		_	イノシシ	上腕骨	近位端(癒合)	左		30
		·-	イノシシ	上腕骨	近位端(癒合)	左		35
		=	イノシシ	上腕骨	近位端(癒合)			131
		-	イノシシ	上腕骨	近位端(未癒合骨端脱落)	左		33
		-	1/99	上腕骨	近位端(癒合)		ノフ味り、吐	149
		-	イノシシ	上腕骨	遠位端(癒合)		イヌ噛み跡	31
		-	イノシシ	上腕骨上腕骨	遠位端(癒合)			286 34
		-	イノシシ	上腕骨	遠位端(癒合)			287
		-	イノシシ	上腕骨	遠位端(癒合)			341
		-	イノシシ	橈骨	近位端(癒合)			13
		-	イノシシ	橈骨	近位端(癒合)	右		29
		_	イノシシ	橈骨	近位端(癒合)	右		88
			イノシシ	橈骨	遠位端(癒合)	右		28
		-	イノシシ	尺骨	滑車切痕	左		16
		-	イノシシ	尺骨	近位端(癒合)			265
		-	1/99	尺骨	近位端(癒合)			337
		-	イノシシ イノシシ	尺骨 	近位端(未癒合骨端脱落)			134
		-	イノシシ	ラスト 寛骨	恥骨 			54
		-	イノシシ					55
		-	イノシシ	寛骨	寛骨臼(癒合)			133
		-	イノシシ	大腿骨	近位端(癒合)	左		128
SD-1 TA(I)	21b	Ⅲ期~Ⅳ期初頭	イノシシ	大腿骨	近位端(癒合)	右		125
			イノシシ	大腿骨	近位端(癒合)	右		263
			イノシシ	大腿骨	遠位端(癒合)	左		342
		-	イノシシ	大腿骨	遠位端(癒合)	右		18
		-	イノシシ	大腿骨	遠位端(癒合)			262
		-	イノシシ 	脛骨	近位端(癒合)			340
		-	イノシシ	脛骨	遠位端(癒合)			40
		-	イノシシ イノシシ	脛骨 踵骨	遠位端(癒合) 近位端(癒合)			59 56
		-	イノシシ	正月 距骨	선 단체 ()정 다 /	右		57
		-		中手骨·中足骨	近位端(癒合)		イヌ噛み跡	97
		-	ニホンジカ	頭蓋骨	頭頂骨+前頭骨(♀)			63
		-	ニホンジカ	頭蓋骨	前頭骨+角座骨(♂)	左	角座骨を分割している	53
			ニホンジカ	下顎骨	[<u>dp2 dp3 dp4</u> M1 (M2)]	右		36
		-	ニホンジカ	肩甲骨		右		95
		-	ニホンジカ	上腕骨	近位端(癒合)			148
		-	ニホンジカ	上腕骨	近位端(未癒合骨端脱落)			266
		-	ニホンジカ	上腕骨	近位端(癒合)			17
		-	ニホンジカ	上腕骨 上腕骨 上腕骨	遠位端(癒合) 			27
		-	ニホンジカ	上腕骨				264
		-	ニホンジカ	上腕骨	遠位端(癒合)			283
		-	ニホンジカ	橈骨	完存(近位端:未癒合脱落、遠位端:癒合)			60
		-	ニホンジカ	橈骨	近位端(癒合)	左		267
		-	ニホンジカ	橈骨	遠位端(癒合)	右		25
		-	ニホンジカ	橈骨	遠位端(癒合)	左		339
		-	ニホンジカ	尺骨	近位端(癒合状態不明)			292
		-	ニホンジカ	寛骨	坐骨(坐骨結合癒合)			6
		-	ニホンジカ	寛骨	寛骨臼癒合、恥骨癒合		右側は恥骨のみ	132
		-	ニホンジカ	寛 骨	腸骨			96
		-	ニホンジカ	大腿骨	近位端(癒合)			124
		-	ニホンジカニホンジカ	大腿骨	近位端(癒合) 			293 58
			ー小ノンガ	大腿骨	選四端(想合)	70		28

遺構	地区	層位	時期	種	部位	残存部分	左右	備考	遺物No
				ニホンジカ	踵骨	近位端(癒合)	右		284
			-	ニホンジカ	踵骨	近位端(癒合)	右		113
			-	ニホンジカ	脛骨	近位端(癒合)	左		22
			-	ニホンジカ	脛骨	近位端(癒合)	右		12
			-	ニホンジカ	脛骨	近位端(癒合)	右		343
			-	ニホンジカ	脛骨	遠位端(癒合)	左		112
			=	ニホンジカ	脛骨	遠位端(癒合)	右		32
			=	ニホンジカ	脛骨	遠位端(癒合)	右		111
			=	ニホンジカ	中足骨	遠位端(癒合)			42
			=	ニホンジカ	基節骨	完存(近位端癒合)			135
			-	ニホンジカ	中節骨	完存(近位端癒合)	不明		137
			-	中型哺乳類	胸椎	椎体	1 -91		269
			-	中型哺乳類	胸椎	椎体			270
			-	中型哺乳類	胸椎	椎体			276
			-	中型哺乳類	胸椎	TE /A			140
			-		腰椎	横突起			8
			-	中型哺乳類					
			-	中型哺乳類	腰椎	椎体			279
			-	中型哺乳類	腰椎	椎体			281
			-	中型哺乳類	腰椎	棘突起			7
SD-1	TA(I)	21b	Ⅲ期~Ⅳ期初頭-	中型哺乳類	腰椎				45
				中型哺乳類	腰椎				46
			-	中型哺乳類	腰椎				114
			-	中型哺乳類	腰椎				115
			-	中型哺乳類	椎骨	関節突起			52
			-	中型哺乳類	椎骨	椎体			11
				中型哺乳類	椎骨	椎体			43
			_	中型哺乳類	椎骨	棘突起			5
			_	中型哺乳類	椎骨	棘突起			51
			_	中型哺乳類	椎骨				296
				中型哺乳類	椎体盤	椎体			272
				中型哺乳類	椎体盤	椎体			272
			-	中型哺乳類	肋骨	関節部	左		297
			-	中型哺乳類	肋骨	骨幹部	左		41
			- -	中型哺乳類	上腕骨	骨幹部	右		9
			-	中型哺乳類	不明				44
			-	中型哺乳類	不明				69
			-	中型哺乳類	不明				142
			-	中型哺乳類	不明				277
			-	中型哺乳類	不明				294
			-	中型哺乳類	不明				280
				イノシシ	尺骨	遠位端(癒合)	右		122
			-	イノシシ	尺骨	近位端(癒合)		同一個体?	73
SD-1 -	TA(I)	21	Ⅲ期~Ⅳ期初頭		 肩甲骨	近 [24][(18] 日 /			121
00 1			m /// 14 /// /// gg		上腕骨				
			-	ニホンジカ	工规·审 不明	建 区编(舰音)	11		72 74
				中型哺乳類		ר מא אא מם פם ז	±		
SD-1	TA(I)	21層南壁	Ⅲ期~Ⅳ期初頭	<u>イノシシ</u>	上顎骨	[P3 P4 M1 M2]			38
				イノシシ	大腿骨	遠位端(未癒合骨端脱落)			37
SD-1	TA(I)	SR-1 15		ニホンジカ	顔面骨	切歯骨			61
				ニホンジカ	踵骨		右		62
SD-2	TC(I)-	9-10	Ⅳ期前葉	ニホンジカ	頭蓋骨	角座骨十角			76
		10	Ⅳ期前葉	ニホンジカ	脛骨	遠位端(癒合)	右		85

^{*「}中型哺乳類」: イノシシやニホンジカ程度のサイズ

^{**・「}小型哺乳類」: イヌ程度のサイズ *「小型哺乳類」: イヌ程度のサイズ *上顎骨・下顎骨の記載について、[] は顎骨の残存部分を示す。またそれぞれの歯について、< >は未萌出の段階、()は萌出中の段階、×は顎骨から脱落した歯、一は欠損 歯、下線部は歯根部のみが残存することを示している。



図73 下之郷遺跡出土のイノシシ

1:右上顎骨 (No.306)、2:右下顎骨 (No.233)、3:左下顎骨 (No.234)、4:右下顎骨 (No.338)、5:左下顎骨 (No.344)、6:左肩甲骨 (No.39)、7:左上腕骨近位端 (No.30)、8:右上腕骨遠位端 (No.341)、9:左橈骨近位端 (No.13)、10:左尺骨 (No.16)、11:右寬骨 (No.133)、12:左大腿骨遠位端 (No.342)、13:右脛骨近位端 (No.340)、14:右脛骨遠位端 (No.59)、15:右踵骨 (No.56)

()については表8の遺物 を示す。

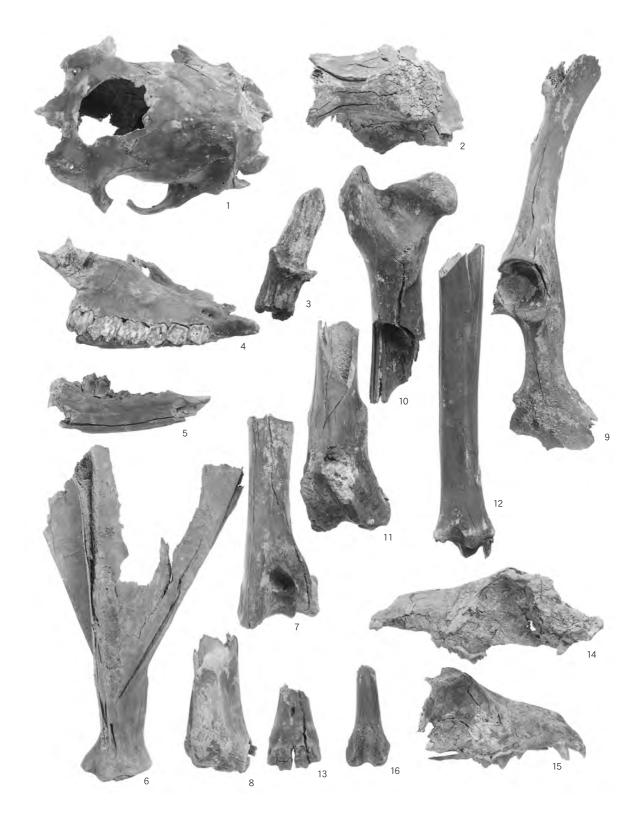


図74 下之郷遺跡出土のニホンジカ・イヌ

1~13: ニホンジカ〔1: 頭蓋♀(No.144)、2: 左前頭骨♂(No.53)、3: 角+角座骨(No.76)、4: 右上顎骨(No.145)、5: 右下顎骨(No.36)、6: 左肩甲骨(No.121)、7: 右上腕骨遠位端(No.283)、8: 右橈骨遠位端(No.25)、9: 左寛骨(No.132)、10: 左大腿骨近位端(No.124)、11: 右大腿骨遠位端(No.58)、12: 右中足骨遠位端(No.42)、13: 左脛骨遠位端(No.112)〕

14~16:イヌ〔14:左頭蓋 (No.309)、15:右頭蓋 (No.309)、16:大腿骨遠位端 (No.65)〕

()については表8の遺物 を示す。

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討

下之郷遺跡は、これまでの調査で弥生時代中期後葉に帰属する遺構・遺物が多数確認され、今回の調査区においても同期の環濠や溝跡が検出された。発掘調査は史跡整備に際し、集落縁辺に開削された多重環濠の性格づけを主な課題として実施した。

ここでは弥生時代中期後葉の遺物について検討を加えて、遺構の埋没過程や環境変遷を把握し、 復元整備にかかる基礎資料とする。

第1節 弥生時代中期後葉の土器群について

今回の調査では、弥生時代中期後葉の土器が環濠内から多量に出土した。環濠が開削された時期から埋没していく過程で一括廃棄されたものが複数あり、各器種の特徴も把握可能な資料と考える。 そこで、出土した土器群について形態分類を行い、その編年的位置づけを試みる。

1) 形態分類

<壺形土器>

- 広口壺A 緩やかに外反する口縁をもつ壺で、口縁端部に面を作る。頸部から体部にかけて櫛描文 を施す中型の壺。
 - I1類 体部外面を粗いハケ仕上げとし、口縁端面を斜位ハケで仕上げる。
 - I2類 体部外面を粗いハケ仕上げとし、口縁端部にキザミを施す。
 - Ⅱ1類 体部外面を平滑に仕上げ、口縁端面に列点文等を施す。体部全体を櫛描文で飾る。
- 広口壺B 内傾して短く立ち上がる頸部より、屈曲して外方へ短くひらく口縁部をもつ。
 - I1類 体部外面を粗いハケ仕上げとし、口縁端面を斜位ハケで仕上げる。
- 広口壺C 垂直に立ち上がる頸部から短く外反する口縁をもつ壺で、口縁内面を加飾する。
 - I1類 口縁端部を水平に引出し、端面に波状文を施す。口縁内面は櫛描列点文をめぐらす。
 - 12類 口縁端部を短く引出し、口縁端面を強く横ナデし上端部を短く突出させる。
- 受口壺A 頸部から緩やかに外反する口縁を立ち上げ、先端部を受口状につくり出す。頸部には2 孔1対の紐通し孔がある。
 - I1類 外反する第1口縁の先端に横位の粗ハケを施し、第2口縁をつくり出す。
 - I2類 外反する第1口縁の先端を屈曲させ、第2口縁外面を斜位の粗いハケでしあげる。
 - I3類 頸部から腹部にかけて櫛状工具による波状文、直線文で飾る。
- 受口壺B 外傾して延びる第1口縁の先端を折り曲げ、受口状に第2口縁を立ち上げる大型の壺。 頸部には貼り付け凸帯文を持つ。口縁部の形状からII類に分ける。
 - I 1類 内傾して短く立ち上げる第 2 口縁の外面を斜位に粗ハケを施した後、端部を横位にナデ仕上げを施す。
 - I2類 内傾して短く立ち上げる第2口縁の外面全体を横位のナデ仕上げとし、列点文で飾る。
 - I3類 上方に短く立ち上げる第2口縁の外面全体をナデ仕上げとする。
 - Ⅱ1類 内傾して幅広の第2口縁を立ち上げ、外面を加飾するもの。
- 有段口縁壺A 卵形をした体部をもつ大型の壺。口縁は逆ハの字状に開いた後、緩やかに屈曲して立ち上がる。口縁部外面に凹線文が施され、頸部付け根に貼り付け凸帯文や刻み目などを施す。

	I 1	9000° 0	受口	Iз	68		Ιı	8
広口壷	Ι2	17	壷 B	П 1	88	細	Ι₂	
A	П 1			Ι₂	min o croose 23	頸 壷 A	П 1	29
広口壷	I	101	有段	Ι₂			II 1	26
B 広口壷 C	I 1	19	口縁	Iз	22	_	I ₂	74
壷 C	Ι2	100	壶 A	Ⅱ ₁	4	細頸壷	Ι	
	Ι 1			ш1	72	В		110
受口				II 2	69	短頸	I	
壷 A	Ι₂	2	直			壷 A		7
	Із		口壷	I	10	太頸壷A 台	I	25
受	Ι 1	20	Α	П	102	口付無頸壷 A	Ι	30
回 壷 B	Ι₂	52	長 頸 壷 A	I	28	台付無頸壷口	I	54
						В		

図75 出土土器分類図1

- I 1類 やや内傾ぎみに第2口縁を立ち上げ、外面を斜位に粗ハケを施した後、横位にスリナ デ仕上げを施す。頸部に貼り付け凸帯文を付し、ヘラ状工具でキザミを入れる。
- I 2類 上方へ緩やかに伸びる第 2 口縁を立ち上げ、斜位に粗ハケを施した後、横位にナデ仕上げを施す。頸部に貼り付け凸帯文を付し、指頭押圧を施す。
- I3類 上方へ伸びる第2口縁を立ち上げ、斜位に粗ハケを施した後、横位にスリナデ仕上げ を施す。口縁外端部にヘラ状工具でキザミを入れる。
- Ⅱ1類 緩やかに外反して伸びる口縁から、やや内湾ぎみに第2口縁を立ち上げる。第2口縁 外面に凹線文を施す。頸部には、ヘラ状工具でキザミを入れる。
- Ⅱ2類 緩やかに外反して伸びる口縁から、やや内湾ぎみに第2口縁を立ち上げる。第2口縁 外面に多条凹線文を施す。頸部には、ヘラ状工具でキザミを入れる。
- 直口壺A 体部から円筒状の口縁を立ち上げる壺。
 - I類 口縁端部に1条のスリナデを施すもの。
 - Ⅱ類 口縁外面に多条の凹線文をめぐらすもの
- 長頸壺A やや外傾して上方に伸びる口縁部の先端を短く折り曲げ受口状につくり出す。
 - I類 体部から頸部に櫛描文を施すもの。
- 細頸壺A 体部から逆ハの字状にひらく口縁部をつくり、先端を短く内傾させるもの。
 - I1類 漏斗状に伸びる口縁の端部外面を横位にスリナデするもの。
 - I2類 漏斗状に伸びる口縁の端部外面を斜位にスリナデするもの。
 - Ⅱ1類 逆ハの字状にひらく口縁の端部外面を横位にスリナデするもの。
 - Ⅱ2類 逆ハの字状にひらく口縁の端部外面を斜位にスリナデするもの。
 - Ⅲ1類 逆ハの字状にひらく口縁の端部を短く内傾させ、外面を斜位にスリナデするもの。
- 細頸壺B 算盤玉状の体部から漏斗状に伸びる口縁を持つもの。
 - I1類 漏斗状に伸びる口縁の端部を緩やかに内傾させるもの。外面を櫛状工具で加飾する。
- 短頸壺A 下膨れの体部から短く外傾して伸びる口縁を持つもの。
 - I1類 器壁全体を粗ハケした後、口縁端部外面に横ナデを施したもの。
- 太頸壺A 太頸で短く外反する口縁を持つもの。
 - I1類 太頸で短く外反する口縁を持つもの。
- 台付無頸壺A 体部から口縁にかけて内湾してすぼまるもの。腹部に2孔1対の穿孔がある。
 - I1類 短く広がる脚台を持つもの。
- 台付無頸壺B 体部から口縁にかけて内湾してすぼまるもの。口縁部に2孔1対の穿孔がある。
 - I1類 体部外面を多条の凹線文で加飾するもの。

<甕形土器>

- 甕A類 口縁がくの字状を呈するもの。
 - I類 口縁部をやや外反ぎみに立ち上げる大型の甕。
 - Ⅱ類 口縁部をくの字状に屈曲させるもの。
- 独 B類 口縁が波状、山形をなすものや口縁端部をやや立ち上げるもの、2段に成形するものなどがある。(近江型独)
 - Ⅱ2類 口縁を外方に伸ばし、端部を押圧ぎみに横位に粗ハケを施し短く立ち上げる。

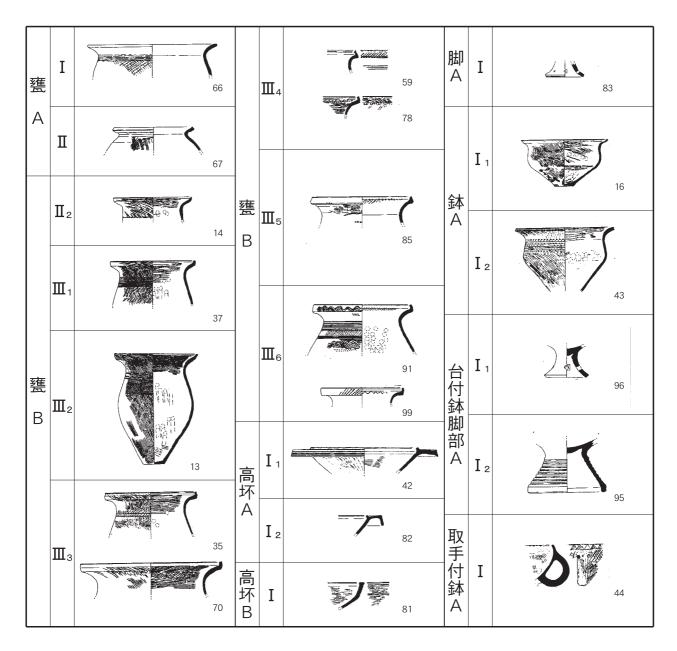


図76 出土土器分類図2

- Ⅲ1類 第2口縁を短く立ち上げ、外面を粗いハケ状工具で水平からゆるい斜位にスリナデしているもの。
- Ⅲ2類 第2口縁外面を粗いハケ状工具で斜位にスリナデしているもの。
- Ⅲ3類 第2口縁をほぼ垂直もしくはやや内傾して立ち上げ、外面を粗いハケ状工具で斜位に スリナデした後、端部上半をつまみ、ナデ消しするもの。
- Ⅲ4類 第2口縁をほぼ垂直もしくはやや内傾して立ち上げ、外面を粗いハケ状工具で斜位に スリナデした後、端部上半をつまみ、ナデ消しし、外面や内面に列点文や波状文を施す。
- Ⅲ5類 第2口縁をほぼ垂直もしくは内傾して立ち上げ、外面のハケ状工具によるスリナデを ナデ消しし、外面下半に列点文や波状文、キザミ等を施す。
- Ⅲ6類 第2口縁をほぼ垂直もしくは内傾して立ち上げ、外面のハケ状工具によるスリナデを ナデ消しし、外面に幅広く列点文や波状文、キザミ等を施す。

高坏A 椀部から水平に口縁を引き出すもの。

I1類 水平に伸びる口縁の端部を押圧し、面をつくり凹線文を施すもの。

Ⅱ2類 水平に伸びる口縁の端部に垂下する口縁を付す。

高坏B 浅い椀状の体部から屈曲して立ち上がる口縁をもつもの。

I類 口縁端部外面に凹線文を施す。

脚A ハの字状に開脚するもの。

I類 短くハの字状に開き、穿孔をもつもの。

鉢A 体部から緩やかに外反する口縁をもつもの。

I類 口縁外面を横位にナデつけし、やや内湾ぎみに立ち上げるもの。

Ⅱ類 緩やかに外反する口縁の端部をキザミ等で加飾するもの。

台付鉢脚部A ハの字状に開脚するもの。

I類 短く開脚するもので穿孔をもつもの。

Ⅱ類 ハの字状に開脚するもので、外面に多条の凹線文をめぐらすもの

取手付き鉢A 小型で内湾する体部に、縦位の取っ手を付すもの。

I類 小型でコップ型を呈し、体部外面をヘラ描などで加飾するもの。

以上、形態や製作手法、施文の有無などから分類を行った。このなかで在地系器種にあたるものには、広口壺A、受口壺A、受口壺B、細頸壺A、甕AI、甕B、鉢Aなどがある。また凹線文を施す器種には、有段口縁壺A、直口壺A、高坏A、B、台付鉢脚部Aなどがある。

2) 環濠堆積層の土器型式期と編年的位置

ここでは、(1)で形式ごとに細分類された諸型式が、どのような組合せで出土しているか、検 出された環濠6条についてみていくこととする。なお、壺や高坏等は遺構ごとで出土状況にばらつ きがあり系統立てた検討が困難であるため、最も数量的に多く、各層序から安定して出土している 甕を基軸にして検討をおこなった。

(1) SD-1

SD-1(ベルト18・20)から出土した土器の点数は壷が83点、甕が156点、高坏が1点、鉢が5点。甕のなかで型式を判定出来たものは116点を数える。環濠最下層部分にあたる20~24層(基本層序でいう環濠開削~埋積期)は、今回の調査地から出土した土器のなかでも、最も古い型式にあたると

表 9	SD-	1 (ベ	ルト	18・19) 出	±±	- 器	一覧	表						※ 翌	EΒ.	こつし	いて	は出	土点	数記	載。	()番	号/	土	器番	号。		
出土區		近江型		の出土点数		翌								E地系								凹線				喜	坏		
出土層 序区分	甕Β	L		甕 B	_	甕	<u> </u>	厶	口壺	Α	受	口壺	ĒΑ		受口	壶B		組	頸壺	Α		有段	口縁	壺		10.		その他	埋没時期の推定
77 (27)	総数	$\Pi 1 \Pi 2$	Ш1 Ш2	Ш3 Ш4 Ш5 1	II 6	I	П	I 1	I 2	II 1	I 1	I 2	Ι3	I 1	I 2	Ι3	II 1	I	II	III	I 1	I 2	$\Pi 1$	III 1	Ш2	Α	В		
1~5層	53			2 42																		1 (4)							IV期後葉 (IV-5~6期)
6~8層	17		2	10 1 2																		1 (24)						2 鉢 2(43) 取手付台付鉢 (44)	IV期中葉~後葉 (IV-3~5期)
9~11層	27		19	6 1					1 (18)					1 (21)					2 (27) (26)		1 (23)	1 (22)					1 (42)		IV期前葉~中葉 (IV-2~4期)
12~16層	16		3 13				(1 (17)					1 (20)					1 (29)									1 (42)		IV期前葉 (IV-1~2期)
17~19層	2		2								1 (1)	1 (2)																1 短頭壺 I (7)	IV期前葉 (IV-1期)
20~24層	1	1							1 (3)									1 (8)										3 短頸壺 (9) 直口壺A(10) 鉢 (16)	Ⅲ~Ⅳ期

考えられるもので14 (甕BII 2)や3 (広口壺AI2)、8 (細頸壺AI1)、9 (短頸壺AI)、10 (直口壺AI)、16 (鉢AI1)が出土している。14は、近江型甕の一種である。

近江型甕については、佐原 真氏の先行研究 (注1) 以降多数の文献 (注2) がある。山崎秀二氏は近江型甕の典型を佐原氏が言う甕 B に求め、そのなかで、近江型甕と受口状口縁甕(口縁を 2 段に成形するもの)に分類をおこない、受口状口縁甕の出現をIV様式にはじまり、漸進的に増加することを指摘している。 (注3) そして、IV様式にある受口状口縁甕を、 I 類:口縁部外面に斜めハケのみに調整するもの。 II 類:口縁部外面のほぼ上半を指ナデし、下半のみにハケを残すもの。 II 類:明確な稜をもち、口縁外面に刺突列点を多用するもの。 の 3 類に分け、 $I \to II \to III$ 類へと変化することを指摘した。その後、大橋氏は、服部遺跡の中期後半から後期初頭の土器を検討し、近江型甕を B 1・B 2・B 3 に分け、さらに細別を行い、その編年的位置づけを行っている。 (注4)

環濠最下部から出土した甕14については、山崎氏が指摘する受口状口縁甕に先行する型式のもので、大橋氏が分類するB2- Π に相当するものと考えられる。山崎氏の指摘では、この型式は Π 様式にはじまり、一部がIV様式古段階に残るものとされている。同層序からの甕の出土は上記 1 例だけでそれ以外の器種については、10 (直口壺A I)がある。この壺の口縁端部には、凹線文とは言えないまでも、横位に強くスリナデを施しているものが認められる。これらのことから、環濠SD-1の最下層(開削~埋積期)は、 Π 様式からIV様式への過渡的な時期にあたるものとの理解に留めたい。これまでに同様式期の遺物包含層は下之郷遺跡のなかで極端に少なく、集落誕生時期の年代を検討するうえで貴重な資料といえる。

環濠の下層部分17~19層および12~16層は、再掘削と埋没が繰り返される時期で、甕にはB \blacksquare 1 やB \blacksquare 2がある。これらは、先の山崎氏や大橋氏の編年におけるIV期前葉にあたる。また共伴資料には在地系器種は出土しているものの、口頸部などに明瞭な凹線文を施すものもこの地点では見えない。環濠中層の9~11層は、人為的な埋土で構成されており、出土した甕の7割強がB \blacksquare 2で、B \blacksquare 3やB \blacksquare 4が2割程度含まれている。また甕以外には、有段口縁壺 I 類や水平口縁を持つ高坏A I 1が出土しており、埋戻された年代はIV期前葉~中葉に比定される。その上層の再掘削~埋積期の6~8層で出土した甕は、B \blacksquare 3とB \blacksquare 4が7割を超え、B \blacksquare 5もしくはB \blacksquare 6が1割程を占める。共伴土器には、凹線文と貼付凸帯文が施された有段口縁壺やコップ状取手付台鉢などがある。IV期中葉~後葉にかけて漸次埋もれていき、層相が極端に異なる1~5層にかけてはB \blacksquare 5やB \blacksquare 6が大半を占めることから、IV期後葉に埋もれたものと判断される。

以上、環濠 SD-1から出土した土器の型式組列を確認し、属性変化を追った。近江型甕については、今回型式設定した甕BⅢ2とBⅢ1~BⅢ6にかけての流れが、堆積層序の下層から上層への塁重状況と整合することが確認できた。これは、かつて山崎氏が提案した受口状口縁甕の型式序列を追認するかたちともなった。

(2) SD-2

SD-2(ベルト17)から出土した土器の点数は壷が13点、甕が59点、鉢が2点。そのなかで甕の型式を判定出来たものは全部で37点であった。最下層部分にあたる $9 \sim 11$ 層(環濠掘削~埋積期)は、遺物の出土量が少ないが甕BIII 2が出土しており、IV期前葉に比定しておく。環濠の下層部分 $8 \sim 9$ 層(環濠掘削~埋積期)は、甕BIII 3、BIII 4や広口壺AII 1 (45)などが出土しており、IV期中葉に位置づけられる。環濠中層の $6 \cdot 7$ 層は、人為的に土砂が埋戻されている土層である。この土層からは、甕BIII 4、BIII 5が多数確認されておりIV期中葉から後葉に埋もれ、その後、環濠は再掘削されるが、最終的に埋もれてしまうのは、IV期後葉になるものと推定される。

表10	SD-	2 (べ)	レト1	17) 出土土器·	一覧	長					*	甕Β	こつ	いて	は出	土点	数記	載。	()番	号は:	上器看	昏号。		
出土層	甕B	近江型甕)の出土点数 甕B	養 療 /	+	立口 南	- Α	平	口泰A	在地	系壶 受口	市B		組	- 頭赤	Δ			文系 口縁		- 16	⑤坏	その他	埋没時期の推定
序区分		П 1 П 2 П	_	ШЗШ4Ш5 Ш6	11	I I 1	I 2	_		I 2 I	3 I	1 I 2		II 1		II	Ш	I 1	I 2	1	III 1 III	2 A	В	CONIE	
1~3層	8			6																				1 太頭壺(46) I	Ⅳ期後葉
4~5層	11			1 1 5				2 (47) (49)																2 太頸壺(48) I " (50) I	Ⅳ期中葉~後葉 (IV-3~5期)
6・7層	11			10								1 (52)								1 (53)				1 台付無頭壹B I (54)	Ⅳ期中葉~後葉 (Ⅳ-3~5期)
8・9層	5			2 1 2				1 (45)																1 広口壺C(51) I-1	Ⅳ期中葉 (IV-3~4期)
9~11層	2		1																						Ⅳ期前葉 (IV-1~2期)

(3) SD-3

SD-3 (ベルト11)から出土した土器の点数は壷が6点、甕が27点、高坏が3点、鉢が1点確認された。そのなかで甕の型式を判定出来たものは全部で9点を数える。

SD-3の掘削から埋没までの時間幅については、最下層部分にあたる $18\sim20$ 層(環濠掘削~埋積期)は、遺物の出土量が少ないため今後、検証していくことが必要だと思われるが甕BIII 2、 BIII 3 が出土しておりIV期前葉から中葉に比定しておく。環濠の下層部分 $8\sim17$ 層(環濠掘削~埋積期)は、甕BIII 3、 BIII 4が出土し、IV期中葉に比定される。環濠中層の $5\sim7$ 層は、人為的に土砂が埋戻されている土層である。この土層からは出土点数がなく時期を明確にすることができない。そして、環濠が最終的に埋没していく $1\sim4$ 層は、甕BIII 5・6が出土しておりIV期後葉と現時点では判断している。

表11	SD-	- 3	3 (1	ヾル	<i>,</i>	11) 出	土	土装	器-	- 覧	表							※ ₹	題B(こつ	ハて	は出	土点	数記	載。	()番	:号(ま土	器番	·号。		
出土層			近江型	甕(二点数	效		34								王地列									文系			凛	坏		
出土層 序区分	甕Ε	3 L				甕				_	甕	$\overline{}$	IZ	立口壺	_		디로	_	_		ĒΒ	_	<u> </u>	田頸壺	<u> </u>		有 段	口縁	_		_		その他	埋没時期の推定
" = "	総数	X]	I 1 II	2 Ⅲ	1 111 2	2 111	3 Ⅲ	4 III :	5 II	16	I	II	I 1	I 2	П1	I 1	I 2	Ι3	I 1	I 2	I 3	II 1	I	П	Ш	I 1	I 2	II 1	III 1	1112	Α	В		
		T					Ţ		Ļ		П																							Ⅳ期後葉
1~4層	3	⊢		╀		+	2			\dashv						l							l								l			
	1	+	\neg	╁	т	+	\top	Т	Т	\dashv	Н	-				\vdash			\vdash			\vdash	_			_			\vdash		\vdash			Ⅳ期中葉~後葉
5~7厘	0	E		t																			l											(IV-3~6期)
		_[\Box	_	L	_			\Box	Ш					_				_									_					
8~17厘	3	⊢		╀		12	+	+		\dashv						l					1		l								l			Ⅳ期中葉
0~1//2	1 3	╌		╁		+				\dashv						l					(68)		l								l			(Ⅳ-3~4期)
	†	╅		✝	1	1	Т	T	Т	\neg	Н																	-						Ⅳ期前葉~中葉
18~20層	3						1									l							l					(69)			l			(Ⅳ-2~4期)
		_		上												Ц_												(30)			$oxed{oxed}$			

(4) SD-4

SD-4 (ベルト5)から出土した土器の点数は相対的に少ないが、最下層部分にあたる14~16層(環濠掘削~埋積期)は、甕BⅢ2、甕BⅢ3と有段口縁壺Ⅱ1が出土しておりIV期中葉に比定される。埋没してしまう時期は、甕BⅢ5が出土していることからIV期後葉と判断しておく。その中間にあたる人為的埋戻し層(9~5層)の埋積時期を示す資料は、ベルト5からの出土がない。このためSD-4 (ベルト16)から出土した土器を参照して検討すると、(6~7層)からは甕BⅢ4もしくはBⅢ5にあたるものと71(広口壺AⅡ1)が出土し、その下位にある8~9層からは甕BⅢ4、BⅢ5と有段口縁壺Ⅱ1や凹線文を坏部外面に施す高坏(A)や垂下口縁をもつ高坏(B)が出土している。このことからSD-4

表12	SD-	4 (^	・ルト	5)	出土	土土器	- 5	覧表							※ 發	EΒ≬	こつり	いて	は出	土点	数記	載。	()番	号/	は土	器番	号。		
出土層		近江型	甕(甕E		土点	数		甕							E地系								凹線				喜	坏		
出土層 序区分	甕B			甕Β			3	ĒΑ.	Π	た口壺	ĒΑ	受	口壺	A		受口	·壶B		希	田頸壺	A		有段	口縁	壷		10	9-1	その他	埋没時期の推定
万区刀	総数	$\Pi 1 \Pi 2$	III 1 III	2 III 3	Ш4 Ш	I5 Ⅲ6	i	П	I 1	I 2	II 1	I 1	I 2	Ι3	I 1	I 2	I 3	II 1	I	II	III	I 1	I 2	II 1	III 1	III 2	Α	В		
1~4層	1				1																									IV期後葉 (IV-5期)
5・6層	0																													+
7~13層	0																													+
14~16層	6			2	2 2	!	I																							IV期中葉 (IV-3~4期)

の中間層で観ることができる人為的な埋戻しの層は、IV期後葉にまで下る可能性がある。 SD-4については、調査対象地の南地区(TF地区)ベルト①で同様の断ち割り調査を実施してい

表	13	SD-	4 (^	、ルト	16) 出土	土器-	一賢	表							※ 望	EBV	こつし	って	は出	土点	数記	載。	(土土	器番	号。		
ж	土層		近江型)の出土点		甕							E地系									文系			ė	坏			
	区公	甕Β			甕 B	翌	ĒΑ	ſŹ	立口壺	ĒΑ	受	ㅁ랿	ĒΑ		受口	_		糸	頭壺	Α		有段	_					その他	埋没時期の推定	
/ 3-	E /1	総数	$\Pi 1 \Pi 2$	Ш1 Ш2	Ш3Ш4Ш	I5 Ⅲ6	Ι	II	I 1	I 2	II 1	I 1	I 2	Ι3	I 1	I 2	Ι3	$\Pi 1$	I	II	III	I 1	I 2	II 1	${\rm I\hspace{1em}I} 1$	III2	Α	В		
1.	~ 5 層	2				1																								Ⅳ期後葉
1.	- 5層	2			1																									
6	- 7層	-									1																			Ⅳ期後葉
0	・ / 唐	'			1						(71)																			(Ⅳ-4~5期)
	_	12			3 2	2															2			1			1	1		Ⅳ期中葉~後葉
8	・9層	12			1 2	5															(74) (75)			(72)			(81)	(82)		(Ⅳ-4~5期)
							╟																							
111	~14層	0																												
								_																		_				

る。この地点からは、しがらみ状遺構が検出され、その杭材(96w)についてC14年代測定を実施している。その成果を勘案して環濠の埋没年代を推定することとなるため、同ベルトについて出土傾向を以下に示しておく。

ベルト①から出土した土器の点数は壷が14点、甕が20点。そのなかで甕の型式を判定出来たものは15点を数える。19~23層からは、甕B \blacksquare 3もしくは4が出土しており、 \blacksquare 8期中葉に相当すると考えられる。その上層にあたる1~18層までについては、甕B \blacksquare 4~B \blacksquare 5にあたるものが出土しており \blacksquare 9月中葉から後葉にかけて埋没していくものと判断している。

表14	SD-	4 (ベノ	レト	1)	出	۱±.	土器-	一覧	表							※됖	EΒ (こつし	いて	は出	土点	数記	載。	()番	号に	土土	器番	号。		
出土屋		近江	型甕	(甕E			点数	t		甕				_			E地系									文系			30	坏		
出土層 序区分	甕Β	L			甕E				翌	ĒΑ	J.	立口壺	_	受	口壺	_			壶B		ř	田頸壺	įΑ			口縁					その他	埋没時期の推定
""	総数	II 1 I	I 2 II	[1] III	2 III:	3 III 4	Ш5	Ⅲ6	Ι	II	I 1	I 2	II 1	I 1	I 2	Ι3	I 1	I 2	I 3	$\Pi 1$	I	II	III	I 1	I 2	II 1	III 1	Ш2	Α	В		
1~7層	4		\pm			1		1																								Ⅳ期後葉
-	_	\vdash	+	_	+	_	2		⊩	-						_												-			1	Ⅳ期中葉~後葉
8~11層	4	Ľ	+		F	4																									直頸壺(102)	(IV-3~6期)
12~18層	4					2		2																							2 広口壺B(101) 広口壺C(100)	IV期中葉~後葉 (IV-3~6期)
19~23層	3					3																										IV期中葉 (IV-3~4期)

(5) SD-5

SD-5 (ベルト2)からは遺物の出土量が少なく、土器がごくわずかに出土している。環濠掘削~埋積期にあたる $6\cdot7$ 層からは、甕BIII3、甕BIII4が出土しており、IV期中葉に比定される。

表15	SD-	5 (/						一覧	表									こつし	ハて	は出	土点	数記	載。				土土	器番	号。		
山土屋		近江型	甕(甕			点数			在式							E地系								凹線				i	坏		
出土層 序区分	・										立口壺	Α	受	口壶	Α		受口	Ι壶B		糸	晒頭壶	Α		有段	口緑	壺		0	121.	その他	埋没時期の推定
厅区刀	総数	П 1 П	2 III 1 II	112 III	3 Ⅲ4	Ш5	Ш6	Ι	II	I 1	I 2	П1	I 1	I 2	Ι3	I 1	I 2	I 3	II 1	I	П	Ш	I 1	I 2	П1	III 1	III 2	Α	В		
1~5層	0																														
6・7層	2				2																										IV期中葉 (IV-3~4期)
8~11層	0																														

(6) SD-6

SD-6(ベルト15)から出土した土器の点数は壷が8点、甕が9点、鉢が2点。そのなかで甕の型式を判定出来たものは8点を数える。SD-6の掘削から埋没までの時間幅については、最下層部分にあたる5・6層から埋没してしまう $1\sim2$ 層までの時間幅が短いことが想定され、いずれの層からも甕B \blacksquare 5が出土している。また共伴する遺物には受口壺A、細頸壺A \blacksquare 、凹線文(B種)を器壁外面に施す台付鉢脚部(A I 2)などが出土しており、その時期は \blacksquare V期後葉に下るものと判断される。

表16	SD-	- \	ルト				-覧	表									こつし	ハて	は出	土点	数記	載。	(土土	器番	号。		
山上屋		近江型	甕(甕B)の出:	上点数		翌							在	地系	壶							凹線	文系	壶		÷	坏		
出土層 序区分	甕Β			甕Β			甕	Α	広	一壶	ĒΑ	受	口壶	4		受口	壶B		糸	頭壺	Α		有段	口縁	壺		[D]	Ι Ρ Ι'	その他	埋没時期の推定
アムカ	総数	П1П2	Ш1 Ш2	ШЗШ	4 III 5	Ш6	I	II	I 1	I 2	П1	I 1	I 2	I 3	I 1	I 2	Ι3	II 1	I	П	Ш	I 1	I 2	П1	III 1	III 2	Α	В		
1・2層	,	\Box			2			Т																						Ⅳ期後葉
1 - 2/6																														
0 4 🖾	_				4			T										1			1								2 台付鉢(95)(96)	Ⅳ期後葉
3 · 4層	4							- 1										(88)			(89)								⊞ 14 34 (95) (96)	(Ⅳ-5期)
- CB	_				2			T																						Ⅳ期後葉
5・6層	4							- 1																						(Ⅳ-5期)

第2節 出土土器からみた環濠の埋没時期について

1) 環濠の開削から埋没にかけての時期

出土した土器の形態分類と編年的位置づけを検討し、6条の環濠の埋没過程について時期別に整理していく作業を試みた。調査箇所の中には、資料点数が少なく今後の調査で補強、検証をしていかねばならないと考えられるが、現時点での予察として環濠埋没の時期を下記のように整理した。今回検出された6条の環濠のなかで、最も古い時期に開削され埋没し始めたのは、SD-1でその時期は畿内第Ⅲ様式(新段階)からIV様式への過渡的な時期にあたるものと理解している。その後、SD-1が埋積と再掘削を繰り返していくなかで外側にSD-2とSD-3が新たに掘られ、IV期前半に埋積が進んでいく。そして、その後については2つのストーリーが現時点での土器の観察からは提案できる。一つはSD-4とSD-5が開削され、その後一気にSD-1~SD-5までの環濠が人為的に埋め戻される。もう一つは、SD-1~SD-3までの環濠が再掘削整備されていくなかでIV期中葉に埋め戻される。その後にSD-4とSD-5が掘削され、間もないうちに再度埋もれてしまう。その後は、IV期後葉にSD-1~SD-4は規模が小さくなるが再掘削され、合わせてSD-6が開削される。そして最終的には、全ての環濠がIV期後葉に埋没してしまっている。

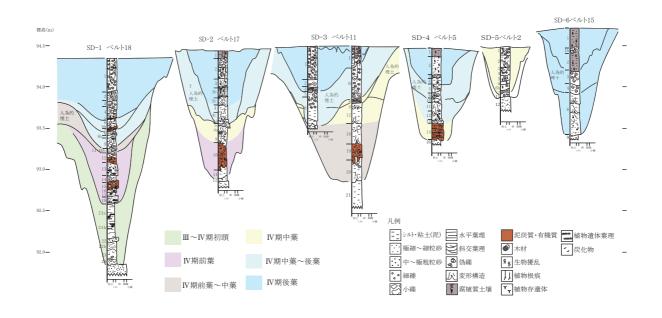
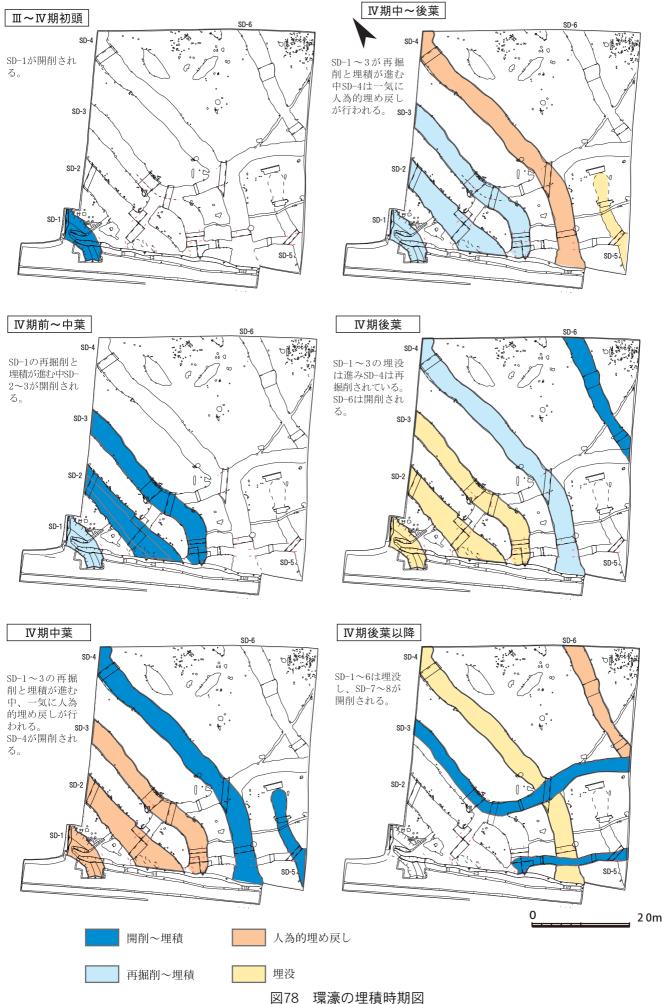


図77 出土土器から見た環濠埋没の時期



2) 環濠の暦年代資料について

今回の調査で検出した環濠は6条(SD-1~6)ある。それらから出土した土器を分析した結果、出土土器の年代幅は近畿第Ⅲ~Ⅳ様式に納まるものであった。最も古い時期に位置づけられるものには、SD-1の最下層部(開削期から埋積期)から出土するものである。また最も新しい時期に位置づけられるものにはSD-6の上層部(再掘削期から埋没期)から出土するものである。

環濠集落の誕生から衰亡までの時間幅について、かつて『確認調査報告書 I 』(注5) で140年間と推定したことがある。その時点での年代推定をおこなう材料になったのは、第1環濠の下層から出土した「盾」の年輪年代測定結果と二ノ畦・横枕遺跡の井戸枠材の年輪年代測定結果(注6) を参考として考察したものである。前者の盾については最外年輪BC223年(推定伐採年代BC200年)という結果で、後者の井戸枠材の年輪年代測定結果で、最外年輪BC60年(伐採年代BC60年)という定点である。その定点間の時間幅約140年間が、環濠集落の存在した時間幅だと予察した。

今回の調査では、環濠の埋没年代を検討するため出土木材の年輪年代測定と炭素年代測定を実施した。年輪年代測定については、3点の計測可能な木材試料が確認できたが、いずれも辺材部分が失われており、遺跡の年代に直接関連する年代情報は得られなかった(『史跡整備に伴う報告書 I 』)。炭素年代測定による分析では環濠出土の木材試料4点が計測された。そのうち1点が、SD-1の開削期~埋積期にあたる22b層出土の木片で、前2世紀前半208-168calBCという年代が判定された。この年代値は、これまでに指摘されていた環濠集落誕生期の年代とも調和的で、これまでの成果を補強する結果となった。ただし、実年代と集落の動向を相互に関連づけていくには、出土遺物、堆積層順、年代測定分析をさらに重ね検証していく作業が必要である。

特に、誕生期集落の具体的な様相を分析するうえでは、近江湖南地域における第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけての土器資料が乏しい。今回の調査でも、環濠SD-1の最下部からⅢ様式に遡ると考えられる資料の出土があるが、出土量そのものが少ないことから、土器型式の詳細な分類や編年基準は今後の出土事例を待って検討していくべき課題でもある。

【参考文献】

- (注1) 佐原 真 1960「先史時代」(『彦根市史』上冊) 1968「琵琶湖地方」(小林行雄、杉原荘介編『弥生式土器集成』本編2)
- (注2) 福岡澄夫 1973「中期甕型土器の一類型」(『湖西線関係遺跡調査報告書』.滋賀県教育委員会) 伴野幸一 1988「総論.編年的位置」(『二ノ畦遺跡発掘調査報告書』守山市教育委員会) 2003「滋賀県野洲川流域遺跡群と受口状口縁甕の変遷」(『古墳出現期の土師器 と実年代』(財)大阪府文化財センター)
 - 伊庭 功 2004「近江南部の弥生時代中期から後期初頭の土器編年」(『弥生中期土器の併 行関係』埋蔵文化財研究会.)
- (注3) 山崎秀二 1986「受口状口縁甕の系統について」(『守山市文化財調査報告書第20冊』守山 市教育委員会)
- (注4) 大橋信弥 1986「出土土器の問題」(『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』滋賀県教育委員会・守山 市教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会)
- (注5) 守山市教育委員会編 1986『下之郷遺跡確認調査報告書 I 第28・29・31・32次調査の報告書』
- (注6) 光谷拓実 2000 『埋蔵文化財ニュース99 年輪年代法の最新情報 弥生時代~飛鳥時代 』 奈良国立文化財研究所

第V章 自然科学分析

第1節 ウリ科果実遺存体のDNA分析とメロン仲間の種子遺存体における形態の分析

田中 克典(弘前大学人文学部)

1. 始めに

滋賀県守山市下之郷に位置する下之郷遺跡の第61~62次調査において、北地区・環濠SD-1のベルト18第12~13層よりウリ科の果実と思われる遺存体が出土した(図79)。同地域周辺では縄文時代中期から古墳後期にかけてヒョウタンの果実が出土している。そこで、果実遺存体の種を同定すべく、形態ならびにDNA分析を実施した。また、同地区・環濠SD-3のベルト11の第19層よりウリ科作物の種子が出土した。そこで、種子の形態に基づいて作物を同定すると共に、ウリ科作物の利用について検討した。

2. 試料と方法

・果実遺存体の分析

SD-1のベルト18第12~13層より取り上げた弥生中期の果実(補正年代: 2120 ± 40 BP; BC350-310, BC210-40 [2σ])について、水で果実内外部に付着した泥を洗浄後、写真を撮影した。果実の一部を氷結後、内部表皮、中央部、外皮より薄い切片を作製し、顕微鏡下(Miniscope TM-1000, HITACHI)にて細胞の構造を観察した。また、細胞の構造を比べるために、下之郷遺跡25次調査の環濠下層(TB地区 SD-1 第7層)より出土したヒョウタンの試料も観察の対象に加えた。DNA分析には同一資料より切片(2.0g; $1cm\times1cm$)を2つ切り出した。DNAはそれぞれの切片からCTAB法により抽出し、カラムによる精製を行った。精製後、PreCR Repair Mix (NEB, USA)を用いてDNAを修復し、葉緑体ゲノム領域をPCR増幅した。増幅した葉緑体ゲノムの領域はLS_InDel1領域(TrnC-PsbM)及びLS_InDel2領域(TrnS-TrnG)とccSSR7領域(PsbC-TrnS)である(Erickson et al., 2005; Chung et al., 2003; 表1)。塩基配列は1回目のPCR増幅産物を鋳型に用いて行ったPCR反応増幅産物をダイレクト法により決定し、データベース (DDBJ)の配列及び現生メロン5品種(マクワウリ: '金俵',シロウリ: '高田白瓜',ネットメロン: 'Earl's Favourite',ネットメロン: 'Hales Best',フユメロン: 'ハネデュー')の配列と比較した。なお、PCR増幅にはコンタミネーションの確認のため、ネガティブ・コントロールとして脱イオン蒸留水(滅菌蒸留水)を用いた。

種子遺存体の形態分析





図79 ウリ科果実の出土位置

SD-3のベルト11において、19層より取り上げた土壌1kgを水洗し、ウリ科作物の種子遺存体を選別した。種子100粒は写真撮影後に、Image J (http://rsb.info.nih.gov/ij/) で種子遺存体の長さと幅を計測した。

3. 結果

果実遺存体の分析

出土した遺存体は果実の一部であり、大きさが縦幅42.0mm、横幅105.0mm、厚さ29.5mmであった (図80)。形は果皮が内部に凹んでおり、また扁平であった。洗浄したところ、果実遺存体は外部が茶色の果皮であるのに対して、内部には白色の内容物が認められた。果実の表面は滑らかであり、雌花の跡である花落ちがあった。茶色の部分の果皮は幅が3.0mm~5.0mmであり、花落ちに近づくにつれて厚くなっていた。一方、白い内容物は表面に凹凸があり、茶色い果皮と容易に分離できないほど密着していた。このため、ヒョウタンに特有の外果皮内側の筋を特定することはできなかった。また、遺存体内部に詰まっていた泥や白い内容物において、種子は検出されなかった。

顕微鏡 (100倍)にて果皮を観察したところ、細胞の構造は内部では丸く、外部では柵状であった (図81)。また、下之郷遺跡25次調査 (TB SD-1 第7層) で出土したヒョウタンの果実遺存体においても、細胞の構造は外部へ移行するに従って縦に長くなっていた。

2つの切片から抽出したDNAをPCR増幅したところ、LS_InDel1領域(*TrnC-PsbM*)、LS_InDel2 領域(*TrnS-TrnG*)及びccSSR7領域(*PsbC-TrnS*)の増幅産物では、それぞれ、ヒョウタンの期待サイズである97bp、125bp及び101bp付近にDNA断片が認められた(図82)。これらの断片について塩基配列を解析したところ、LS_InDel1領域において遺存体の配列は現生メロン5品種(以下、「メロン仲間」)と同一であった(図83)。LS_InDel2領域において、果実遺存体の塩基配列は現生メロンの配列と比べると挿入または欠失(Indel)が1箇所で認められた(図84)。また、遺存体の配列は、キュウリの配列と比べると、2箇所のIndel、1箇所の一塩基多型(SNP)、1箇所の単純反復配列(SSR)が認められた。一方、ccSSR7領域において、遺存体の配列はメロン仲間及びキュウリと同一であった(図85)。なお3つの領域において、遺存体の配列は、分類学上属レベルで異なるヒョウタン(現生、遺存体)、トウガン(現生)、スイカ(現生)の配列とは異なっていた。

・種子遺存体の分析

土壌1kgを洗浄したところ、メロン仲間の種子遺存体は320粒が認められた(図86, 図87)。任意に選んだ100粒について種子サイズを計測すると、種子遺存体は長さが $4.84\sim9.38$ mm (平均: 7.25 mm)、幅が $2.55\sim3.80$ mm (同: 3.24 mm)と幅広い変異を示した(表17, 表18, 図88)。種子長8.5 mmを境に種子遺存体を分けると、98個体が小粒系メロン(9.0 mm未満)で、残り2系統が大粒系メロン (9.0 mm以上)であった。

4. 考察

下之郷遺跡より出土したウリ科の果実遺存体は土壌中でも果皮の構造が保たれるほど果皮がやや堅く、果皮の色が茶色であった(図80)。しかしながら、遺存体は一部が凹んでおり、破壊を受けていた。また、白い内容物が内部に認められ、加工を示す穴は認められなかった。細胞の構造は下之郷遺跡の既存調査から出土したヒョウタンと似ていた(図81)。遺跡周辺では、縄文時代(栗津湖底遺跡)、弥生末(下長遺跡)、古墳時代(出町遺跡)から、ヒョウタンの果実が出土しており、弥生中期には既に琵琶湖東岸においてヒョウタンが利用されていたと考えられる。ヒョウタンであると仮

定すると、果実遺存体は加工を受けていない幼果実の頃に収穫され埋没したと考えられる。

果実遺存体はLS InDel1領域(TrnC-PsbM)とccSSR7領域の塩基配列が現生メロン5品種と同じ であった (図79, 図81)。また、LS_InDel2領域 (*TrnS-TrnG*)の塩基配列は、現生のキュウリとは4 箇所 (Indel: 2, SNP: 1, SSR: 1)が異なっていたが、現生メロンの配列とは1箇所 (Indel)を除いて、 一致していた(図80)。このことから、果実遺存体は遺伝的にメロン仲間であると考えられた。果実 遺存体を取り上げた付近(北地区, SD-3, ベルト11)においてメロン仲間の種子遺存体が出土してい ることから、弥生時代中期において同遺跡ではメロンが利用されていた可能性がある。

SD-3より出土した種子遺存体は100粒の内、98粒が小粒系メロンであった。しかしながら、種子 の長さは幅広い変異を示した。藤下 (2008)は、メロン仲間の種子遺存体を長さに基づいて、雑草 メロン型 (〈 6.10mm)、マクワウリ・シロウリ型 (6.10 - 8.09mm)、及びモモルディカ型 (8.10mm ₋) に分ける方法を提案している。この基準を用いて下之郷遺跡の種子遺存体を現生メロンに置き換え ると、78個体がマクワウリ・シロウリ型であった(表18, 図88)。種子遺存体が出土した層序は19 層と果実遺存体が出土した層序 $(12\sim13層)$ よりも下層であった。また、内側の環濠 (SD-1)におけ る6~19層で、マクワウリ・シロウリ型と雑草メロン型の種子遺存体が認められており、連続した 期間にメロン仲間が利用されていた可能性がある。本遺跡でメロン仲間の種子遺存体はマクワウリ・ シロウリ型だけでなく、雑草メロン型とモモルディカ型も認められた(図87,図88,表18)。岡山県 の鹿田遺跡では弥生時代の井戸から雑草メロン型の種子が出土しており、祭事に利用していた説が 考えられている (藤下, 1983)。同遺跡におけるメロン仲間の利用方法について検討の余地はあるも のの、弥生時代中期には多様なメロン仲間やウリ科作物を利用する文化的素養が備わっていたと考 えられる。

Erickson DL, Smith BD, Clarke AC, Sandweiss DH, Tuross N 2005 An Asian origin for a 10,000-year-old domesticated plant in the Americas. Proceedings of the National Academy of Sciences, USA 102: 18315-18320.

Chung SM, Decker-Walters DS, Staub JE. 2003 Genetic relationships within the Cucurbi taceae as assessed by consensus chloroplast simple sequence repeats (ccSSR) marker and sequence analyses. Canadian Journal of Botany 81: 1-19.

藤下典之 1983 鹿田遺跡から出土したメロン仲間Cucumis melo L.の種子、特に雑草メロン型の 小粒種子について. 鹿田遺跡Ⅰ, 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 3: 443-452.

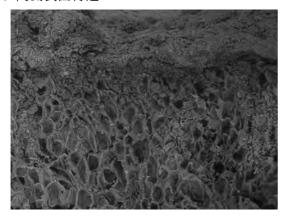
藤下典之 2007 メロン (II) メロン仲間の系譜, 日本への渡来. 日本食品保存科学会誌 34 (2)

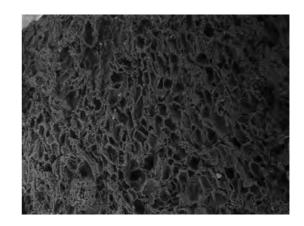




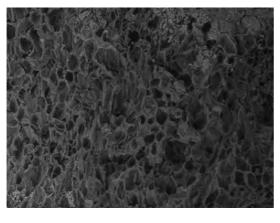
図80 ベルト18から出土した果実遺存体の外面と内面

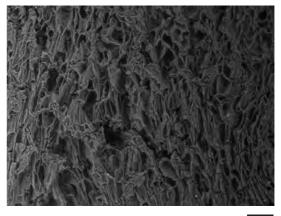
a) 内側表面付近





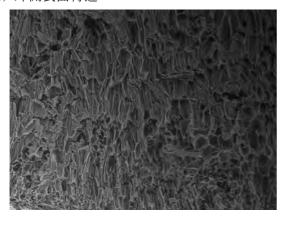
b) 中央部付近





5.0mm

c) 外側表面付近



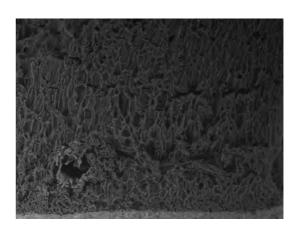


図81 下之郷遺跡より出土したウリの果実遺存体(左)と周辺の遺跡から出土したヒョウタンの果皮遺存体(右)における細胞の構造

- 1) 写真は顕微鏡下にて100倍で撮影した。
- 2) ヒョウタンは下之郷遺跡25次調査 (TB地区SD-1第7層) の果皮遺存体。

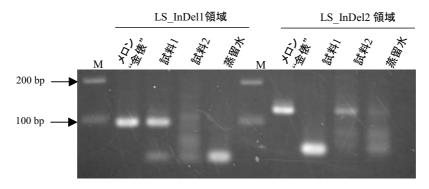


図82 LS_InDel1 領域とLS_InDel2 領域を増幅した PCR 産物の電気泳動M: 100bp DNA ladder (New England Biolabs, USA)

ヒョウタン遺存体・アジア型	TCCAATGAATCTGAAATGAAATAATCGAAAGGCCACTAATCTTTTTTTAGCAGTCGA
ヒョウタン遺存体・アフリカ型	
現生ヒョウタン・アジア型	
現生ヒョウタン・アフリカ型	
スイカ・コロシントウリ	$\cdots\cdots\cdots \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\$
トウガン	$\cdots\cdots\cdots \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\$
キュウリ	$\cdot G \cdot \cdot \cdot \cdot C \cdot $
現生メロン(5系統)	·AG······T·····T····
果実遺存体	$\cdot AG \cdot \cdots \cdot T \cdot T$

図83 LS_InDel1領域における塩基配列の構造

ヒョウタン遺存体・アフリカ型	AACTTTTTTGATTAGCAATTCAAATCAAATCCATTTAGATA-AATTAGATAAAAGGC
ヒョウタン遺存体・アジア型	
現生ヒョウタン・アフリカ型	
現生ヒョウタン・アジア型	
スイカ・コロシントウリ	$\cdots - \cdots \top \cdots \top \cdots \top \cdots \top \cdots \top \cdots \cdots \cdots \cdots \cdots \cdots \cdots \cdots $
トウガン	$\cdots - \cdots \cdots T \cdot - \cdots \cdot T \cdot - \cdots \cdot GTAAG \cdot \cdots$
キュウリ	$\cdots -\!$
現生メロン(5系統)	$\cdots \hbox{-} \hbox{T} \cdots \cdots \hbox{T} \hbox{C} \cdots \hbox{C} \hbox{C} \hbox{T} \cdots \hbox{A} \hbox{G} \hbox{A} \hbox{T} \hbox{-} \hbox{A} \cdot \hbox{A} \cdots \cdots \hbox{T} \hbox{T} \hbox{C} \cdots \cdots \hbox{G} \hbox{G} \hbox{-} \hbox{-} \cdots \hbox{G} \hbox{G}$
果実遺存体	···CT·····T····G····C·T··AGAT-A·A·····TTC······GG

図84 LS_InDel 2 領域における塩基配列の構造

¹⁾配列はプライマー領域を除いたPCR増幅領域を示す。"・"と" - "は、それぞれヒョウタン遺物と相同な配列、及びスペースを示す。

²⁾ヒョウタン遺存体・アジア型: DQ300474 (アメリカ), DQ300477 (ペルー); ヒョウタン遺存体・アフリカ型: DQ300470 (メキシコ); 現生ヒョウタン・アジア型: DQ300469 (タイ), DQ300468 (フィリピン), DQ300465 (インドネシア), DQ300464 (インド), DQ300462 (中国); 現生ヒョウタン・アフリカ型: DQ300457 (ウガンダ), DQ300457 (スーダン), DQ300451 (南アフリカ); スイカ: DQ282077; コロシントウリ: >AY693769; トウガン: DQ282075; キュウリ: DQ865976

現生ヒョウタン トウガン スイカ・コロシントウリ キュウリ メロン (5系統) 果実遺存体

図85 ccSSR7領域における塩基配列の構造

¹⁾配列はプライマー領域を除いたPCR増幅領域を示す。"・"と" - "は、それぞれヒョウタン遺物と相同な配列、及びスペースを示す。

²現生ヒョウタン: AY396179; トウガン: AY396184; スイカ: AY396178; コロシントウリ: AY396177; ペポカボチャ: AY396185; キュウリ: DQ865976



図86 下之郷遺跡・北地区におけるSD-3ベルト11より収集したメロンの種子遺存体

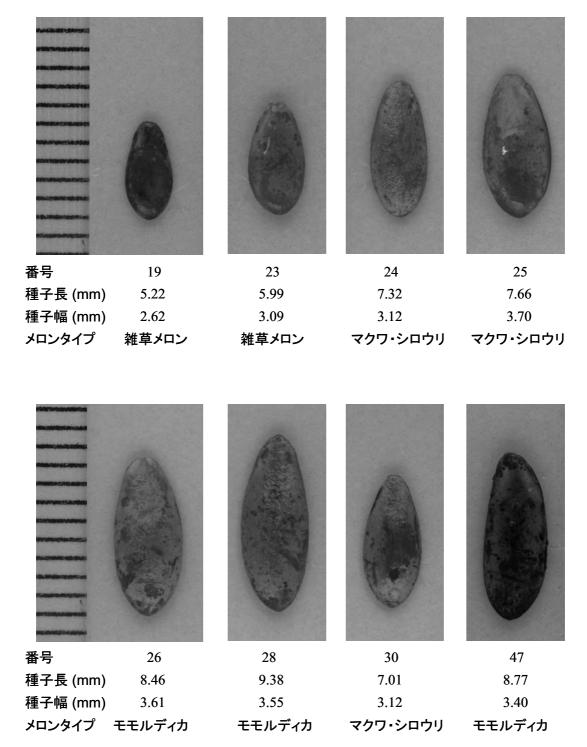


図87 本報で供試した代表的なメロン仲間の種子遺存体とメロンタイプ

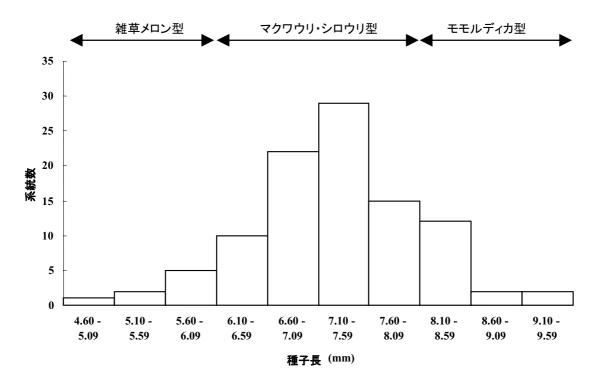


図88 メロン仲間の種子遺存体における種子長の頻度分布構成とメロンタイプ

表17 下之郷遺跡・北地区(第61・62次)におけるメロン種子遺存体のサイズと種子タイプ

番号	長さ	幅	種子 ¹⁾	メロン ²⁾	番号	長さ	幅	種子 ¹⁾	メロン ²⁾	番号	長さ	幅	種子 ¹⁾	メロン ²⁾	番号	長さ	幅	種子 ¹⁾	メロン ²⁾
	(mm)	(mm)	タイプ	タイプ		(mm)	(mm)	タイプ	タイプ		(mm)	(mm)	タイプ	タイプ		(mm)	(mm)	タイプ	タイプ
1	7.78	3.70	小粒系	С	26	8.46	3.61	小粒系	М	51	7.13	3.24	小粒系	С	76	6.63	3.31	小粒系	С
2	8.32	3.42	小粒系	С	27	8.06	3.71	小粒系	С	52	6.91	3.21	小粒系	С	77	6.58	3.40	小粒系	С
3	7.33	3.60	小粒系	С	28	9.38	3.55	大粒系	M	53	7.35	3.46	小粒系	С	78	7.72	2.94	小粒系	С
4	6.83	3.04	小粒系	С	29	7.47	3.40	小粒系	С	54	7.29	3.21	小粒系	С	79	8.19	3.59	小粒系	М
5	6.27	2.95	小粒系	С	30	7.01	3.12	小粒系	С	55	7.07	3.18	小粒系	С	80	6.92	3.15	小粒系	С
6	7.90	3.69	小粒系	С	31	8.10	3.49	小粒系	M	56	7.69	3.43	小粒系	С	81	6.98	3.46	小粒系	С
7	8.17	3.50	小粒系	M	32	8.33	3.74	小粒系	M	57	7.61	3.25	小粒系	С	82	6.79	3.15	小粒系	С
8	6.74	3.22	小粒系	С	33	4.84	2.55	小粒系	Α	58	6.54	2.87	小粒系	С	83	7.28	3.27	小粒系	С
9	6.57	3.09	小粒系	С	34	6.92	3.06	小粒系	С	59	7.01	3.30	小粒系	С	84	9.14	3.34	大粒系	С
10	7.90	3.64	小粒系	С	35	7.44	3.55	小粒系	С	60	7.35	3.56	小粒系	С	85	6.39	3.12	小粒系	С
11	8.47	3.64	小粒系	M	36	7.00	3.37	小粒系	С	61	8.26	3.24	小粒系	М	86	6.68	3.15	小粒系	С
12	7.65	3.24	小粒系	С	37	8.15	3.21	小粒系	M	62	8.44	3.74	小粒系	М	87	7.96	3.33	小粒系	С
13	7.41	3.12	小粒系	С	38	6.79	2.84	小粒系	С	63	7.51	3.43	小粒系	С	88	6.58	2.96	小粒系	С
14	7.17	3.09	小粒系	С	39	7.24	3.16	小粒系	С	64	6.34	2.90	小粒系	С	89	8.26	3.43	小粒系	M
15	7.23	3.43	小粒系	С	40	7.22	2.78	小粒系	С	65	8.12	3.27	小粒系	М	90	7.54	3.20	小粒系	С
16	7.04	3.21	小粒系	С	41	7.50	3.09	小粒系	С	66	6.31	2.90	小粒系	С	91	7.75	3.18	小粒系	С
17	6.33	2.65	小粒系	С	42	7.56	3.02	小粒系	С	67	7.12	2.88	小粒系	С	92	7.45	3.15	小粒系	С
18	6.39	3.06	小粒系	С	43	7.35	3.40	小粒系	С	68	5.90	2.84	小粒系	Α	93	7.10	3.03	小粒系	С
19	5.22	2.62	小粒系	Α	44	6.83	3.42	小粒系	С	69	7.26	3.22	小粒系	С	94	7.26	3.54	小粒系	С
20	5.95	3.07	小粒系	Α	45	7.84	3.02	小粒系	С	70	7.63	3.15	小粒系	С	95	6.61	3.00	小粒系	С
21	5.50	2.56	小粒系	Α	46	6.30	2.99	小粒系	С	71	8.77	3.52	小粒系	М	96	7.29	3.16	小粒系	С
22	6.05	3.31	小粒系	Α	47	8.77	3.40	小粒系	M	72	7.16	3.33	小粒系	С	97	6.96	3.28	小粒系	С
23	5.99	3.09	小粒系	Α	48	6.84	3.06	小粒系	С	73	6.95	3.46	小粒系	С	98	6.05	3.06	小粒系	Α
24	7.32	3.12	小粒系	С	49	7.29	3.80	小粒系	С	74	7.83	3.60	小粒系	С	99	6.62	3.06	小粒系	С
25	7.66	3.70	小粒系	С	50	7.86	3.57	小粒系	С	75	7.41	3.09	小粒系	С	100	7.07	3.18	小粒系	С

¹⁾種子タイプは9.00mm未満を小粒系、9.00mm以上を大粒系とした (藤下, 1992)。

表18 メロン種子遺存体の基礎統計量と種子タイプ

調査	平均	最大値	最小值	中央値	標準	変動係数	種子タイプ ¹⁾		メロンタイプ別頻度 (粒)				
項目	(mm)	(mm)	(mm)	(mm)	偏差	(%)	小粒系	大粒系	6.10mm<	6.10 - 8.09mm	n 8.10mm≤		
長さ	7.25	9.38	4.84	7.26	0.80	11.0	98	2	8	78	14		
幅	3.24	3.80	2.55	3.22	0.27	8.4			-	-	_		

¹⁾種子タイプは9.00mm未満を小粒系、9.00mm以上を大粒系とした(藤下, 1992)。

²⁾A: 6.10mm未満を雑草メロン型小粒種子、C: 6.10 - 8.09mmをマクワウリ・シロウリ型中粒種子、M: 8.10mm以上をモモルディカ型大粒種子 (藤下, 2008)。

第2節 環濠(SD-3・SD-6)の大型植物遺体分析

那須 浩郎 (総合研究大学院大学)

1. はじめに

本稿では、滋賀県守山市下之郷遺跡の第62次調査により発掘された環濠SD-3とSD-6(弥生時代中期)から得られた大型植物遺体(種実類)を報告する。前報告(那須 2011)では、環濠SD-1から得られた大型植物遺体により、下之郷遺跡での利用植物や栽培植物について報告し、あわせて、環濠SD-1が埋没する過程で周囲の植生がどのように変化したのかを復元した。本報告では、環濠SD-1よりも外側の2つの環濠SD-3とSD-6での分析結果を追加することによって、環濠の周囲の古環境変遷を空間的に復元する。

2. 試料と方法

今回分析を行ったのは、第62次調査のSD-3 堆積物(ベルト11)とSD-6 堆積物(ベルト15)である。SD-3(ベルト11)は、川畑・辻本(2011)により1層から21層に分層されており、これらは、開削期〜埋積期(20~9層)、人為的埋戻期(14~5層)、再掘削〜埋積期(4~1層)の大きく3時期の埋没時期に区分されている。このうち大型植物遺体の分析に用いたのは、開削期〜埋積期(20、19、18、12層)、人為的埋戻期(8、6下、6上、5層)、再掘削〜埋積期(4、1下、1上層)の合計11試料である。

SD-6 (ベルト15) も同様に、川畑・辻本 (2011) により1層から9層に分層されており、これらは、開削期〜埋積期 (6層)、人為的埋戻期 (5~3層)、再掘削〜埋積期 (2~1層)の大きく3時期の埋没時期に区分されている。このうち大型植物遺体の分析に用いたのは、開削期〜埋積期 (6層)、人為的埋戻期 (3層)、再掘削〜埋積期 (2、1層)の合計4試料である。

大型植物遺体分析は、各堆積物試料を100ccずつビーカーで計量して実施した。分析方法は、那須・百原(2010)に従って標準的な水洗選別法を用いた。2 mm、1 mm、0.5mm、0.25mmのフルイを重ね合わせて堆積物を水洗選別し、残渣をシャーレに分けて実体顕微鏡で検鏡した。種類の同定が可能な植物遺体をピンセットで拾い上げ、現生の種子標本や図鑑、論文などを参照して種類の同定を行った。出土した植物遺体は、総合研究大学院大学に保存してある。

3. 結果および考察

大型植物遺体は、SD-3とSD-6の合計15試料(1500cc)の堆積物試料から、24種465点が出土した(表19)。SD-3では24種464点が出土したのに対し、SD-6では1種1点しか出土しなかった。前回報告のSD-1では51種7431点が出土しているので(那須 2011)、外側の環濠につれて植物遺体の保存状態が悪くなる傾向が見られた。特にSD-6は、スゲ属痩果が1点のみしか出土しておらず、有機物の保存状態が著しく悪い。このSD-6は、SD-1~SD-4とは異なる時期に形成された環濠である可能性が指摘されており、位置も少し高く、機能も異なっていたと考えられている(川畑・辻本 2011)。おそらく、空掘りのような環濠だった可能性がある。環濠SD-3も有機物の保存状態が悪く、開削期~埋積期の堆積物以外ではほとんど植物遺体の出土がみられなかった。この環濠SD-3の開削期~埋積期は、時期的にSD-1の再掘削~埋積期に相当するため、以下にSD-3の出土植物種を、SD-1と比較しながら考察する。

林縁要素では、高木~低木のヤマグワ、サンショウ属、タラノキ、ニワトコ、キイチゴ属、つる性木本のマタタビ属、ブドウ属、草本のウド、カラムシ属/イラクサ属、キケマン属の10種237点が出土した。林縁要素の構成種は、いずれも開けた明るい環境に生育する種類であり、林冠木となりうるような種類は見られなかった。前回報告した環濠SD-1でも、この時期にはケヤキ、トチノキなどの林冠木が減少し、中低木の陽樹が多くなっており、この時期のSD-1からSD-3までの環濠周辺は、明るく開けた環境だったことが伺える。

畑地・路傍・荒地要素では、栽培植物のマクワウリ、草本のノミノフスマ近似種、ハコベ属、イヌタデ近似種、キジムシロ属、カタバミ、ナス属、イヌコウジュ属、メナモミ属の9種104点が出土した。栽培植物のマクワウリは、前回報告のSD-1でも、この時期からマクワウリが出土し始める。ただし、SD-1では14点の出土だったのに対し、SD-3では53点と多く出土した。このことから、環濠外側のSD-3付近でマクワウリの利用が多かった可能性がある。草本の構成種は、SD-1とほぼ共通するが種類は少ない。これは、SD-3環濠の有機物の保存状態の問題か、あるいはSD-3付近がより開けた路傍環境だった可能性を示しているのかもしれない。

水田・湿地要素では、栽培植物のイネ、草本のボントクタデ、タネツケバナ属、スゲ属の4種124点が出土した。イネは、ほとんどが炭化しており、炭化小穂軸が81点、炭化頴果が14点出土した。前回報告のSD-1でも、この時期から大量の籾殻が出土し始める。ただし、SD-1では未炭化の小穂軸が多く、出土量も6000点近くで多かったのに対し、SD-3では炭化した小穂軸が多く、出土量は81点と少なかった。この出土形態と出土量の差は、環濠SD-1とSD-3における有機物の保存状態の差が関係していると考えられるが、場所によるイネの処理過程の違いも関係しているのかも知れない。もし後者も関係しているならば、環濠の内側(SD-1付近)にイネの脱穀等が行われるような場所があり、環濠の外側(SD-3付近)で加熱・燃焼等の処理が行われていた可能性がある。草本の構成種は3種のみで、SD-1と比べて著しく少ない。これは、この環濠が水を湛えている深さが浅く、水を湛えた状態で機能している期間が短かったため、湿地性の植物がもともと少なかったか、保存が極端に悪かった可能性を示している。

以上の結果から、SD-1 (那須 2011) での結果も踏まえて下之郷遺跡の環濠周辺の環境変化と 植物利用の変化をまとめる。まず、環濠周辺にケヤキやトチノキなどの高木が比較的多く生育して いる時期があり、木材分析と花粉分析の結果も参照すると(能城ほか 2011、佐々木尚 2011)、 周囲にはアカガシ亜属も比較的多かった可能性が高い。未発表のデータではあるが、第25・27次発 掘調査では、アカガシ亜属の堅果類も報告されている (佐々木由 未発表)。このような比較的高 木が多い時期に、環濠SD-1が開削された。その後、次のSD-1の再掘削期には、SD-3が開削され、 この時期には周囲の高木の伐採も開始された。木本類は、ニワトコ、ヤマグワ、カラスザンショウ 等の中低木の陽樹が主体の開けた明るい環境になった。この時期から、イネとマクワウリの栽培植 物の利用が始まった。水田や畑の位置は確認できていないが、SD-1周辺でイネの脱穀が行われ、S D-3周辺の少し高く乾燥した土地でマクワウリの利用が行われていたと考えられる。その後の人為 的埋戻期には、SD-1からSD-4までの環濠が埋め戻されており、洪水等のイベントが契機になった 可能性が指摘されている(川畑・辻本 2011)。その後の再掘削期では、特にSD-1でイネの籾殻 が再び増加し、イネの脱穀等がSD-1の周辺で再開されたと考えられる。ただし、周囲の環境は、 湿地性の植物が少なく、より乾燥した土地に変化していた可能性が高い。これはSD-3付近でも、 同様もしくはより乾燥していた土壌に変化していた可能性が高い。一番外側に位置する環濠SD-6 はこの時期に開削されており(川畑・辻本 2011)、空掘りだった可能性がある。

引用文献

- 川畑和弘・辻本裕也 2011 「環濠堆積物の層序」『下之郷遺跡の史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』: 21-41. 守山市教育委員会
- 那須浩郎 2011 「環濠 (SD-1) の大型植物遺体分析」『下之郷遺跡の史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』: 97-112. 守山市教育委員会
- 那須浩郎・百原 新 2010 「大型植物化石 (種実化石)」 日本第四紀学会50周年電子出版編集 委員会編 『デジタルブック最新第四紀学』: CD-ROMおよび概説集30p. 日本第四紀学会
- 能城修一・佐々木由香・村上由美子 2011 「出土した木製品類と自然木の樹種」『下之郷遺跡の 史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』:77-96. 守山市教育委員会
- 佐々木尚子 2011 「環濠 (SD-1・SD-3) 堆積物の花粉分析」 『下之郷遺跡の史跡整備に伴う 発掘調査報告書 I 自然科学分析編』:59-64. 守山市教育委員会

表19 下之郷遺跡第62次調査SD3・SD6環濠から出土した大型植物遺体一覧表

和名	学名	出土部位		SD-3 試料番号											SD-6 試料番号				
			_		~埋積			人為的埋	1戻期				埋積期			再掘削~埋積期	<u>人為的埋戻期</u>	開削期~埋積期	
縁要素				1上	1下	4	5	6上	6下	8	12	18	19	20	合計	1 2	3		6 合
陈女系 高木~低木																			
ヤマグワ	Morus australis	痩果											1	2	3				
サンショウ属	Zanthoxylum sp.	種子破片										15			15				
タラノキ	Aralia elata	種子							2			4	19	2	27				
ニワトコ	Sambucus racemosa subsp. sieboldiai											1	3	2	6				
キイチゴ属	Rubus sp.	核											4	13	17				
つる性		1# -											_						
マタタビ属	Actinidia sp.	種子				2		2	1	1		55 5	3	1	65				
ブドウ属	Vitis sp.	種子										5			5				
草本 ウド	Aralia cordata	種子												3	3				
カラムシ属/イラクサ属	Boehmeria/Urtica sp.	痩果										3	83	5 5	91				
キケマン属	Corydalis sp.	種子										4	1	J	5				
1712/20	Coryuans sp.		林緑要素合計			2		2	3	1		87	114	28	237				
			· 秦廷教合計			ī		ī	2	i		7	7	7	10				
也・路傍・荒地要素		11700-2				•		•	-	•		•	•	•					
栽培植物																			
マクワウリ	Cucumis melo var. makuwa	種子						1	1			50		1	53				
草本																			
ノミノフスマ近似種	Stellaria cf uliginosa	種子										9			9				
ハコベ属	Stellaria sp.	種子												1	1				
イヌタデ近似種	Persicaria cf. longiseta	痩果												4	4				
キジムシロ属	Potentilla sp.	核												1	1				
カタバミ	Oxalis corniculata	種子										1		•	1				
ナス属	Solanum sp. A	種子										24		2	26				
イヌコウジュ属	Mosla sp.	分果 痩果												3	3				
メナモミ属	Sigesbeckia sp.	^{授未} 畑地・路傍・荒	- 特本事本科					1	1			84		3 15	3 101				
		畑地·路傍·荒地要						1	1			4		7	9				
3·湿地要素 栽培植物		MINE TO TO THE SE	マポ1生以口 日					•	•			7		,	9				
イネ	Oryza sativa	炭化小穂軸		1	1	1	8	14	15	29	7	4	1		81				
1.1.	5/y2a 5aava	炭化頴果		•	i	•	Ü	• • •	4	4	2	3			14				
草本		7141																	
ボントクタデ	Persicaria pubescens	痩果										4		1	5				
タネツケバナ属	Cardamine sp.	種子											8	13	21				
スゲ属	Carex sp.	痩果 .											2	1	3			1	1
			退地要素合計	1	2	1	8	14	19	33	9	11	11	15	124			1	1
		水田・湿地要	長素種数合計	1	2	1	1	1	2	2	2	3	3	3	4			1	1
通要素																			
草本 イネ科	Poaceae sp.	炭化痩果					1		1						2				
1 111	Foaceae sp.		【				1		1						2				
			医素種数合計				i		i						ī				
 				1	2	3	9	17	24	34	9	182	125	58	464	-		1	1
数合計				1	2	2	2	3	6	3	2	14	10	17				1	1
の他 										_									
不明	Unknown			1	3	3	10	9		7	20				53	1	7	2	10

第VI章 総 括

平成18~20年に下之郷遺跡の東側約8,000㎡を対象にして史跡整備に伴う発掘調査を実施した。対象とした地域は、石田川を挟んで北地区と南地区に分かれている。北地区では集落の縁の部分に掘られた環濠が6条と、それが埋積した後に掘り込む状態で東-西に伸びる溝が4条、方形周溝墓などが検出された。そして南地区からは環濠2条と分岐する溝、直交する溝などが検出されている。これまでの発掘成果では、集落の東側には6条目の環濠よりさらに外側に、3条の濠が掘られていたことが判明している(注1)。全てが集落を全周するものではないが、東側においては9条の濠が掘られていることになり、最も内側から外側までの環濠帯の直線距離は約120mにおよぶものとなる。規模や形状、水環境、埋積時期、遺物の包蔵量や出土状況などは、それぞれの濠によって違いが認められる。今回検出された6条の環濠については次節で述べるが、環濠が埋もれた後に再度掘られるSD-7やSD-8等の環濠に交わる溝については、詳細な時期や用途は明確にすることが出来ていない。

北地区で検出された環濠SD-4とSD-6の間に掘られていたSD-5は途中で途切れ、その空閑地には 方形周溝墓 (SX-1) が造墓されている。検出された方形周溝墓は、4辺のコーナー部分が浅くなり 途切れる形状をしており、これまでに下之郷遺跡の周辺で検出されているものに類似する形状である (注2)。IV期後葉にあたるもので、環濠集落が存続している時期に外縁部で造墓された可能性がある。隣地周辺の調査が行われてないため、墓群を形成するのか、単独のものなのかは判然としない。

1) 環濠が開削された地域の土地条件と水環境

今回の調査地では、基盤層(地山)が氾濫堆積物によって構成されていることが明らかとなり、その堆積状況から、基盤層の完成から環濠が開削されるまでの時間幅は、長期間ではないことが指摘された(注3)。すなわち、環濠の開削された場所は、安定した古い微高地上に位置するものではなく、氾濫原が発達する一連の動きのなかで、不安定な土地条件のもとにあったことが推察される。このことは、環濠そのものの機能にも関係することであるが、周辺の自然植生の変遷を明らかにしていくうえでも重要なことである。今後、周辺の地形環境分析を進めるなかで明らかにしていく必要がある。

今回の調査では、SD-1とSD-2で初めて珪藻分析を実施した(注4)。これまで、環濠は堆積土砂によって水があったと推測されていたが、珪藻分析でも裏付けられた。SD-1の開削期は、水深1.5m以上の常水で、水の動きがない状態が推定されている。

次に、これまでに調査してきた環濠の底レベルを示し(図89)、水流について検討した。遺跡が立地する場所は、東高、西低に微妙に傾斜する地形であるが、A~E地点の環濠底レベルは、最も東に位置するC地点のレベルが西側のA地点やE地点よりも、むしろ低い。このことは、珪藻分析で明らかとなった常水、水流なしの結果と符合する。SD-1は、その後埋積と再掘削が繰り返されるなか、一面に植物が繁殖するような場所へと変化し、離水していったことがうかがえる。河川からの流れ込みは、SD-1、SD-2の珪藻分析からIV期中葉以降に認められ、滞水域状態の環濠へ外部から取水されていたと推定される。

一方、SD-4の底レベルは、高低差は認められないが、濠底の堆積物には砂質土が認められ、一時

的に水流があったことがうかがえる。この点では、しがらみ状遺構の機能とも関連することで、水勢制御や水深調整の役割を果たしていた可能性を示唆する。ただし、SD-4は、珪藻分析等は行っていないため、水流や水深についての状況把握は今後の課題である。

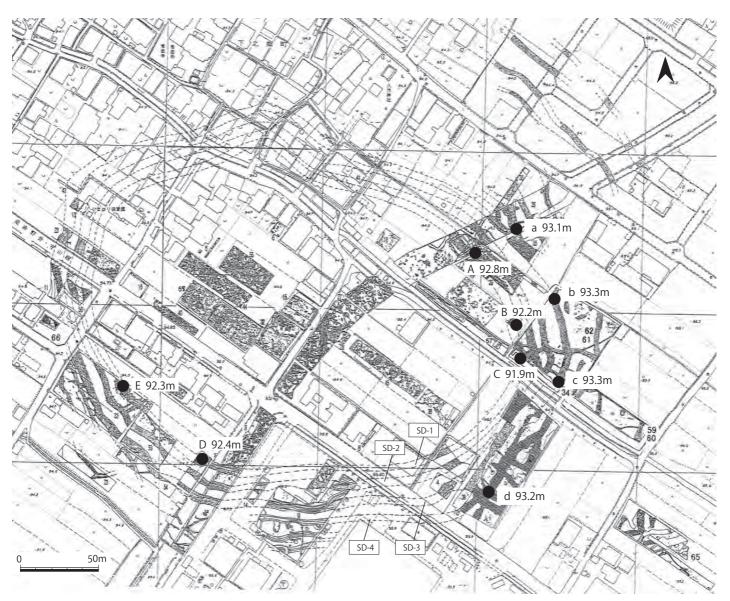


図89 環濠底の標高レベル一覧

2) 環濠埋積と地震痕跡について

環濠の開削は、一番内側に位置する環濠SD-1からおこなわれたことが出土土器の型式(Ⅲ~Ⅳ期初頭)から判断される。この時期は、これまでの下之郷遺跡の集落域の調査で出土した土器のなかでも最古段階のものであることから、集落形成の初期から環濠は存在していたものと考えられる。62次調査の北地区で検出された環濠SD-1は、既存調査で検出された環濠のなかでも大規模なもので、濠幅が約7m、深さは2.5mを測り、旧地表面の削平を考慮すると当時はさらに深かったと考えられる。環濠の埋積土の中には、環濠周辺から人為的に埋戻されたと考えられる大量の土砂が確認されている(注5)。今回の調査では、具体的な形で土塁の存在を示すことはできなかったが、この人為的な埋戻し土は、周辺遺跡の調査事例(注6)で確認された土塁の崩落土と堆積構造が類似してお

り、即断はできないものの、環濠の際に土塁が存在していた可能性を示唆するものである。複数個所で確認されている人為的な埋戻し土は、いずれも環濠内の水位が上昇した時期ないし氾濫堆積物が流入した後であることがうかがえ(注7)、洪水などを契機として埋戻しが行われた可能性がある。環濠が機能していた時期には、2回の地震が発生していたことが、環濠に埋積した土砂断面の変形構造から明らかとなった。そして、変形が認められる層序の上端直上と直下の出土遺物から、地震発生の時期をしぼりこむことができた。一回目の地震はIV期中葉(DZ-2)、二回目の地震はIV期後葉(DZ-1)に比定される(注8)。地震の規模や震度階級は不明だが、一回目の地震の後には各地点で土砂の埋積が確認されており、その土砂量は、環濠(SD-1、SD-4等)を埋没させてしまう程のもので、周辺の景観をも激変させたと推定される。その後、環濠は再度掘り直しされるが、再掘削された濠幅は狭く、深さは浅くなっている。また、一回目の地震の後(DZ-2)に、SD-5より外側で新たにSD-6が掘られており、集落の周りに大溝を掘る行為は継続している。

3) 周辺植生の推移について

環濠の埋没時期について第IV章第2節で記述した。その時期区分をもとに植生について明らかになった事項をまとめる。

環濠SD-1は、Ⅲ期からIV期初頭において水生生物(ヨシ属)が岸辺では見られるが、水底には生育していない環境が珪藻や植物珪酸体分析の結果からうかがえる。周辺植生は、林縁で生育する高木種で二レ属、ケヤキ属、エノキ属、ムクノキ属、ウルシ属、トチノキ、ムクロジ等と、中低木の陽樹としてタラノキ、ニワトコ、キイチゴ属などが認められ、草本類では畑地・路傍などに生えるイノコヅチ属、ハコベ、タデ、ヤブジラミ、ナス科、メナモミ属、アザミ属、ヨモギ属が認められている(注9)。

IV期前葉になると、SD-1は最下層部分には泥が1m程度溜まった状態となり、沼沢湿地環境から湿潤な陸域環境に推移していき、当初の清浄な水環境が汚濁していったことがうかがえる。これに呼応して植生はヨシ属が見られなくなり、ネザサ節が増加している。周辺にあった高木性の樹種は減少し、ヤマグワ、タラノキ、ウコギ科などの中低木の陽樹やマタタビ、ブドウ属などのつる性の木本、そしてカラムシ属、イラクサ属の林縁草本が増加している。この時期には栽培種のマクワウリ、イヌタデ近似種など畑地雑草が増加する傾向にあり、周辺での人間活動が活発化したことを反映したものと推定される。

IV期中葉は、SD-1の再掘削と埋積が進むなか、一時期に人為的な埋戻しが行われた時期である。 SD-2、SD-3、SD-4は、再掘削と埋積が進み、SD-5が新たに開削されていくこととなる。植生は木本花粉でウコギ科が減少し、クワ科、イラクサ科花粉が特徴的に多く出現する。大型植物遺体の分析では、人為的埋戻期において高木性の樹種が見られなくなり、タラノキ、ニワトコ、キイチゴ属の中低木とマタタビ、ブドウ属のつる性木本、カラムシ属、イラクサ属の草本が見られる程度となる。

IV期後葉は、SD-1~5の埋積が進むとともにSD-6が開削され埋積する時期である。周辺は乾燥が進み、陸域環境がさらに進んだことがうかがえる。大型植物遺体の分析では、高木性の樹種はなく、中低木のタラノキ、ニワトコとつる性のマタタビ、林縁草本のカラムシ属のみとなる。そして、栽培種のマクワウリが出土し、アカザ属、シソ属、エノコログサ属など畑地雑草が確認できている。

以上、出土した植物遺存体等の変化から、環濠をとりまく植生変化を概観すると、環濠が開削された当初期においては、環濠帯の周辺にはケヤキやエノキなどの高木が比較的多くあったが、水田や湿地に生育する草本は少なく、畑地や路傍、荒地に生育する草本が多かったようである。その後、IV期前葉になると、高木は減少し、中低木の陽樹が多くなり、環濠帯周辺が開けた明るい環境であったことがうかがえる。その後は、水田や湿地に生育する草本が増加するとともに、人為的埋戻し(IV期中葉)の後には、高木が見られなくなり、中低木やつる性木本、草本類が多く生育する状態がうかがえる。

4) 木材利用について

今回の調査で出土した木材のうち、自然木を除く木製品類(318点)の樹種はスギ,アカガシ亜属,ヒノキの順に多かった(注10)。第Ⅲ章において図示・報告した木製品(109点)の樹種をみても、点数が多いのはスギ(40点),アカガシ亜属(12点),ヒノキ(10点)である。しかし、アカガシ亜属とスギ・ヒノキでは自然木の様相が異なり、両者では木材の入手のしかたが異なっていたことが推測される。

アカガシ亜属は自然木では最も多く、加工木ではスギに次いで2番目に多い。そしてSD-4のしがらみ状遺構の構築材としてもスギ、アスナロの次によく使われていた。よってアカガシ亜属は周辺に多く生育し資源量が豊富であり、小径の自然木から農具にできるような直径50cm以上の大径材まで様々な太さの木材を得て、製品から土木材まで各種の用途に利用されたといえる。長さ1.6m以上の長大なみかん割材や樹皮のついた未成品もあることから、農具として使えるような直径50cm以上の大径材も比較的近傍で得ていたようである。そして泥除けや竪杵はイチイガシ以外のアカガシ亜属、鍬や鋤はイチイガシと、両者の間に使い分けがあった可能性がある。

スギ・ヒノキは大半が加工木であり、製品としてはスギが腰掛や栓、有頭棒、杭などに、ヒノキが背負板や有頭棒に用いられた。自然木はスギが1点あるのみでヒノキの自然木はない。両者とも調査地の周辺に成育していたとは考えにくい。製材時に生じたとみられる残材があることから、大型の材の状態で持ち込み、付近で製材を行って大量の割材を得たのち、各種の製品や土木材に用いた可能性が高い。すなわちスギは調査地のすぐ近傍には生えていなかったとみられるが、資源として最も利用されている樹種であり、杭や加工材に多量に使われている。

5) 環濠と水田域について

今回の環濠調査における花粉や植物珪酸体分析の成果では、環濠が開削された当初のⅢ期~IV期初頭においてはイネのプラント・オパールは検出されず、出土する大型植物遺体でもイネそのものは認められてはいない。また、イネ科の花粉の出現率も低いことから(注11)、環濠周辺に水田域が広がっている様子は想定されない。その後、IV期前葉になると、SD-1からは水田や湿地などに繁殖するタネツケバナやホタルイ、コナギなどの水田雑草が出土しはじめ、イネの籾殻が出土するようになる。しかし、植物珪酸体分析におけるイネ(機動細胞由来)の密度は600~1,400個と低い値であり、花粉分析においても水田やその近傍地で認められるイネ科花粉の塊は検出されていないことから、環濠SD-1の近傍に水田域が広がっている様子を想定することは難しいといえる。IV期中葉においては、大型植物遺体の分析で水田雑草の種類は若干増加するが、前時期と大きな変化はない。

ただし、この期の一時にイネの籾殻が大量に出土している。このことは、植物珪酸体の分析で、イネの葉や籾殻に由来する植物珪酸体が極めて多量に検出された内容とも符合しており、当時は何らかの形で環濠内に稲藁および稲籾 (籾殻) が投棄されていたと推定されるが、水田そのものが今回の調査地周辺に展開していたことは想定できない。

6) 生業と食生活について

環濠の堆積土砂から稲籾が多量に出土している。環濠SD-1から出土した稲籾は、頴果は比較的少なく、籾殻が格段に多いことが指摘できる。頴果については、破片や不稔のものが多いことから、イネの脱穀等の農作業が行われた後に環濠へ廃棄されたものと考えられる。またSD-1出土木製品には、竪杵2本があり、うち1本は先端に顕著な使用痕をとどめていて、出土した籾殻との関連が注目される。環濠の周辺で脱穀等の農作業が行われていたことは、植物珪酸体の検出状況からもうかがえ、特にIV期中葉以降においては環濠内へ稲藁や稲籾が大量に投棄されていたことが推定される。環濠から稲籾や稲籾に由来するプラント・オパールが大量に検出されたことについては、池上曽根遺跡や唐古・鍵遺跡の調査で同様な事例が認められている(注12)。集落をめぐる環濠が埋積される過程において、一部が廃棄物の投機場所になっていることは、今回の調査成果とも類似する点であり、環濠が機能を失う過程で、上記した2遺跡と共通した状況を認めることができる。

イネ以外には、ウリ科の植物が検出されている。TA地区環濠SD-1から出土したウリ科の果実遺存体は、果実の表面は滑らかであり、雌花の跡である花落ちが認められた。そして外部が茶色の果皮であるのに対して、内部には白色の内容物が認められた。この果実について、顕微鏡による細胞構造の検討ではヒョウタンに似ているものであったが、DNA分析を実施した結果、この果実はメロン仲間の果実と判定された(注13)。また、果実が出土したSD-1やそれ以外の環濠からもメロン仲間の種子遺存体が出土した。その種子の形状を計測した結果からマクワウリ・シロウリ型だけでなく、雑草メロン型とモモルディカ型も認められ、この時期には既に多様なウリ科作物を栽培していたことが判明した。

環濠SD-1から出土する動物遺存体については、出土点数のうち8割以上が環濠下層の開削~埋積期にかけての土砂の中から出土している。出土した動物遺存体のなかで哺乳類については、イノシシ、ニホンジカ、イヌの3種に集中しており、最も多く出土したイノシシについては、メスの成獣が多く、幼獣や若獣が少ないという結果が得られた。また、解体方法は、胴部を椎骨3~4個分単位で切り離して調理されていたことが復元された(注14)。これらの状況が、弥生時代の下之郷遺跡において普遍的な現象と言えるかどうかは、今後の調査でさらに検証していく必要がある。

貝類については、イシガイ科やシジミ科と推定されるものが出土している。これらは貝殻の炭酸カルシウムの部分が融けて殻皮のみで出土するため、細部を同定することが厳しい状況であるが、いずれも琵琶湖の湖辺域や河川に生息する淡水産の貝と判断される。

魚類については、環濠の既存調査においてフナの鰓ぶたや咽頭歯が多数出土している(注15)。今回は、環濠SD-1ベルト19地点の11層から20層にかけての埋積土を土嚢袋で試験的にサンプリングし(注16)、数地点の土嚢袋を各々1袋程度ずつ土壌洗浄と篩いにかけた結果、11層よりフナの破損歯等が少量検出された。

以上、今回の調査は史跡整備に伴う発掘調査として、検出した遺構のなかでも環濠に重点を置き、

小面積の発掘ではあるが、実施した自然科学分析の結果をもとにまとめた。

下之郷遺跡の立地環境は地下水位の高い地域であることから、地下に埋蔵された遺物の保存状態は極めて良好である。環濠の底から発見された「かご」は、出土時にはまだ黄味を帯びており、樹木の葉っぱや植物種子も原色に近い状態で検出されるものがあり、2000年以上も時間が経っているとは思えない状況のものがあった。これらは弥生時代中期の人々の生活や農耕、漁撈、狩猟、採集といった生業のあり方、自然環境、洪水災害などを復元するうえで好材料となる。また、堆積層序や出土遺物の型式に自然科学分析で得られる情報を精緻に組み込ませていくことで、過去に起こった出来事や人間活動、周辺環境の変化がさらに精緻に描かれることになる。そして、集落環境や生業復元とともに、内部空間の建物や構成の変化をつき合せていくことで、琵琶湖沿岸部に位置する拠点集落の個性や特性が明らかになっていくものと思われる。今後の史跡整備と活用では、それらを反映させて、さらに充実したものへとしていく必要がある。

- (注1) 守山市立埋蔵文化財センター 2008 「正福寺遺跡発掘調査と正福寺遺跡発掘調査(下之郷遺跡65次)確認調査」『乙貞』159号
- (注2) 守山市教育委員会 1992『吉身西遺跡発掘調査報告書』他
- (注3) 川畑和弘、辻本裕也 2011 「環濠堆積物の層序」『下之郷遺跡史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』守山市教育委員会
- (注4) 藤根 久 2011 「環濠堆積物中の珪藻化石群集」『下之郷遺跡史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』守山市教育委員会
- (注5) 人為的埋戻し土は、(SD-1) ベルト18の10、11層。(SD-2) ベルト17の7層。(SD-3) ベルト11の6、7層。(SD-4) ベルト5の5、6層。(SD-6) ベルト15の3、4層などを指摘 することが出来る。これらは大きさが不揃いで角~亜角状の偽礫(シルト~極細砂) を不 規則に配置していることから、人為的な営力により埋められたと判断されるもので、基盤 堆積物に酷似する土砂によって構成されている。(『報告書 I 』 p29に X線写真掲載)
- (注6)(財) 栗東市文化体育振興事業団・文化財センター 1991『栗東市埋蔵文化財調査報告書 1990年度 年報 』(財) 栗東市文化体育振興事業団・文化財センター 2001『栗東市埋蔵文化財調査報告書 2000年度 年報』
- (注7) 川畑和弘、辻本裕也 2011 「環濠堆積物の層序」『下之郷遺跡史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』守山市教育委員会
- (注8) 辻本裕也 2011「環濠充填堆積物で認められた変形構造」『下之郷遺跡史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』守山市教育委員会
- (注9) 那須浩郎 2011 「環濠 (SD-1) の大型植物遺体分析」『下之郷遺跡史跡整備に伴う発掘 調査報告書 I 自然科学分析編』守山市教育委員会
- (注10) 能城修一・佐々木由香・村上由美子 2011「出土した木製品類と自然木の樹種」『下之郷遺跡史跡整備に伴う発掘調査報告書 I 自然科学分析編』守山市教育委員会
- (注11) 杉山真二・パレオ・ラボ 2011「植物珪酸体分析」『下之郷遺跡史跡整備に伴う発掘調査

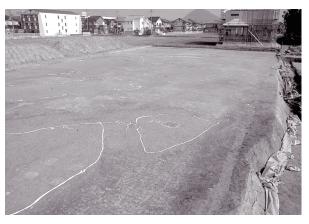
- 報告書 I 自然科学分析編』守山市教育委員会
- (注12) 外山秀一 2006 『遺跡の環境復原 微地形分析,花粉分析,プラント・オパール分析とその 応用 』古今書院
- (注13) 田中克典 2012「ウリ科果実遺存体のDNA分析とメロン仲間の種子遺存体における形態の分析」『本書』守山市教育委員会
- (注14) 山崎 健 2012「動物遺存体」『本書』守山市教育委員会
- (注15) 中島経夫 2003「淡海の魚からみた稲作文化」『弥生のなりわいと琵琶湖 近江の稲作漁 労民 – 』守山市教育委員会編
- (注16) 現地における土壌試料のサンプリングから洗浄、仕分け、鑑定については中島経夫(滋賀県立琵琶湖博物館)の指導協力を得て実施した。

図版

巡



TC・TD地区調査風景



TA・TD地区調査風景



TA地区調査風景



TA地区 SD-1 ベルト18



TA地区 SD-1 ベルト18



TA地区 SD-1 ベルト18



TA地区 SD-1 ベルト18



TA地区 SD-1 ベルト18 (竪杵出土状況)

図



TA地区 SD-1 ベルト18 (背負板関係部材出土状況)



TA地区 SD-1 ベルト18 (記号文土器出土状況)



TA地区 SX-2



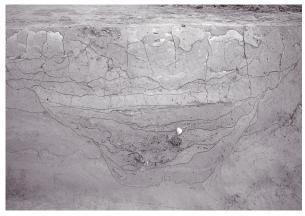
TA地区 SX-2



TA地区 SD-1 ベルト18 (動物遺存体出土状況)



TA地区 SD-1 ベルト18 (動物遺存体出土状況)



TA地区 SD-3 横断ベルト



TB地区調査状況



TC地区 SD-1 ベルト19調査地



TC地区 SD-1 ベルト19



TC地区 SD-1 ベルト19



TC地区 SD-1 ベルト19



TC地区 SD-1 ベルト19 (泥除け出土状況)



TC地区 SD-1 ベルト19 (堅杵出土状況)



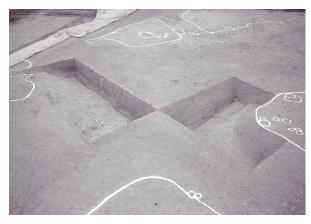
TC地区 SD-1 ベルト19 (腰掛出土状況)



TC地区 SD-1 ベルト19 (背負板出土状況)



TC地区 SD-2 ベルト17



TC地区 SD-2 ベルト12



TC地区 SD-3 ベルト11



TC地区 SD-3 ベルト13



TC地区 SD-4 ベルト16



TC地区 SD-4 ベルト6

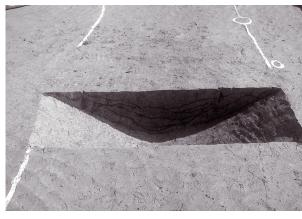


TC地区 SD-5 ベルト2

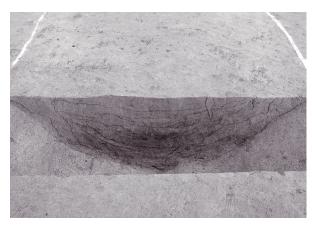


TC地区 SD-6 ベルト15

図



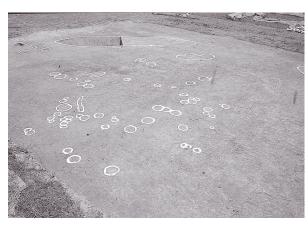
TC地区 SD-7 ベルト7



TC地区 SD-8 ベルト8



TD地区 SX-1



TD地区 SX-1



TD地区 SX-1



TD地区 SX-1



TE地区 調査全景



TF地区 調査全景

巡



TF地区 調査ベルト① 調査状況



TF地区 調査ベルト① しがらみ状遺構出土状況



TF地区 調査ベルト① しがらみ状遺構出土状況



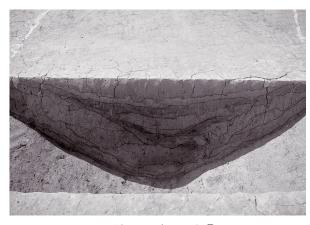
TF地区 調査ベルト① しがらみ状遺構出土状況



TF地区 調査ベルト① しがらみ状遺構出土状況



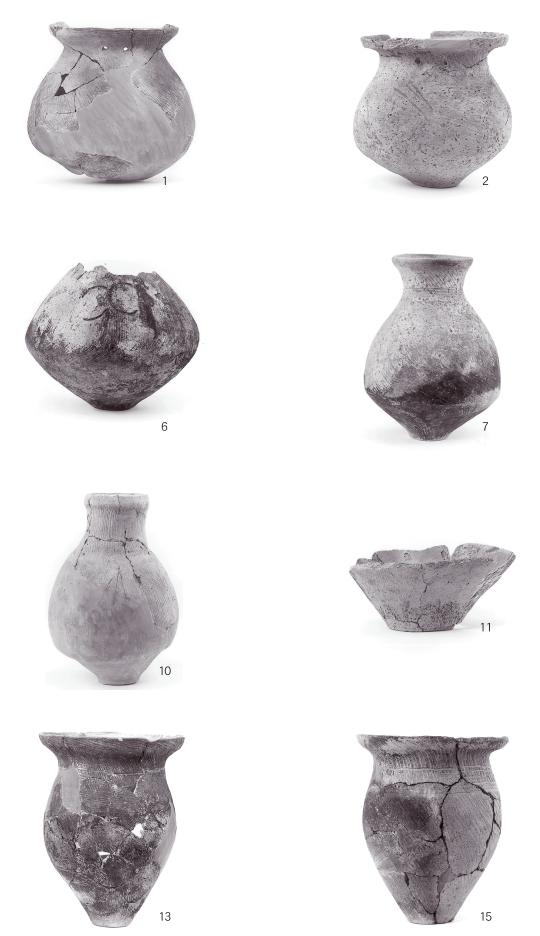
TF地区 調査ベルト②



TF地区 調査ベルト③



TF地区 調査ベルト④



SD-1出土土器





17











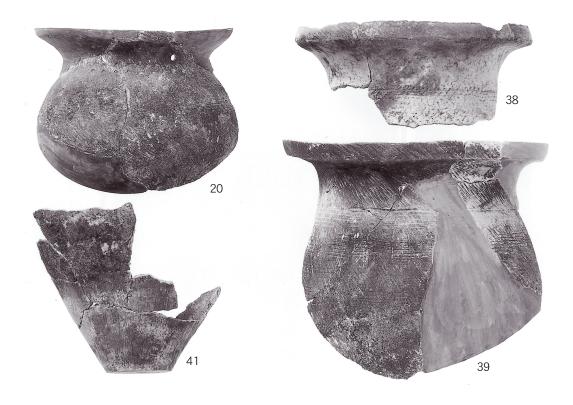


SD-1出土土器

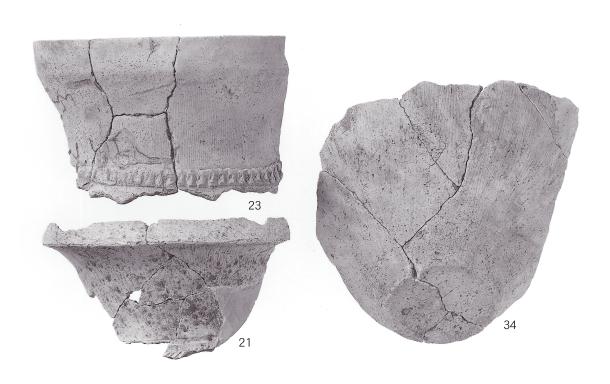


9 5

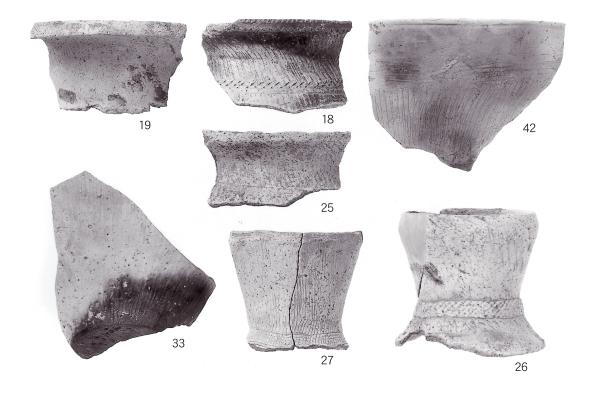
第62次調査 SD-1 出土土器



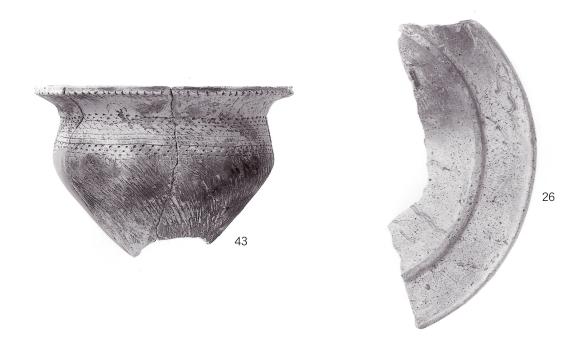
第62次調査 SD-1 出土土器



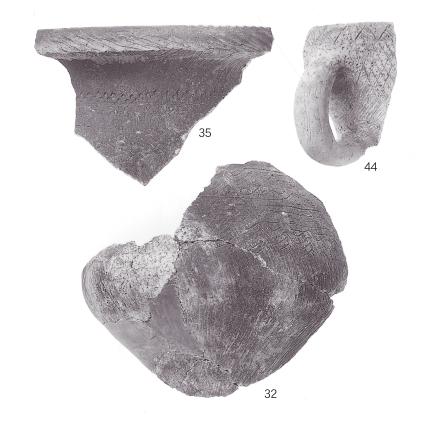
第62次調査 SD-1 出土土器



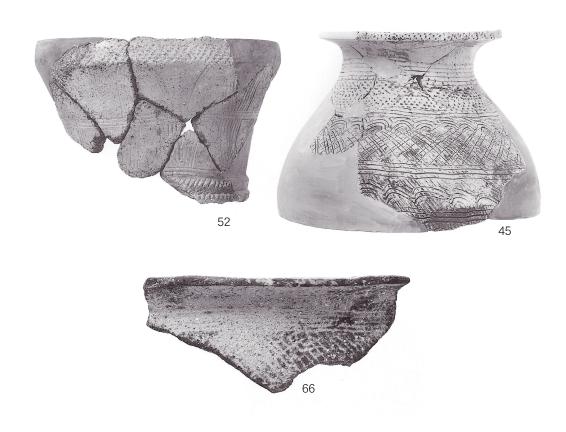
第62次調査 SD-1 出土土器



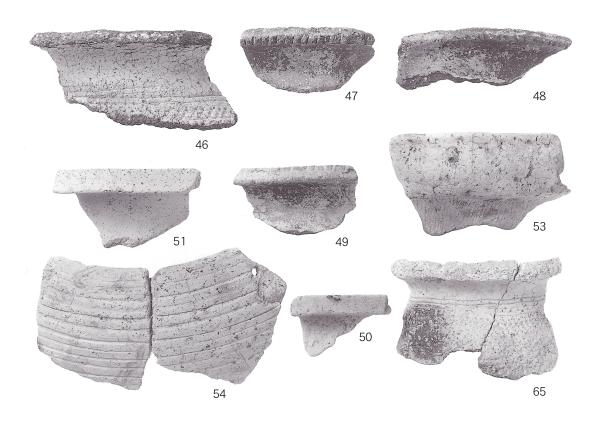
第62次調査 SD-1 出土土器



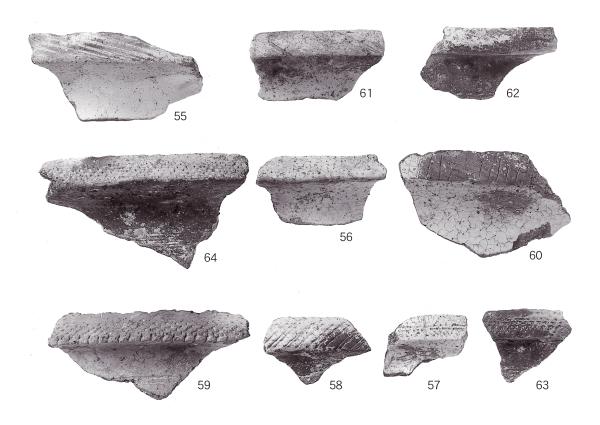
第62次調査 SD-1 出土土器



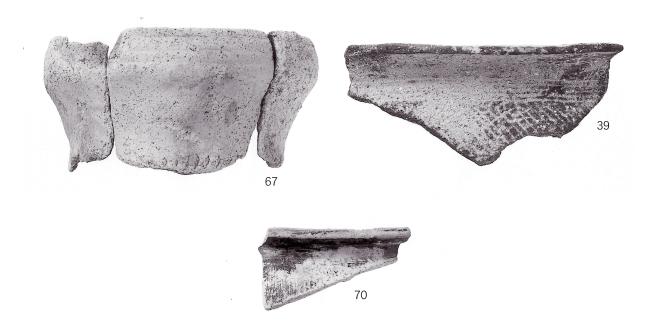
第61·62次調査 SD-2 出土土器



第62次調査 SD-2 出土土器



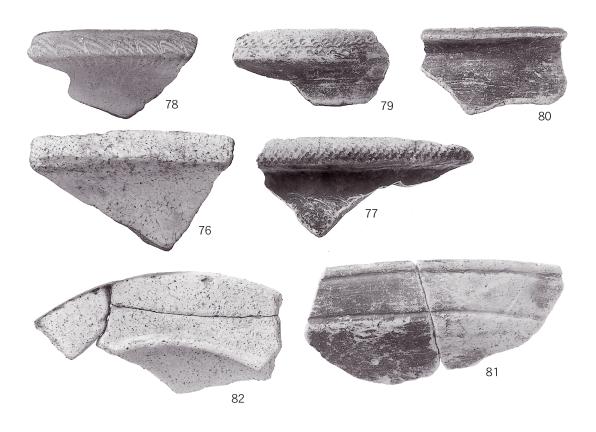
第62次調査 SD-2 出土土器



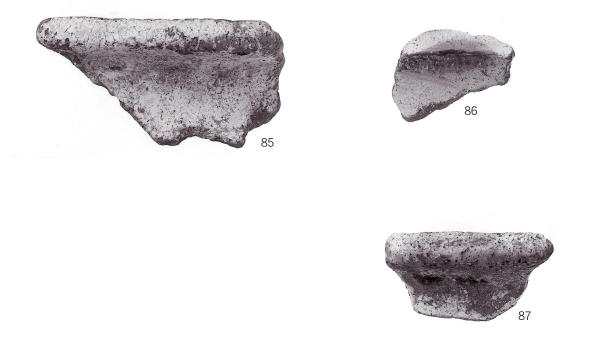
第61次調査 SD-3 出土土器



第61・62次調査 SD-4 出土土器

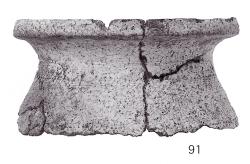


第62次調査 SD-4 出土土器

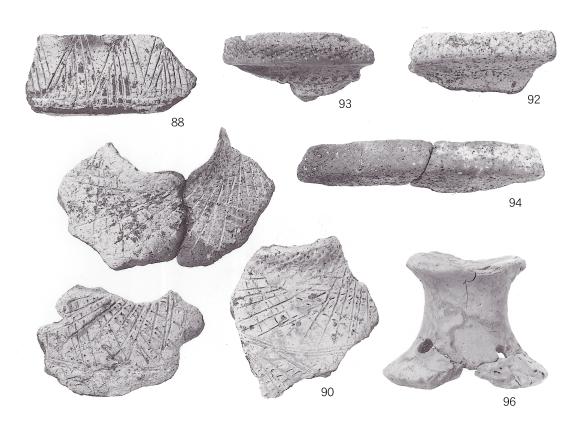


第61次調査 SD-5 出土土器

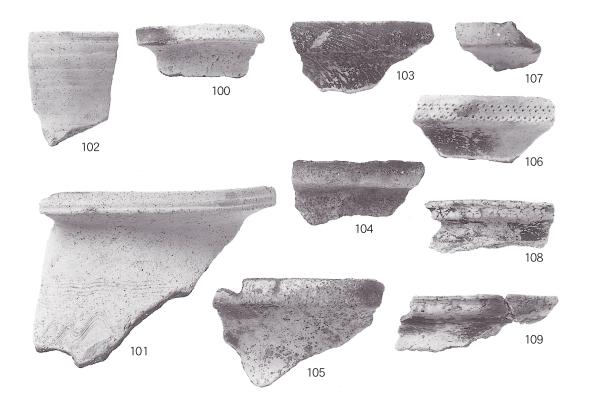




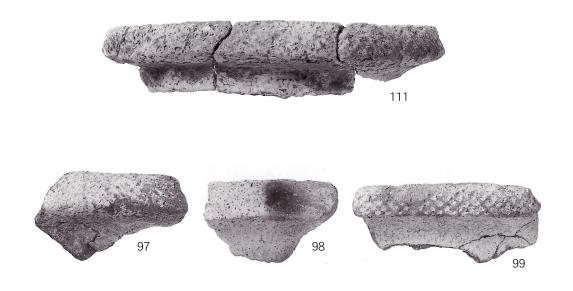
第61次調査 SD-6 出土土器



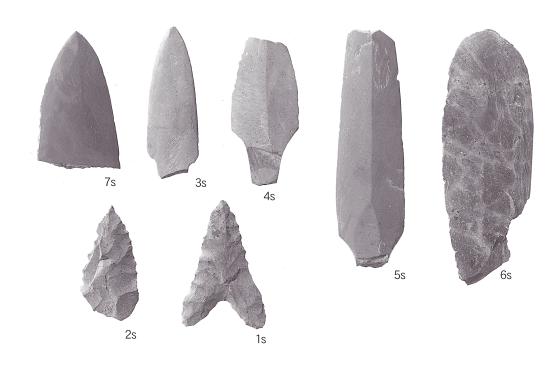
第61次調査 SD-6 出土土器

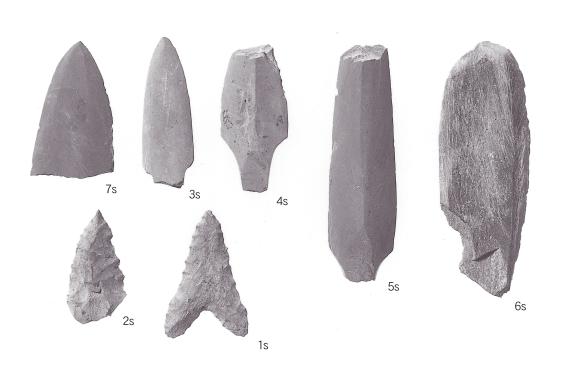


第63次調査 SD-4 出土土器



第62・63次調査 SX-1・SD-G 出土土器

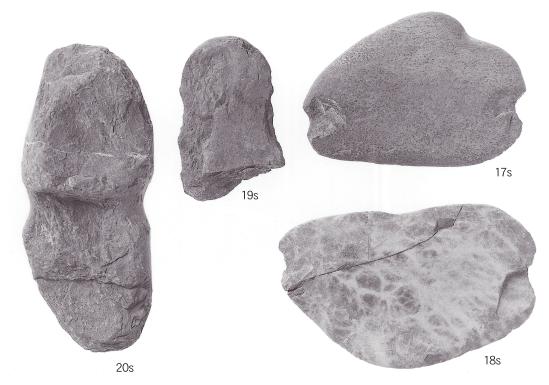




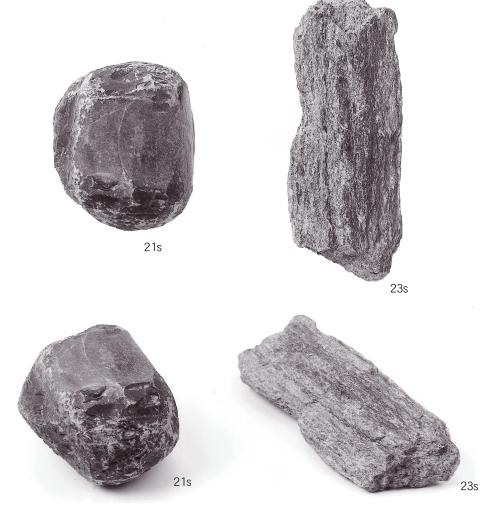
第61~63次調査出土石製品



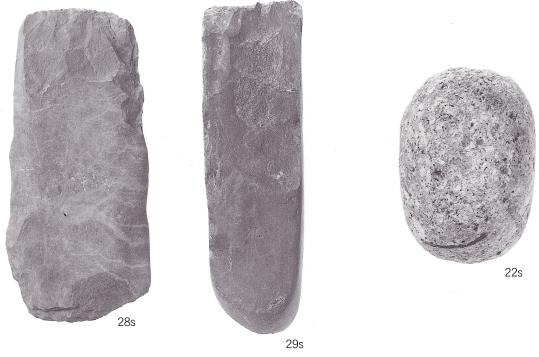
第61~63次調査出土石製品



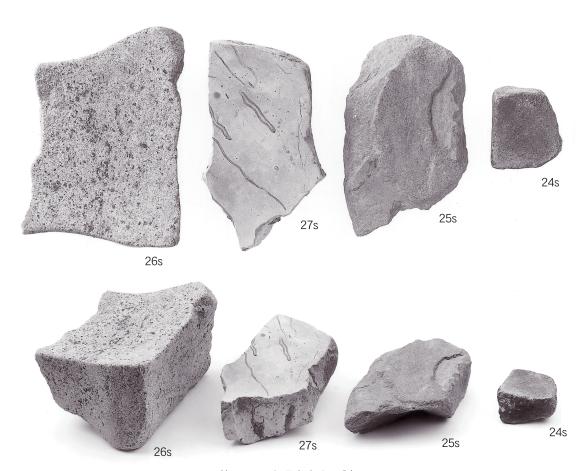
第61·62次調査出土石製品



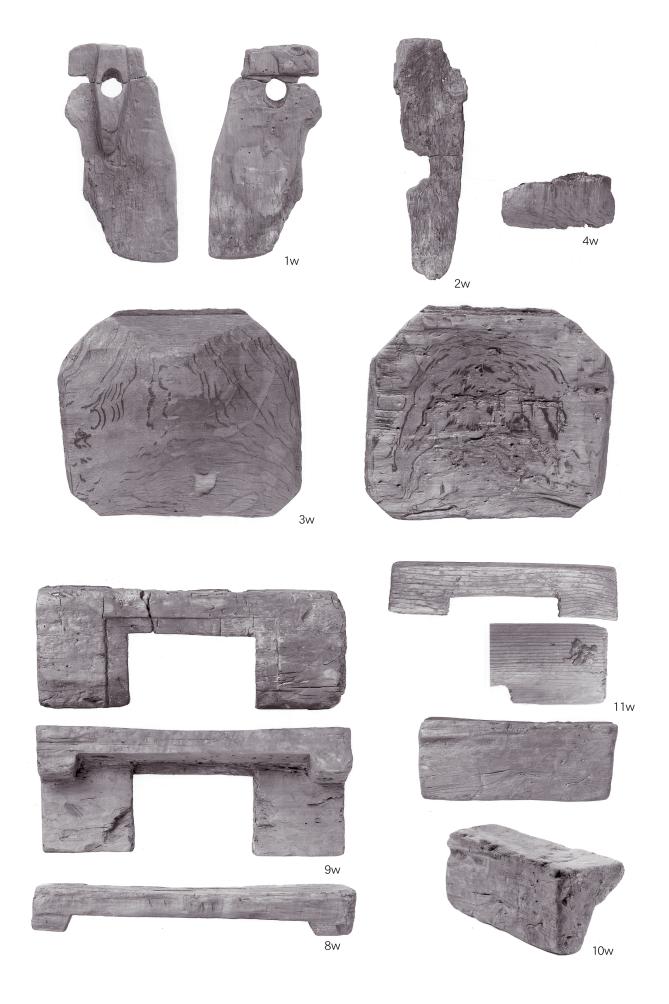
第61・62次調査出土石製品

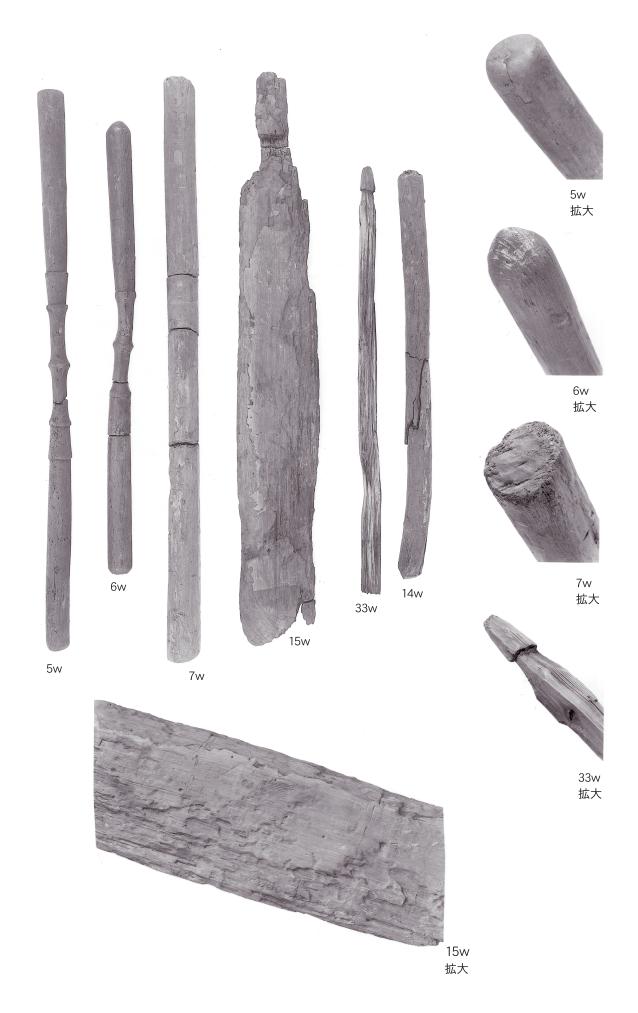


第61・62次調査出土石製品

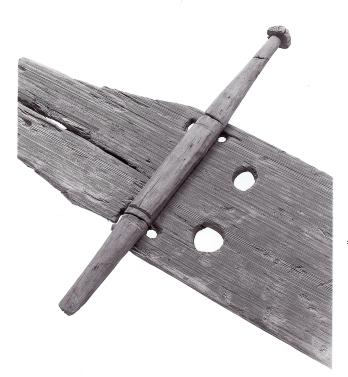


第61・62次調査出土石製品

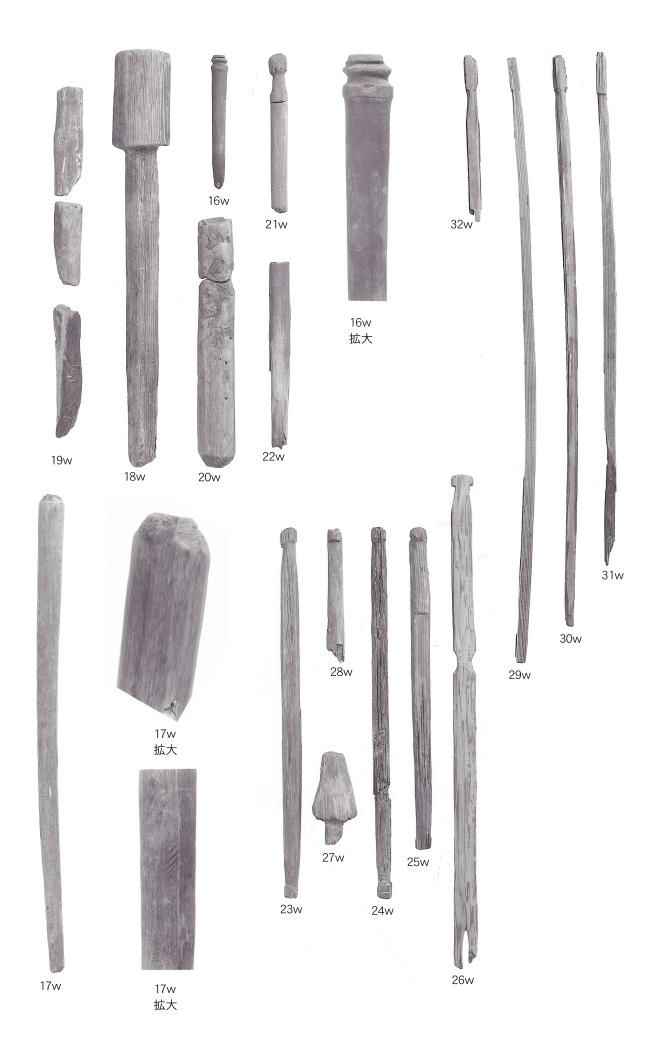


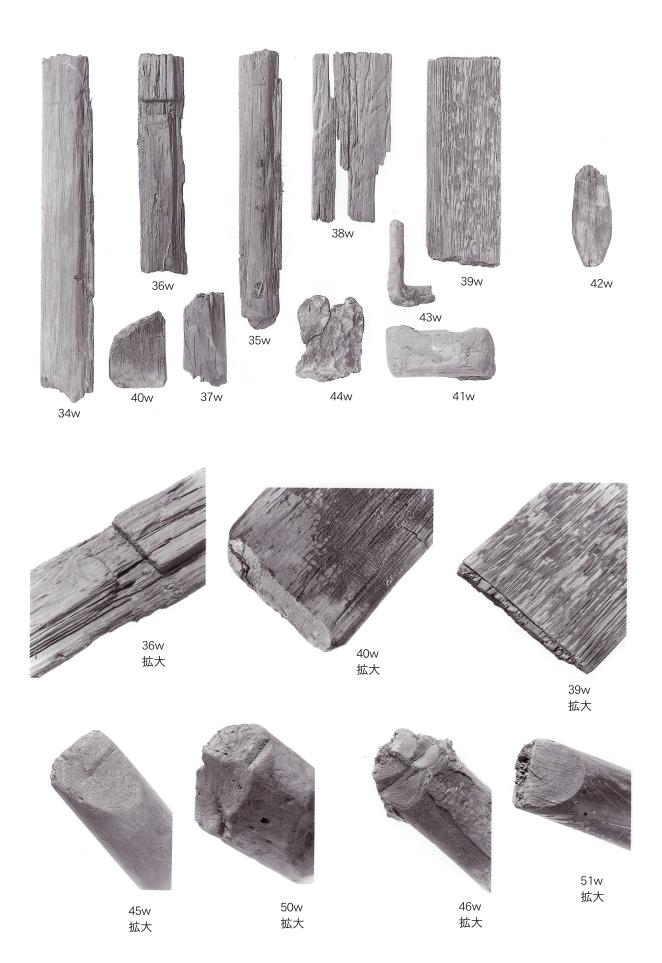


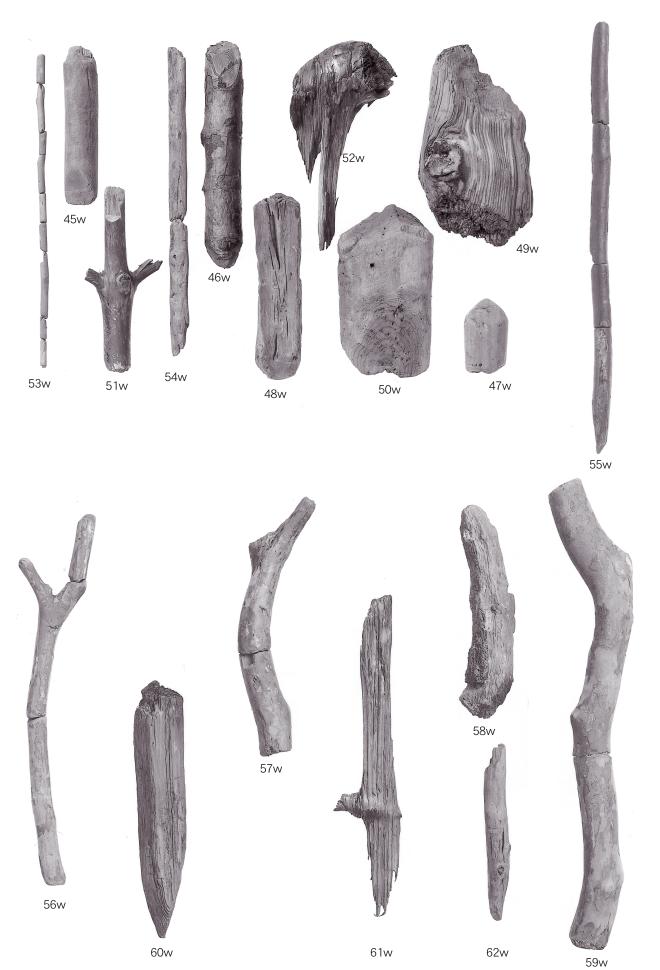




背負板と横桟の接合状況 (推定復元)

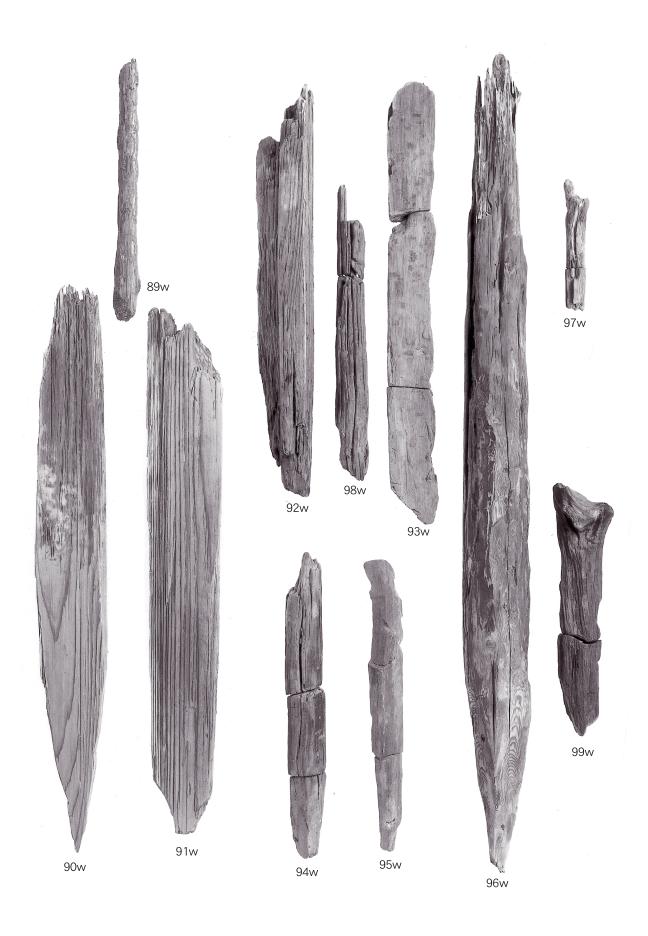


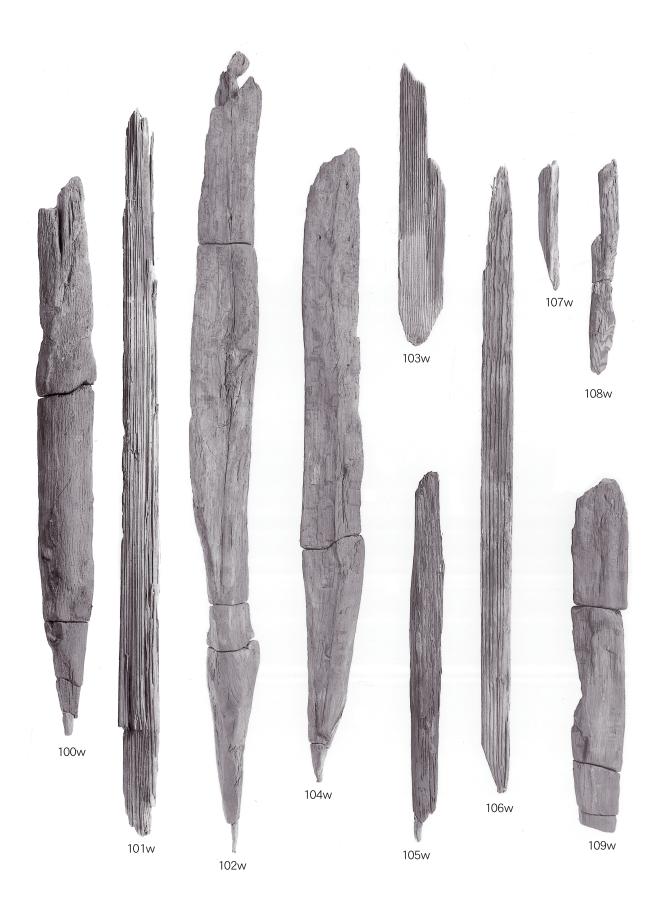












報告書抄録

	ふりがな	しものごういせきのしせきせいびにともなうはっくつちょうさほうこくしょ II								
巻 次 シリーズ名 シリーズ番号 編著名名 川畑和弘(編)、上中央子、佐々木由香、田中克典、那須溶館、村上由美子、山崎 健編集機関 守山市教育委員会所在地 〒524-8885 滋賀県守山市市身二丁目5番22号 TEL 077-582-1156 発行年月日 平成24年3月 本のがな 所化地 市町村 遺跡番号 北峰 東経 発掘期間 調査面積 調査原因 上ものごりせき 滋賀県 25207 15 35" 135" 20060901 3,021m" 史跡整備に伴う発掘調査 (第61次) 下之郷前 00" 20" 20070324 実施機能に伴う発掘調査 25207 15 35" 135" 20070611 4,288m" 史跡整備に伴う発掘調査 (第62次) 下之郷前 00" 20" 20080623 上のごりせき 法領集 25207 15 35" 135" 20080601 3,100m" 史跡整備に伴う発掘調査 04' 59' ~ 5発掘調査 00" 20" 20080323 しのごりせき 法領集 25207 15 35" 135" 20080601 3,100m" 史跡整備に伴う発掘調査 (第63次) 下之郷前 04' 59' ~ 5発掘調査 04' 59' ~ 5発掘調査 第254所 第25	署名	下之郷遺跡の史跡整備に伴う発掘調査報告書 II								
シリーズ名 シリーズ名号 編書名名 川畑和弘 (編)、上中央子、佐々木由香、田中克典、那須浩郎、村上由美子、山崎 健 編集機関 守山市教育委員会 所在地 〒524-8585	副署名	遺構・遺物・総括編								
 シリーズ番号 編 著 名	巻次									
編 著 者 名 川畑和弘 (編)、上中央子、佐々木由香、田中克典、那須浩郎、村上由美子、山崎 健 編 集 機 関 守山市教育委員会	シリーズ名									
編集機関 守山市教育委員会	シリーズ番号									
所 在 地 〒524-8585 滋賀県守山市吉身二丁目 5 番 22 号 TEL 077-582-1156 発行年月日 平成 24 年 3 月	編著者名	川畑和弘(編)、上中央子、佐々木由香、田中克典、那須浩郎、村上由美子、山崎 健								
※	編集機関	守山市教育委員会								
おりがな 所収遺跡 所在地 市町村 遺跡番号 北線 東経 発掘期間 調査面積 調査原因 日のごいせき 接資泉 25207 15 35° 135° 20060901 3,021n² 史跡整備に伴う発掘調査 (第61次) 下之郷町 00″ 20″ 20070324 15 5% 135° 20070611 4,288m² 史跡整備に伴う発掘調査 (第62次) 下之郷町 04′ 59′ ~ 20″ 20080323 15 35° 135° 20070611 4,288m² 史跡整備に伴う発掘調査 (第62次) 下之郷町 04′ 59′ ~ 20″ 20080323 15 20080601 3,100n² 史跡整備に伴う発掘調査 5% による変換 5% に申り合えが計 04′ 59′ ~ 20″ 20080601 3,100n² 史跡整備に伴う発掘調査 5% に申し合えが計 04′ 59′ ~ 20090314 万と郷遺跡 5% に申し合えが計 00″ 20 20090314 万と郷遺跡 年間 上ものごがま 年間 上ものごがま 年間 上ものごがま 年間 下之郷町 万と郷遺跡 年間 年間 年間 年間 年間 年間 年間 年	所 在 地	〒524-8585 滋賀県守山市吉身二丁目 5番 22号 TEL 077-582-1156								
所収遺跡 所在地 市町村 遺跡番号 北線 東経 発掘期間 調査面積 調査原因 世級貿原 25207 15 35° 20060901 3,021m² 史跡整備に伴う発掘調査 (第61次) 下之郷前 04′ 59′ ~ 20070324 15 35° 20070324 15 35° 20070324 15 35° 20070611 4,288m² 史跡整備に伴下之郷遺跡 下之郷前 04′ 59′ ~ 20″ 20080323 15 35° 20080323 15 35° 20080323 15 35° 20080323 15 35° 20080323 15 35° 20080601 3,100m² 史跡整備に伴う発掘調査 下之郷遺跡 中之郷遺跡 中之郷遺跡 中之郷遺跡 15 15 20080601 3,100m² 20 20090314 15 35° 35° 35° 20080601 3,100m² 20 20090314 15 35°	発行年月日	平成 24 年 3 月								
しものごかせき 送資県 25207 15 35° 20060901 3,021m² 史跡整備に伴 5発掘調査 (第61次) 上ものごかせき 送資県 25207 15 35° 135° 20070324 20070324 20070324 20070324 20070324 20070324 20070324 20070324 20070611 4,288m² 史跡整備に伴 5発掘調査 (第62次) 上ものごかせき 送資県 25207 15 35° 135° 20070611 4,288m² 史跡整備に伴 5発掘調査 (第62次) 上のごかせき 送資県 25207 15 35° 135° 20080601 3,100m² 史跡整備に伴 5発掘調査 (第63次) 上のごかせき 送資県 ではまた では	ふりがな	ふりがな コード								
下之郷遺跡 中山市 (第 61 次) 04' 下之郷面町 59' 00" 20" 20070324 しものごういせき (第 62 次) 送賀県 下之郷面町 25207 15 35° 00" 135° 00" 20070611 4,288m² 史跡整備に伴 う発掘調査 しものごういせき (第 62 次) 送賀県 下之郷面町 25207 15 35° 00" 135° 20080601 3,100m² 史跡整備に伴 う発掘調査 下之郷遺跡 (第 63 次) 上崎のできるよう 守山市 (第 63 次) 15 35° 00" 20080601 3,100m² 史跡整備に伴 う発掘調査 下之郷遺跡 (第 63 次) 生のできるよう 下之郷遺跡 (第 62 次) 東落 弥生時代 環際、溝 (第 62 次) 事生時代 環際、溝、しがら み状遺構 事生器、石製品、木 製品、動植物遺存体 下之郷遺跡 (第 63 次) 東落 弥生時代 環際、溝、しがら み状遺構 事生器、石製品、木 製品、動植物遺存体 要 新州川下流域の沖積平野に立地する下之郷遺跡は、これまでの調査から集落の周りに3~9条の 環際が掘られていることが判明している。今回の調査地で検出された 6条の環源は、最も内側に掘	所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	調査面積	調査原因	
(第 61 次)	しものごういせき	しがけん 滋賀県	25207	15	35°	135°	20060901	3, 021m ²	史跡整備に伴	
しものごういせき 送資県 25207 15 35° 20070611 4,288m² 史跡整備に伴う発掘調査 (第 62 次) 上でごかにか とのごういせき 送資県 25207 15 35° 135° 20080601 3,100m² 史跡整備に伴う発掘調査 (第 63 次) 下之郷前 2500 15 35° 135° 20080601 3,100m² 史跡整備に伴う発掘調査 (第 63 次) 下之郷前 20″ 20″ 20090314	下之郷遺跡	もりやまし 守山市			04'	59'	~		う発掘調査	
下之郷遺跡	(第61次)	しものごうちょう 下之郷町			00"	20"	20070324			
(第 62 次) 「下之郷町	しものごういせき	しがけん 滋賀県	25207	15	35°	135°	20070611	4, 288m²	史跡整備に伴	
しものごういせき 滋賀県 下之郷遺跡 (第 63 次) 25207 15 35° 135° 20080601 3,100m² 史跡整備に伴う発掘調査 (第 63 次) 「中山市 (第 63 次) しものごうちままで 下之郷町 00″ 20 20090314 特記事項 所収遺跡名 種別 主な時代 環濠、溝 弥生時代 環濠、溝 弥生土器、石製品、木 (第 61 次) 東落 弥生時代 環濠、周溝墓 弥生土器、石製品、木 (第 62 次) 弥生時代 環濠、周溝墓 弥生土器、石製品、木 (第 62 次) 東本 京生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 (第 63 次) 東本 弥生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 (第 63 次) 東本 弥生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 (第 63 次) 東本 京生時代 東本 京生 市 での調査から集落の周りに 3 ~ 9 条の 環濠が掘られていることが判明している。今回の調査地で検出された 6 条の環濠は、最も内側に掘	下之郷遺跡	もりやまし 守山市			04'	59'	~		う発掘調査	
下之郷遺跡 いのではまたできまます でえ郷町 04' 59' ~ 20090314 う発掘調査 所収遺跡名 種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項 下之郷遺跡 集落 弥生時代 環濠、溝 弥生土器、石製品、木 (第 61 次) 東落 弥生時代 環濠、周溝墓 弥生土器、石製品、木 製品、動植物遺存体 下之郷遺跡 集落 弥生時代 環濠、周溝墓 弥生土器、石製品、木 (第 62 次) 東落 弥生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 製品、動植物遺存体 下之郷遺跡 集落 弥生時代 環濠、溝、しがら み状遺構 製品、動植物遺存体 要 約 野洲川下流域の沖積平野に立地する下之郷遺跡は、これまでの調査から集落の周りに3~9条の環濠が掘られていることが判明している。今回の調査地で検出された6条の環濠は、最も内側に掘	(第62次)	トものごうちょう 下之郷町			00"	20"	20080323			
(第 63 次) 下之郷町 00″ 20 20090314	しものごういせき	しがけん 滋賀県	25207	15	35°	135°	20080601	3, 100m ²	史跡整備に伴	
所収遺跡名 種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項 下之郷遺跡 集落 弥生時代 環濠、溝 弥生土器、石製品、木 製品、動植物遺存体 下之郷遺跡 集落 弥生時代 環濠、周溝墓 弥生土器、石製品、木 (第 62 次) 集落 弥生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 (第 63 次) 集落 弥生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 (第 63 次) 集落 弥生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 製品、動植物遺存体 要 約 野洲川下流域の沖積平野に立地する下之郷遺跡は、これまでの調査から集落の周りに3~9条の 環濠が掘られていることが判明している。今回の調査地で検出された6条の環濠は、最も内側に掘	下之郷遺跡	もりやまし 守山市			04'	59'	~		う発掘調査	
下之郷遺跡 集落 弥生時代 環濠、溝 弥生土器、石製品、木製品、木製品、動植物遺存体 下之郷遺跡 集落 弥生時代 環濠、周溝墓 弥生土器、石製品、木 (第 62 次) 集落 弥生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 (第 63 次) 集落 弥生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 (第 63 次) サ洲川下流域の沖積平野に立地する下之郷遺跡は、これまでの調査から集落の周りに3~9条の 環濠が掘られていることが判明している。今回の調査地で検出された6条の環濠は、最も内側に掘	(第 63 次)	しものごうちょう 下之郷町			00"	20	20090314			
(第 61 次)	所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
下之郷遺跡 集落 弥生時代 環濠、周溝墓 弥生土器、石製品、木 製品、動植物遺存体 下之郷遺跡 集落 弥生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 (第63次)	下之郷遺跡	集落	弥生時代	環濠、溝		弥生土器、石製品、木				
(第 62 次) 製品、動植物遺存体 下之郷遺跡 集落 弥生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 (第 63 次) 異品、動植物遺存体 製品、動植物遺存体 要 約 野洲川下流域の沖積平野に立地する下之郷遺跡は、これまでの調査から集落の周りに 3~9条の 環濠が掘られていることが判明している。今回の調査地で検出された 6条の環濠は、最も内側に掘	(第61次)					製品、動植物遺存体				
下之郷遺跡 集落 弥生時代 環濠、溝、しがら 弥生土器、石製品、木 (第 63 次)	下之郷遺跡	集落	弥生時代	環濠、周溝墓		弥生土器、石製品、木				
(第 63 次) み状遺構 製品、動植物遺存体 要 約 野洲川下流域の沖積平野に立地する下之郷遺跡は、これまでの調査から集落の周りに 3 ~ 9 条の環濠が掘られていることが判明している。今回の調査地で検出された 6 条の環濠は、最も内側に掘	(第62次)					製品、動植物遺存体				
要 約 野洲川下流域の沖積平野に立地する下之郷遺跡は、これまでの調査から集落の周りに3~9条の環濠が掘られていることが判明している。今回の調査地で検出された6条の環濠は、最も内側に掘	下之郷遺跡	集落	弥生時代	環濠、溝、しがら		弥生土器、石製品、木				
環濠が掘られていることが判明している。今回の調査地で検出された6条の環濠は、最も内側に掘	(第 63 次)			み状遺構		製品、動植物遺存体				
	要約	野洲川下流域の沖積平野に立地する下之郷遺跡は、これまでの調査から集落の周りに3~9条の								
られたものが古く、順次外側へ掘られていくことがうかがえた。各々の環濠で自然科学分析を行っ		環濠が掘られていることが判明している。今回の調査地で検出された6条の環濠は、最も内側に掘								
		られたもの	られたものが古く、順次外側へ掘られていくことがうかがえた。各々の環濠で自然科学分析を行っ							
た結果、開削時には、水を湛えているものが多いことが判明し、周辺の植生とその変化の概要が明		た結果、開	た結果、開削時には、水を湛えているものが多いことが判明し、周辺の植生とその変化の概要が明							
らかになった。		らかになった。								

下之郷遺跡の史跡整備に伴う発掘調査報告書 II 遺構・遺物・総括編

発 行 日 平成 24年 (2012) 3月編集・発行 守 山 市 教 育 委 員 会滋賀県守山市吉身二丁目5番22号

印 刷 博善社印刷株式会社